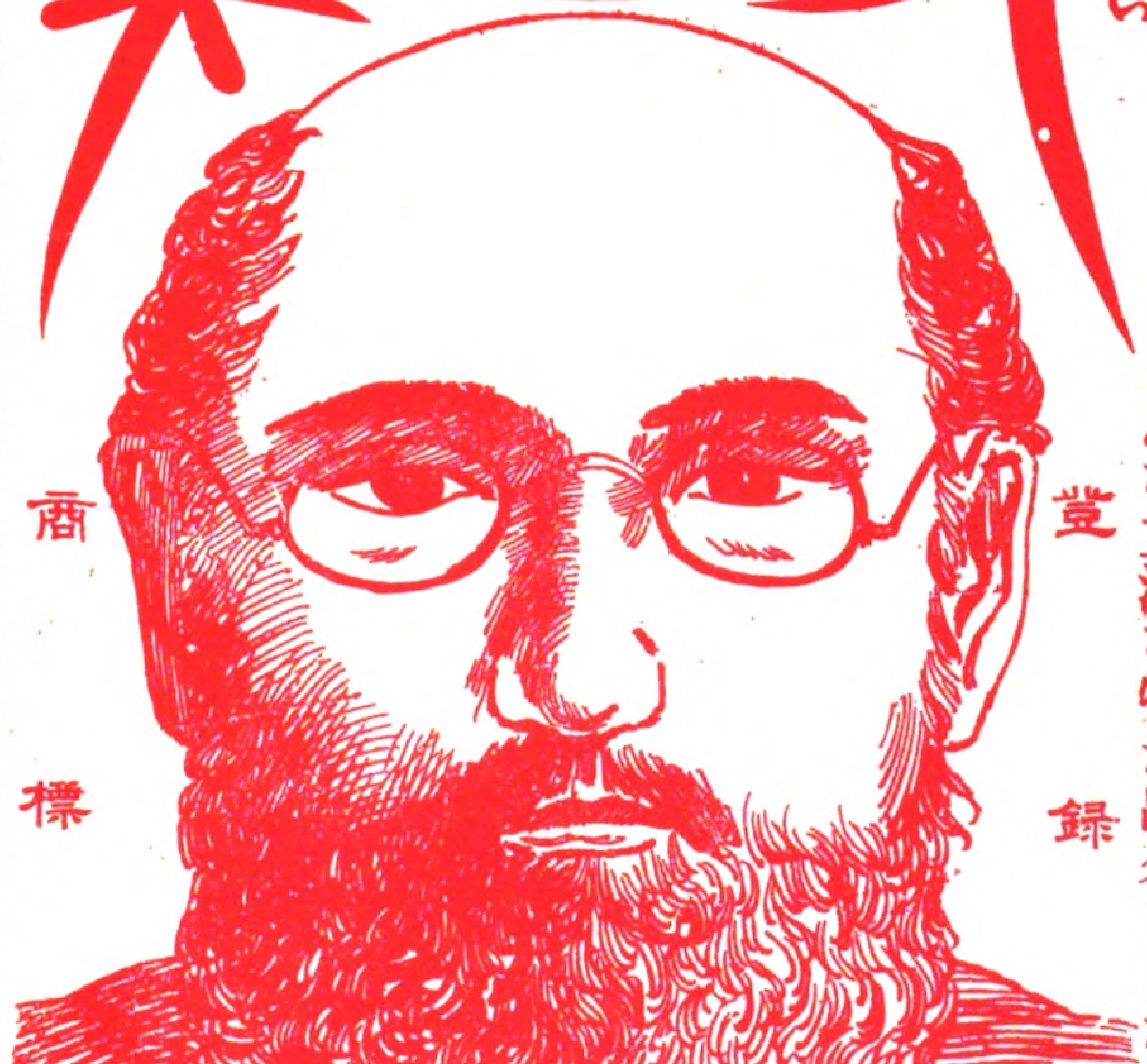

明治四十一年十一月十五日發行
38 博文館臨時增刊
女學世界第八巻第十五號
こゝろ乃日記

大學目藥

『世の進むに従ひ目藥にもこんな立派な物が出來ました

大學目藥は帝國醫科大學病院の處方に基きし貴重の製劑也世に有觸し賣藥の類に非ず

●定價金十錢(郵税二錢) 中瓶三十錢(郵税四錢) 大瓶五十錢(郵税八錢) ▲各地藥店に在



日本大阪北濱(ヘブリン丸元祖本家)

參天堂藥房

効能の概略

▲はやり目
▲トラホーム
▲星目
▲のぼせ目
▲かすみ目
▲たゞれ目
▲血目
▲打撲目
▲疲勞目

其外眼病一切に驚くべき奇効あり

●又この藥は目力を強くするの確効あり故に無病の人にても毎日少し宛此藥を用れば眼病一切を豫防するを得べし



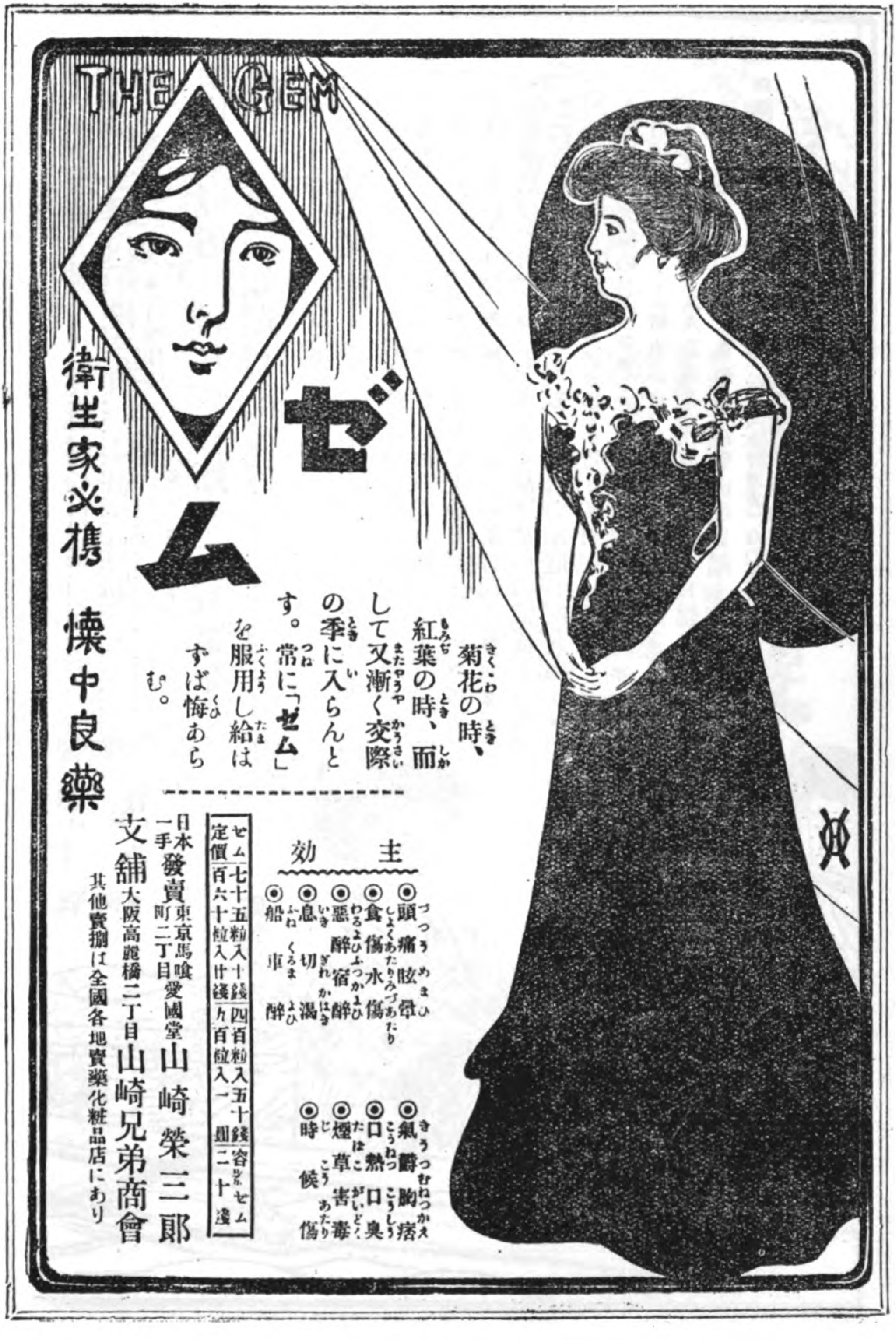
デパートメントストーア
三越呉服店
鞄
折鞄
靴
旅行用
化粧品入
一式
時計
指輪
寶石類
ブローチ
其他
諸大家ノ繪画陶器漆器
銅器七寶 其他新式ノ日用食器類一式
香水 香油
石鹼 白粉
歯磨 口紅
呉服
洋服
太物 子ル
セル等此
新柄品
傘
履物
舶來
文房具
和洋
巻
莨
シガー
一切

女學世界定期增刊 心の日記 第八巻第拾五號 目次



古今日記文粹




THE GEM
ゼム
衛生家必携
懐中良薬
菊花の時、紅葉の時、而して又漸く交際の季に入らんとす。常に「ゼム」を服用し給はずば悔あらむ。
主効
◉頭痛眩暈 ◉食傷水傷 ◉悪醉宿醉 ◉息切渇 ◉船車醉
◉氣欝胸痞 ◉口熱口臭 ◉煙草害毒 ◉時候傷
ゼム定價 七十五粒入十錢 百六十粒入廿錢 四百粒入五十錢 九百粒入一圓 容器入ゼム二十錢
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
支舗 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣薬化粧品店にあり



日高島助筆

初氷



水野秀方華

徳富蘆花先生跋　藤井繁一先生譯

再版

マクスオーレル著

「女」殿下

裝釘雅美　全一冊　正價七十錢　郵稅八錢

女性研究家として古今獨歩の稱ある佛國文豪マ氏著書中の傑作『ハー、ローヤル、ハイチス、ウーマン』全部の飜譯也

譯文の流麗快暢亦文壇の珍たらん。

◉中央公論　原著者は婦人問題の研究に於て有名な從つてその種の著書が多く世に出でたり。歐米の讀書社會に歡迎されて居るマックス、オーレル氏である。就中此著は原名を Hea Royai Higlnest Waman といつて、彼地の批評界に名聲嘖々到る處の家庭に必ず一本を備へられて居るといふ程のものださうな。原著は既に觀察の深刻と、造詣の奇警とで推稱されて居るのだから、之れを和譯して而かも元との姿を失はざらんとするには平凡な腕では容易な事では無いのだが。今此譯著を繙いて見ると流麗な文章は淸淺の水の隨處に淵を作り瀨を成して趣を示すが如く、淀むべき處に淀み流るべき處に流れて毫も難の跡はなく、警句の多くも巧に我國の俚諺に譯されて居る丈、有りしまゝの力を備へ譯物の香が十分に取れて居て讀み心地がよい、一編四十五章、「戀する男子」「結婚せんとする男子へ」「夫婦の撰擇」「夫の操縱法」等より始めて或は英米佛の細君氣質を評し或は母親氣質、祖母氣質、姑氣質、看護婦氣質等を說き去るものゝ中讀むべき幾多の好文字が散らばつて居る。

◉報知新聞評　女性研究家の泰斗たる佛國の文豪マックス、オーレル氏の原著にして歐米に於ける讀書界を風靡したるもの、章を分つ事四十有五先づ久遠の女性より說いて情界私言に及ぶ、觀察機慧にして深酷、興味津々として諧謔、諷刺百出せる間に深邃なる敎訓の意を含めり、中にも戀する男子へ、夫の操縱法、男子の戀と女子の戀、女媚び、嫉妬の研究、蓮葉女と街娼女等一讀千金の價値あり、戀を解するものと解せざるものとを問はず、否又男女老幼の別なく更に又家庭の讀物として推奬するに憚らず、從來坊間に見る處の類書と趣を異にし一個眉を顰むべき汚穢の文字なく淸新なる眞面目の研究によつて遺憾なく美はしき女性を解剖し得たり。譯文流暢、裝釘瀟洒。

（甲の一）

發行所　東京神田區雉子町　振替第七八九五番　玄黃社　賣捌各書林











取次は最寄小間物店
及化粧品店

（ハナワポマード）
ハナワ香すき油
（スミレ色）

頭髪の黒々と柔かに鬢髱の房々しく鮮に麗しきは其丹誠のよろしきに因るなれば髪油の質として舊來の髪油の如く粘々しく又昨今流行のギシ〳〵きしむものにては天美の髪を害ねる譯にして毛の養にならず故にハナワ香と名けたる改良すき油を新に發明せしものなれば舊來の髪すき油と異ひ髪毛に延よく粘りなくサラサラとして洗髪の如く、ふけ、ふきでもの生せず又西洋煉香油及びチックの如く赤毛に硬ばり中途より切れる如き油にあらず兩用いづれの結髪にも從前のすき油同樣御用ひ得らるゝ品なれば御試の上頭髪料として御嗜好に御改良被下衞生上必要の品にして大壺入參拾錢中壺入拾五錢小壺入拾錢御試し詰替鉛紙包三錢の各種御座候て旅行、湯治場等にて携帶便にして腐敗の患なし

ハナワ香油も右の製造に基き候へば梳りの節御用ひ又水髪に御結上げ候には最も適當にして合せて頭髪には欠べからざる器具なり

此香油定價大罎金參拾五錢小罎金貳拾五錢又罐入壹合入、貳合入あり

（ハナワヲイル）
ハナワ香油
（淡黄色油 赤色油）

本舗 東京市神田明神下 大和屋藤井製

女（甲の二）

女子文壇臨時增刊

四十二年第一增刊

新美文

二月十五日發表

懸賞贈品

○第壹種（凡て正金）
壹等賞　金貳拾圓
貳等賞　金拾圓
自三等賞至五等賞　各金五圓
自六等賞至十等賞　各金貳圓

○第二種（凡て吳服物）
壹等賞　價格七圓
貳等賞　同四圓
三等賞　同貳圓

○第三種（凡て吳服物）
壹等賞　價格五圓
貳等賞　價格三圓
三等賞　同壹圓

○別賞（凡て物品）
自一等賞至十等賞　價格貳圓以内

物に驚き易く事に感じ易き青春の人は今や讀むべく語るべく書くべきことの多きに苦しめり、之が大勢の赴く處を知らしむるものは其等若き人の手に成りし文集に如くはなし、殊に現代の随筆とも稱すべき美文に至りては千變萬化、諸君の思想の自由なるが如く作ることも自由なり、今我社「女子文壇」の臨時增刊として「新美文」を出版し、紙數の大半を此に宛て、併せて一般の文藝作品を募り、例の如き大冊子を編纂して讀書界の空氣を清新ならしめんとす、冀くは競ふて投稿せよ

大懸賞募集

投稿締切　十二月廿五日限

新美文募集項目

▼第壹種▲

美文

《廿四字詰百行限》

感情を主としたる文
事實を主としたる文
天然を描寫したる文
家庭を書ける文
或る人を描ける文
その日〳〵の日記文
旅行して得たる紀行文
對話を主どしたる文
地方的特色のある文

投稿諸君は必ず此分類に據るの要なけれども、題を考ふる便宜上假に分類したるのみ、要するに實用的のものを除いて、一般の文章は殆んど美文の系統に屬す。

▼第二種▲

○小説　總假名付一行廿四字百行
○新體詩　總假名付二十行限
○論文　一行二十四字三十行限
○書簡文　一行二十四字三十行限

▼第三種▲

○和歌　一首限
○俳句　一句限
○短文　總假名付一行廿四字五行限

○別賞　圖畫　縱横隨意二寸五分の三寸

▼投稿心得摘要

○題と文體とは各自の隨意なり。
○投稿紙は半紙又は原稿紙に限る
○投稿は課題を異にする毎に必ず別の用紙に認むべし。
○投稿は句點を施すべし。
○圏點は附すべからず。
○投稿の封筒は東京京橋女子文壇社編輯局宛新美文原稿の文字を傍書すべし、
○投稿は必ず自家の作物たるべきこと若し剽窃の疑あるものは入賞無効とす。
○入賞の通知を受けたる者は最近寫眞送付あれ。
○投稿は一切返附せず、不足未納税は謝絶す。
○入賞者へ懸賞品送附は發表一ヶ月後たること。

（甲の三）

發行所（投稿受付）東京市京橋區中橋大鋸町十一番地　女子文壇社

樂器ノ月賦販賣及賃貸……

鈴木ヴァイオリン

號外A金貳圓より號外C金四圓迄
壹號金五圓より拾參號金四拾圓迄
特製品金五拾圓より金百貳拾圓迄 各種

弓（金七拾錢、金壹圓より金拾圓迄 各種

箱（金壹圓五拾錢より金八圓迄 皮製金八圓以上 各種

外附屬品 糸、ヤン、駒等 各種

鈴木マンドリン

第壹號 金七圓
第貳號 金拾圓
第參號 金拾貳圓 其他上等品 數種

イタリーテーブル式
金八拾圓以上金百圓迄 數種

サック

ヅック製 金貳圓五拾錢
舶來更紗製 金貳圓五拾錢
（リボン飾付携帶至便）

外ニ義甲、絲及附屬品 各種

樂器ノ調律及修繕應需……

◎高尚ナル音樂ハ家庭ノ和氣ヲ增進ス



◎家庭ニ於ケル慰安ハ之レヲ高尚ナル音樂ニ求メヨ

◎高尚ナル音樂ヲ奏センニハ其樂器ヲ選バザル可カラズ



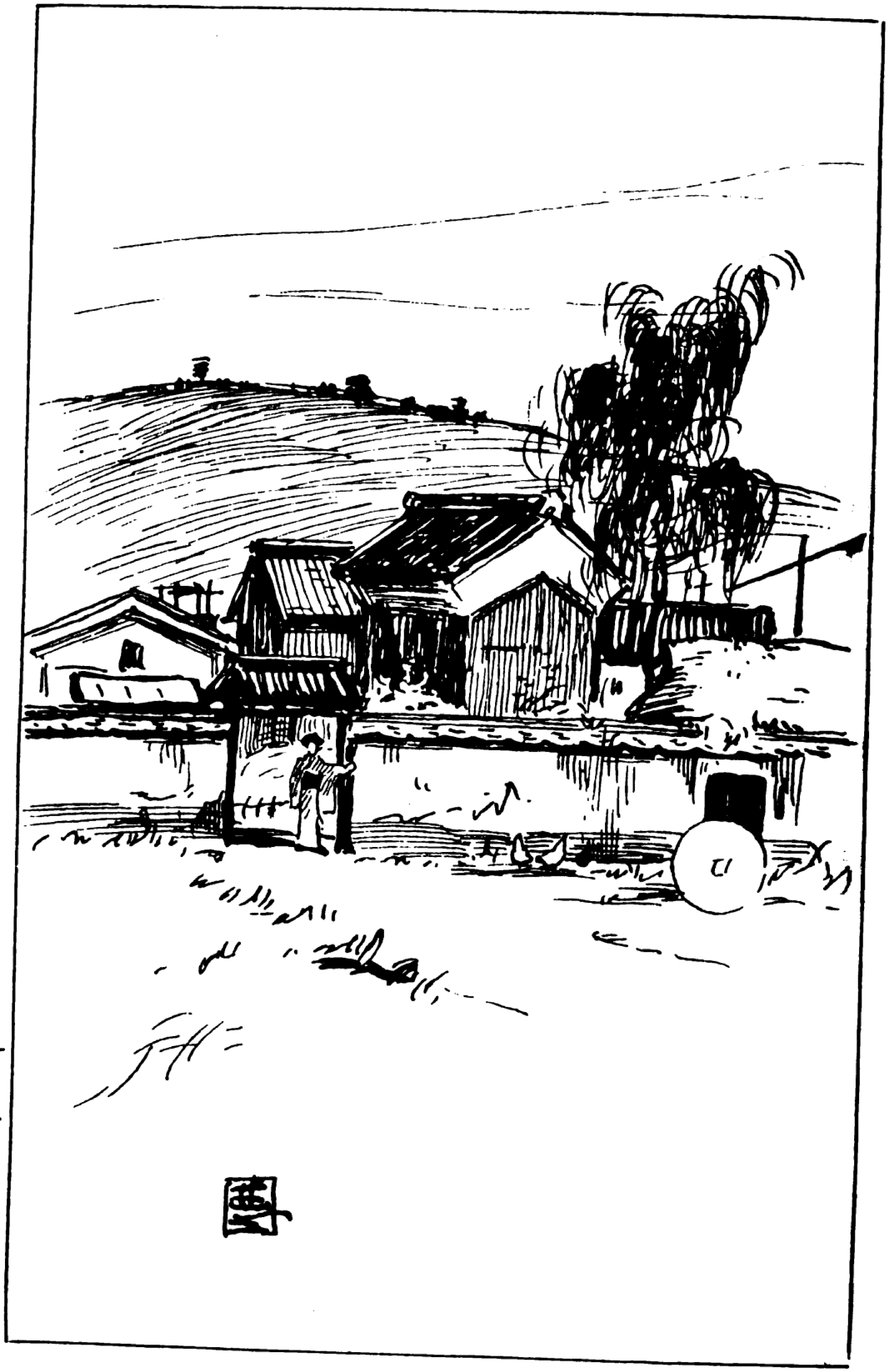
◎優良ニシテ日本ノ家庭ニ適スル樂器ハ何？

鈴木ヴァイオリン鈴木マンドリンニ如クモノナシ

女（甲の四）

東京京橋區竹川町十三 合資會社 共益商社樂器店 電話新五二九◎四八八〇 振替貯金口座一五八〇番

わかれ



竹久夢二筆

霜がれ

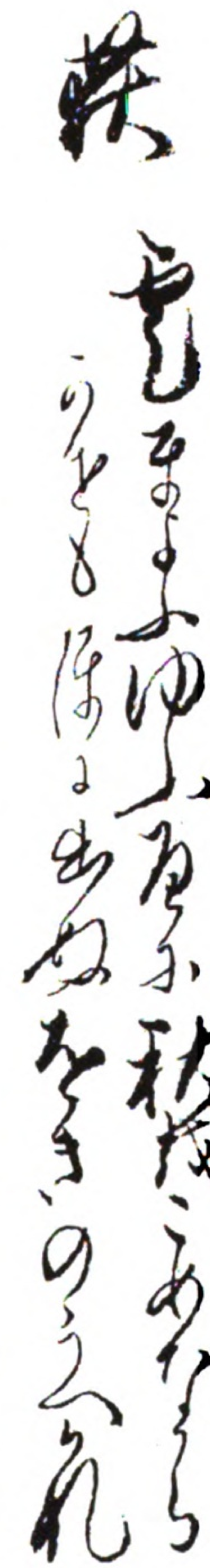


加藤南山筆

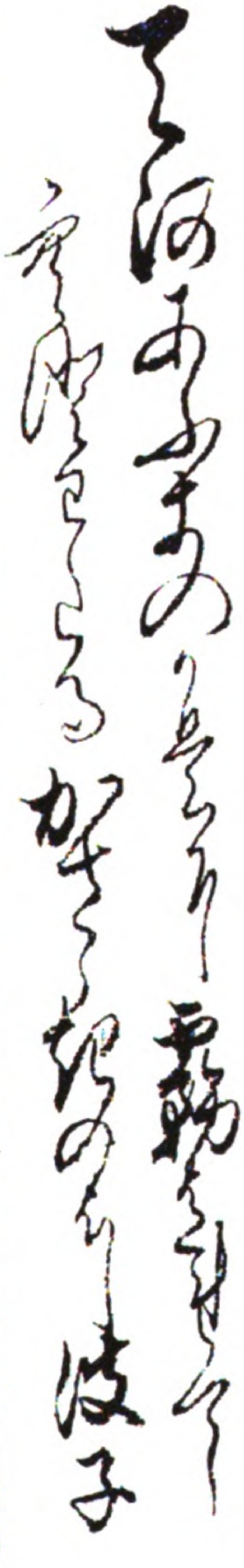


竹久夢二筆

小さきスケッチスト



星野タヘ子 十二才



山本ナミ子

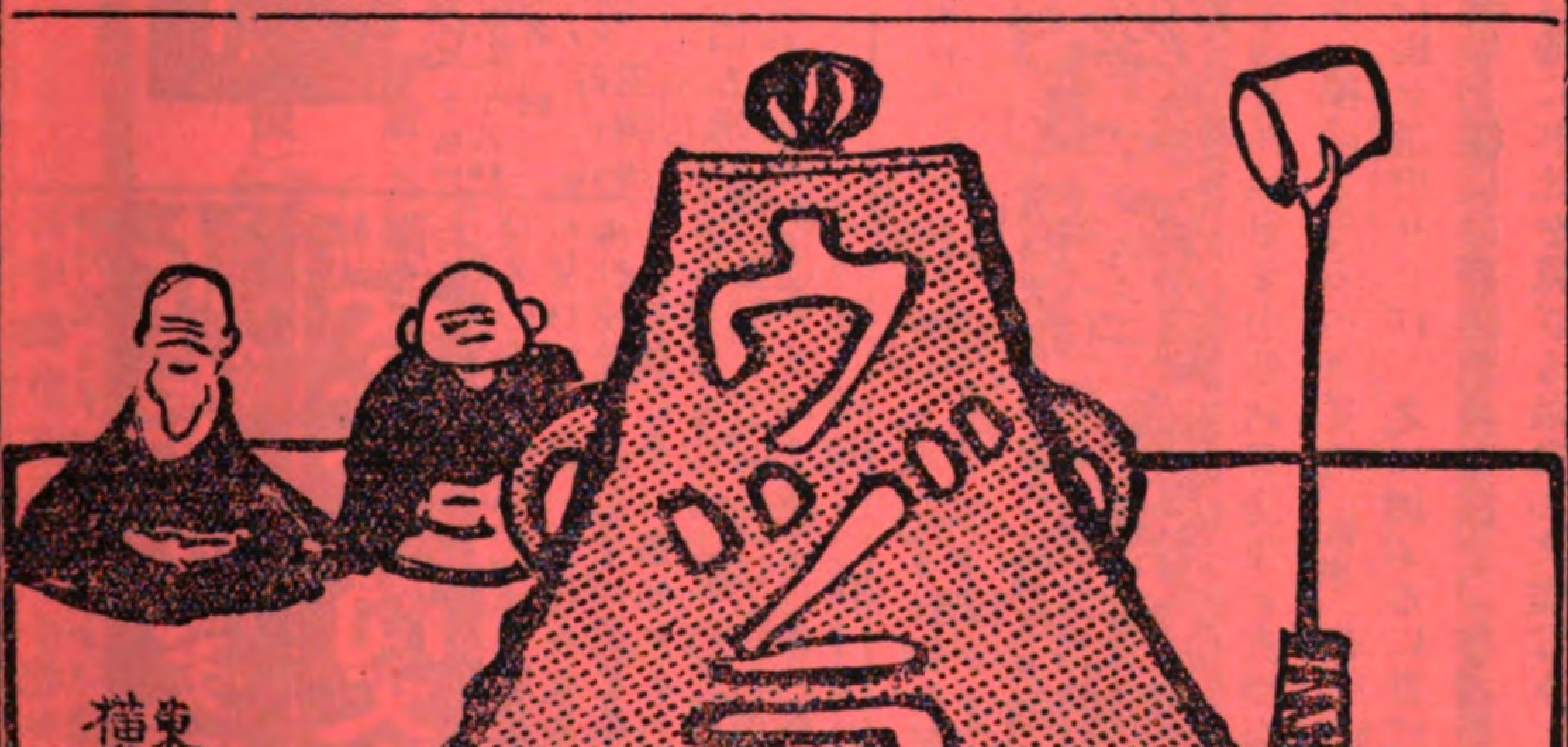


三木ハマ子


發賣御案內
最新式造花用鐵線
如何に本品の斯用として好適せるかは御試用の上
知り給ふべし郵券貳錢封入申込み次第直送す
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
美術造花材料商 天野卯兵衛
特電話浪花一六四三番
電信畧號（アマウ）
振替口座四九七〇番
營業案內御入用なれば郵券四錢封入御申込みあれ

（一〇二）


於内外博覧會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醤油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN
ヒゲタ印醤油
宮内省御用達
銚子港 田中玄蕃醸造 千葉縣


東京
横山町
天野浅五郎
石鹸

(その四)

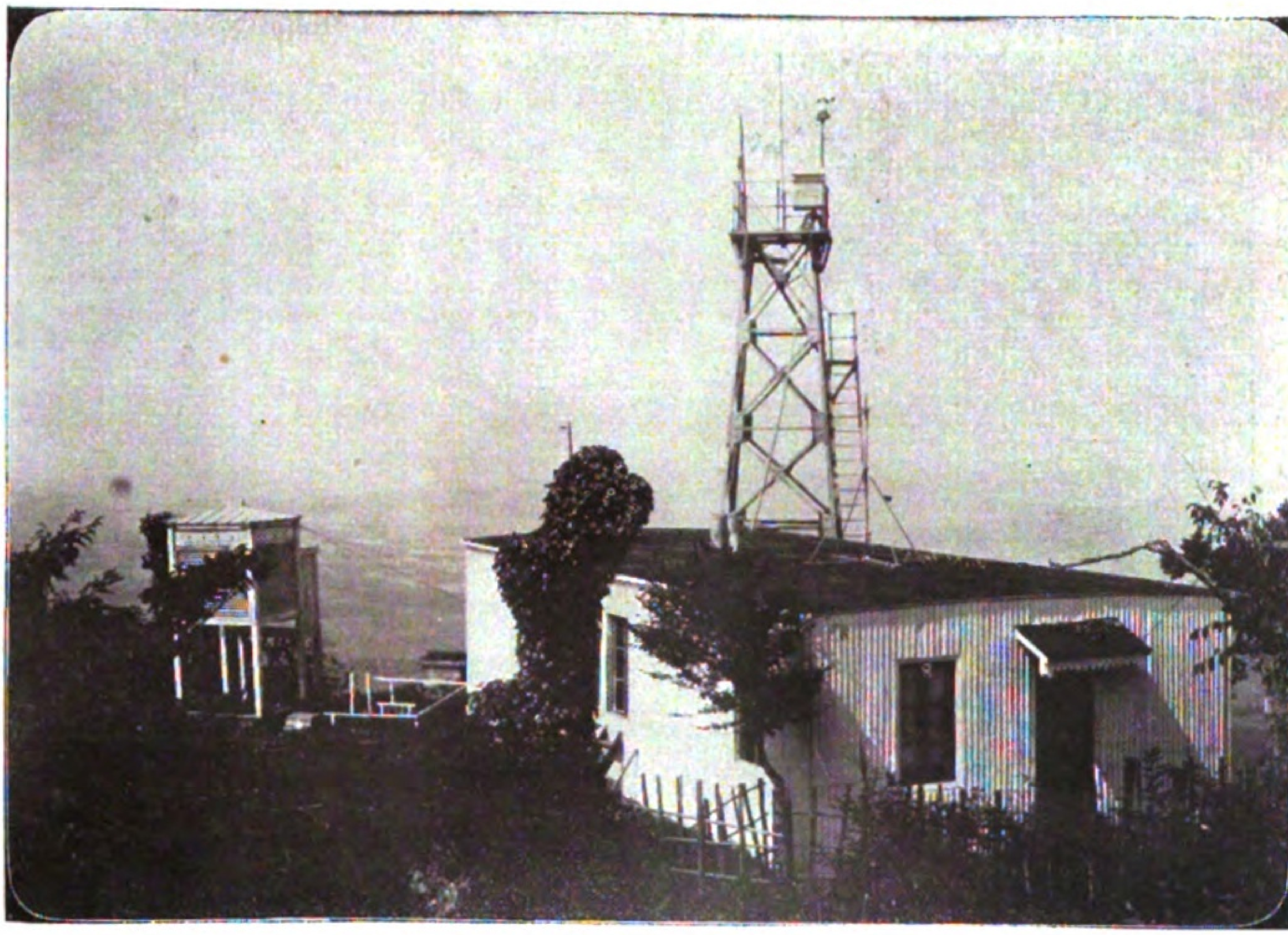
大葉子



文部省展覧會の出品（木彫）

山崎朝雲作

筑波山上の観測所



筑波山男體山の絶頂に於ける山階宮測候所

下妻より見たる筑波山



菊の馨



こは米國艦隊司令長官スペリー少將入京の際赤坂女藝學校生徒が贈呈せし造花にして、左右に立てる、町田はる子、下田由技子の兩人が總代として其任に當れるなり。

母



消化新藥 タカヂアスターゼ

本品は毎瓶强度一定効力永久不變なりこれ高峯博士發見の新法式に從ふ特長なり

澱粉不消化の一般徵候

醫學博士谷口長雄氏曰く『……澱粉不消化に因する重なる徵候は胃の膨大、疼痛、溜飲、腸内瓦斯蓄積便秘若くは下痢等にして甚く營養の障害を來す是等の疾病に對しタカヂアスターゼの頗る有効なるを信ず』（說明書は直接發賣元に要求せよ郵呈す）

東京市日本橋區南茅場町貳番地

三共合資會社

滋養新劑 グリコナール錠

本品は各地有名藥舖にあり本品の說明書は直接發賣元に要求せられよ無代郵呈す

醫學博士 北里柴三郎氏指導の下に化學者佐伯矩氏が牡蠣の滋養成分に就き研究創製せる本劑は滋養劑として肺病及一般病者虛弱者に必適なるのみならず之を用れば自から心臟を强め盜汗を制止し速かに體力を恢復して元氣を旺盛ならしむる特異の効顯あり

東京市日本橋區南茅場町貳番地

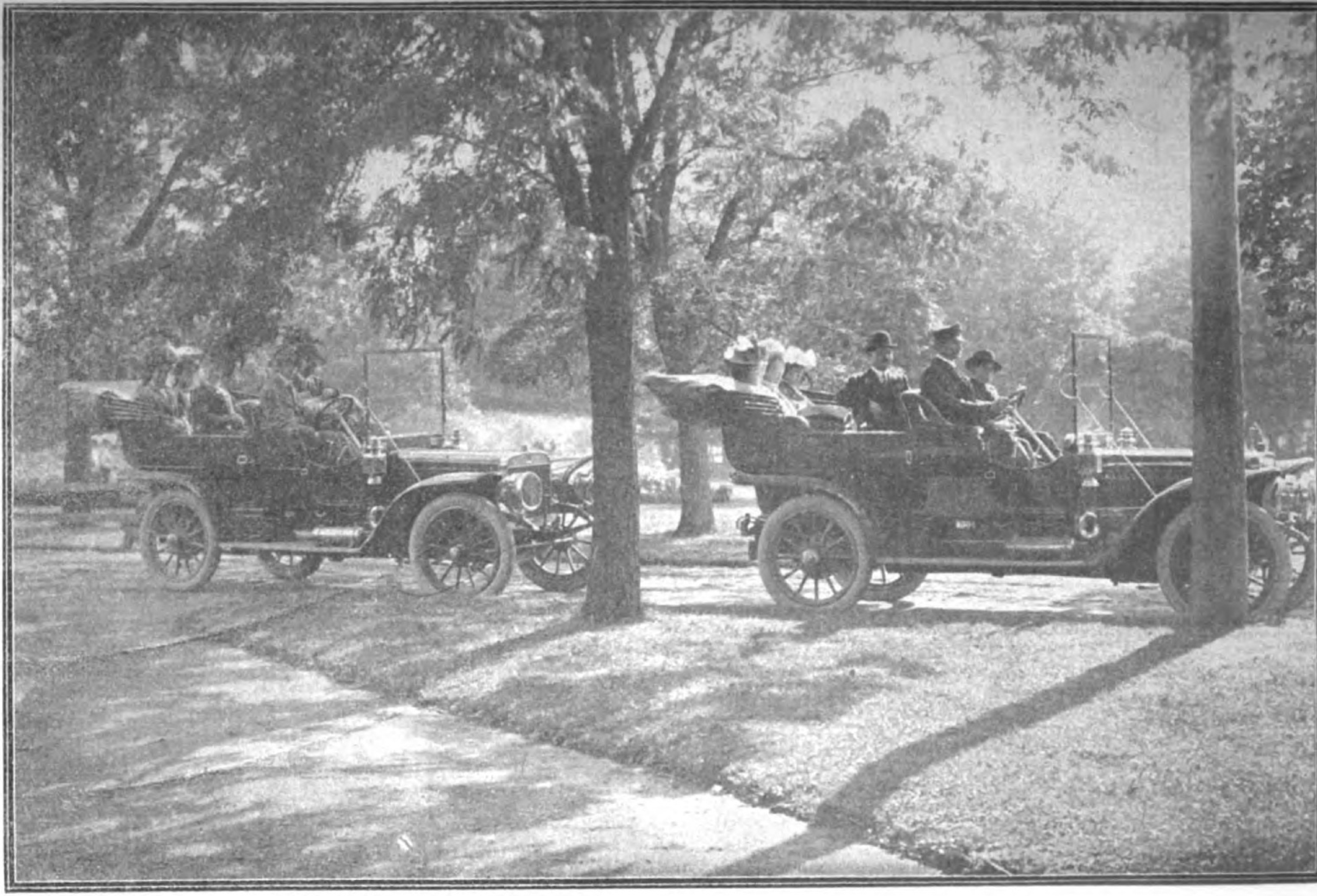
三共合資會社

（丙の一）

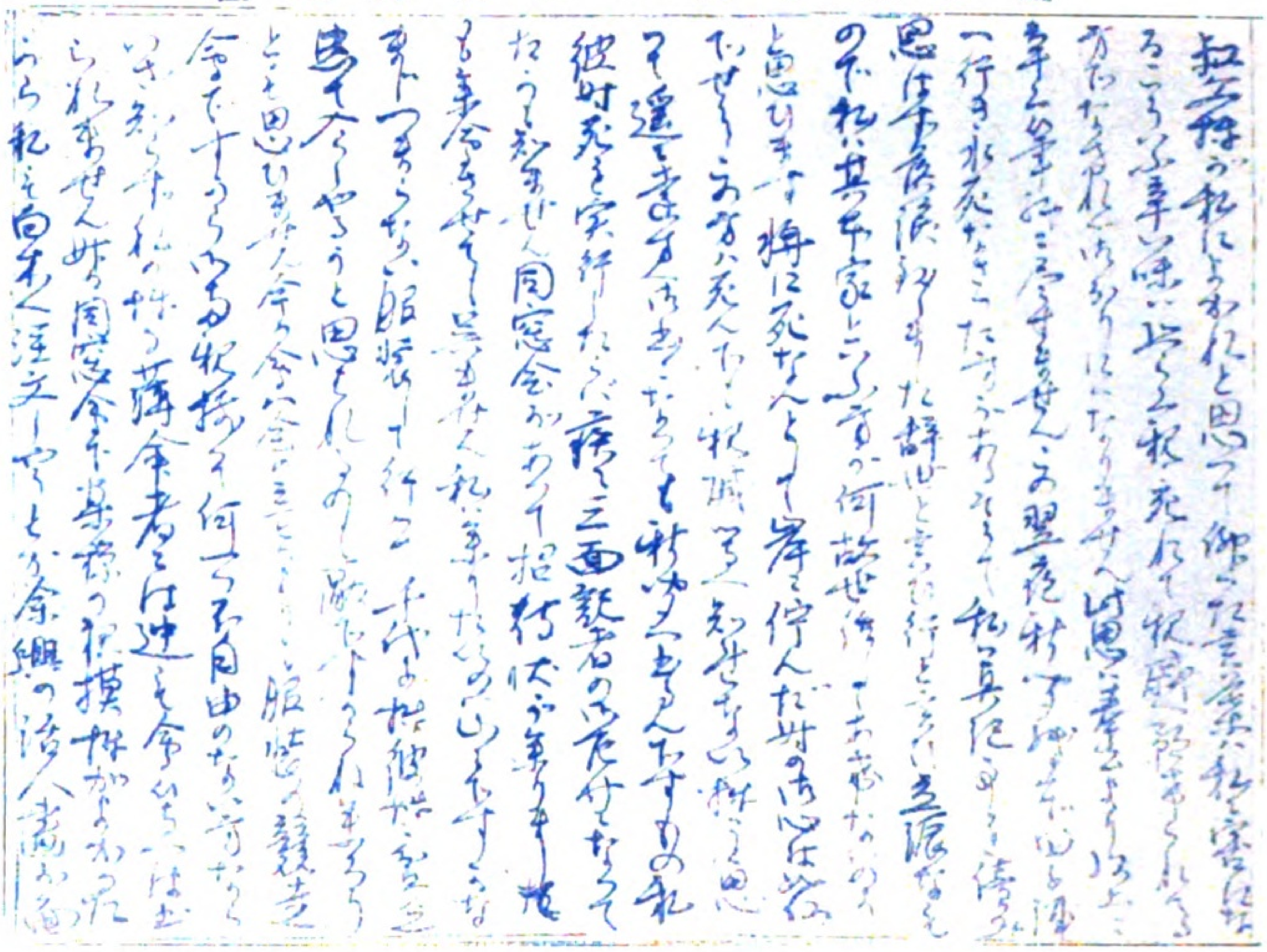

千代田白粉
香油
千代田白粉と香油とは廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
白粉（大瓶廿五錢 小瓶二十錢 水粧 廿五錢
香油（大瓶卅五錢 中瓶廿五錢 小瓶十七錢 特製 七十錢
東京馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九三

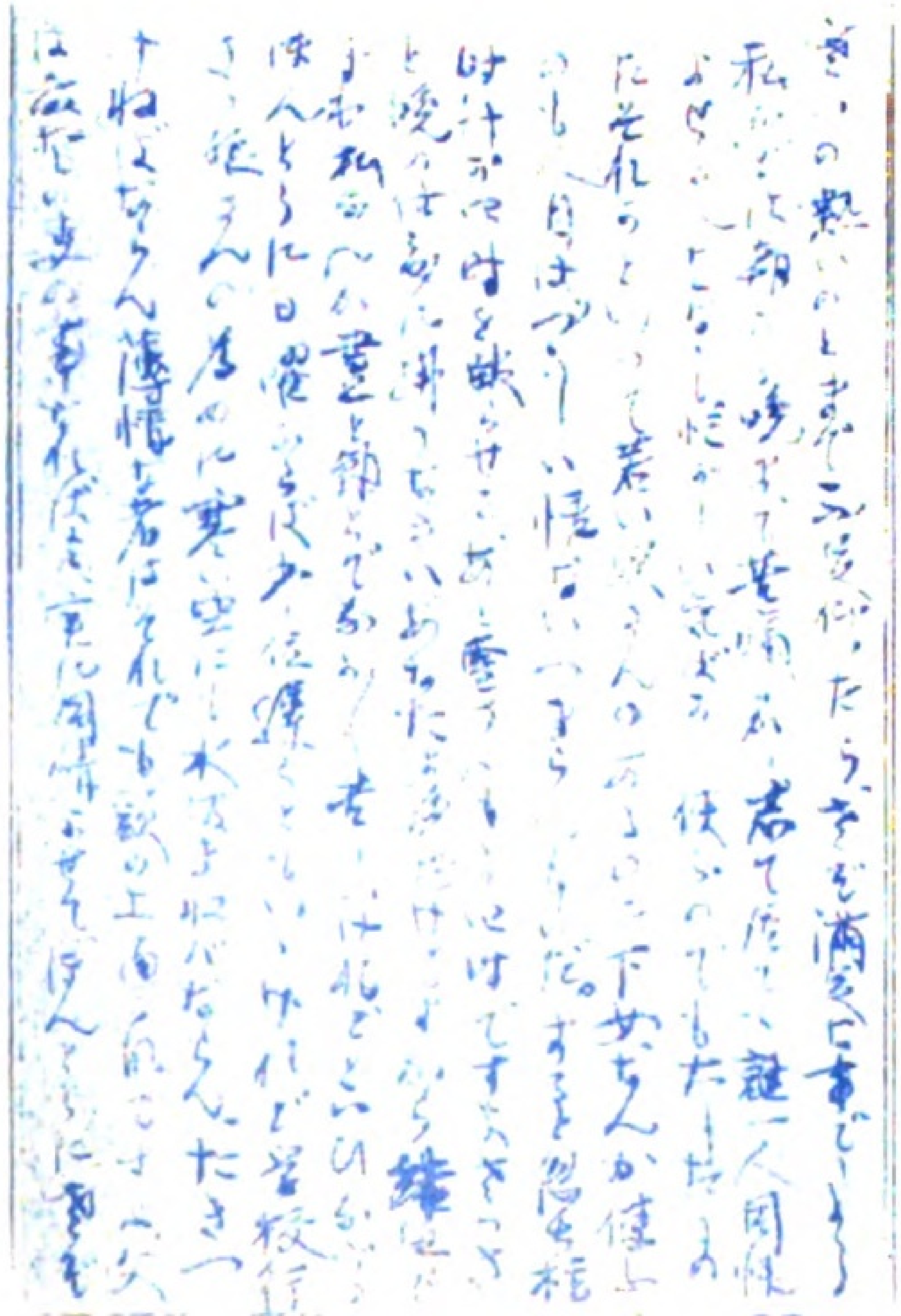
女（丙の四）

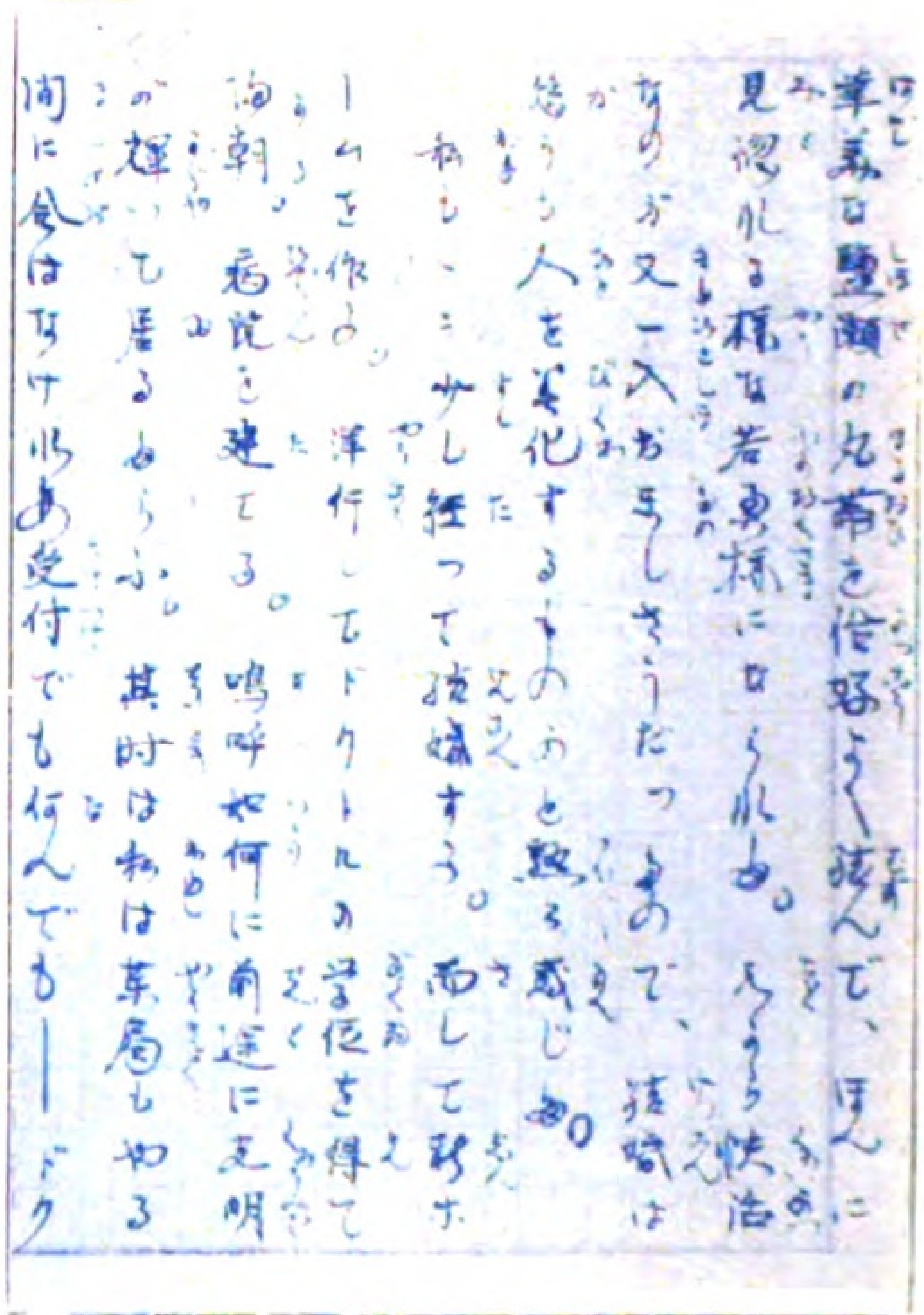
大使の安着



シアトル安着當ウドランド公園通行の光景、前自動車は、平夫人、同令孃　高橋日本人會長、同夫人、後車は荒井東洋銀行支配人、同夫人等なり。







華美な豐頬の丸帯を恰好よく結んで、ほんに見惚れる様な若奥様になられる。さうして快活なのが又一入お美しさうだつたので、語嘴は絡ふ人を美化するものだと感じる。
私も一寸少し経つて結婚する。而して新ホームを作る。洋行してドクトルの学位を得て、病院を建てる。嗚呼如何に前途に光明が輝いて居るだらう。其時は私は薬局もやる間に合はなけれあ受付でも何んでも――ドク

葡萄祭の景況



北米加州ローダイに舉行せる葡萄祭の葡萄の陳列

茶園内の喫茶店



同上加州にて日本人の設計せる茶園

佐々木弘綱翁遺著
佐々木信綱君校訂

和歌 世々のあと

全一册　洋装四六判美本　紙數約二百五十頁　正價金廿八錢　郵稅四錢

和歌世々の跡は明治の歌壇に多大の功勞ありし佐々木弘綱翁の遺著にして、國初より近世に至る凡ての歌人の代表的短歌を、時代を追うて採錄せるもの。專ら初學者の爲にとて、その選出に、戀歌を省き或は難解の歌を避けられたれば、**和歌の小歷史**として、**作歌の模範**として、**獨習用に又高等女學校の教科書**等に、最も適當なる書なり。長く草稿の儘秘藏せられしを、今年翁が十七年祭に、翁の鄉里伊勢石藥師村に紀念碑を建設するに際し、その紀念として、息信綱氏の嚴密なる校訂を經、かつ近世歌人年表和歌系統圖等を附し、添ふるに井上、小杉、木村、芳賀博士、本居侍講の追悼の文章を以てす。國文和歌に志ある人々の、必ず座右に備ふべき書なり。

東京本町　博文館

東京帝國大學文科大學講師 佐々木信綱君著

歌學論叢

全一册　洋装四六判總クロース　紙數約五百八十頁　定價金壹圓　郵稅金八錢

歌學論叢は、佐々木氏が、數年前より、帝國大學文科大學に於て、和歌の歷史を講ぜらるゝ、其研究の餘材として成れるものなり。或は燃犀なる眼孔を以て、『和歌と時勢』『和歌の將來』『歌學の根本』『上世の和歌』『歌格の研究』等に就て論究し、或は卓拔なる見識を以て、『人麿と赤人』『貫之』『西行』『實朝』『景樹』等を論評し、或は、『仙覺以前の萬葉研究』『戶田茂睡』等精細なる考證あり。或は『萬葉集の女歌人』『建禮門院右京太夫』等趣味津々汲めども盡きざるものあり。又、『六人部是香』『大隈言道』『野村望東尼』等未だ世に知られざりし歌人歌學者に紹介したるが如き、國文學史上に一新事實を提供せるもの。其他、『萬葉集私見』『近世歌人雜話』『家集のいろ〳〵』等すべて廿篇、五百八十頁にわたり、該博學なる學識と淸新なる文藻と相俟ちて、我國の歌學界に新生命を與へたる書と云ふべく、又上代より近世にいたる側面の日本歌學史と云ふを得べし。苟くも和歌に志あり、國文に興味を有する人々にとりて、必讀の好著なり。

東京　博文館　本町

（了の二）

女（丁の三）

英國 ボヅソン、エンドシンプソン會社 特製品

實用浮石鹼

千九百〇八年八月最新輸入品

會社の自慢本品特點

香氣の高きは
本品特點なり
價格の低きは
本品の特點なり
實用に適するは
本品の特點なり
上流界に好評を博すは
會社の自慢とする所也

レックス



論より證據實地御使用を乞ふ

東洋輸入元 東京 ヱ ス シ ー

賣捌所は全國到る處の信用アル
舶來小間物店及ビ化粧品店ニ有

謹告

四十年間 墺國宮内省御用

リスリン入 石鹼



此リスリン石鹼は芳香の馥郁たる色を白く皮膚を滑かならしむるの特徴を有する特に墺國醫學博士イー、イーボール氏の證明を得たり

一千九百〇五年

墺國タジク會社

日本一手販賣

東京日本橋區橋町二丁目

舶來化粧品 輸出入商 竹間商店

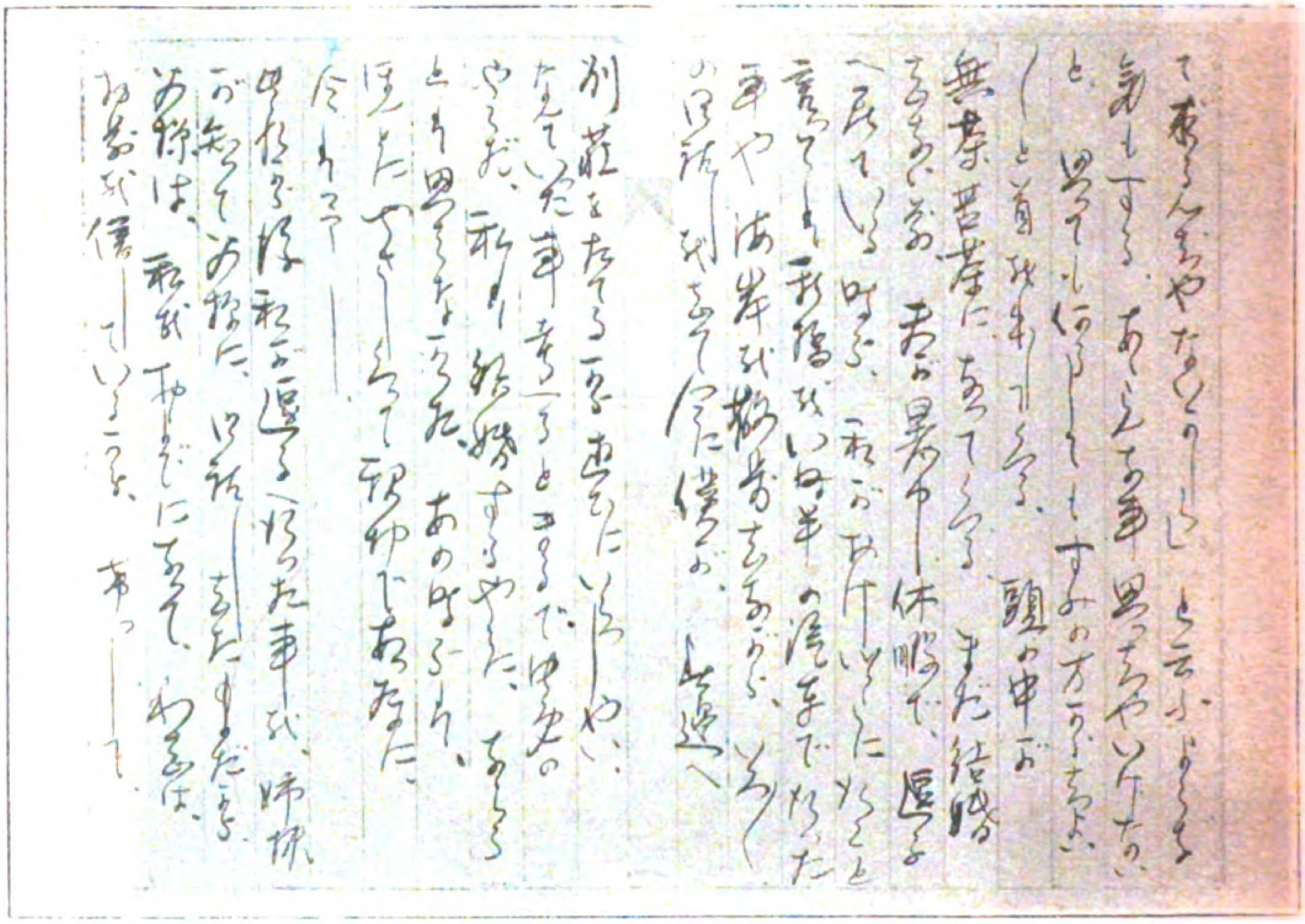
○販賣所市内は信用ある藥店小間物化粧品店に有之候

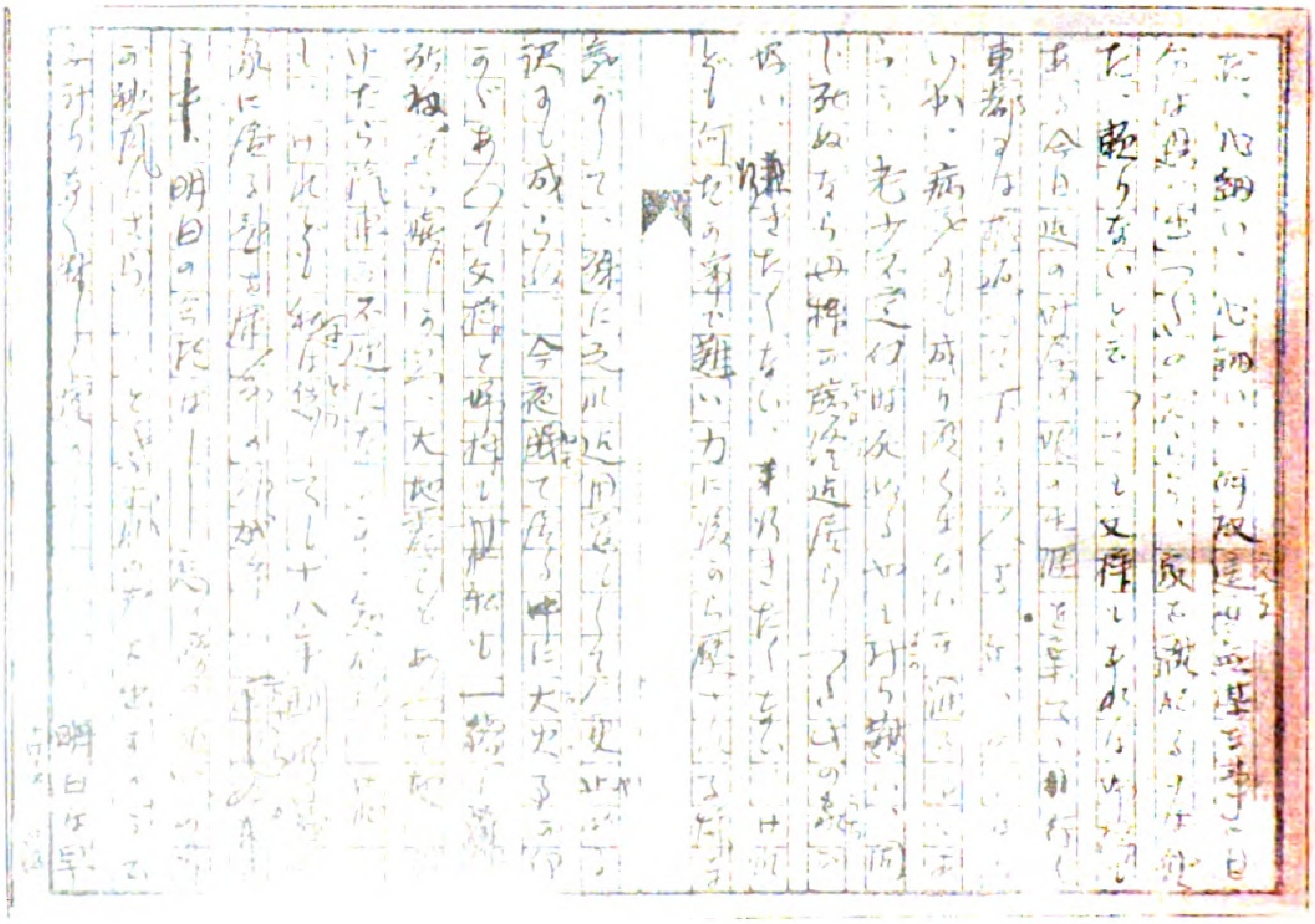
「タジク」の名なきものは僞物なり御注意を乞ふ

GOTTUEB TAUSSIG
Soap Maker and Perfumer to the Imp. and Roy. Cou.
VIENNA-AUSTRIA.

(丁の四)

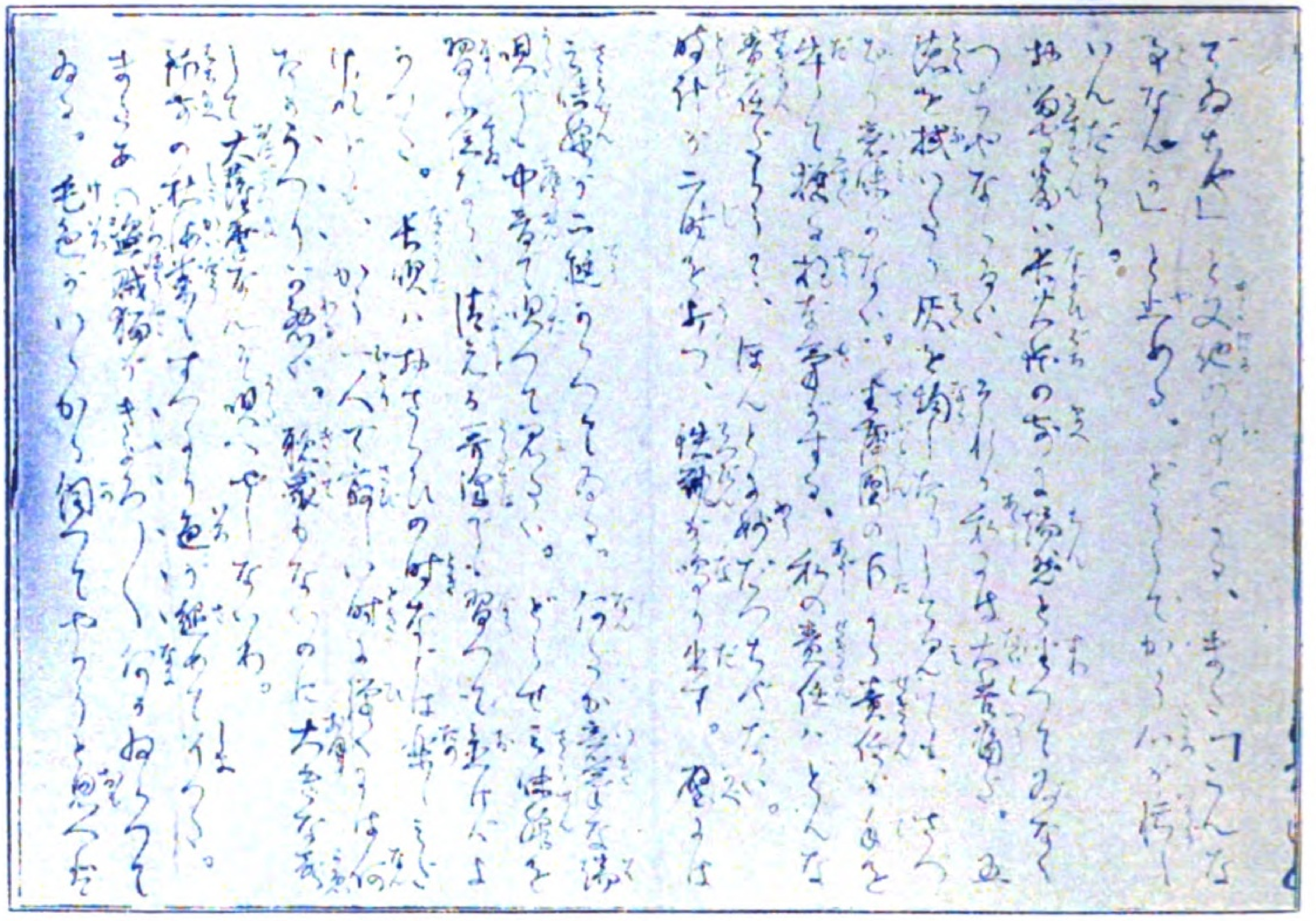
虐待されし從姉の日記外一種

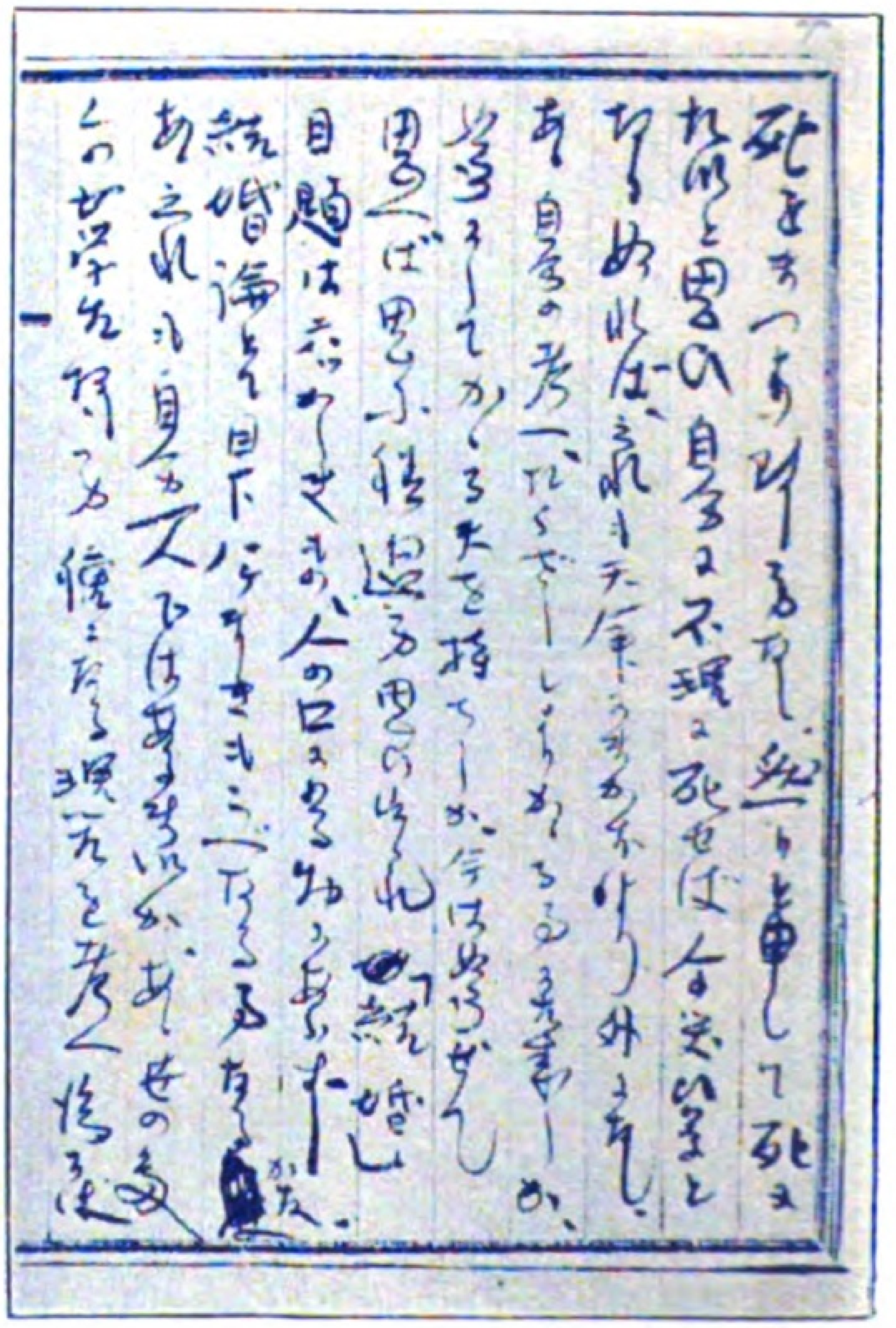


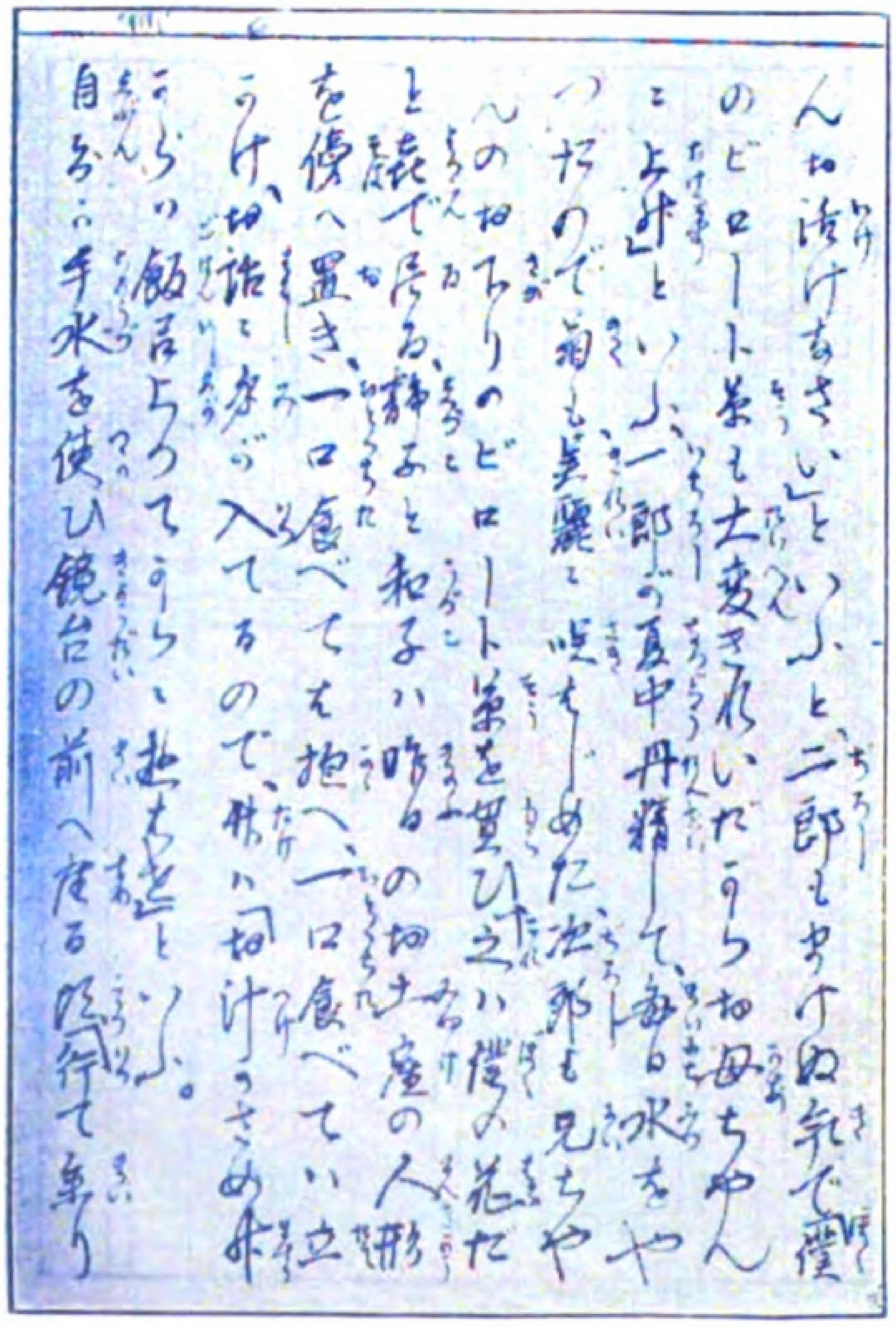


前橋大沼音樂講習所員









んお漬けなさい」といふと二郎もやけぬ氣で僕のビロート菜も大変きれいだつらお母ちやんとよんといふ。一郎が夏中丹精して毎日水をやつたので葉も美麗に咲きそめた次郎も見ちやんのおかりのビロート菜を買ひ之は僕の花だと競で居る、静子と和子は昨日のお土産の人形を傍へ置き一口食べては抱へ一口食べてはいつけ、お話と身が入てるので、味がお汁のさめてからの飯台らつてつら、[illegible]といふ。自分は手水を使ひ鏡台の前へ座る時行て来り

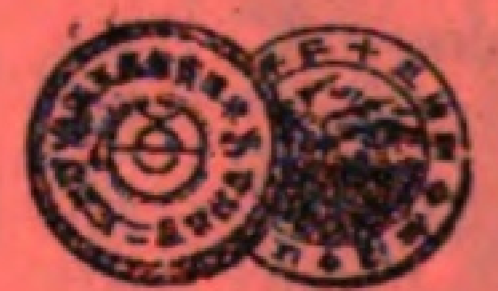
第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

壽美禮おしろい

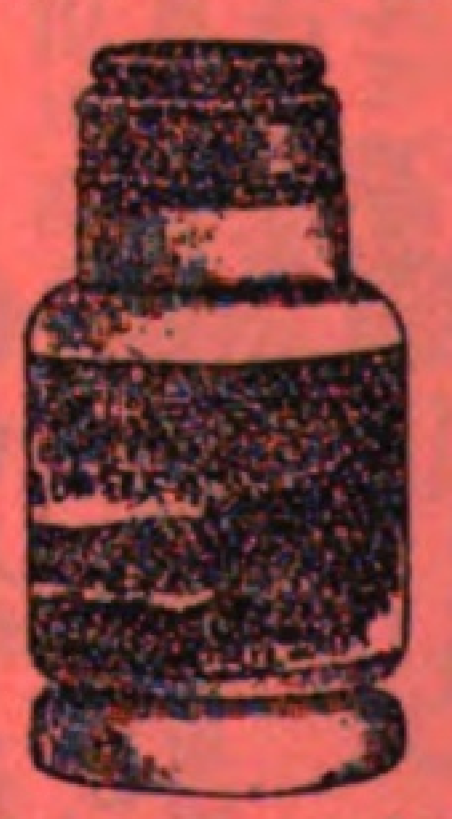
五二會品評會
功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴイオレツト煉製

錫蓋附乳白硝子器入



ヴイオレツト水製

ぬり製　大壜二十錢　小壜十二錢
水製　大壜二十五錢　中壜十五錢　小壜十錢
玉製
粉製
肉色各種
錫栓附乳白硝子壜入

◎壽美禮白粉

は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顏肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白さに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衞生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京橫濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑　壽美禮あらひ粉の特性

綠、藍、紅彩蝶番ひ罐詰入　錢
別製罐詰　五拾錢
大袋　二錢
小袋　一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美くしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗に御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は溫湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登錄商標
西洋白色くなるあらひ劑
SUMIRE
WASHLNG IOWDER
壽美禮あらひ粉



製造本舖　東京東兩國元町(兩國橋際)　壽美禮堂謹製　(電話浪花二七六五番)

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

(戊の一)

淞南 宮崎三郎君編

現代思潮

二十一家講話

▲講話者二十一家は悉くこれ當代斯界に於ける錚々たる人その時事を談ずるや眞摯にして熱誠着實にして明細その學説を叙するや深遠にして精緻津々たる趣味讀去讀來の間に生じて倦を措く能はざらしむ

講話者芳名

農學士 石渡繁胤君
法學博士 仁保龜松君
法學博士 戸田海市君
法學博士 千賀鶴太郎君
法學博士 岡村司君
工學士 金子篤壽君
鹿子木孟郎畫伯
工學士 加護谷祐太郎君
工學博士 吉川龜次郎君
竹田默雷師
法學博士 田島錦治君

理學士 坪井仙太郎君
湖南 内藤虎次郎君
法學博士 井上密君
桑原芳樹君
醫學博士 松岡道治君
福井彦次郎君
南岳 藤澤恒翁
醫學博士 佐多愛彦君
文學士 島文次郎君
下河内十二藏君
（イロハ順）

▲編者は青年新聞記者として最も有爲の敏材冷静能く諸大家の聲咳を寫して些の誤謬なし而して行文流麗盤上珠を轉ばすが如し眞個秋燈讀書の好侶伴たり

洋裝四六判並製紙數二百十八頁
正價金三十五錢郵税四錢

女（戊の二）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

加藤文學博士序
辻教育會長序
高崎正風男監修
學習院教授秦政次郎君謹修

教育勅語奉釋

教育に關する勅語は單に學校のみならず家庭社會を通じ一般の國民に賜はりたる聖諭にして人道上の大憲法なれば必ず其謄本を奉戴して各人拳々服膺せざるべからず而れども聖旨の宏大深遠なる之が奉釋を試みたる者少なからず何れも特色ありと雖も各階級に適する能はず是に於てか一徳會長高崎男爵閣下は秦先生と相諧り特に先生に囑して歴朝の御遺訓と祖先の遺風とを詔勅御製並に正史正傳より謹査審按して卑近簡明なる通俗の口語に奉釋し勅語を全國の同胞一千萬戶の家庭に普及すると共に聖旨の在る所を知らしめんとせらる歐米にすら大に此の勅語に感激して或は教科書中に入れたりと聞く我々國民たる者は一人にても知らずして可ならんや本書は老幼とも既に假名字を讀む目あるか之を聞くの耳あらば聖旨の宏深なるを拜了すべく特に青年の心性修養の第一義は此の勅語の外に覓むべからず弊館幸に發行の榮を荷へり全國の各位毎家に一本を備へて必ず聖諭を奉戴せられん事を望む。

全一冊洋裝菊判金模樣刷
美本紙數百十二頁
正價廿四錢　郵稅六錢

奥村繁次郎君著

家庭に於ける吉凶百談

▲洋裝四六判紙數三百八十頁▼

●正價金四拾錢　▲郵稅六錢

この書は平素家庭に於けるあらゆる禍福吉凶の原因を詳述したるものにて、文意は何人にも分り易く、一目にして半信半疑の妄説を破り、如何なる迷信家と雖も忽ち迷信の愚なることを感じ教育學及び風俗研究の參考書ともなり、教育家は固よりいづれの家庭に論なく、必ず一讀すべき實用的要書也

東京　博文館　本町

女(戊の四)

幸田露伴君著

普通文章論

文章に二あり、一は美術的文章にして一は實用的文章なり、世の作文難を唱ふる者は畢竟文章に此二種あるを知らず、又た二種の特長如何を辨別せず、一種の混合文章を作成するに汲々として實用文章か美術文章か譯の分らぬ鵺的文章に苦心せり、其の到底滿足なる文章の作られざる所以怪しむに足らず、而して實用的文章の範圍は極めて廣大無邊にして所謂文章の七八分を支配し占領せりこれ其文體が淺近、平凡、庸常、容易、單簡にして然かも明晰なる人間に切實なる用途を與ふるものなればなり、幸田先生茲に感あり近時作文書の汗牛充棟なるも多く實用文章の性質を誤解せるを遺憾とし遂に「如何にして普通文章を作るべきか」といふ問題を最も明快に解決せられたり、作文難の士は必ず一本を机上に備へて先生の精論を熟讀せられよ

洋裝四六判上製
定價七拾五錢
郵稅八錢

モリス、ブロック著
前田越嶺譯

偉人の母

再版

全一冊洋裝菊判紙數百八十頁
正價金參拾八錢
郵稅金六錢

●1 羅馬の偉人グラッキの母●2 宗教界の偉人オガスチヌス(オーガスチン)の母●3 佛國の詩人アンドレセニエ兄弟の母●4 獨逸の文豪シルレルの母●5 獨逸の天才ゲーテの母●6 ナポレオン一世の母●7 佛國の文豪シアトブリアンの母●8 佛國詩人ラマルチンの母●9 佛國の博學者リットレの母●10 佛國の歷史家ミシュレの母●11 佛國武士の典型バイヤールの母●12 佛國の將軍チュレンの母●13 佛國博物學者リン子の母●14 普王フレデリック大王の母●15 ワシントンの母●16 瑞西の教育家ペスタロッチの母●17 蘇國小說家ウオーターースコットの母●18 獨逸の音樂家メルデルツソンの母●19 獨逸の詩人ハイ子の母

女(戊の五)

東京 博文館 本町

特製 正價各五拾五錢 郵税拾錢宛 ‖ **帝國百科全書**（最近發行）‖ 並製 正價各四拾錢 郵税八錢宛

第百八十二編 會計法論

法學士 工藤重義君著

會計法は財政學中最も實務に重要なるものにして會計法を學ばずんば財政の運用と活動とを了解すること能はず本書は著者が我國現行の會計法に付て親切に解說を下せしものにして會計法會計規則より幾多勅令省令訓令をも引用參照したれば我制度の趣旨は一目瞭然に理解することを得べし一般の官吏公吏は勿論苟くも財政に志ある人士は必らず一讀せざるべからず

第百八十三編 都市經營論

法學士 矢田七太郎君編

我國自治制を布かれてより年を經ること少しと爲さゞるなり然るに其發達の遲々たる慣慨に價するものあり是れ豈に人の之が攻究を怠るに因るなきを得ん乎矢田法學士多年思を此研鑽に潜め而して今此著あり豈茲に見る所あるか其說く所を見るに序次整然說明親切或は範を歐米に採り或は缺點を現制の中に捜り能く都市經營に就ての要項を說き盡して餘蘊なし就中都市改良に關する所最も見るべしとなす自治制の下に生れて其善政に浴せんと欲するの士は必ず一讀を怠るべからず

第百八十四編 殖民政策汎論

法學士 山内顯君著

海外に向つて發展を計らんには、鞏固なる基礎の下に殖民をなすより他に良策なることなし、是れ學者の定論にして又實驗の之を證する所たり著者は曰く「民族統一の時代は一轉して帝國主義の時代となりぬ。帝國主義は半面に於ては二十世紀の強國たる能はず、新進殖民國たる日本國民が、殖民政策に關する一般的智識を有せん事は極めて必要なり。然り而して殖民政策に關する良著の世に行はるゝもの乏きに至ては、吾人の切に遺憾とせざる能はざる所なりとす、余固不敏自ら其器に非るを知るも、必要は終に本著を成すに至らしめたり」と。以て著者の抱負の存する所を見るべく又著作の梗概を窺知するに足るべきなり。血に富めるの男子は一讀以て雄飛の素を成すに怠るべからざるなり

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（戊の六）

博文館雜誌廣告料値上げ豫告

廣告料を屢々改正變更致し候は廣告者に不安の念を懷かしめ感情を損じ廣告紙面發展の上に影響する處尠からざるは弊館も豫知する所に御座候へども何分とも弊館雜誌發行部數の增進號を追て甚しく就中三四種の雜誌は現在の料金にては其實費を償ひ難き有樣に御座候へば此値上げ斷行の爲め廣告紙面の減縮候樣の事有之候ても致し方なきものと覺悟仕り斷然從來の廣告料金に改正を加へ値上げを施し明治四十二年一月號分より決行仕るべき筈に御座候其改正定價表は本月中旬迄に各御得意方のお手許迄差送り可申候間來る一月號よりは右改正定價表により塲面等級割引等從來の取次人若くば直接御引合の上倍舊の御愛顧賜はり度希望仕候

東京日本橋區本町三丁目

博文館廣告係

俳壇の珍寶現はる

內藤鳴雪翁題句
中村不折君揷畫
今井柏浦君著

俳諧例句 新撰歲事記

古來『歲事記』に關する幾多の著述ありと雖も、多くは德川時代の編纂に係り、蕪雜杜撰、全く今日の用を爲さず、明治の刊行に成れるもの亦た繁簡適せず、眞に斯道の津梁たるべき書殆んど絕無の狀態なるは、俳界多年の缺陷ならずや。著者深く茲に慨する處あり、多年研鑽せる蘊蓄を傾盡して古今の『歲事記』を參酌し、東西百科の書籍を涉獵し、精査探究、其錯誤を正し逸却せるを拾ひ、更に多くの新題を網羅す、分類精確、註解簡明、尙は各題毎に古今大家の例句を示し一瞥の下に作句を自在ならしめ、且つ卷頭には部類別、いろは韻索引、分類別を附して檢索に便し、整備完美他に匹儔を見ず。即ち本書は俳壇唯一の典據たると共に又又空前の一大歲事記なり。俳句に志す人の稀有の重寶たるのみならず、實に明治文壇を飾るべき光彩ある出版物の一たるを失はざるべし。

全一册洋裝菊半截判
携帶至便 印刷鮮明
紙數約六百頁

近日刊行

（戊の七）

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館

女學部新設

實用 女學講義錄發行

◢本會は中學講義錄の發行に從ふこと既に五年通信教授に於ける甚深の經驗を基礎となし今回更に女學部を新設して『實用女學講義錄』を發行せり。
◢講習期一ヶ年半、此間に於いて高等女學校程度の學課は勿論、本邦家庭の事情に照らし女子必須の諸家目を講說し圓滿なる主婦を作る事を目的とす
◢講義錄は每月二回發行とし講師は教育に經驗深き斯道專門の名家のみ也講述極めて平易、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難き憂なかる可し
◢每月女學雜誌『姬百合』を發行して會員に限り每號無料進呈す『姬百合』は現代知名の女子教育家及び專門大家の訓話學說創作及び會員の投稿を揭ぐ
◢會長尾崎行雄親しく本部を監せらる。組織整頓し取扱最も懇切也。且つ會費極めて低廉、都會一ヶ月の遊學費を以て優に全學科を修了する事を得べし

◉新學期開始＝至急入會者に限り入會金全免すべし◉

見本
無料
つき
進呈
規則

大日本國民中學會女學部
東京駿河臺
電話本局三千〇四番
振替口座四千二百番

(戊の八)

紅葉をさこそ嵐の拂ふらめ
　この山本は雨とふるなり　　權中納言公經

露をおもみ籬の菊のほしもあへず
　晴るれば曇る宵の村雨　　鎌倉右大臣

白菊のまた咲けるかと驚けば
　霜の下にぞ色はありける　　源三位賴政

昨日こそ秋はくれしかいつの間に
　岩間の水の薄氷るらん　　大納言公實

まばらなる槇の板屋に音はして
　漏らぬ時雨や木の葉なるらん　　藤原俊成

ちりはてゝ後さへ風を厭ふかな
　紅葉をふける山のべの里　　藤原盛雅

風寒み木の葉晴れゆく夜な〳〵に
　殘る隈なき庭の月影　　式子内親王

木の葉ちる宿に片しく袖の色を
　ありとも知らでゆく嵐哉　　前大僧正慈圓

さよふけて月影寒み玉の浦の
　離れ小島に千鳥なくなり　　薩摩守忠度

鳥さゆる富島が磯の村千鳥
　立ち居は波の心なりけり　　正三位季經





小姑の書いた嫂の日記

若紫

兄サンは去年大學卒業の新學士であるが、大分此頃はお金づかひがあらくて髪を變な香ひの油で、カヅラの樣になでつけて居らつしやる、御兩親は俄に嫁をと大さわぎ、時々大學一流（？）の筆蹟でもなく、何となくいやしき、しかも今まで聞いた事もない名前の人から手紙が來る、兄サンに誰と訊くと。

「矢張りお友達さ」

と仰有るきり、直ぐ讀まうともなさらぬ、夫から來た手紙許は、お留守の時本箱、机の抽出し、イクラ探しても見えぬ、不思議でならぬと思つて居ると、丁度兄サンの出張留守に又來た、氣に成つて仕樣がないので惡いとは知りつゝ、そつと開封して見た所、果してひどい折釘流で、先夜は失禮したことの、御病氣はいかゞさまだ事の、私もどうやらお腹の工合が變で、食事が進まぬから、是非今晩か明晩の内に來て下さい、御相談したい事があるなどゝ書いてある、おしまひに妻何子より、旦那樣へとある、兄サンに限つてと思つてたのに、いつのまにこんなものに近づく樣におなりなすつたやらと思ふと、イヤに成つて、口もきゝたくなくなる、昨年頃までは私にも和歌を習へことの、ピヤノがよいのと、高尚な事許り仰有つて居らして、私もほんとうに好きだつたのに、此頃はお前の樣にさう衿をつめて着物をきると野暮でイケないの、御酒を注ぐ手つきが惡いのと仰有る、殆で人間が變つておしまひなすつた、どうかと思つたものゝソツト お母樣に見せると若い内には有りがちさと、案外落付いて居らつしやる夜分例の某サンが來らして、愈々近日嫂サンが出來る

ことゝなつた、某女學校の秀才で、評判の美人との事である、始めからお母樣は義のかたい田舍の相當な家庭に育つた娘の、極内氣なおとなしいのをとのお話だつたが、私は田舍者は一生垢がぬけないと主張した、私は只お友達の手前、曾つては代議士でもあつた人の娘といふだけ、肩身が廣くてうれしい、色々な事も教へてもらふし、散歩にも一緒に行かうし、嘸ハイカラであらう、赤ン坊が出來ると私が可愛がつてお守りをする、早く日が來ればよい待遠しい。

二 當日

愈々當日となつた、早朝から大さわぎ、私は床に松を挿さうと、一生懸命だが、平常手にかけないから思ふ樣にならぬ、よいかげんにして鶴の掛物をかけて座敷掃除して置くと、媒妁役の某サンが來らして、島臺とかいふものを飾るやら、屏風を引まはすやら、御婚禮らしくなつた、兄サンは折々出て來て、ニヤ／＼と思ひ出し笑をして居らつしやる。お母樣は今日は無暗な口は利れませんよと仰有つたから、私は愼んで居ますと、お勝手では早料理人が來て、トン／＼と俎の音をさして居る、來る人も來る人もお日柄ようと先づあいさつをする、知れ切つた事をと可笑しい。

表がやかましく成つたと思つたら、お荷物が來た、定紋附の簞笥長持のゆたんの萠黄の色あざやかなる、さては本箱下駄箱などに至るまで、所狹きまでズラリと並んだ、却々女の子を持つた親は容易の事ではない毎日々々學校に通はせ、人なみに何もかも出來るやうにして、さてこれだけのお荷物こしらへて、他所にやるのである、昔から女の子三人持つと家の棟おちるといふが、そんなものかもしれぬ、嫂サンは兩親と某サン夫妻につれられて來らしつた、門前のガヤ／＼とさわがしい事、お車が這入ると門をしめさせる、お玄關からお化粧室に行かれるところを、チラと見た、文金に黒紋附、背はスラリと思ひきり高い。

さて兄サンは叔母サンに何か頻に教はりながら、お袴の紐を結んで居らつしやる、ブランデーを一杯グツ

ト呑んで、例の肩をふつてお座敷に笑ひながら居らつしやる、咳ばらひ一つ聞えなかつた、間もなく高砂がきこえる、暫くすると今度は私達も行くのだと呼びに來る、行つて見ると先の兩親親類が一とながれ、又此方は父様、母様、兄サン、其おとなりに嫂様がチヤンと、今度は勝色の御紋附に着かへてすわつて居らつしやる、齢も二十四といふのだから恥しくもないのか、ツンとすまして却つて兄サンの方がきまり惡るさうにうつむいて居らつしやる。何だか配合がわるい、お酌の老女三寶にお盃のせて持つてまはる、如何に商賣とはいへ、手に入つたとはいへ、餘りシヤア〳〵として重みがない、私のあたまの上までお三寶さゝげて、又下つて置く所など、式の森厳も何もあつたものでない私はをかしさを忍んで居た、學校で作法の時 某サンと某サン のなすつた方がどれだけ温淑でよかつたかもしれぬ。

一とわたりすむと、サア皆が色々なお話をする、何雄サン此間までこんなであつたが將來にそんなのが出來ますよなどゝ兄サンはいはれて居らつしやる、私はよいかげんに引さがる。

三　翌日

朝嫂サンは雨戸をガタ〳〵さして居らしたが、遠慮して行かないで置くと、此度は兄サンが開けに居らしたやうだ、兄サンは、常もよりまじめにお手水つかひに來らつしやる、嫂サンは昨日の島田少しみだれて、花やかなお召に、小豆色のお羽織、どちらかといへば粋といふ方に近い顔立、成程奇麗だが色は白粉やけとでもいふのか淺黒い。

朝食がすんで兄サン、嫂サンのお部屋にあてられた八疊に行くと、細工物だの編物だの、寫眞ブツクには、そも〳〵子供時代から順よくはさまれてある、それから琴、生花、茶之湯の免許證など大變なものだ。

午後兄サンと二人でお墓參りやら、親類まはりなさるので、着物換するとて水色に裾模樣のある縮緬の長襦袢のまゝ彼方此方なさる、之れ見てくれといはぬ許

りに見えていやしい、やがて車がくる、無論先のは嫂サンである、夕方お歸り、折からお風呂があきましたといふ、先づ嫂サンからといへば。

「ア、さうですか」

サッサとお這入なさる、イクラお湯の遠慮は水に成るとはいへ、之れでは餘り曲がなさ過ぎる、後私がはいつて見たら糠が奇麗に圓めて、片隅に置いてある、僅な事ながら、つゝましげな花嫁らしくてよい。

夜は茶の間で父様は新聞、母様は縮緬のみゝも少しつなぐと、一反分だとセッセとつないで



居らつしやる、私は雑誌をよむ、奥の八疊ではトランプでも始まつたらしい、キャッキャッと笑ひ聲がもれる、私にもおはいりなさいと呼びに來さうなものだが、と思つて居ると今度は兄サンはインバチス、嫂サンはセルのコートで、そこら歩いて來ますと二人でお出まし、私は何だか思つた程面白くない、父様母様をソット見ると、不安の色がアリアリと見えるが、皆何ともいはない。

九時頃お歸り、緋鹿の子のてがら、根掛、リボンなど買つて戴きましたと

出して見せる許り、母様はやさしく。

「ソレはよかつた」

と仰有ると、其まゝ持つて奥に入らつしやる、一つ如何ですとたとへ口先許りでも仰有れば父母はどんなに満足なさらうものを。

四　其後の様子

毎朝食事の仕度の出來た頃、起きて居らつしやる、そして食事がすむとフイと八疊にはいり込んで、ピシヤンと唐紙をしめたきり、出て來らつしやらない、少しも打とけた風はない、まるで下宿人のやうだ、來客でいそがしいから、嫂サン一寸之をお座敷に運んで下さいませんかといふと、兄サンは私をお睨めなすつた第一に我子第二に妻、勿體なけれども親は第三番目と或人の自白の通りであると思つて居ると、兄サンが「此處へ養子に來たと思へ」と仰有る、何だか私には意味がよく分らぬが多分嫂サンに運んで下さいといつた事がお氣にさわつたらしい。

晝食の時、お父様が先刻某が來て私の縁談の事をお話なさると、兄サンと嫂サンが顔見合せてクスクス笑つて居らつしやるので、私は何ともいへぬイヤな氣がした。

午後は父様も母様もお出掛け、夕食の時私は御飯をつけますから、嫂サンお肴をつけて下さいなといふと先づ頭を兄サンに、次に眞中を御自分、尾を私におつけなすつた、私は重々面白くない、たとへ學術優等であらうが、琴が上手であらうが、何になる、女は智育よりも德育が大切である、私は學問も何もないが、嫁したらこんな氣まづい事はしない、お蔭でよい學問をした、一體嫁入るといふのは遊びに行くのではない、家風の異つた家にゆき、家人の意に投する様にと思へば、却々むづかしい、樂天も程度を越すと馬鹿も同じだ、兄サンが、

「明日お天氣だつたら旅行でもしよう」と仰有る、嫂サンが、

「私は出る事なら何時でも」

といふので早速きまる、兄サンも殆で變つておしまひなすつたが、其中をうまく取もつのが嫁の役目であるまいか、嫂サンは自己本位だから、とても家族のある處では納まらない。

　翌日は早朝髪結ひが來て丸まげになさる、能く似合ふ、ほんとに好いマダムぶりだ、之れで今少し氣をおつけなすつたら、申分はないのだがと思ふ、兩親は何事も穏かにと日頃の氣質、元々着實なる家庭に、外面を飾るもの丶娘だからそも〳〵撰擇をあやまつたのである、次に我息子に妻を御する力がないのであると歸らめて居らつしやる、それにしても嫁を娶らんとする息子に、妻帶後の心得等をよく〳〵申聞かすべき必要がある、從姉のお何サンは、婚禮の晩夫から、自分にかまはず親、弟妹を大切にしてくれといはれたとやら、そして陰になりては夫が私をかばつてくれると話した。

　夕方は思の外早いお歸り、お土産は鮒酢司である家では誰も食べないのは兄サン御存じの筈と思つて居ると、嫂サンが、

「里の父は餘りおいしいものに厭きて斯樣いふものが好です」

と仰有る。父樣は、

「それなら持たしてやれ」と仰有ると、イソ〳〵女中にお渡しなさる、嫁の里自慢程感情を惡くするものはない、ほんとうに愼むべきものである、口ぐせのやうに早くよい嫁とつてと仰有つたお母樣の失望は、どんなであらう、此上多くはいふまい、鬼千匹といはる丶小姑の身である、只もう一度水入らずに親子むつまじく暮して見たい。

◎湛々たる筆づかひ、而して用意極めて周到綿密。

◎巧を求めずして巧奇を衒はずして而して奇。

◎言葉少くして、意味を言外に置き。多く言はずして自然に人を信服せしむる度量あり、誠に是れ名将の兵を行るがごとし。

◎これを書いた方はどんな人か、却々隅には置けない女だ。

◎そこで斯ういふ嫁が今の家庭に納まつて行くものとすればムスコ殿は萬歳である。

看護日記

一宮きよ子

◎つらかりし一日

今迄の病室は陰氣だからとて今朝姉樣の御氣分よきを幸、お母樣と二人で南の間にお床を引き代へる、前の間とは違ひ其晴々しさは、小春の日影が心地よう障子一面に照つて縁には「玉」が居るのか鈴の音がする。東枕に吸入器や藥瓶、それから昨日摘んだ藤袴を生けて上げる。

今日は、少し動かれた故か咳が甚く出て見る目もつらい位、今朝は冷いから絹の綿入を着せて上げる、姉樣は細帶を結びながら不思議相に前を合せて見て『この着物はこんなに大きかつたかしら』と云はるゝに何氣なう『そりやお痩せなすつたから』と口迄出たのをハッとして默つた。

熱を計る間に亂れたお髮を梳いて上げながら色々と浮世話をする、今朝は何時になく血色もよく時々痩せなすつた頰へ輕い微笑さへ浮ぶのに、「病氣が病氣故」と豫て石橋樣(醫師)からは聞くものゝそこは同胞の慾目に、此樣子ならば其内に全快さるゝだらうと嬉しう思う。

お母樣が牛乳が煮えたと仰しやるので早速差上げると二合飲んで『ア、もう、これで三月寐たかね……』と背を下に夢の樣に天井を見て歎息せらるゝに『もう其内に起きられませう』とは事なげに云うたが妾は急に淋しい淋しい思がして泣き度くなつた。

夜になると例のごとく熱が出たので妾は氷嚢をのせて上げて枕許に見張る、洋燈の火がヂヂと燃えて、寂とした外からは蟲の聲が漏れ來る、姉樣は急に物に驚いた樣に眼を開けられる、かと思うと亦ウト〳〵とせ

られる。咳が出る毎に背を輕う撫でゝ上げて長き夜の經つのを待つ。

十一時にお母様と變つて妾は床につく、隈なく照る月影は窓から水の樣にさし込む、妾は今宵も冷たい夢に入るのである。

◎嬉かりし一日

姉様は變つた事もない、二三日前から急に寒くなつた、朝は裏の垣根から野は一面の霧、姉様の手水を持つて行く時白く息が見える。十時頃、妾が井戸端で水使をして居ると人が



ある、誰かと見ると明石の叔母さん、餘りの久々に「まあ」と云つた切り襷を脱し乍ら後に從て上がる、昨日から叔父様が留守なので一寸見舞に來たとの事、姉様には見事な梨を下さつた。叔母様は相變らずの面白い御氣象、妾がつひ〳〵暇の無いので身じまひをもせぬのを「きよ子さんも女なら髪位は結つては如何、殆で唐獅子の樣だ」なぞとそれは夫れは面白い事許り仰有つて、留守だつたお母様が歸つて見えた時思ひがけぬ笑ひ聲に吃驚なされたとの事、姉様迄が氣が紛れ縁の暖い處へ出て

肩掛にくるまりながら面白げに話を聽いて居らるゝ樣子、妾はこんな嬉しい日は無いと思うた。何も一晩なりと、お預しても家が心掛りだとて叔母樣は夕の列車で歸られる。切角樂しかつた日も叔母樣の車の音が聞えぬ樣に成ると共に暮れて、後は一層身に泌む舊の淋しさ。緣に立つて鐘の音を聞いた時妾は得も云はれぬ秋の淋しさを感じた。而も賴る人とては唯一人のお母樣、せめてお父樣が今迄生きて居て下されたらと果敢なき事を思ふ。

◎夢心地

朝からの混雜、石橋樣は昨夜から詰め切つて居らるる。明石の叔母樣は不斷着の儘見えた。妾は二三日前から病人には近づけられぬので唯臺所の手傳をする。襖を閉て切つた奧は寂として唯吸入の音がするばかり、伯母樣は奧へ行つた儘未だ出て見えぬのが妾は氣が氣では無い。時々衣ずれの音がしてヒソ／＼と話聲がもれる。

ふと出て來られたお母樣を見ると遠く夜明しに血の氣のないお顏色、妾はお母樣から先へ倒れられはせぬかと案じた、妾は若い故か別に疲れたとも思はぬ。最早覺悟はして居るものゝ唯ブル／＼と體がふるふ。

今日も夕方に成つた、妾が洋燈を持つて行つてそと差し出す時、微に姉樣の聲が聞こえる、そして何かお母樣が云つて居らつしやる樣子、すると叔母樣が出て見えて妾を陰に呼んで「今夜は決して變は無いとの話だし疲れてもいけないから先へお休み」と仰しやる、妾は强てとも云ひ得ず心許ながら、自分の部屋に下がる、午後から曇つた空は雨風となつて戶に打ち附ける雨の音、妾は二分心をつけて床に入る。病室の方には物音一ッせぬのに幾分か安神して日頃の疲につひうとうとと寐入つた。

ふと足音に眼を開けると枕元の廊下で話聲。

「今夜でせうか!?」とは叔母樣。

「さうで無いかと思うですが……」石橋樣らしい、妾は飛び起きた、そして廊下へ出るとお母樣だ、お母樣

と石橋樣とが立つて居られる。
『姉さんが如何ですつて』と思はず聲を。お母樣は『コレ』と眼で睨んで『其聲は何です!!! お前は呼ぶ迄入つておいで』と叱られた。
妾は茫然と坐つた、雨は少し降り止んだ樣子だが風は益々烈しう裏の木を吹く音が物凄い。病室では夜具を動かす音がする、暫く靜だと思うと話聲が聞える。ドーと金盥に注ぐ水の音がするかと思うと亦舊の靜さに歸る、すると突然『石橋樣!! コリャ如何でせう!?』と高い聲、ハタ〳〵と足音がして急に動搖めく樣子、妾はハッとして立ち上がる途端、お母樣が『きよ、早く』妾は前後の辨もなく病室へと走り込んだ。

◎淋しき日

混雜した家の中も一昨日頃から大水の退いた跡の樣な寂しさ、それに急に寒く成つた、朝晩は火鉢によりたい位。正午迄は臺所の後仕舞や庭の落葉の掃除に過す。
妾はふと机の前に坐つた、庭の垣根を見ると野菊が咲いて居る、きれい〳〵の白雲の間から力弱い午後の日影が照るごとに障子が赤くなつて葉末の露がキラ〳〵と赤に黄に緑に輝く。
机の上にはズット前仕掛けた靴下が未だ其儘に錆びた針にさゝれて居る、塵にまみれた寫眞立、アヽこれは姉樣がなすつたのかと思はず手にとつた。
最早姉樣の葬式が濟んでから十日、それでも妾は未だ姉樣が亡くなられたとは思えぬ、かうじつと机に坐ると隣の間で微な咳拂や夜具の音がする樣、亦病室の前の廊下を通る時は何となう覗いて見たい樣な心地がせられるのに私は私の心を笑つた。
お母樣が見えて、暇ならば姉樣の行李を一度調べてはと仰しやるので進まぬながら手にかける、何か入つて居るとはよく知つて居たものゝ中を見ると、今更胸が迫る。
髪の道具、小學校の時の御褒美、編物の型、琴の爪などを一々取り出して見ると何れも皆昔の見覺えのある物ばかり、妾は齢の行かぬ時姉樣とよく飯事をした

事、雛様を飾つた節句の事を思出す、何時か一緒に伊勢へ行つた事、途中で妾が汽車に酔つて笑はれた事もあつた、アヽあの時は姉様も壮健だつた、そしてお父様も居られた、あれが家中そろつてした旅のお終だつたと思うと急に悲しう成る。

　すると不圖眼に止まつたは罫紙をとぢた日記「さよ子」と姉様の名があるのに、恐る恐る開けて見ると細い字で折々歌や感想を記したのが眼に入る、縦の罫に更に横線を引いて、一枚毎に朱で日附がしてある、三月四月と繰り行くと六月頃からは漸う白い頁が増して九月に成つては何も書いて無い。噫、十一月迄の壽命とは神ならぬ身のどうして知られたらう⁉筆の跡ばかり美はしう十二月末日迄の日附ばかり殘つて居る。

アヽ姉様は死なれた。妾は姉様のこの日記をひしと抱いて何時何時迄も形見とせうと思うた。

看護日記などいふものは概してつまらぬもの丶様であるが、讀んで居るうちに知らず〳〵引ばられて行くのは、どこにか眞實の描寫があるからであらう。果然夢心地のくだりに至つてまさに入神の文學に接觸した、臨終の一刹那思はず手に汗をにぎらせた。





可惜教育を受けたる女の不遇日記

筑紫磯子

◎一日

私達を第二回として送つた母校は、此春四回目の卒業生を出した。

何某伯令嬢の夫人となられたと云ふて、同窓生から羨まれてゐる友もあれば、學士夫人と成り澄ましたきり、文通さへせぬ友もある。才德兼備の靜さんは、行末どんな美しい花を咲かせるかも知れなかッたのに、とう〱奥津城の人となつた。なつかしうてならぬのは、靜さんばかりである。

今夜は、隣りの豊田家の婚禮とて見物の爲であらう表通りが特別にさわがしい。私も一寸門に出て見る。丁度其時手に手に提灯を持つた、五六人の影が見えると、大勢の子供はわざ〱そこへ行つて御辭儀をする、不思議な事と思ふて、あたりの人にたづねたら、あの中の一人が今夜の聟様で、さうして〇〇小學校の先生との事であつた。

まあと驚いた。

豊田家は私の家庭と同じい、世間の人から度外視されてゐる、所謂醜業者である。それに、人もあらうに教育者が養子にならうとは飽くまでも意外である。

然し、同業者ではこんな事を云つてゐる。立派に税金を納めて、公然と營業を許可されて居る以上は、世間に對して、どこにひけを取る理由があるかと。

それも一應尤な理屈であらうが、幸か不幸か多少の教育を受けた私は、はづかしい、つらい思ひばかりしてゐる。

忘れもせぬ、女學校の一年生の時であつた、落合先

生の國語讀本にある、孟母三遷の敎で散々とはづかしい目に逢はされた。治亂興敗の歴史の時には、きつと其引合に出される、家政學、育兒の時にも、眞先に例をあげられる。賤業者の子女で、敎育を受けるには、こんなつらい思ひをせねばならぬかと、つく〴〵いやにもなつた、が、然しこんな苦しい思ひをするのも充分に我れに良心の存在してゐるからだと一方では又大いに喜びもした。

私は卒業後、猶けがれた木蔭で衣食してゐるのが心苦しく、自分だけでもどうにかして正しい道を行きたいものだ、せめて敎の庭にと、希望もしたが、惡家庭に人となつた身は、到底駄目と心ならずも、家事に從がつて居る。

だが〇〇小學校の先生の心持はと、ひそかにあやしんだ。

◎二　日

久しぶりに山田さんを訪ねた。

在校時代からヴアイオリンの名手、今も研究中との事、其居間にはヴアイオリンは勿論、オルガン、セロ、等西洋樂器がならべ立てゝあッた。

どうか、一曲としきりに賴んだが、なか〳〵應せず話ばかしきかされた。山田さんはこんな事を言つてゐる、「ミセスホワイトも、づるく、身分を見て敎授にも區別をするから殘念でならぬ。それに、川口さんは百三十五圓のヴアイオリンを買ひ、谷山さんも百四十五圓でデンマルクから取よせた。私は技術で勝ッて見せるとは思ふけれど悲しくて、くやしくて、泣きたい、將來に私も一錢でも五厘でも高いのを買つて見せる。」

山田さんの氣性としては、無理からぬ事、親しい友と云ふではないけれど、小學校時代からのよしみもあるので私も遠慮なしに、

どんな目的での研究かは知りませんが、分に安んせよ、と云ふ事もある。何の爲にそんな苦痛を求めなさる、私でも名譽心も、虛榮心もあるけれど家の職業が職業ですから、出度い所にも出ず、云ひ度い事も云はず、臺所の手傳や、帳面のつけ書きや、裁縫の加勢等

そして、いろんな事を考へる暇の無い樣に、からだを動かし、つらい時や悲しい時は腰折の一つも詠んで、自ら慰めてゐる。自分のまゝにならぬと云つても、突飛な事をするわけにはゆかず、萬事あきらめが大事です。

すると山田さんは又、

『筑紫さんのあきらめ宗には、常々から感服してゐるが、私の氣質としては出來兼ねる、ヴアイオリンを家庭樂としてどこまでも普及させる目的、さうして其引込思案とは反對、進んで交際社會にも出、金錢で出來る事ならどんな會にも入會して、今時の貴婦人社會の惡習慣を打破する積り、私のこんな心も皆社會が生んだのだから仕方がない。島村さんもそれはよくないと云ふけれど。』



あゝ自分も三年前まではこんな心をいだいた事もあつた。

川口さんも、谷山さんも、島村さんも、私も、同窓生の一人在校中こそひけを取らぬ時もあつたけれど、今は檢事長や、博士や、裁判所長の令孃だと思ひ出すと、急に淋しい秋風になぶらるゝ樣な氣がする、矢張り女の數には漏れぬか。

違ふ違ふ、目的は安心立命解脫だと自らいましめた。

今夜も漱石先生の草枕をくりかへした、破戒は讀むと淋しい〳〵感じがするので、堪へきれぬ。草枕では、いつもあの畫家の氣

持になつて讀んでゐるので、自分迄がしばし浮世をはなれた人間の樣な心持がする。

不如歸を讀んで左程感じが起らぬにつけて、血も淚も自ら失ひつゝあるかと思はれる。

◎三　日

三千六百斤の新代を受取に山下から來たので、母も留守どうしようかと父に相談したら、

『どうもかうも自分に云ふ迄もない、なぜ、都合がわるいと云ひわけをせぬか、其位の事が出來ぬと云ふては一人前の飯は食へぬ。』

とさん〴〵しかられた、しかられるよりわけを云ふて返すのが遙につらい。

四五年來の不景氣に、かてゝ加へて、株式上の失敗の爲、二萬圓からの負債の出來た事とて、父も苦しからうが、世帶廻り一切の遣繰をしてゐる、母の心痛も亦大したものである。丁度この時母がゐないで私がしかられ役になつたのは幸ひであつた。

今年入學した女學校の一年生、永野の娘に、暇の折折復習してやつて吳れとの事、出來ることだけならばと父母の許しを得て諾した。

◎四　日

朝早く墓參、黃ばんだ櫻の葉が大層ちつてゐる。庵から帚を借つてやつと掃除をすまし、香花をとりしばらくふし拜んだ。

こゝにねむつて居るのは、血は分けぬけれども母にも勝るいつくしみを受けた祖母である。十一歲の冬、木枯らしと共に、世をさられた。其折の悲しさは今猶忘れかねてゐる。

『祖母さんが存在ならおまへの家もこんな落目にはならなかつたらう。』

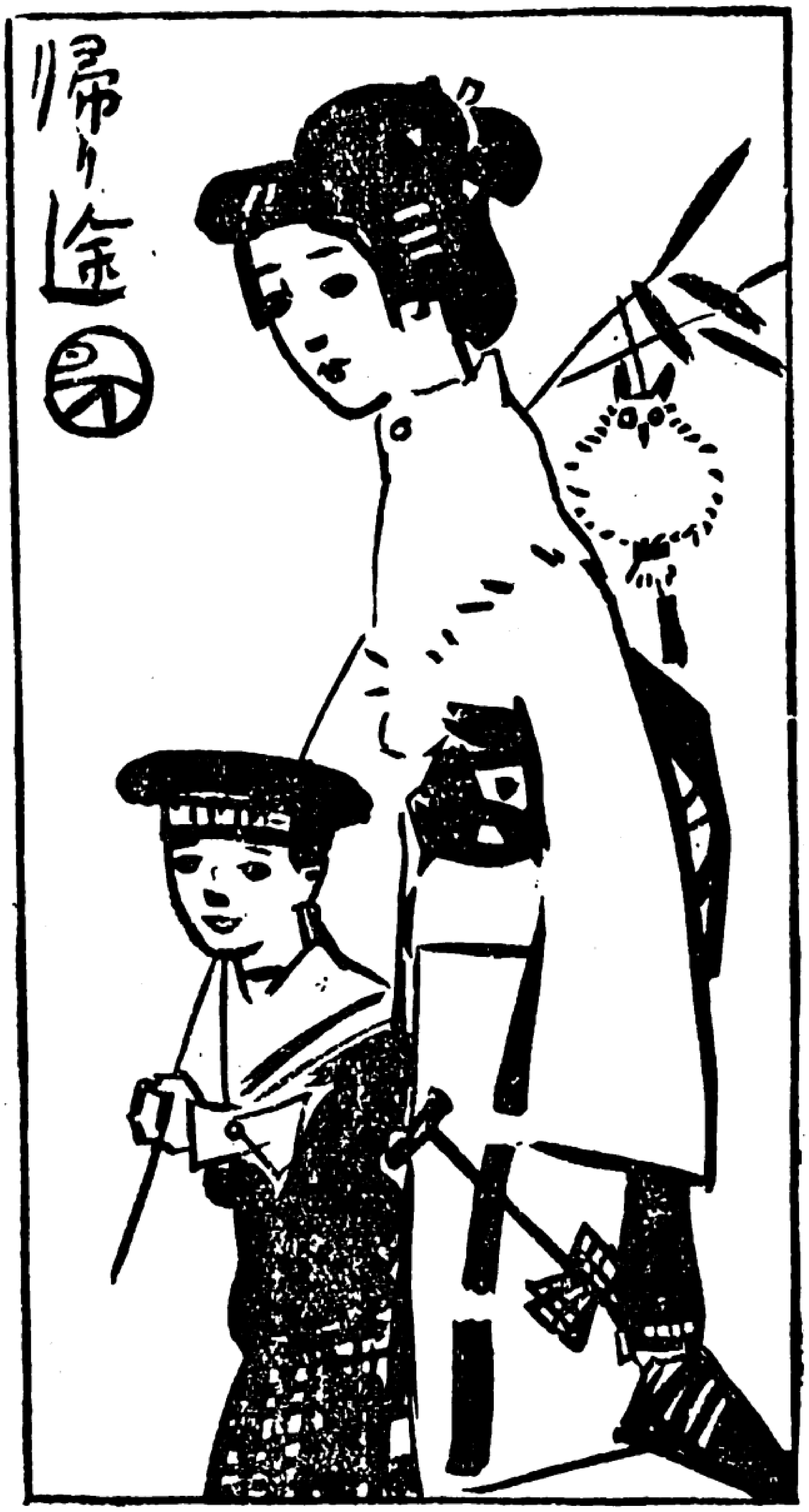
とはよく聞く話である。

歸り道、本町通りで車の軋る音に思はずふりかへつて見れば、我家の爲には二千圓近くの債權者、日淸戰爭後の俄か豪家の令孃で、曩日新造艦某艦の機關長夫人となつた人であつた。

友に一小軍醫の妻となり今秋女兒を擧げた一人があ

る。

「少尉位で子供が出來ては困るでせう。」とは機關長夫人の言葉であつた。自分が少佐の妻であるから、そんな暴言を吐いたのであらうが。ともかくも情ない樣な氣がした。そして、自分はまだそんな賤しい心は持たぬ、山田さんが、貴婦人社會の惡風と云ッたのは、こんな事であらうと私まで殘念に思つた。



祖父は今日別宅から引越して來られた。

十年前、祖母の死後、二人の子のある後妻を入れて別居されたが、其當時は家も繁榮の最中、こちらよりの仕送りも充分、浪風も立たなかつたが、兩三年此方の有樣に、次第に秋風を吹かせ、年頃の兩人の娘も希望に任せて外人の妻となし、自分迄も娘の家で暮し、別宅へは顏出しもせぬ不人情、もとかく祖父の意によつての別居なれど老後の事故、此方から乞ふて歸つてもらつたのである。

「又お前等の世話になッて死ぬ積り。」と云はれた。それはもとより自分等の義務である。

私はこゝで「我勝てり、邪は正に敵し難し」と我と我が心に感謝した。

姉娘が外妾となッた當時はまだ私の在校時代であッた。花は、出世した、美しい着物を着、立派な煉瓦づくりの家に住んで、何の苦勞もなくやつてゐる、えらい者だ。お前の樣に學校にばかり行ッてゐる者は役に立たぬ。自分に孝行をして呉れて、後の祀までして呉れるのは二人より外にない。

貧しいところを親子三人、それに老母迄も引取つて養ひ育てゝ貰ッた恩義は少なくはない、心ある者ならば孝行は無論、後の祀までするのは當然であるが。それにまだ、目をつぶらぬ今でさへも斯である。私にも義理の祖父、假令骨肉は分たぬとも道理の多少はわきまへてゐると、其折は泣いて居たが嬉しい時期が來た。

◎五日

女子大學英文科にゐる春さんから寫眞一枚と都の秋色細々と認たゝめた消息とが着いた。昔を忘れぬ厚い情、一方ならず嬉しく思ふ。一緒に通學してゐた時、あの校庭の草原でよく、ハイネや、バイロンの、詩を聞かされた。

春さんはえらい、自分達の及ぶ所でない、一種異つた所があつた。どうか成功して下さい。

多血質の春さんは、よく教場で顏を赤くした。今も矢張りさうかしらん、樂しかつた學生時代を思ひ出して、夢を見た樣な心地がした。

私は意志が弱い、なせ、自分の信じた方向に進まなかつたらう。自棄し方があんまり早かつた。

◎文にはさほど覇氣があるとは思はれぬが、其の心持はまさに覇氣縱橫である。

◎此人が世間に對するの考へは他の平凡娘子に比して一頭地を拔いて居る。

◎彼女が紛々たる世の毀譽褒貶を度外にして眼中人無しの態、讀み來つて世上幾多落魄の人をして意を強うせしむるところがある。



夫には見せぬ私の日記

みどり

一日　昨日ひけて歸り給ひてより夫の御氣色常ならずさゝいな事にも聲あらゝげて叱らせ給ふは如何なる譯か。氣の利ぬ奴、うつけ者、馬鹿者などゝ、あらゆる罵倒をつゞけ給ふは如何なる譯か。もとより才賢こき吾が身とは思はねども、さりとては又あまりなる仰せ、勤めさきにてお氣に召さぬ事などありての、八ッ當りか、それならば其れと打明けて話し給ひてもよかるべきに、ア、如何にすればお氣を安めまゐらせらるべき、愚かなる身は猶もオド〱するばかりなれば猶もお怒りは增すばかり、早や此家に嫁入りて六とせの昨日までも斯くまで罵られまつりし事はなかりしに、もしや若や二人までも子供もちて昔のかげだになき吾が身いとはしく成り給ひしかいや〱吾が夫に限りて、去るいまはしき御心持たせ給ふともおぼえず、矢張り勤めさきの面白からぬ事ありしとおぼゆされど〱今朝となりても猶御心とけたるさま無きはアゝさても如何なるわけやらむ。

あまりに物思はれて今日は頭重う、子供は親の心も知らで纏ひつく常ならば抱き上げてあやしもするも今日はさる力もなくて、

晝食は子供と三人にて淋しく濟ませり。

毎日の事なれど今日は殊更淋しき心地なり、三時より夕食の仕度にかゝるせめて今宵は好みたまへる料理にてもこしらへおきて御機嫌直さばやと心を込めて數數こしらへおく。

心づくしの料理も出來たり、四時もうちお膳立も調ひぬ四時半となりぬ、なほ靴の音だに聞えず隣の格子の開きし音にも、昨日よりふりつゞける雨だれの音にも、それかと幾度起ちたりしが五時となりぬ猶歸り給

はず五時五分、五時十分。

待つは苦しければ待まじと編み物とり出して編む、もう何時と見れば、まだ五時十五分なり實に〳〵待つ間の一分は平素の一時間二時間よりも尚永き心地す。やう〳〵五時半となりぬなほも格子の音もせず、何となう不安の念はきざし初めぬ、されど我が夫に限りて吾が夫に限りてと繰り返す、チン〳〵と耳をつく樣に鳴る六時此刹那、格子戸はガラ〳〵と開き二人の子供は今迄何處に遊び居りしか氣もつかざりしに父樣お歸りと駈け出て、帽子、杖などてんでに奪ふ樣にとりて、下の子供はその帽子を被りて、躍る姿のをかしさに、思はず吹き出し給へる夫の笑み、流石に今日の夕食中に少しの笑は互の面にもれたり、されど何となくおだやかならぬ御樣子は昨日に變らず。

二日　今朝も尚打解けぬ樣子にて出勤仕給へり昨日のひけの遲かりしは何故ならむ、今迄に打つて變りし御樣子は何故ならむ、ア、思へば今は昔の吾が家に引かへて里といふは名ばかり母あれど兄はあれど弟はあれど西に東に別れ〳〵てさすらゐの身、便りなき吾が身、夫をのみ便りなる吾が身などゝ涙は止め度もなく湧き出て、「彼の樣な事仰有やるだものもう自分をいとはしく思つて居らつしやるだらう此間も斯う仰有つた、何日も彼仰有つたと」惡しき事のみ思ひ出されて果ては胸は板の樣になり涙は瀧の如く生きたる甲斐もなしとまで思ひはつのり、幼きより艱難辛苦に成長せし吾が身故此家をこそ無上の樂天地と神にも佛にも感謝せしものを今は身の置き所もなく、轉々まろびふす苦痛に堪へられぬ胸をおさゑて、つく〳〵考ふれば疑心暗鬼を生ずとか言ひけん樣に、吾がひがみ心より斯く思はるゝには非ざるか吾が夫に限りて罪もなきものを、へだて給ふともおぼえずと思ひ返しては、いとゞ罪ふかき心地して今日こそは如何にもして御心和らげんものと心に祈る。

祈りし甲斐はなかりき歸り給ひてよりも思ひある身には快活なる樣子せんものとつとむれ共つひ〳〵沈み勝ちとなるまゝ、その泣き面が氣に食はぬとて、また

散々に叱り飛ばされて、口惜しさ限りなく、言ふなく〳〵と良心の責むるをおして、口答へせし爲め又叱かられ遂に自分が詫びをして濟む。

三日　今朝は晴れ〳〵したる天氣なり、夫もにこやかに出給へり嬉しとも〳〵、詫びれば直ぐに、昔のやさしさが返り給ふものを昨夜は何故早く詫びざりしかと口惜し、ア、思へば今更に吾が愚かなる心の淺間しく、幾度も幾度も心に罪を謝しぬ。

今日は何日にもまして、早くいそ〳〵と歸り給へり昔の儘の、にこやかなる御顔にて、嬉くいぶかしくて言の葉もなく、以後は夢にもかゝる淺間しき心は起すまじと心に誓ひて後の戒めにとかきつく。

此兩三日中の浮き給はざりし故を問ひまゐらせしに、かねていとも忌み給へる他の課へ代るべく、上官よりの相談あり、此を斷るべき口實なきに苦しみ給へりしに、今日しも好みて行く人の出來上官も許したれば今は心も晴れ〳〵したり、何かにつけて八ッ當りせしは吾が惡しきぞ許せよと打ほゝ笑みてのたまへり、嬉しとも嬉しくさりとは知らで、彼れ是れと疑ひし吾が僻心のはづかしく罪ふかく今更に謝しまつるべき。



平凡日記

鳴琴女史

きのふ今日の空の麗かさ、子供達も庭へ下りて夏菊だのおしろい花の咲殘りだのをつんで音なしく遊んで居るので、穢物等少々片づけたせいか夜二人共れかしつけて了ふと急にがつかりする。この頃のくせでゆふべも夜中に目がさめて了つたので例のそれからそれへといろいろ考へたがどう思つても私の過去は失敗であつた。これ迄いろ〳〵心遣もし、隨分力も盡したつもりだつたが其は丁度日曜學校で話にきいた、あのイスラエル人が神に逆つて天迄屆く塔を立て樣としたが、積石も〳〵くづされて了つたのと同樣みんな無益の骨折であつた、のみならず非常な禍の種となつた。

もう五年も前私が此家へ嫁いた時から世間によく見る人の世の常に許り慣れて、其爲夫の目的まで曲させる樣な眞似はすまい、天晴妻の務を果したいと思ふその考へに今も露も變りはないが、唯以前にはどうしたら其が出來るか強く考へもしなかつた、それに私も江戸ッ子で、よくそれを自慢にもして居たが今から思ふと其江戸ッ子が氣に食はない、昔の男達てにしても、人の爲火水の中へも飛込むとは云ふものゝ、眞實に人のためにするのではなくまあ顏を立て樣と云ふ矢張自分本位のが多いやうだ、それも深く先きを考へてすることではない一時のはやり心な樣だ、これは私の想像に過ぎないが私だけは確に斯樣なのであつた。今更何と思つたつても取返しもつかないが、どうして私はあんな空な考へをして居たのだらう。

『それはもう○○にいつ迄居たとて新らしい學問には遲れる許り早晩當地へ出てきて研究にかゝらなければならない』

とは夫も仰る通りだが其れには時機もある事何の貯へもないに、こちらへ出て來たとて食べずには勉強も出來ない、それを、

『夜間飜譯でもしていたゞけば家の事はそれで儉約に儉約してやつて參りますから大學院へでもおはりなさいまし』

と勸めぬいてとう〳〵かう云ふ事になつたのだ。さあ實際やつて見れば豫算のやうには行かぬ少しも氣がつかなかつた二番目の幸生の懷姙は濵人になると、直にそれと悟つての大驚き國元の姑君は亡くなられる私の姉もゆく始めの一年許は夢の樣だつた、それに寢る時間をさいて

も貧弱の御手傳ひする位の勢私は一日働けば翌日は腰の立たない様な有様で、まあその爲夫はどれ程迷惑なすつたらう。子供の世話や私の手助けで大事な時間はつぶされ生活の爲にかくものが、漸うで研究も何もあつたものではない、そんなで又一年過したのだ。この間も何かの序に夫が、

「私も少し早まりすぎた、もう少し考へるが宜かつたが餘り御前を買ひかぶつて居たのが間違だ」

と仰られたがあの時御詫でもすればよいに充分自分の惡かつた事を覺つて居ながら、さてかう云はれて見ると例の性分であの日一日は口もきかなかつた様な怒りかた、あの無口な夫があゝ迄に仰るのだから御腹の中ではどんなにか思つてゐらつしやるのだらう、私だとて夫や子供の事を思ふと胸もはりさけさうだ。

あゝ此間迄は俊子様や玉子様を虚榮心の權化とも思つて心の中には蔑んでゐたが自分こそうろ覺えの昔の賢女をはき違へて少しの間の苦勞を餌にしてよい名を得ようとしたのではなかつたらうか、賣り拂つた衣類や持物がどれ程役に立つたらうたとへあの十倍も百倍も物をつかつたからとて心がしつかりして居なければ何にもならない。まう〳〵姉の看病の時あつた親戚の大谷さん、

「私より重い物も持たなかつた御孃様がよく御一人であのやうに御働きになられます」

とあの人一流の大行な口調で云つたのを眞に受けてその當座何ぞと云つては夫に口答へした淺ましさ。女賢うして牛賣り損ふと云ふのは私の事だ。今の様に勉強も出來ぬ位なら○○に居た方が餘程いゝ、あんなに御忙しい思ひを御させ申さなくてもすんだのだ、子供の二人や三人の教育に事をかゝぬ。いくら隱して居ても御國の兄様だとて御察しと見えてこの頃は御手紙の度にいろ〳〵事情を尋ねようとなさる、もしやこんな事をして居る中に御病氣でも出たらどうしやう。

それに殘念に思ふのは今度○○にもいよ〳〵△△の設備が成ると云ふ話だ、さうなれば勉強も思ひの儘に出來るはずあゝ私はもうこゝの家の運をとりにがしたのだらうか。せめて○○に居つた時幾分か貯金でもして置いたら宜つたに今の生活費の倍の御金がなんで遣へたらう、書生だの下女二人は何の用があつて置いたのだらう勿體なくて涙が出る。子供だからとてまだ抱つこしたがる齢だのに充分にそれも滿足にさせないし、汚ない物を着て可愛さうに、せめて少しの我儘は許してやりたいと思つても生れついた性質か、だゞでもこねられるとつひ

カツとして叱つて了ふ、自分が人一倍嚴しくされたので子供心にもつく〴〵悲しくて私が子をもつたら、どんなにか可愛がつてやりませうと思つて居た、今でもさうだけれど其場に臨むとわれを忘れて了ふ、此れからは優しい御かあ樣になりませうと思つたのは幾度だらう、これも遺傳された性質かと思ふと私の父母と祖父母との間の面白くなかつたを、父母が此頃私に對するつれなさ、何だかこの子たちと私の將來のいまはしい樣な氣がして思はずふるへる。幸生がけたゝましく泣きだしたので、見ると蒲團がぐつしより、それをあちらこちらにして私も床へはいる。

○九　月　二　日

朝夫が神田迄行かれた歸りに〇〇世界を買つて來て下すつた。それには先月初に投稿しておいた物があるので氣がかゝて居たが、到底だめだらうから、いつそ見ずに濟まさうか、と思つて居た位だ、でもかう買つて戴いて見ると少しも早く首尾が知りたい、頁を飛して其欄を見るとどうだらう、まちがひもなく名前が出て居るではないか、嬉しくて〳〵無意味に家の中を歩き廻る、始めて私の名が活版ずりにされたのだ。夫も本屋で明けて見たら出ていたので早く見せたいと思つてそこからこゝ迄走つてきたと仰る、こんな人通りの少ない處だからよい樣なものゝ隨分をかしなものだつたらう。何だか今にも取消のしらせがきさうに思はれる。氣が引立つてゐるのでいろいろ　供たちと遊んでやる。

○九　月　三　日

本田樣の奧樣が糸子樣つれて來らつしやる何時見ても糸子樣の御美しいを、內の晴子もあの位色が白かつたらさぞ引立つだらう、慾目か知らないが、子柄は優つて居る樣だ。こんな時下女が居ないと大變困る生憎とつて置きの御菓子はなかつたし何ぞと思つても御客樣を置て買ひにも行かれない、矢張夫の仰る通りに早く置きませういくら私がやりとほす氣でも却々手はまはらない、尤出京した時分から思ふと大變なちがひで、よほどなれてきたからこの先もだん〳〵もつと働ける樣にはならうが、其れ迄時々夫の手を煩す樣では矢張いけない、それより下女を置いて私も樂になれば、それ丈子供の敎育に氣もつけられる夫も專心書き物や勉强が出來る、素直に明日でも人にたのみませう。

だがこの頃の御子樣方は餘り御りこう過ぎる、御行儀や御言葉や何も大人の樣にさせるには當らない、それより自由に大膽に跳まはらした方がよい但後年道德上に



宜くないやうな原因を見た時丈はどんなにしてもなほしてやらなければいけまい。

夕方裏の丘へ連ていつて石を拾つて遊ばした、丁度夕陽が向ふの學校の屋根へおちかゝつて西の空は眞赤に一はけはいたやうだ、あれは三十五年の秋であつた仲よしの川西様と二人目黒の方を散歩したつけ、學校卒業の前の年だつたので、いろ〳〵將來の事などお互に語りあつたが、氣がついて見るともう日は澁谷の森のうしろへ隱れ樣とした處で、空には薄紫や紅の雲が金色に縁どられてちぎれちぎれにとびちつて居たけしきの美しさ。

浮世の事にまぎれて暫く遠ざかつて居たなつかしい武藏野、草深いむさし野の初秋の趣をしみ〴〵思ふ。



事務員の書いた不平の日記

美波女

二十八日。花よ紅葉よと遊山の日を、私は俸給の袋を懐にせか〳〵と局から歸つて來ました。臺所で母樣が、何かゴト〳〵煮て居らしたが「おやお歸りかえ、今日はお前の好きなお菜だよ」と莞爾、私も遂ひ、にこ〳〵となつて、「牛肉ですね」と圖星を指すと「あゝ」とお笑ひなさる、何だか嬉しかつた。

　撞平机の前に坐ると、土浦の豊子さんからお手紙が來て居ました。夕飯後例に依つて俸給の内二圓を小使に頂く。それから悉皆用を片付け、洋燈の下で夕刊を讀み始めると、〇〇局の不都合と云ふ題で其局員が不親切だとか無責任だとか書き立てゝある。で折角忘れて居たのに、私も事務員であると思ふと既う堪へられない。日給若干で毎日機械の樣に動くのかと、其都度襲ふて來る淋しさを自らの冷笑に押へ押へして居るのである。それでも俸給日から俸給日の間は、テク〳〵と下駄を引摺つて、黃昏の歸るさ、三越や松屋の陳列を茫然見ながら、彼の帶が欲しいの、此衣物が着て見たいのと思つたり、又或る時は、鳥渡品の好い女學生なんかに逢ふと私は何故か嫉ましい氣になつて、先づ素早く向ふの風采を一瞥する、で自分より聊か劣つた所でもあると、滿足して得意で肩をそびやかすのですが、もし相手が絞りお召に金鎖でもきらめかして居たなら、はつと、胸を突いて、噫、私も父樣が生きて、被居つたなら……と遂ひ愚痴を繰り返すのでした。殊に私は意志が弱いと云ふのか、奈何も心が確乎と据つた事がなく、丸で空に浮いて居る樣な。ですから山茶

花の咲いた片折戸の内に琴の音を聞けば、私も十三絃が調べて見たく、座敷の床に花が活けてあれば、私も遣つて見たくなる、何でもかでも、見聞く毎に胸のときめき、一つでも好いから、此度俸給を取つたら習つて見よう……と何時でも斯う云ふ考へで、慾界の煩惱を制して居ます——制すと云ふより爾う極めて、わづかに心を慰めて居るのです。

扨、今日の樣に俸給を受取つて見ると、却々豫算したのと合はない。第一小使の二圓位は半襟一掛に、無くなるのだから、光つた羽織でもと思ふと、自然俸給全部に若干かの補助を母樣から仰がねばなりません、まして、琴やお花の稽古所ぢやない。元來母子二人の暮しのたしに私は働いて居るのですから……。

未來の二十八日は樂しいけれど、現在の二十八日にお金を持つと却つて苦痛である。何だか餘計考へて了ひます。一層やけだから、滅茶に二圓を使つて了はうと思つても、矢張其樣な實行は出來ませんでした。

頭が變になつたから、お湯に行つて歸つて來ると、夜なべをして居た母樣が、煙草を召上りながら、凝と私を御覽になつて、「若い者は夜見ても、奇麗だね」と、しみ〲仰有るので、あゝ母樣もお年を召したなと何だか心細くなつて來ました。

二十九日、薄曇りの氣の重い日、役目だけに咲く垣根の小菊の許に、何やらの蟲が鳴いて居る。そして折折寒い風に、はら〲と落葉する。朝の內羽織を縫ひ返しかけて、午後から出勤。

宿直部屋へ這入ると、交代前だから例の通り喧しさ、可笑しくも無い事に轉げて笑つたり、鏡と首引きに髮を結びなほす人がある、又戸棚から毛布を出してごろり寢轉んで居るのもある、本當に厭だ、私は出勤して階段を一段づゝ登るごとに、むら〲と黒い雲が襲ふて來る、夢中で宿直部屋の扉を開けると、カッとして蒸された樣に頭が殆んど馬鹿になります、面白くないくだらないと、事務室へ這入つて、仕方がないから自分の擔當だけは眞面目に遣る、隣りの友達が、明日から新らしい人が二三名來るのだと云ひました。

柱時計が五時を打つたから喫飯に行きますと、又しても厭になる。食卓の上はお茶が濡れて、ポタリ〳〵疊を濡らす、食パンの食べさしやら、辨當の明箱やらの中に食事をしなければなりません、宿直部屋兼食堂の三十疊と云ふのに、電燈一つの陰氣に此有樣、支那の家の樣だと、私は苦笑せずには居られませんでした。小使が來る、居る三四人が、餡パンを三錢にお煎餅を四錢のと買ひ込んで、それを食べながら取締の噂や、松田さんが係長にお諂諛をする事だの、髪の結ひ方が奈何だとか、一つとして取立つた事の無い話ばかり。處へ、小山さんが泣き顔をして來ましたので、默つても居られず私が尋ねますと、又衝突の結果松田さんが係長に讒言したとかで……詰り古參の小山さんを、差し置いて、係長の氣に入りを笠に松田さんが、我意を張るのが元なのです。此頃は此樣な葛藤が縺れて、事務員等は松田黨と小山黨とが、互に睨み合つて居るのですから、實にもう見聞くさへもほと〳〵します。然しまあ私は小山さんに同情します、で此時は非常に慰めて上ました。

　九時過ぎに夜勤が歸ると間もなく、係長が見廻りに來るや、例の如く松田さんの傍へよつて何だか話しながら、頻りに笑つて居る、私始め修羅をもやした一同の視線が等しく其方を見た。それでも二人は未だ平氣で話て居ます。私の事を惡口するのぢやあるまいかと、各〻に神經を起すので、私も少し厭な氣持になつた時、はゝゝと係長が高笑をしながら、私の方をちろり見た樣だ、私は急にカッとして、事務もろくに手に付かなかつた。

　宿直の後徹が寢てから一時間後私は補助なので寢に行く。秋の夜は大通りでも森とした、窓から覗くと、暗の中を赤い提灯が見えて、「お稲荷さーん」と夜商人が通る。後徹の人は未だ起きて、ひそ〳〵語りあつて居ましたが、私が蒲團をかぶると、話して居る小山さんが、あゝと欠伸をして、『さあ既う寢ませう寢ませう』と少し潤んだ聲で云ひながら、ぱつと電燈を消して了ひました。

眞暗な中に私はまじ〳〵して、此樣な事を考へた。奈何しても私等は上官の氣に入らなければ、損だと云ふ事は百も承知して居るのですが、それが奈何も其お世辭やお諂諛が出來ません。松田さんは此點は確かにえらい、敢えて嫉む心算ぢやないけれども、それが私等には面白くない、で私もお世辭をやつて見ようかと考へても、遂ひ係長の顏を見るとむら〳〵となつて、お世辭所か、頭を下げるのも、いま〳〵しくなつて了ひます。矢張駄目！私には那麼腦力はないのだからと、諦めて了へば別段松田さん對係長の云々に屈託する必要はないのだけれど、其諦らめられぬのが私の性質、實を云へば、人の前には局外者だと澄まして居るだけ猶腹の中はもや〳〵して仕方がないのです。あゝ、此樣な詰らぬ、係長の顏色に氣を置いて、おまけに不公平な下に立つて、全く堪へられるものぢやない、一層の事、ノアの洪水の時の樣な大水が來て、奇麗にこの腐つた內



部を洗つて了ひたい。其折の全能の神様は後、ダビデの唯一つの過さへお許しなかつたのに、なぜ此様な係長を其儘に許して置くのでせう、私は全く眼が冴えて寢つかれないのです。

三十日。曉方、とろ〳〵とした夢の中を搖り起されました。空は薄紫の霞の奥がぽつと赤らんで、何と云ふ美しい色でせう。ガタンガタンと二階では大きな物音、一時洗面所では、水を使ふのが忙はしない。表を通る車の音が耳について、朝風の冷たさ、もう冬めいたなと感じました。朝飯には牛乳を呑んで、事務室へ這入る。それから三十分も經つて、松田さんは奇麗にお化粧して這入つて來ました。

今朝も又係長が三度も遣つて來る、何の用なのだか。未だ事務も暇なので、茫然机に頰杖を突いて居ると、又古い事を考へ出す。私と仲好しの人は既う大抵辭職して了つた、其別れる度に私は云ひ知れぬ淋しさに、唯理由も無くほろりとする。去年の今頃は私が丁度、斯うして茫然して居ると、兒玉さんがいきなり私の眼をかくす、『兒玉さんだよ、お止しなさいよ取締に叱れるわ』と云ふと『おゝ厭だ』と手を放し樣、烏渡おどけた風をして、『ねえ吉野さん』とそれからすり寄つて大抵交代まで二人で話して了ひます。あゝ其兒玉さんは、然かも今は世に亡い人。矢張り此樣な境遇をはかなむで……外に事情もあるのでせうが、遂々身を投げて了つたし。俄に情けなくなつた時、松田さんが遣つて來て、『吉野さん、奈何なすつたの、大變顏の色が惡るくつてよ』と云ふから『ふゝむ』とたゞ笑つてやりました。

八時交代の時新參の人が、珍らし相にぽつとして居るのを見て『あゝ此人達もやがて事務員化して了ふのだな』と爲に涙を惜しまなかつた。

歸宅後、午後より母樣と散歩に出た、團子坂を素通りして上野に來た。

晴れ〳〵とした青空、秋の日は紅葉に映えて、のんびりと影法師を映す、私は急に押し竦められた圍を飛び出して、手足を、すつと延ばした樣な、氣になりま

して、何だか胸が開けて來る、本當に斯う云ふ時だけ事務員で無くなり、子供――昔の家で、そして母樣に連れられて遊んで居る樣に思はれます。實際其時代が戀しいのです。旣う一遍母樣に甘へて、其財布の紐を解かせて見たいけれど……。

然し今日は樂しくつて、何時になくはしやいで居ました。ピアノの音が聞える音樂學校の屋根から、烏が柿の小枝に飛びうつる、熟した實がポタリと落た。「行く秋と」云ふ思ひが、胸に染むと、又無趣味な今の業をよく三年越し勤めたものだと、一人で感心する、無性に過去がなつかしい。すると心の何處かで、過去の夢が返るものかと云ふ、だから其樣な、夢を追ふのでなく、更に奮發して昔の家に復活がしたいのです……だか、それにしても彼の腐敗した局――不公平な係長に追ひ使はれねばならぬのかしら……。

遂ひ溜息をすると、

「奈何したんだねえ」と御存じない母樣に怪しまれる。

「いゝえ何、あの……」と理由の解らぬ事を云ひながら知らすまいと湧き來る涙をぐつと呑んだ時は全く辛かつたのでした。

ぶら〳〵と動物園の橫手の坂を下り掛つた時、裏門の前で、積み込んだ石の重さに行き惱む馬を、ぐい〳〵力まかせに馬子が引張るので、馬は苦し相に前足を上げて藻搔いて居ます。

「あ、可憐相な」と母樣も私も暫らく立止ると、物見高い見物は、わい〳〵とさわぐ、けれど誰しも馬が可憐相だと云ひ合つて居るのです。

爾う斯うする內、門の中から恐ろしく毛の長い人が古洋服の手に鞭を上げて、したゝかに馬の平頸にぴしやり當てた。馬子も一緖になつて打つ、引張る、蹴る、旣う馬は口から泡を吹いて、へと〳〵になつて、是で奈何して又重荷が引けるでせう。

萬一私等が一つ係長に白眼まれ、逆らつたら、よし手は下さないけれど、此馬以上苦痛をさせられやしないか……偶と斯う思ふと、厭な〳〵心地がして、馬を打つて居る人がまるで係長の顏に見えて、係長が馬を

打つて居る人の樣に思はれました。

『行きませうよ……』と眉を顰めて見て被居る母樣の袂を引いて、さつさと步き出したので、

『何だねえ』と母樣は少しあきれて、從いて御出でなさいます。

其途で茶店に休みまして、

『あゝ久し振りで好い保養をしました』と甘さうに母樣がお茶を召上つた時、私は胸が一ぱいになりました。

家へ歸つてから間もなく、國から從兄が來て宿まりました。

斯樣な風で今月も過ぎてしまつたが……あゝ何も思ひますまい。月が變れば又新らしい風が吹くでせう……一日の苦勞は一日で足れりと云ふ——。





女教師の日記

波子

四月一日　晴

出勤する途すがら新入學の兒童を連れた村の父兄に幾人も遇つた。山の中とは云へ汽車も通る鐵道馬車もある。文明の小怜悧しい潮流は山を越え谷を越えて此の土地迄も浸入して人の話にきく二十年前の質朴な村民の性質など藥にしたくも無い。赴任する前に人情の薄い處だと人から注意されたが話よりも酷い。途を通れば田に仕事をして居る若い者が、『海老茶ハイカラ』と呼ぶ。

常には『あれが俺の學校に居る女教師奴か』と云はぬ計りの顔付で送り迎へて居る親達が今日のみは逢ふ人毎に恰も十年來の知己の如く笑顔を作り腰を低うして『先生樣斯んな我儘者でござんすが何分宜しくお頼申します』と餘分に「樣」呼り迄して媚を呈して來る。人情もこんなものかと思へば悲しい。

校門を入ると舊い生徒は姉樣や兄樣氣取りで幼者の世話をして居る。急いで事務室に這入ると職員は最早一人殘らずヅラリと顔を揃へて居る。支度に長く暇を潰した樣でもなかつたがと、今朝のみ施した顔の白い物が氣になつて一寸頬をおさへて獨りで赤くなつた羊羹色の羽織を着慣れた校長樣も十九世紀風のフロックを召して白髪混りのお髭はピンと何かの物語りにでもありさうなスタイル。五ッ紋いかめしい杉本先生。高きカラーのみ目に着く谷先生。何うやう他處の學校へでも行つた樣な氣がする。風の吹き廻しで得ならぬチックの香もする。齢こそ若けれ常に物案じ顔の横田先生は大火鉢の側で話好の山上先生と頻に地震の話をして居られる地震とは職員更迭の別名である。私も其

處へ行つて小さくなつて手をかざした。學校を卒業して直ぐ當校に來てから最早滿三年になる、私も今度は學期の變り目であるから地震の影響を受けるかも知れない。神經質の横田先生など大分心配して居るらしい『別れる時だつて涙一滴落さぬ情のない生徒だから何時轉任したつて思ひ置く事は少しもない』と職員間では常に云つて居てもいざとなつたら何うだらう。生徒よりも自分の方が先に悲しくなるかも知れぬなどゝ考へて見ると餘り好い心地はしない。

白髮頭の村長を先頭に收入役、書記なども役場から出張して來た。九時に始業の鐘が鳴ると皆講堂へ集まつた式は例の如く第一に君が代の合唱次で新入生の挨拶校長の注意などが在て後一寸した學藝會が開かれたオルガンの音につれて巧に歌ふ生徒の唱歌に白手拭を被つた婆さん達は首を傾げて感心して居る、柱の蔭に居る爺さんなどは涙ぐんで松の皮見たいな手で眼をこすつて居る樣が哀れな感じがする。時代の潮流に浴さない一人なんだらう。此方の忙しのにお構ひなく顏を見る度に廊下の隅でござれ便所の入口でござれ子を思ふ親の心で『何卒先生お願申します』を何遍となくくり返された。

新入生の中には滿六歲とは云へ漸く四歲位にしか見られぬ兒童も居る。いくら自分の任務とは云へ道理を敎へて學校生活に慣れさせる迄の徑路を考へて見ると樂みと云のは表面で內心にはどうしようかと思つた。

兒童が歸つて後校長からお茶菓子の御馳走になつた出席簿や學籍簿の整理をして歸宅したのは最早燈火頃であつた。夜は新聞の拾ひ讀みなどして九時眠に就く

同二日　晴

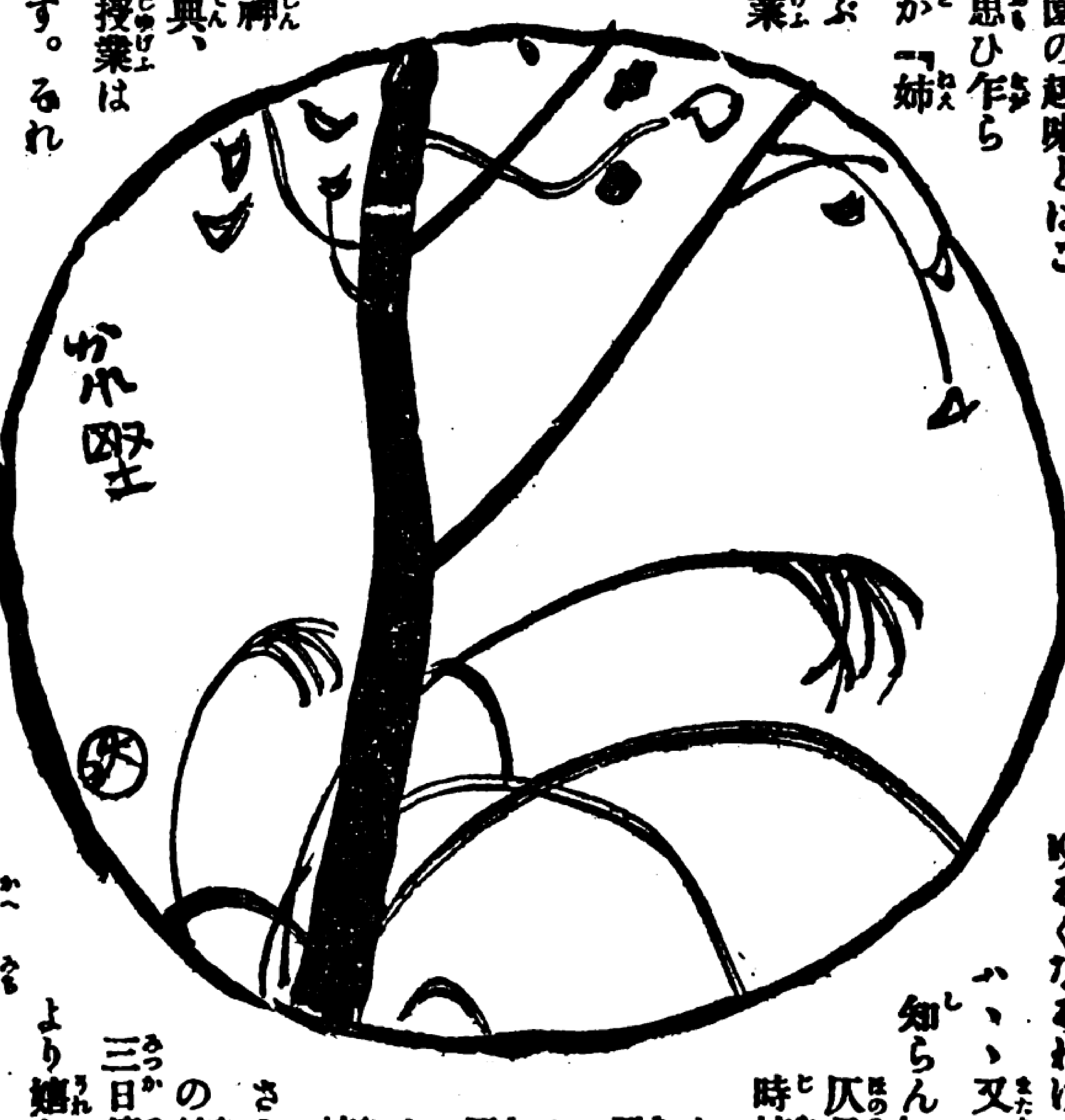
床を出ると郵便が來て女學世界を投げ込んで行つた先づ寶探し當選者の名を見たが私は不幸にし落選した『何せ私は籤運が惡から』と云へば『お前當にして居たのかえ』と母に笑はれた。

車井戸の側の桃の木で鶯が鳴いてる手水を汲んだ金盥の上へ顏を出すと一しよに綻び初めた枝が映つた柔かい春風は頰をなぶつて絹にでも觸る樣な心地がす

る田の畔の藁屋からは朝餉の煙がゆる〳〵と立上つて丁度畫を見るやうだ。田園の趣味とはこんな事を云ふのだらうと思ひ乍ら茫然とし居ると五歳の妹が『姉ちやん御飯ですよ』と呼ぶ。

今日は校務の整理で授業は休みだ。さしも廣い庭も森閑として、日々踏みにじられて居る所へ出した計りの春草も、脊が延びるだらうと思はるゝ。

事務がすんで後校長は髭をひねり乍ら『明日は神武天皇祭明後日は村社祭典、明々五日は日曜ですから授業は六日から初める事にします。それに職員も揃はないから何だかあやふやで——水害のため二部教授だなんて皆様にも大層御苦勞懸ましたが、今度は職員が二人増ゑるのでまあ少し手ゆるくなるわけです。どんな人が來るか、、又理屈屋で虐められるかも知らん』と不安の色は眉の邊に仄見えた。私が赴任した當時校長と折合が付かなくてよく議論などした首席が居たが今校長の頭には其の〇〇教員の事が浮んで居るだらう、師範派の人と檢定派の人は何處の學校でも幾分の軋轢があるさうだが實際だらう、當校の校長は檢定派である。



三日續けて休みと云ふのが何より嬉しい如何に活用しようかと歸り途にはそんな事ばかり考へて居て二筋になつてる野道を行き違つてハツと思つて引き返

す中途で小學時代の友に逢つた。脊中の籠に辨當を脊負て片手に鐵瓶を下げて居る野良からの歸りらしい。逢ふ度に私を見て羨ましいと云ふが私の考へではこの呑氣らしい友の姿が羨ましい。生中文字が讀めるから悶へも悲しみも多いのだ。此地へ嫁に來てから二年になると云ふが顏も幾分かやつれて見える。呑氣らしく見える心の中にも矢張り苦勞があるだらう。

種々の事を思ひ乍ら家に着く迄に久しく逢はぬ友を訪れようと決めた。母に話すと直ぐ許して呉れたので汽車の便を借りて直ぐ出發する事にした『三番には迚も間に合ふまいから明日にしたら』と止めるのもきかず、支度もソコ〱に停車場へ驅つけた時は發車前二分の際どい處であつた。同室には三等へなど何うして乘つたかと疑はるハイカラ紳士が三人乘つて居た。話はシベリヤ鐵道で持ち切りだ、退屈しのぎと地理敎材の好材料だと思つて耳を傾けたが至極便利に出來て居る相だ。汽車から降りたが初めてなので道が分らぬ。車に乘らうと思つたが餘り高價な事を云つたので歩く事とした、親の脛計り嚙つて居る人と、自分の汗を絞る者とは斯んな時の考へが異うだらうと思ひ乍ら凸凹した道を五丁計りたどると町になつた。郡役所も警察もある。郡中第一だけ在て店なども一寸賑かだ。兼て聞た玩具屋を訪れると神さんらしい人が出て來た『伊東さんはお宅に居らつしやいますか?』『ハアお二階に……』『夫れでは山本が參つたと申して下さい』階段を下る音がしたと思ふと『アレ。マア。お獨りで』『エヽ』膝には子供を抱て居る。生れた事は手紙で知つて居るが目の邊見て驚いた。二階へ上ると座敷は三間になつて居る。世帶の總ての道具は其處に納めてある。花子樣は私と同時の卒業で學校を出ると直ぐ中學の敎師と結婚して既う子供迄ある樣になつたのだ『御良人は?』『一寸學校へ行つたが未だ歸らないの……』花子さんは子供を炬燵に寐かして置て茶など入れ乍ら種々話された。子供があるのに下女を使はぬのみならず、朝登校する時近所の神さんに赤兒を預けて前に變らず勤めて居ると云ふ事だ。普通の人なら結婚でもすれば子供が

無い迄も公職になど就いて居る人は少いのに傍ら家政も取り育児もやる其繁雑な務めを処理する友の心掛けに私は少からず驚嘆した。其中御良人が帰られた髭のカイゼル式な髪を真中からきれいに分けて居らるゝ方である。其夜は友の家政の實驗談などで夜を更した。

同三日　雨後曇

目を覺すと外は雨の様子だ軒だれの音が聞える。友は私と床を並べて未だ寐て居るのに障子一重の向から炭のはねる音やゴロ〳〵と味噌を摺る音がする『誰？』と花子さんに問ふと『ホヽヽ』と笑ひ乍ら『坊が可愛いからよ』と云ふ。大方察しが付たので私は後を問はなかつた、花子様夫婦は非常に止めて下さつたが午後歸宅する事にした停車場迄三人で送つて下すつた。汽車の中で別れる時の坊ちやんの愛らしい笑顔を幾度も思ひ浮べた。



同六日　曇

曇つた厭な日だ。私は尋常一年生の受持なので其席などを極めるため常より早く出勤した。『山本様一寸』と校長から辭令を渡された轉任かと思つて恐る〳〵見たら昇

給ので在た。職員一同へ回覽に付すると異口同音に御目出度うと云ふ。三年も置き据にされて漸くの事と思へば、私は御目出度い心持もせなかつた。他の一枚は杉本先生の轉任のであつた。私より二年も後に來た人が先に行く。何だか變だ。

鐘と共に兒童を教室に集めて席順をきめて遣つた椅子の上へ足を上せて机へ腰を掛けてる兒童が在つた。實際この土地の人など大人でも椅子など見た事のない者が澤山あるだらう。子供だから無理もない。「禮をする時には机の側へ立つてするんですよ」と注意して置て私が「禮！」と號令をかけると又腰掛の上へ立つた者が幾人もある。私は耐へきれなくて吹き出した。斯んな事で二時間計りを費して歸した後重荷を下した樣に事務室で私はホッと一息ついた。

午後新任の先生が來た年頃二十二三師範を出た計で極く眞面目らしい。四年間を所謂馬車馬的に進んで來た人だ。男と女でこそあれ私も三年前束縛の甚だしい師範を出た時は、今よりも眞面目な女であつたがと今昔の感に耐へなかつた。

バイオリンを出したが氣が進まないので止めて直ぐ歸宅した。此頃ともすれば心が滅入つて何事にも感じて悲しくなる。「若き愁ひと青春の寂寥は誰にもある」と友は云ふが其樣な意味の者ではない。只何となく淋しいのだ。然しこれが矢張り左樣なのか知らと思つても見る。會社から歸る父を待つて居たが十時になつても歸らない明日の業務があるからと母に促されて、失禮して先に床へ入つたが却々眠られない。每日同じ事をくり返して何日迄これを續けなければならぬかと行末の事など思ひ乍ら現ともなく夢路に入つた。

同七日　晴

學校には別に變つた事はなかつた。只杉本先生の生徒への告別式と、授業後職員と役場吏員とで聊か送別の宴を開いたのみで。女ではあり酒など呑めないので私は直ぐ歸宅した。庭の八重櫻が散り初めた。其下の石の上で私は風葉樣の青春を讀んだ。前に一度讀んだのでこれで二度目である。

實際欽哉や繁の様な人があるか知ら？ある〳〵確にある。小説家は現代の思潮を暴露する爲めに寫し出すのだもの。これが現代の或る一部の人のモデルになつて居るのだ。さうすると小説がモデルなのか人生がモデルなのか一寸解らなくなるが兎に角斯様な人があるに違ない。私など育英とか云ふ眞面目な職にある故か何事をするにも道念に支配されて仕方がない、二度とない今の若さをと思つても直ぐ心の中の或る何物にかもみ消されて仕舞う。斯くて我が世の春は暮れるのである。此の櫻の如く………

夕方友なる芳野様から長い手紙が來た

「衰へたる一家の犠牲になつて、又とない婚期を空しく過して仕舞うと人は心配して呉れるが、自分は其様な事は何とも思はぬ只我家の幸福と今奈落の底にある兄を救ひ出すのが我が大なる責任である。然は思ひ乍らも又我身の前途を思へば半夜夢圓かならざる時があつて一掬の涙なき能はずだ」と云ふ悲しい意味の言葉があつた。今宵はよく晴れて居る。斯んな晩に必らず見なければ氣がすまぬ云はゞ私の戀人とも云ふべき星が常よりも光 鮮かに南の山の端に照つて居る。崇高なる光よ！懐かしき瞬きよ！「友よ涙を納め給へ同じ境遇に泣く深き同情者我在るを思ひ給へ」と芳野様へ返しの文を此處迄書いたが筆が進まぬ何故か涙が流れて筆を止めて仕舞つた。





田舍住の處女日記

内藤千代子

何の縁あつてか此の相州の片田舍に十年餘り住なれて、花やかな都にあこがれ女學生さん達を羨んで居る妾。まだ戀と言ふ物も知らねば筒井筒振分髪の床しと慕ふべき君も持たぬが、これも亦一興とその日記の一節を左に。

十月十日　土曜日　晴れ

五時に起きた。夢の様な殘月はまだ薄すりと中空にかゝつて居る、手早く朝の用を濟せて髪を結ふ。もう長らく日本髪の癖が附いて居るので何うしても丸髷にうまく行かない。終ひにはいら〳〵して來たが餘りぢつてると直き母樣にまた癇ばかし氣にしてるねと叱られるからいゝ加減な處で思切つて、櫛箱を片づけて仕舞ふ。昨日のより出來が惡い。

午後からは母樣は諏訪さんへ行らした。でお留守居をしながら縫かけの羽織を縫つて居ると、お玄關に人の聲がする。直ぐ出て行つて見と思がけない和さんであつた。明日の日曜に御親類の方が大勢いらつしやるから歌留多會をするつて、妾をも招きに來て下すつたのである。まあ何うぞお上りと云つても否今日はお使ひに參つたのですからと無理に式臺に腰をかけてしまつて、ね貴女お母樣にお聞遊ばして宜しかつたら必と來て下さいましね、學校の本庄先生もいらつしやいますしお優ちやんも參りますわ。ねつて仰有る、今母樣はお留守だが、何外ならぬ田内さんの事。殊に歌留多があると聞くものを、よしお許しなさらぬからつて何うして妾が靜として居られよう。ともう魂は天外に飛んで、是非お仲間に入れて頂きますとお返事すると、き

はめて御滿足の御樣子。ほんとに和さんは女學校仕込にも似合ぬお温順しくて居らつしやる。

軈て、では御悠くり明晩ね、と身を起して會釋成さると高い菫の香がその紫矢絣の袖と胸からパツと立つ、お齡は妾より一ツ上だがお下げに緋のリボンを大きくかけて、まあお若くてお美しい事、東京の方は何故こうきやしやでお奇麗だらうと、つく〴〵羨くなつて恍惚後影を見送つて居た。

夕方は夕映が美しかつた。薄雲が樺色に光澤と光りを含んだ花やがて。かう言ふ色をリボンにしたらさぞ髪の毛と調和するだらうと思はれる。

夕飯の時母樣に先刻の事をお願したら、あゝ田内さんならばとばかり、別に何とも仰有らなかつた。妾はホツと重荷を下したやうに嬉しかつた。

夜はお室に引籠つて久振に算術をさらう。相變らず散々脳を絞つたあげく、ふと久子樣は今年は縮緬の御紋付と繻珍の御帶が出來るんださうだつて事を思ひ出すともう羨くはないが口惜くつて耐らない。尙且妬ましいからだ、だが妾は今まで母樣に何か欲しいなんてねだつた事は一度もない。せがんで買つて貰ひ、ねだられて拵らへてやる樣なのは母子の情が薄いのだ。何うして親と云ふものは欲しいと思ふ當人のそれ一倍着せてやりたい。買つてやりたいと氣をもんで居らつしやるんだもの、出來さへすれば默つて居たつて買つて下さる。その代り買へない時にや、何程せがんだつて出來よう筈はない。とまあ思つて居るが、何だつて妾には父樣がないんだから仕方がないんだなどゝ飛んだ處へ考が外れて了つて、我乍ら腑がひなさに手帳をポンと投り出すと、お床の中から母樣がもう寢よと仰有る、丁度茶の間の時計が鳴り出して十一打つた。

十月十一日　日曜日　晴れ

矢つ張佳いお天氣。併し朝は寒かつた。畑へお汁の實の茄子を摘りに行くと露にぬれた足の先がもうピリピリする。朝飯後髪を結ひに行く。と道傍に今時分紫のすみれが二ツ咲いて居た。餘り可愛相だから摘み取つて手帳にはさんで置いた。

夫から女學世界へ短文を投書する。さあ今度の首尾は如何であらうか。母様は過日貰つた圖書切手を送つて、毎月女學世界を取つたらいゝぢやないか。何うせ小賣店から買ふ位ならと仰有るけれど妾には惜しくつて何うしても手ばなす氣になれない。生れて始めて、懸賞文に當選して賞品を貰つたあの切手。お上手な方が聞いたらさぞ可笑しいであらうが、もう〳〵一生大切に寶物として藏つておき度い程に思ふ。

午後からは胸がワク〳〵して仕事なんか手につかず、五時頃から支度を始めて。着物はあの紡績ので澤山だと思つたが、和さんは平常でも銘仙なんか召して居らつしやるんだもの。妾もいくら大切がつて藏つてばかしおいたつて仕方がないから。ぢや佳い方のを着て行かうと定めて簞笥から出す。格子のお召に葡萄色縮緬の襲り裾が映て、我物乍ら今更に震ひ附き度い程佳い、悉皆着替て了つてから、妾だけ先へ御飯を食べる何だか嬉くて咽喉へ通らない。おまけに勿體ない事だが炊きたての御飯が熱くて〳〵フウ〳〵言ひ乍ら、やつと二膳終へて箸を投げた。あとは野となれ山となれお茶碗も洗はずに、行つて參りますとばかりで飛び出して仕舞ひ、お優ちやんを誘つて見たら今髪をなで附けて居た。思ひがけない島田である。まあ何時お上げなすつて、よく出來たわね。一寸そつち向いて御覽成さいと云ふと、くるりとむけて羨しい襟足を見せる。矢はりおはまさんかしら。成る程よく出來て居る。だが髷が低くて、ちつと下すばつた風だ。何時でもだが、お優ちやんは何故こんなのが好きだらう。妾はまた島田なら、思切つての高髷で根元にキリ〳〵と白丈長を卷いた、そして平打を一本さしたのが品がよくつて一番佳い。もつともお優ちやんに言はせたらそんなのは野暮つたいなんて云ふかも知れないが。

鳥渡待ち合せて居て二人で出かける。御門内に美しく敷つめた小じやりに音立てゝ、輝やく樣なお玄關からおとなふと。

「まあよく、えゝ〳〵先程からお待兼で御座います。何うぞ此方へ……」

小間使のまさが莞爾と出向て奥へみちびく。皆さん丁度お風呂を召して居らした處。妾達もすゝめられるまゝに御一緒に頂いて入湯る。棚でも板の間でも滑り相に光つた廣い奇麗なお湯殿で外はまだ暮れきらぬにもう照り返のランプがかつ／＼と輝いて居る。お加減はちつと熱いが、我慢してぢつとしづんで、顔をしめし乍らふと見るとまあ、流で洗つて居らつしやる夫人や、和さんのお身體の美しい事。まつ白くてきめが、細くてそれこそ玉のやう。散々海水浴でやき上げて日頃椋子を以て自任して居る妾――だつて何且色の白い方は羨ましい。



だからこそ白粉もぬつて見のだがお優ちやんも膚のよい方ぢやないので、隨分氣をもんで素顔を人に見せた事がない程なのに、此わりで見ると廣告なんか、十分一もあてに成るものぢやない。併し和さんやお優ちやんのムクムクと肥えて居らつしやるには驚いてしまつた。妾は決して肥つてる方ぢやないので、今も夫人にまあ貴女は今の若にそんな事で何う成さると、叱るやうに云はれたが何だか妾

は、たとひ肺病患者じみてるなんて言はれても、肥つて居ない方が嬉しいのだ。

するとお化粧が始まつた。妾は夫人がお使ひ成さいと言つて下すつたクインか何かを佳加減――に併し濃くつけてざつと洗ひ落して仕舞ふ。そして早さと着物を着始めて帶止のをパチンとしめ乍ら、大きな姿見の前に立つとくつきり映つた我姿、鬢ふつくりと露を含んで水のたるやうな桃割のあでやかさ。うぬぼれらしう、しばらく鏡の中を見詰めて居たが、ひよいと氣がつけば和さんは、帶がひとりで締こなせなくて困つて居らつしやるから、手傳つて結んで上げる。

と、もう何度もお禮を仰有る、九月の女學世界のお孃さんの初旅の中に丁度こんな處があつたつけと思ひ出して妾は微笑んだ。

軈て三人打連れてお座敷へ行つて見ると、もうお客樣は揃つて居らつしやる。大抵初對面の方ばかし、手輕く御挨拶をすませて座につく。小野瀨さんも來て居らした。重なる憂憤、やり羽子のうらみ思はず白眼みつけてやりたかつた。まづ世間話しが二ッ三ッの中に皆さんのお名前なども伺ふ。熊谷さんは中學校、中山さんは一高の學生、工科大學の沼川さん、早稻田の森田さん。鵠沼の小學校教師の本庄さん。

讀役はいつもの通り夫人で、妾等は源平に別れた。學校の先生なんてわりにちつとも取れないのよ。歌留多にかけたら妾の方が餘程上手だわ。小野瀨さん相變らずお口が達者でお人が惡い。妾こんな方大嫌ひ。だが高い聲ぢや言はれないわ。だつてホーお優ちやんに憤られるから。

いく度か組をくみ直して戰ふ、分けかへてあらそふ。勝つたのだか負けたのだか、まるで夢中であつた。和さんは今年のお正月より大變御上達成すつた。第一敏捷いのに閉口して仕舞ふ。それよりお上手なのは熊谷さんだ。丁度妾と互角の相手――とは言へ、一騎打ちの勝負では大分骨が折れさうだ。中山さんもなかなかお上手だが何だか氣ののらぬ樣な取方成さるので妾は嫌ひ。もう全精神を火と燃して眼中歌留多の外何物

もない位でなけりや眞の歌留多の味は知らぬのだ。

一番お拙手な沼川さんと本庄先生は僕等はコンマ以下だからと自ら云つて隅の方に小く成つて居らつしやると、夫人の發言に皆さん大賛成で東が和さんに妾。西が熊谷さんと中山さんとお優ちやんとして一ツやつて御覧成さいと云ふ。少し無理だとは思つたが、二人共痩我慢張つて承知して、さあ一生懸命である。

眼をみはり札をねめつけたまゝ、お互の心臓のひゞきはさながら蹄の音と聞える。

『はッ失敬ッ』『御免ッ遊ばせ』『参つた』『失敬ッ』不意にさけぶ聲あやしくかんばしつて、妾等は自分乍ら可笑しい程、絶へず指先がぶる／＼打震へる。歯がガタガタ鳴る。

かくて立つゞけての三番勝負に見ん事二度まで、相手を敗つたあざやかさ。皆さんはヤンヤとばかり口をきはめてお褒め成さる。妾は和さんと顔見合せて得意の微笑をきんじ得なかつた。そこで、暫時休息と成るその間にそつと座をぬけて便所へ立つた。

障子を開けると清い外の空氣が水のやうにざつと流れこむ。まだ雨戸を明け放してある、お縁側に月が美しくさして、木の影が入りみだれたお庭も、殆で晝の様熱し切つた頬を冷やかな夜風がはらふ心地よさに、妾はしばらく手洗の側に立つて居る。と何處かで蟲が鳴いて居る。ジジ、、ジイと地の中へでも引入れられるやうな聲だ。黄ばんだいゝてふの葉は絶へず梢をはなれて、ヒラ／＼舞つて來る。もう秋と言ふ感がひしひし胸にせまる。折からわつと起こる笑聲。見返せばお座敷の障子には花やかな灯影あか／＼と。

こゝのみは秋のあはれも外なれや
　　歌留多に更けし館のともし灯

室内へはいると急にまぶしい程赤く明るい。

歌留多もう一番やりませうつて熊谷さん。先刻の名譽を恢復したいもんだからしきりに膝を進めて仰有るけれど、餘り遲く成つてもと思つて妾はたゞ笑つて居ると、何時の間にやら夫人はまさに手傳はせて茶菓をお運に成る。柿やみかんや お煎餅廣蓋にうづ高く──。

さあ何うぞ〳〵つて進められたが、流石歌留多場裏の女將軍も食べる事にかけては戰場の働ほど活潑にはゆかず、つひもじ〳〵と御遠慮ばかりして居るので、わざ〳〵林檎をむいて下さる。別に紙へお菓子を包んで下さる。そしてお茶を頂き乍ら愉快にお話しする。皆さんのお國自慢やら失敗談湧くが如し。

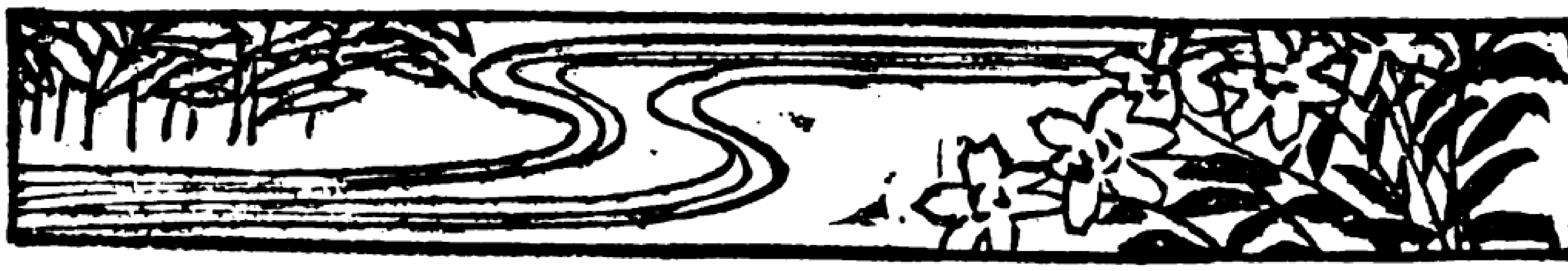
夫人も和さんもまだ引留める氣で居らつしやるし、内心殘り惜しくつてたまらないが兎も角もお暇申した時には何誰の時計も、もう十二時まはつて居た。

で夫人と森田さんと沼川さんとで家まで送つて下すつた。月はいよ〳〵玉と輝つて草葉の露にきらめき、影法師長く引く四人の下駄の音に蟲の音がハタとやむ。ぞつとして襟を引合はすと夫人はかゝへるばかりすりよつて、その和らかなお手を妾の背にお加へなさる。この美しい優しい夫人、和さんとは成さぬ中に聞くが妾は耐らず懷かしくて縋り附き度く思つた。

遠くチラ〳〵する我家の窓の灯をのぞんで森田さんが貴女はあんな處にお母さんと姉さんと只た三人で住んで居るんですか。よく淋しくないね。女ばかしで――實にえらいもんだと、さも感心したやうに仰有る。そりや父樣が亡いと隨分氣が強くなるものだ。妾だつて素はこんなにお轉婆ぢやなかつたが。

門前でお別れして家へ駈け込むと母樣もまだ起きて居らした。御挨拶し乍らずん〳〵と茶の間に通つて、ふと見上げれば、家の時計は遲れて居る、十二時に餘す事十分。

平々凡々の事を書いてこれほどに讀ますは尋常の業にあらず、彼の秋濤は描き易く眷月は寫し難しの譬へ、その原稿をみれば、手腕の不つゝかなる、小學校の生徒さへ、かくまでは拙なからずと思はるほどなるに、其文の堂々たる調理の老將も舌を卷くべきところありこれが田舍に埋もれたる無名の女子かと思へば、眞に惜ましき心地す、描寫は細に入り天眞流露して筆に同情多し。



婚禮日記

鵜殿ちか

五日。　此頃から度々妾しの婚姻の話が出る、浦町の叔母様も今宵遊びにお出でゝ、妾を傍近く呼び寄せ給ひ、色々と問はれますもの、妾し何んだか、恥しくて顔を赤くして書齋に逃歸ました、すると其後で、叔母様と母様がまた話をお初めなさる樣です。何んな話しか知らと妾はそつと、襖の影から盗み聽きますと、何んでも妾の良人となる人は、昨年大學校を卒業なさつた文學士で、今は或る中學校の教頭を勤めて、家にはあり餘る財産があつて、結構な暮し眞當に菊江（妾の名）は仕合者だと仰有つた樣に聽えました、妾しは知らぬ顔でその儘、臥床に入りましたが、何うしても眠れませんの、怎樣な人？と第一に思ひましたが、藤子さんが八ヶ間敷い姑さんの爲めに、ひどく苦勞をされた話が、つひ浮び出まして、妙に恥かしく嬉しい樣な心持に成りまして、床中で、良人となる人の容貌や理想などを思ひ續けて眠入つて了いました。

六日。　思ひ待ちし良人の寫眞來る。お父様は一杯機嫌で、男の性質と地位とを説かれて、此の寫眞よりも男振はよいと仰有る、お母様はお前の運が向いて來た、能く姑様に仕へればならぬと注意して下さる、妾しは氣恥かしくもあり、氣もそは〳〵して、寫眞の主を一瞥したばかりでした、中身儀で背のすらりとした、品格の有りさうな人で、妾達には、もつたいない樣な容姿、此の御方と夫婦に成るのかと思ふと、身が引ける樣で、學校で教はつた家政學の一斑や、料理法は、あゝである、かうであつたと、つひ〳〵餘たる責任が重い氣に成り、さては兒童の家庭教育！　ほゝゝ、まさか、未だ母親でもない妾が、……然し斯樣な者へは、いくらも出て參りますから、不思議ですわ。

八日。　明日が愈々婚禮日。朝早くから家内の者は、起床してそれ〴〵と妾しの嫁入道具を手傳ふのです、母様は躍起に成つて、此方の退氣を取らない樣にと、あの羽織も、その紋附もと、自分から立働いて心配されるのです、其間、妾しは、お母様の命令で自分の書齋で、隣家のお仲婆さんから、丸髷を結つて貰らひました、お仲婆さんは五十路ばかりの後家さんで、妾の髮を結ひ〳〵色々と自分が嫁入つた事から、離縁に成つた事やらを、面白く話して妾を笑はせますので、妾しも談話に釣込ま



れて了ひました。漸う、丸髷の髪が出來上つたので、机の前に、ぼんやり、坐つて居まするると、「姉さん〳〵」と、弟の武ちやんが獨り微笑んで、突然、妾の居室へ入つて來ました。妾しには唯た一人の愛弟ですし、最早分離れるのかと、胸が一杯に成つて、犇うしつかり抱き上げて、優しい薔薇色がゝつた頰に、接吻を與へました、すると、悲しさうに、涼しい黑目勝の瞳に露を浮べて居るぢや御座いませんか、一倍戀しくて堪りませぬ。而して毎晩、澄んだ聲で面白い歌を唄つてくれ、それはそれは心底から、妾を慕つてくれる武ちやんを振捨てゝ、あゝ何故姉さんは、嫁入をして見も知らぬ家庭の人と成られればならないのかと思ふと、取り止めもない寂しい氣がして、もう〳〵決して、――武ちやんの傍を離れまいかと思ひました。然し、直ぐ其の氣も忙はしい爲めに消えて終ひ、これから、新生涯に入つて良人と樂しい家庭を遣るに嬉しく感じました。

十二日。　恥かしかつた婚禮式もすんで、妾は此の家の人と成りました、良人の氣質は未だ能く解りませんが寫眞で見たより少し劣つては居ないかと思はれます。五十路ばかりの姑樣と、初子さんと云つて十七歳の妹と他に下女一人で、ごく寂しい家内です、良人が學校に勤めに上りますと、後で二人が奥座敷で裁縫するのが普通で、姑樣と申上ぐるは、なか〳〵品のよい婦人で、學問なども、到底、妾達の及ぶ所ぢや御座いませぬ位、四書とか五經とか、妾どもには解らない書物を講釋される初子さんも美しい優しい娘で、誠に妾の云ふ事を聞いてくれますから、今は、けつく氣樂で、前に戀しかつた母親や、懷かしかつた武ちやんのことも、自然と忘れる樣に成りました。で、何んですれ、處女時代から家庭時代（妾の爲めには）の徑路を考へて見ますと、恰度彼の美しう咲き亂れた菜の花に迷ふ胡蝶の樣で、菜の花が凋んで來ますと、自然と胡蝶も花を忘れて、他の香りの香い花を尋れます、でも、胡蝶だつて元の色香は、何時迄も忘れる樣な事はない筈ですが、やはり、その遊蝶に變る習ひでれ、ほゝゝ、是れは妾しの觀察よ。

十三日。　母樣の命令で親族の所へ良人と挨拶に參る、別段恥がしくもなかつた、良人が從いて居りましたから、宅に歸つて、針仕事をして居ましたら、客が參りました、でつぷりと肥えた赤い顔の人で、妾しが案内しますと、良人が妾を其客に紹介しますから、妾しも挨拶しました、良人の親友高木某と云ふ人、やゝ二時間も談話て居らつしやりましたらう、其後で、良人は初子さんと



母様を呼んで、何事か話しの様子ですか、妾しには解りませぬ、すると暫時經つて、初子さんが妾の居間に參られ、悲しさうな風情で何か云はう樣な目付、で、妾しが何事ですと尋ねたら、妾しに嫁入せよと仰有る、どう致したらよいでせうと、恥かしさうに答へられた。其時妾はつくづくと感心しました、あゝ、乙女心と云ふ者は我が煩悶える胸の爲が一すら明し得ぬ弱い者であると、自分もあの夜の事を聯想して、やるせなき身の、昔戀しうなりました、初子さんが自ら事情を打明けて、相談されるのは、妾しを敬慕の餘りから出た事ですから、妾しも喜んで、自分の思つた事や、母様から教はつたことなどを、初子さんにくれぐれも注意を與へました。

思へば、早いもの、婚禮してから——數日、嫁となりさては母親の代理も務めました、永き變化の活歷史も一頁一頁と進みます、妾しの婚姻は世にありふれたものですが、心邊の境遇はそれ以上です、是れからまた、子の母親となり、家庭教師となりますと、今迄よりも、より以上の責任と變化が來て、如何なる運命に立ち至るでせう。



縁遠き女の煩悶日記

村の娘

結婚は？

ア、私も女の盛りは遠うの昔に過ぎて既に所謂老嬢の部に屬して居る。親の心配するも無理はない。早く何とか身を立てねばならぬ。と斯う常には思つて居るが扨て兩親から將來の事に就いて相談し掛けられると何だか無性に涙が流れて眞面目に口が利けなくなる兩親は呆れて『仕樣のない娘だ。何も壓制に斯うせよ彼あせよとはいはぬ。お前も教育を受けて居る女——東京へまで出かけて四年も學問して來たのだから少しは考へもあらう。其考へが聽きたいのだ。何時も相談しかけると直ぐ泣いてしまう。手が着けられぬぢやないか』と歎ばされる。成程手が着けられぬ。自分ながら何故斯う涙が出るかと恨めしい。其癖他人からは何を聽かせられても睫毛一つ濕らない。場合に依つては却つて間の惡い事がある。『私だつて早く何うにかしたいと思つて居るがまだ善い考へもありません。』と遂尖り聲になる。『善い考へがないならば、おれが聞かせる、先づ女には二途ある。』といはるゝ頃は早や瞼が膨くれ上るので勢ひ遁げねばならぬ破目になる。『エーそんな事は聽かなくとも知つて居ます。』と我れながら無茶の言葉を口走らして居間へ駈け込み夜具引つかづいて寢てしまう。涙は瀧つ瀬と流れて枕皮がビツショリ。常にも氣に掛つて居るのであるが斯ういはれると又今更に、心配がこみあげて胸は大波動を起して息苦しい。

父の二途あるといふ意味はチャントわかつて居る。一は結婚する事。二は結婚せぬなら女でも何か職業に

就かなければならぬといふ事である。第一の結婚、到底我が柄ではない。荒さび果てた此心で、此顔で、此姿で、今更優さしい態度で人に事へる、到底我が柄にはない事である。私は何でも柄にない事するのが大嫌ひだ。色黒き女の派手な半襟かけたる、齢更けた奥様の廂髪なども、始終目障りに思つて居る。殊に私の様に青黒い顔の愛嬌なきブッキラボーの細君、妻と呼ぶ男の氣が知れぬ。私共の先生に矢張り斯ういふ風の人があつたが其れが四十に手が屆いた今日此頃某外交官と目出度結婚し給ひしとか。尤も子供の四五人もある所への後妻ではあるが。それは其れは一種超然たる造り着けの様にお行儀の正しい人で、先生の笑顔見たか見ぬかの問題が折々生徒間の話題に登るのであつたが外交官の夫人振り全く想像が着かぬ。それもそれも近々相攜へて花の巴里へ乘り込み給ふとか、先日の同窓會の私談中の新話題として珍重されて居つた。其後私は別々の口から三度聞かされたが、何となく可笑しいといふやうの感じがする。

獨身生活などは社會に向つて吹聽す可らざる物ではあるが事情に依つては私に軌を脫するも敢て罪ではないと信じて居る。殊に私の常軌を逸するのは却つて社會の浪費を省く一策であらうと思ふ。私とても親なき後の寂寞は充分豫想する事が出來る。人には兄弟が大勢あるからとはいふものゝ實際は兄弟などは何の賴みにもならぬ。決して金錢上ばかりではない境遇の變化によつてサッサと他人同様になつてしまう。こんな風に老後の寂寞は承知して居ても結婚しようといふ氣になれない。つまり結婚する資格がないと共に意志がないのだ。私は嘗つて獨身主義で御座ると誰れにも發表した事はない。其れも其筈、何も主義あつての話でない。唯結婚といふ事は自分には用のない事と思うて居る丈けの事だ。

自活は？

次に第二の職業に就くといふ事、これは尤もの事である。獨身で無職業だつたら此世が閑すぎて困まる。

其れこそ不善をなさぬとも限るまい。さう思つて職業に就かうと覺悟はしても自分に格好の口がない。今迄永年學校通ひはしたが職業教育は更に受けて居ない。在學中は何うにかなるだらう、なるだらうと一日一日と過ごして居たが、扨て卒業して見れば全く木から落された猿で、途方に暮れてしまう。つら〳〵形勢を窺ふに斯ういふ事は私ばかりでもなく凡才で自活の道に就かうとする者は皆同様らしい。此れも行路難生活難の一つならば意久地がない丈けに職業の範圍が狹い丈けに男子よりも女子に最も深く痛切であるやうに感ずる。先づ平凡の私が今迄學んだ事を役に立てゝ資本いらずの職業に就かうとせば教員より外仕方がない。其女教員、尤も私には厭やな職業である。女教員といふ名詞を聽いた丈けでも既う殺風景極まる光景より外思ひ浮ばない。これも哀れな者の一つである。自分も勿論哀れな者の一つではあるが、其本潮流に入る事を好まない。

私の實の本心をいへばもう隱居をしたいのだ。しかし隱居を許されても決して手を空しうしては日は送らぬ積りだ。私は變人で、してもせんでもよいといふ境遇に置かれるときつと何かする。養蜂養雞園藝といふやうな性質の物が好きである。始めは娛樂的にやつても終には必ず生產的にする事が出來ると信ずる。惡い事ではあるが、實際しなければならぬとなると何事も厭やになる。こんな事を教育家に話したら全然魂を入れ代へねばならぬと刎ねつけるであらう。兩親に打ち明けたなら正氣に還つて吳れといはるゝであらう。實際こんな子供を持つた親は氣の毒だ。殊に氣の弱い母に申譯がない。彼の母を眞から喜ばせて見たいが其れが出來ないのだ。私の母はよく世間へ對して人目が惡いといふ事をいふ。成程さうだらう。私にしても他所の娘が私の年輩で私のやうにして日を送つて居たら何故と思ふから、仕方がない、どうせ行々は何かして自活せねばならぬのだ。何も經驗、厭やな女教員でもして見ようか。教員するといつても免狀を持たぬから小學校へ出る事さへむづかしい。若し幸に口があつた

所が代用教員といふので月俸七八圓、精々で九圓、情けないが仕方がない、彼の人に頼んで置かう。

兩親の慈悲

其後二三度手紙の往復があつて遂にさる僻地の女學校に口があるが出ては何うかといふ事になつた。實は餘り思はしくもなかつたけれども、これをはづしては又今度何時口があるか知れないので、澁々ながら、承知の手紙を書いた。其旨兩親に話したら餘り遠いから考へたら何うかといはれる。自分も實際氣が進まないのであるが、其塲合例の癖として憎らしい方へ口を滑らしてしまつた。「遠うければ一番いゝでせう、持て餘し娘が眼に着かなくて」と。遂に最愛の母の眼には涙が浮かんだ。私も胸からグッと逆寄せるやうに涙が湧いた、實は口でいふ程の心ではないのだが折々こんな事がいつて見たくなる事がある。其癖兩親は私の生命で若し兩親がなかつたら、我慢にも此世の中に生きて居るのがいやになるだらう。其親に向つて變な事をいふのだから自分ながら妙な女だと思ふ。けれども私の兩親は其んな心なら勝手にするがいゝとて知ぬ顏して居るやうの人と違ふ。「仕方がない。さう決まつたら夜



具や着物の仕度も要るだらう。先づ夏休みまでは歸へられまい。節（母の名）よう考へて不自由のないやうにしてやつて與れ。其れからお前先達時計がこはれたとかいつて居たな。其れも直るなら直す直らないなら買ふと早く揃へなければなるまい。己れが明日見てやらう。』と二人で受持を決めて心配して居らるゝ。世の中に親程有難いものはない、有難いといふ事は知つて居るが其れに報ゆる孝の實を擧る事が出來ないのだ、其れは一つは勿論私の不心得からであるが、又一つは今の世の中と私といふものとの關係が親の心を安める事が出來ないやうなつて居るやうに思はれてならぬ。今自分の思ふ通りの事をしても數年の後には或は兩親の心を安め得るやうにならぬとも限るまいか、一時兩親を呆れさせ情ながらせねばならぬ。一時でも兩親に情ながられるといふ事は此私には忍べる事ではない。で姑息かは知らぬが先づ餘り突飛でない職業に就いて居ながら徐に考へる事とせう。初めから何かの階段と思へば、厭な職業にでも我慢が出來るといふものだ。

出立の前夜

いよ〳〵明朝は赴任地へ向つて出立しなければならぬ。厭やで面倒臭いが、仕方がないと覺悟をして居るけれどもまだ決心したと胸を開く事が出來ぬ。私は昔から未だ決心した事がない。何時でも何かに追られてしぶ〳〵ながらも自分で形勢を作つて置いて其形勢に制せられて漸く仕方がないと觀念するまでゝある。其んな調子で何をするにも喜びを以てする事が出來ないのだ。だが又今迄に既に定まつた形勢を破ぶつた事もない。

さていよ〳〵明日が近づいて來る。夕食の膳に就いたけれども食慾は全く絶えて居る。箸は持ちたくないが食はねば眼が凹むであらう。此顏色で眼が凹んだなら全く化物先生となる。忍んで一杯流し込んだ。

明朝早く起きねばならぬといふので間もなく床に就いたが眠られない。此家を去るといふ事がいま〳〵しいやうで涙が流れる。今は家といふ溫かいものがある

からサアといへば逃げて歸る積りで大嫌な世の中へも出て行くが、此が漸く齢とつて親にも別れなければならぬやうになつたら何を慰藉として女教員などして居る事が出來よう。兄の時代になつてはもう私の爲めには決して溫かい家といふ事が出來ない。兄も嫂も決して惡い人間ではないが私との關係が親子でない。兄妹の關係である。嫁小姑の關係である。父との間では笑ひにすまされる事もすぐ生意氣なと壓へつけられる。母との間では何でもない事でも一家中の騷ぎとなつてしまう。私は三年前初めて嫂が出來ると定まつた時考へた。さ



あ私も所謂鬼千疋といふ小姑の位置に立ねばならぬ、だが嫁小姑の爭ひほど見つともないものはない。私は決して鬼千疋とはなるまい。蟻一疋にも價しないやうに心掛けて居ようと思つた。それで何事にも立ち入らないやうに努めて居たから三年目の先日まで何の事もなく暮らして來る事が出來たが。先日の煤掃ひのあつた折少々蟻主義に戻つた事をし出かした。私の可愛甥ではあるが餘りメソ〳〵泣くので私は嘗つて弟を叱かつた如くに叱かつた。處がさあ大變、嫂は何と思つたか涙ほろほろと泣き出した。多分親が附いて居るのに要らぬ事

をと思つたのであらう。私は謝まるのもをかしいと困つて居る所へ、恰度兄が通りかゝつてヂロリと私の顔を睨らむ。アヽ甥を叱かつてさへ蟻主義に戻つたのかと心細くなつた。其れからはいよ〳〵親なき後の寂寞を想像するとムシャクシャするやうで涙が流れる。一層親より先きに死ねば何の面倒もなくて好都合だ。けれども親に心配かけた上に自分の死までも見せたくない。其れかといつて餘り長く自分の方が生き遺つては私は寂寞悲慘に堪へぬ。希はくば兩親と同時に此世を去りたい。だがさうはうまく行くまいから何とか安心の出來るやうに法を立てねばなるまい。其用意として先づ温かい慰藉者のある中に充分に世の中の味を覺えて來よう。私には失敗して歸へれば何時でも迎へて呉れる温かい家といふ慰藉者がある、何もビク〳〵して居るにも及ぶまい、オヽもう三時か無理にも眠らねばならぬ。

筆勢奔馬の如く、滔々として澱みなく、萬丈の光焔當るべからざるの概あり、蓋し裏に抑ゆべからざる不平あつて然るか、何ぞそれその言ふ處ろの痛快なるや。

此文元と荒び果てたる女の心として寄せられたるもの編者妄りに題を改む、僭越の罪寛恕を乞ふ。

即ち荒び果てたる心として見れば學者先生の千萬語よりも女史の一言一句により多くの教訓あるを信ず、かくすれば、斯くなるものと知りながら、止むに止まれぬ大和魂とは吉田松陰の述懐なり。女史はそれ女の松陰先生か。





良人の生命を繫ぎ止めたる私の日記

原　清子

▲一月二十日――柴山醫學士（今は博士にて傳染病研究所の第三部長）の數回の診察に依つて、私の良人は、愈〻肺結核であるとの診斷を下されました。時は丁度明治三十八年一月二十日のことで、多くの人は、屠蘇の醉未だ醒めやらず、若きは歌留多遊びに夜を更し、子供は紙鳶揚げ、羽子つきに夢中に遊べる目出度き節でありました。

是が結婚後一年目に起つた出來事でして、良人は齡三十、私は二十四歲で、是から世の中に出で、奮鬪苦戰し、誓つて家を興したいと云ふ希望に充たされて居た時でありました。此樣な時に、思ひ掛もせざりし「肺結核である」と云ふ醫師の診斷は、實に死の宣告を受けたのと同じことでして、其一言を聞た時に私は身も世もあられぬ位に落膽して、私共の運命は、愈〻是までゞあるかと、茫然として、淚も出ない位に失望致しました。

▲良人の病狀――良人の病氣が、まさか肺病であらうとは、神ならぬ身の更に知るよしもなく、良人が二三箇月前から、何となく身體が弱つたやうに見え、皮膚に光澤がなく、靜脈血管が、靑筋となつて、目立つて能く分るやうになり、時々何となく氣分の勝れない日がありましたが、それも大したことではあるまいと、自分の淺い考からして、格別氣にも止めませんでした。

それから夜分になると、毎晩ではありませぬが、偶に咳嗽の出ることがありました。けれどもそれも乾咳で、多分咽喉にでも少々カタールを起して居るのである

らう。良人は生來蒲柳の質で、頑健鬼をも挫くと云ふやうな身體ではないから、少しの加減の惡い位は、免れないことであらうと、自分獨りで決め込んで居りました。

處が正月の三日の事でした。私共は朝から一里許りの場所まで、散歩に出掛けましたが僅か是位のことで、良人は歸り途に、胸の邊がどき／＼して、苦しい心持がすると申しますから、女の私でさへ、是位の道程は何でもないのに、男子でありながら何ですか、餘り神經が過敏になつて、些少いことまで、氣に掛けるやうでは困りますと、勵ましながら歸つて、午餐の膳に向ひましたが、如何にも食物が不味いやうな模樣に見受けました。

それでもと思つて、午後の二時頃でしたか檢溫器を取出し、腋窩にあてゝ見ました所が三十七度六分位の體溫で、其夜臥りましてから、お正月の寒さにも拘はらず、今迄にない盜汗をかきまして、寢衣を取換へました。

其後は矢張り割合に食が進まなくて、盜汗も偶にありました。會社の勤めは、無理なこともありましたが、それでも一日も缺勤したことはありませんでした。けれども樣子が何となく怪いやうな心持も致しますから、念の爲め、御診察をお願ひなさいと、私から勸めたのでありました。此時までも、私は深い恐ろしい病が、良人の身體に、其根を下して居ようとは、夢にも考へ附きませんでした。

▲醫師への相談――「肺結核である」と診斷を下された翌日、即ち一月廿一日の夜、私は柴山醫學士を御尋ねして、良人の病氣に付き種々詳しくお尋ねしました。其御話の大略は次の通りでした。

結核菌が肺臟の中に侵入して、結核と云ふ變化を起すのには、少くとも一ヶ月を要するそれが段々に増進して、病竈と云ふ病の床を作り、種々の症候を顯はすのは、早きは半年、普通一年位經過てからである。其徴候は、何となく氣分の勝れないこと、永い間咳嗽――時には乾咳の續くこと、食物の進まぬこ

と、熱の時々出ること、盜汗をかくこと、頭痛のすること、身體の次第に羸痩ること、何となく衰弱の模樣の見ゆること、病氣が増進めば、咯血と申して、血を吐くことなどであると。

御話を聽た時に、私は『アア自分の過失であつた』『自分に衛生上の智識の乏い爲めに良人の病氣に就ては、自分は實に不注意、不親切であつた』と、坐に後悔と失望との念に驅られ、遺憾の思に迫られ、心臟は破裂せん計りに激しく鼓動して、顔の色は蒼ざめ、殆ど生きた人間の氣勢はなかつた程でありました。



けれども學士の親切な助言に依つて、此失望の間にも、倘一縷の光明を見出し、暫くの後には、稍勇氣を恢復し、屹度あるたけの力を盡し、良人の病氣を治癒して見せると云ふ望が湧て參りました。學士の助言と申すは、次の通りでした。

肺結核は決して不治の病氣でない――初期に治療を加ふれば必ず治る――肺病患者は出來得るだけ初期に轉地するのが第一である――早い程其治療は完全で速かである――轉地が一週間遲るれば、治療は一ケ月遲れる――素人は病氣が左程强

くないから今急に轉地するに及ばぬ、今少し待つがよいと云ふとが多い――是が病勢を増進せしめる大原因である。

不幸中の幸は、良人の肺病は、今初期であるから、時を移さずに、充分の手當をすれば、屹度治癒る見込があると云ふ學士の御話で、私の心の中には、喜びの閃きが、何處からともなく輝きました。熱心を籠むれは、岩を貫く矢さへもあり、自分の眞心一つにて、爭で良人の病氣を治癒すことの出來ない事があらう。全身全力を捧げ、有りとあらふる物を犠牲としても、屹度目的を遂げて見せると云ふ決心は、此時につきました。

▲費用の準備――急に轉地して、治療を充分に加へたいと云ふ決心は、斯く決定ましたもの丶、先立つものは金錢の用意で、此點には更に一層の苦心を重ねました。

良人は世に出たばかしの人ですから、給料は月三十圓、私の學校で戴くのは、僅に十八圓で、それも一年前の結婚の費や、新世帶の準備の爲めに大分を費し、現今は僅に百圓の貯金があるばかしで、それが私共の財產の全部でありました。

愈ゝ轉地するとなれば、良人は無論職務をやめ、心置なく養生させねばなりませぬから、隨て給料も抛たねばなりませぬ。それから學士のお話に依ると、轉地は如何に短くも、半年と思はねばならぬ、と云ふことですから、病氣の模樣に依つては、もつと永らくの滯在になるかも計られませぬ。それに今一つは轉地療養に、若い妻を看護人として伴れて行くのは、屹度病氣の爲めに能くないと云ふ御話なので、是も別に相當の人を賴まねばなりませぬ。

ですから彼是の費用を合せて、差當り五百圓の金は、どうしても用意せねばなりませぬ處が此やうな準備が二三日の中に、貧乏人の私共で、何で出來ませう。けれども金が出來なければ、轉地療養は出來ず、轉地療養が出來なくて、此儘東京にぐづぐづして居たらば、病氣は段々に增進し、遂には羸瘦衰弱へたる身體を、病の床に横へ、苦痛と悲哀とに呻吟し、怨を呑んで前途

望ある良人を、見る見る還らぬ旅へと辿らせる計りであると思へば、遺憾の念は身を震はし、血を吐く苦で深き憂に沈みました。

ア、自分が數萬圓の財産家であつたならば此樣な境遇に陷つて居る人の爲めに、五六百圓の金は、喜て抛つてやらう。花柳の巷に徘徊き、自分の外見と肉慾との爲めには、一度に數千の金を捨つる痴漢があるのに、我最愛の良人の爲めに、僅かの金を惠む人はないのかと、女子の愚痴かも知れませぬが筆にも口にも云ひ盡されぬ不平と苦心とで、胸一杯を充たされました。

足の棒になる程の奔走も何の甲斐もなく無益に一週間を費しましたが、遂に思切つて私の實家に參り、厭でも應でも金の都合を附ける積りで、一月廿八日急に旅裝を整へ、岡山縣へ出發致しました。



四日間の滯在の間に、無理に無理な算段を致し、苦情だら／＼の間に、四百圓の金を都合し、二月三日の晩東京へと還りました。女子の一生に一度は怒り、一度は强情を言張るべき時ありと申すことを、豫て聽て居りましたから、此時こそと思ひ、金の請求に應じて呉れない父と兄とに向つて、私は散々に怒り飽まで强情を言張り、若しや此怒りと强情とでも、尙請求を容れて呉れねば、生命を棄てゝもと云ふ決心でありました。

▲轉地――慥かに神樣の御助でありませう。此時日露戰爭に出陣して居られた、八木と申す少尉の夫人で、私と同窓

生の、年來姉妹のやうに親しくして居りました方が、獨りで東京に殘つて居られましたが、遂に私共の願を容れて下され、良人と同行して、轉地先の看護をして下さることに決りました。溫厚な同情ある方で、良人の滿足と安心は此上もなく、私も重荷の半分を卸したやうな心持が致しました。

●●●●二月十二日、世は戰勝の祝聲の喧しい間に病める良人は、八木夫人に附添はれて、伊豆國の伊豆山へと參り、山邊の小さき家を借り、約七箇月の間、俗事を忘れて、平和に日を送りました。

七ヶ月の滯在の間、堅く醫師の命令を守り、一意專心に治療を加へました。良人は月一度出京して診察を受け、私は月二度位彼地に參りまして、良人を見舞ひました。此間に實行した養生法は、大略次の通りでありました。

▲新鮮なる空氣の吸入——塵埃や、烟や、臭氣の混らない、極めて新鮮しい空氣を、晝夜絶へず吸入せしむること。病氣の輕い患者は午前午後に、日光を浴びながら、樹木の間を徐かに散歩するは、最も良法であるさうですから、お天氣の良い時は、規則正しく此方法を實行しました。

▲營養物の注意——結核は非常に身體を衰弱せしめる病氣ですから、是非營養物を充分に攝らせて、身體を補はねばなりませぬ。それには、割烹に達した看護者を附け、日毎に料理の法を變へ、材料を精選し、努めて美味い食物を拵へ、少しでも多量に食べさせるのが第一であります。此點に遺憾なく目的を遂することが出來ましたのは、偏に八木夫人の賜でありました。

▲皮膚の手當——毎朝毎夜、微溫水で、胸部背部を拭き、乾きたる手拭にて擦り、皮膚を强練す法ですが、是を規則的に永く續けると感冒を防ぎ、盜汗を去り、新陳代謝の作用を盛にする著しい効を奏します。

* * * * * * * * *

至極簡單な養生法のやうですが、規則立ちて之を實行したこと六ヶ月の後には着々其驗が見えて、不思議にも熱が出なくなり、盜汗をかくとがなく、食慾は進

みドシ〳〵體量は增し、見違へる程に身體が肥え太り、其年の九月廿一日、丁度七ヶ月と十日目に、良人は醫師の許しを得て、目出度東京へ歸つて參りました。其時の喜びは、果して如何であつたでせうか、殆きり死んだ人の蘇つたやうな感が致しました。

其時から殆ど三年を過ぎますが、良人の健康は日に增し優れ、只今は體量十四貫五百目の、生れ變つた身體となりました。



恐ろしい慢性の難病も、幸に初期に診斷の附いたのと、急に轉地して療養したのと、看護者の親切と同情に富んだ人であつたのと、良人が宗教の信仰に依つて、病の中にも精神的に慰藉のあつたこと〻、是等の原因が集つて、良人の病氣を治療したのであるかと考へます。

此出來事の爲めに、私の心に與へられた益は、決して拙き筆で申上ぐることは出來ませぬ。



虐待されし從姉の日記

きぬ子

此の日記は不思議な廻り合せで私の手に這入りました。日記の主は私の從姉で今は此の世にない人です。從姉の胸の底の底迄知つて居るのは恐らく私一人でせう。今でも目を閉ぐとはつきり其の姿が浮びます。眸容、口邊、何と取り立てゝ云ふ所は無いのに、皮膚の奇麗な故か近勝りのする實に艶麗な容貌でした。男勝りの所謂敏腕家の繼母が家中を切り廻して、病身の父と、氣弱な姉とは滅多に口出しさへならぬと云ふ樣な悲慘な間に挾まれて育つた、反抗心とでも申すものでせうか、たよ〱して風にも堪へぬ樣な姿に似合ず、一旦決心すると恐ろしい程膽が据はるので、道ならぬ事と思へば親にも背き、家も捨てゝ、一人の知己もない東都で、しかも十八歳の處女の身で苦學を始めるなどゝ、之れ程無謀な大膽な事をさへ敢てした位です。死因は大火傷でした。机の上に豆ランプが覆へつたのを、晝間の働きの勞れに假寢して容易に眼が覺めなかつたのださうです。「亡き母上の安らかに眠りておはす所――姉の吐息の漂ふ所――忘れ難き地よ懐しき故郷よ」と屢々日記した其の地へ小さな素燒の壺に這入つて老衰した父に抱かれて歸つて來ようとは當人でさへ思ひ及ばなかつた所でせう、從姉が家出をする迄に至つた動機は死後日記に依て始めて解りました、日記を讀み、更に其短かゝつた生涯を思ふて私は實に深い感慨に沈まずには居られません、女は實に割の惡いものです。

十月廿五日。昨夜も考へて考へて考へ拔いた。が矢張り結局は今迄の通りの思案しか出ない、斯うなつては到底御許しの出る見込はないから、默つて上京して苦學するより外に百夜考へた所で方法はない。苦學

と云へば男でさへ仕遂る者は稀だと聞く、まして女の殊に私の様な世間知らずには苦しい苦しくないの問題より、寧ろ境遇に負けて死ぬるか、命が續いて成功するかの問題である。けれども假令飢死をしても、彼麼獸の様な者の手遊にされて此の先二十年も三十年も呼吸の通ふ、死骸を衆目に晒すより、一年半年でも好きな勉强をして、幾分でも世の爲になる事が出來れば死んでも私は本望である。二十萬の財産家で、其の方から受けてる御恩は大したもの、御前が厭と云へば父様は素より家中が明日から難儀をせねばならぬなどゝ母様は仰有つたけれど、二十萬が何だらう、人の生血を絞つた二十萬が何だらう。何かと難癖付けては今迄に七人も奥様を替へて、もう五十に手が屆くと云ふのに女でさへあれば下女でも子守でも手當り次第で何時も新聞種になつてる人が譬へ家の恩人だからつて當人の私も知らず、父様さへ御承知ない先に結納から日どり迄母様一存で極めて仕舞ふとは餘まりではなからう乎。今日と云ふ今日は愈ゝ決心した、憖あつても私は母様の仰せには從はれぬ、今月中には十八年住馴れた自分の家を去らなければならぬ。父様にも、姉様にも別れなければならぬのだ。



立つ鳥も跡を濁さずと云ふから、今夜は前廠の二階の手廻り道具を悉皆片付けた。錦繪で張つた箱へ仕舞ひ込んで置いた飯事の道具には黴が生えて居た、二尺の京人形これは私の初節句に亡くなつた母樣が買つて下すつたのだと聞いて幼心にも大切にした。顏は汚れてるけれど指一つ折れては居ない、外の人形は皆妹に奪られたけれど之計りには手も觸れさせなかつたが、私が居なくなつたら乾度直に妹が持出して、滅茶滅茶にして仕舞ふ事であらう。心配だけれど這麼大きい者を連れて行く譯にも行かぬ、何卒無事で居てお呉れとキッスして御顏を舊の樣に眞綿で包んで錠のある簞笥の小抽出へ仕舞つた。丁度姉樣が昇つて被入つたから母樣はと伺ふと寄席へ行らしつたとの事、又とない折だから姉樣に悉皆決心を打明けた。怎する積りかしらと私も心配で成らなかつたけれど、當人のお前が默つて居る事故何も運命と今迄諦らめて居ました。けれども家出すると云ふのは餘り向見ずぢやなくつて何にしても一生の岐路だから篤とモウ一度考へ直して見て御呉れと姉樣も始は危ぶんで被居つたけれど、今迄久しい間考へて考へての末斯う〳〵と委しく御話したら逐々贊成して下すつて、夫れ程健氣な覺悟があるのなら行くがよい、亡くなつた母樣とて御止めになりはすまい。左前になつて居ればとて髮油と云へば叶屋と流行唄にまで唄はれた六代の老舖、娘に身賣り同樣の嫁入りをさせねばとて明日から路頭に迷ふのではなく、家の爲を母樣は眞向に振り廻しなさるけれど眞底は父樣にせよ釣合はぬ無理な事と思つては被居る、けれども例の御氣象故、思切つた仰せもないのを付け込んで、何ぼう成さぬ仲とて母樣の御仕打も餘りではないか世間にさへ容れられぬ彼麼者と緣組するのが何の家の爲、家の爲の緣組は私の失敗で能う解つて居るではない乎、金の都合故の養子や嫁が何時迄續くものぞ、お前にそこ迄思案が附いた事ならば家はあるものの孤兒であると覺悟して苦學を仕通してお呉れ、私とても出戻り〳〵と邪魔者にされ乍ら生家に居たとて生甲斐もない、いつそ東京へ行つて女中奉公してなりと

幾度思ひ立つたか知れないが父樣とお前に心を引かされて果しませせなんだ、私はどうせもう日陰の身石に喰付てなりと耐へ徹してお前と二人分の孝行もしませう身の廻りをつめてなりと、お小遣位は送つて上げられよう餘り無理をして身體を傷さない樣にと染々云つて下すつた。御話の途中で手燭の蠟燭が盡きて仕舞つた、お藏の窓は密閉してあるから眞暗だけれど、夜が更けて四圍がシーンとして居るのも聲を呑んで泣いて被居る氣色が感じられる、私は餘りの嬉しさ有難さに熱い涙が止め度なく流れて口もきけなかつた。



十月廿七日。今朝は大變お寒くつて皆俄に足袋を穿いた。吐く息が白く見え、町を行く角兵衛獅子の太鼓の音が冴えて勇ましく響く。午前中に糸織の袷を縫掛てあつたのを仕上げた。午後母樣の御供して買物に行く、「繼母だから支度が見窶しいと云はれるのが厭だから」と昨日髪結に云つて被居たが多分夫れが本音であらう、私が可愛から私の爲に買つて

下さるのではなく母樣の虛榮心を滿足させる爲の嫁入支度である。華美な友禪や、紋や取り散らした呉服屋の店頭で斯んな淋しい思ひに沈んで『何を此の子は思案に暮れてるのよ、些と身に沁みて御覽な自分の衣裳ぢやないか』と母樣に叱られた。小紋の羽織の仕立を來月の三日迄に必ずとお誂へになつたけれど、此羽織の屆く頃私は何處に居る事か。

十月廿九日。いろはを習つた此の机で日記書くのは今宵限りである。今日夕方母樣に、明日久子樣の御家へ一日遊びに遣つて頂戴と御願ひしたら、もう十日もたてばお嫁さんになる人が其麽に遊び歩いてはいけませぬとお仰つたけれど、押返して御願したら御許しが出た、此頃母樣は大變御機嫌が好い、時には私の機嫌をとる樣にさへなさる。其の代り私が居なくなつてからの御腹立の程も思はれる。明日の準備はもう悉皆出來た積り、子供の時からお小遣を郵便局へ預けたのが積つて八十圓餘、之れは道中が恐いから父樣姉樣の御寫眞と一緒に手拭に包んで肌に着けた。亡くなつた母樣は寫眞を寫すと壽命が縮むと云ふ迷信から、遂々御寫しに成らなかつた、せめて死顏でもと云つたけれど生前嫌つて居たものをと父樣が御許しにならなかつたとの事。十時過に前藏へ引込んで旅行地圖を見て居たら姉樣が密と來て塵紙の包みを渡して直に又お店へ行つて仕舞つた、月末だから帳合が多忙のであらう。塵紙の中には拾圓札一枚、一圓札十二枚と寶丹とが這入つて居た。今十二時が鳴り始めた、あゝ此の鐘の音、十八年耳に馴れた幽寂かな餘韻のある鐘の音、鐘樓の東は墓地で母樣の御墓はそこにある。今日恁かして御詣りしたいと思つたけれど、此頃は踊りの御稽古も、お茶も止して居るから外出が出來ない。十一……十二……あゝもう今夜限りだ、十二時を聞くのは之れ限りだ、心細い、心細い、何故這麽無謀な事を自分は思ひ立つたのだらう。家を離れるのは厭だ、賴りないと云つても父樣もあれば姉樣もある今日迄の叶屋の娘の生涯を棄てゝ行く東都には振返つて下さる人さへ無いのではないか、病氣にも成り度くはないが罹る事もあら



う、老少不定何時死ぬるやも計り難い、同じ死ぬなら母様が臨終迄居らしつた此の家が好い、行きたくない、行きたくない、けれども何だか爭ひ難い力に後から壓される樣な氣がして、殊に之れ迄用意もして今更止める譯にも成らぬ、今夜眠て居る中に大火事か何かゞあつて父樣も姉樣も私も一緒に死ねたら嬉しかろ、大地震でもあつて地が裂けたら汽車が不通になるかも知れぬ。けれども、けれども私にも憖しても十八年馴れた我が家に居る事を運命の神が許して下さらぬ。明日の今頃は——窓の傍の植込の竹が、秋風にさら〳〵と葉ずれの聲を出すのが云ふ計りなく淋しく懐かしく聞える。明日は早く起きねばならぬのだからもう休みませうあゝ何も彼も今夜限りだ……。

悟り得て嬉れしかりし
私の日記

細谷よし子

うらゝかな秋の靜かさを破つて酒に醉つた女のろれつも廻らぬさけびが起つた。

「何だつてあんまり馬鹿にして下さるなこれでも〳〵……」淚に止つて「私はれこまつてたつて僅か三圓五拾錢の借りを踏み倒しはしませんよ人面白くもない出て行けなんて云ふとなほ行きませんよ」後はひつそりと亭主が小聲に何か云つてる樣。

つひ此の夏こして來たとなりの二階で爪彈きのゆかしや仇な廿五六のいきな島田もつぶしを下に、くわへ揚子の艷な姿をつひ罪な覗見と云ふのをしたのは、自分ばかりではないやうだ其の糸の主の是れは又影で思つた年頃はもう廿年も昔の事とおしろいやけの皺が語つてる、旅稼ぎの何とやらのなれの果てとは僻目ではない。又おろ〳〵聲で三味線の主が……「座敷料はいれないで其の上病氣になつてさア皆な私が世話してやつた」と家の梅やにおかみが口痴ツたさきの事讀めた。その追ひ立ての實行だと……「借りを拂ツたら立派なお客樣でせう」切れて「私がかりたら私の座敷だ、それだのにやれ干し物だそれ何んだと寢て居る所を日に幾度も〳〵通ツて日が暮ればやれ嬉しやこれから樂が出來るかと思ツて……」又淚でせき止められた、さも切つなさうになく音が聞える、あゝいやだと耳に蓋。いつか話がまとまつたさうな夕方に「ハイ左樣なら」と引き出した古道具屋の荷車には火鉢も御膳も有ツとたかそれで味ある音じめをもらす窓からは寂として音もない。

旅の女のさすらひはさていづくの天が下やら知らず。花の色香のうせた身は出稽古のよそ目には氣樂さうだが月一圓では五六軒行て子供でさへ數がしれる。

五六圓のみいりで二圓七十錢の座數料に米やおかずも暮しに要れば却々苦しいのはきまつてるに加へては、病氣になつたので、こつちで休めば月の物もどうぞと手を出す譯にも行くまいに。ほんとにかはいさうだ賣代持てどこに行たらう。

梅干が鶯なかせた事もありやあの人だつて昔になつた若い時は田地を賣て遊ぶ客の相手をしては膝枕させて今でもあんなにいゝ格好だから、肉付のよかツた時分はどんなによかツたでせうと、自分の鼻とくらべて見て梅やがこぼした、鼻すぢ通り老ひてはいやみに見えるほどの露がしたゝ



る樣なあの眼て色白に江戸紫のうつりよく、鼻下長連のはな毛を讀んで誇りの笑ひを浮べたらうとは、まけすぎらひな口元が自然に話して聞かせる樣だッた。

つかの間に四十路の峠ふみこえて、こしかたを眺た時彼の人はどんなに悲しみに歎いたらうか、なぜ盛の時に早くかた氣にならなかつたか撰りぎらひして、よろこんでうかうか年月を過してしまひ今になつてはよるべなき身のよる年波は、日毎に殖る皺によまれて死水とつてもらふ人もない身になり果てたのではないかしらと、秋たけてこうろぎの床下に「ちりゝ」と淋しくなくまでも、かの行きたる人の末をしのんで深く／＼考へた。

あゝ自分は沈靜な此の夜、大きな敎へをさぐり得たが、嬉しかッた。今迄は家庭が何親子が何皆な罪ある人の子がよりあつまりの手前勝手のゑせ道學だと自分は固くさう考へて世の中を獨歩して自分のこの淸き理想を實現しようとのまかぢりの敎育と半わかりの理屈を立てゝ、父母樣が折角嬉んでまとまりかけて私にたづねられると、其度毎に妻となるのが何んですか高等下女に過ぎないではありませんか、私は立派に身を立てゝ自由の海をこぎまはり、家名を上げて御目に掛げますのとまだ浦若い靑くちばしで口廣いこと云ふて、果は理想にかなはぬと皆緣談をことわッてしまつた、あゝ今夜ほど感じた事はない、今年自分は廿年だけれどあと二月もたてばすぐ廿一になるのだッた、云ひ分をおし通して、自分ばかりで天晴賢女獨身生活の樣を見よとレデーよミスよとすまして居ても、今十年も經ッたならば他人が冠詞をつけて下さる、然かもチールドと云ふ敬ふのか、けなすのか其時代には華の姿も月の眉もあたら昔日の夢と消えて孤獨の淋しさをしみ／＼味あふやうにならう、むゝ誰々樣もその爲に煩悶とやらを遊ばしたとよく讀物に見えたのになに皆さう云ふ人は薄志弱行の方のする事現に成功して御出の方もあるものをと千にも萬にもめづらしいのを目あてにして、昨日までも今日までもなぜ悟れなかつたのかしら、それにつけても三昧の主はよい戒しめを此身に加へて行てくれた、丁度立場をうしなつて、岩頭より今にも千仞の谷間へ落ちんとしたのを神樣が危いかなと、もとどりを引いて戻して下さつたやう、自分はぞつと總身の毛あながたつた思ひ月は窓よりさし入りて燈火の消えたのも知ずに、机の前に物思ふ我身を惠ぐみの光でくまなく照して居つた。

それよりしば／＼近き日頃父母樣が說きつさとしつ、さてはかきくどき給ひしあの嫁ぐ事御いらへ申上て一時も早く御兩方に御安心御させ申して自分も淸きまるまげ姿に……足もかろく二階から下りた時、時計の音が七ッだッた。





世帯日記

もと子

八月二日、晴。此の四月の出産に就て、祝つてくれた、遠い處はまア置いて、近い處だけは禮を云つて廻らうと、疾うから氣を揉んでは居たが、何分にも暇がなかつたので、休暇に爲る早々だが、良人に頼んで沼津の叔父の家へ行つて貰つた。

清子も既う此頃では、自由に起上つて手足をばたばたやるやうに爲つた。仰向けに寢かして置いても却々さうしてゐない。彼麼にまで動かしても可いのかしらと、氣遣はれる程運動する。是だものお腹にゐる時から、吃驚するほど動いたのだと、その健かな生ひ立が何よりも嬉しく、毎日殆ど仕事の出來ぬのも忘れて傍を離れない。是ではと思つても、叱言の云ひ人もないので、矢張濟んでいく。

燈火が點いて半時も經つた頃、良人は歸つて來た。上る早々『俺は既う怎麼ことが有つても、決して沼津へは行かん。』と何か大變に激してゐる顏付。『まア何故?』と怪異な私の顏を睨む樣にして、『今日のやうに侮辱されたのは、生れて始てだ!』と邪見に洋服を放り出す。

一體怎麼事が有つたのか分らないが、私は多分義叔母樣との間に、何かあつたに相違ないと早くも察した。で夕食が終つてから緩り聞いてみると、果して然うだつた。良人の語る處によると、良人が今日行つても義叔母樣は座敷へ顏も出さない。病氣かと叔父に訊くと然うでも無い。忙しい用でもあつて手の離されないのだらうとも思つたが、那樣氣配も見えない。茶の間に大きな聲で、富さん(從妹)を叱るの許り聞えたがつひ歸るまで姿を見せなかつた。むしやくしや腹で辭さうとすると、叔父が『彼方に居るから遇つてッてくれ。』

といふ。憤と胸に込み上げた。「まア……宜敷。」と立ちかゝると、叔父は袂を執らん許にして「後で復た蒼蠅いから、どうか過てつてくれ。」と如何にも辛さうに云ふ。で詮方なく茶の間へ行つてみると呆れまいことか、義叔母様は火鉢に頬杖ついて、新聞の小說を讀んでゐた。

良人の顔を見ると苦い顔して新聞を置いて、そろ〳〵例の毒口を始めた。淸子の二十一日の祝の時、返禮として、鳥渡した物を贈つておいた、それが始めて



の子だのに餘り粗末であるとか、義理を辨へないとか散々云つて、私の事を口を酸くして惡く云つたといふことであつた義叔母様の眼から見て贈つた物が怎麼に粗末であつたか知らないが、何も近い親類の間柄で、那樣に他人行儀に咎めなくとも好さゝうなもの、加之私共の暮し向も知つてる癖にと思へば、義叔母様の心事が胸に泌みて、淺間しくも恨めしい。又叔父も叔父だ男で一家の主人でありながら、餘り意氣地が無さすぎる。今始つたこ

とではないけれど、本當に呆れちまう――良人の激した氣配に同化して、私までつひ這麼ことを思つた。思ひ出すのか、良人は屢々溜息して、ともすると私に突掛つて來る。私も面白くない。睨め合ひの揚句は碌な事は始るまいと思つたから、事に託つけて早く寢て終つた。

八月七日、晴、午前十時頃、突然沼津から富さんが來た。暑中休暇だらうが何だらうが、他所へ遊びに出す樣な義叔母樣ではないのに、意外だつた。

『よくお母樣が出してくれてね。』と云ふと、富さんは寂しい笑を、餘り豊ならぬ頰に見せて、叔父から良人に宛てた一封の手紙を出した。夫れを讀み了ると、良人は苦い顏をして私に渡した。受取つて見ると、突然だが富子を託す。少し不埒な事を爲たから、悔悛するまで當分置いて與れ。そして折を見て說諭して貰ひたい。何なら休暇中も置いて貰ひたい。――といふやうな事が書いてある。

良人が苦い顏をしたのは、終の一句だらうと思ふ。不二雄(靜岡の姉の子)も來てゐるのに、此の上什麼して遣つて行かれるだらうとの苦い閃が、咄嗟の間に胸を壓迫したのであらう。

『惡い事爲たつて、一體何にを爲たの。』と訊いてみると富さんは、旣うシク〳〵泣いてゐる。富さんは數への十五だが、身長など今日見ると、私より高い位に成つてゐる、が矢張子供だ。他へ寄んで賺して訊くと――唯無斷でお錢を出して、リボンを買つたといふだけだ。で義叔母樣が家に置かないと云つて、怒つた相だ。

旣う物心も付いてゐる者を、大した事でも無いのに何も那樣にまで爲なくともの事。然う繼子といふ者は憎いのかしらんと、呆れずには居られなかつた。

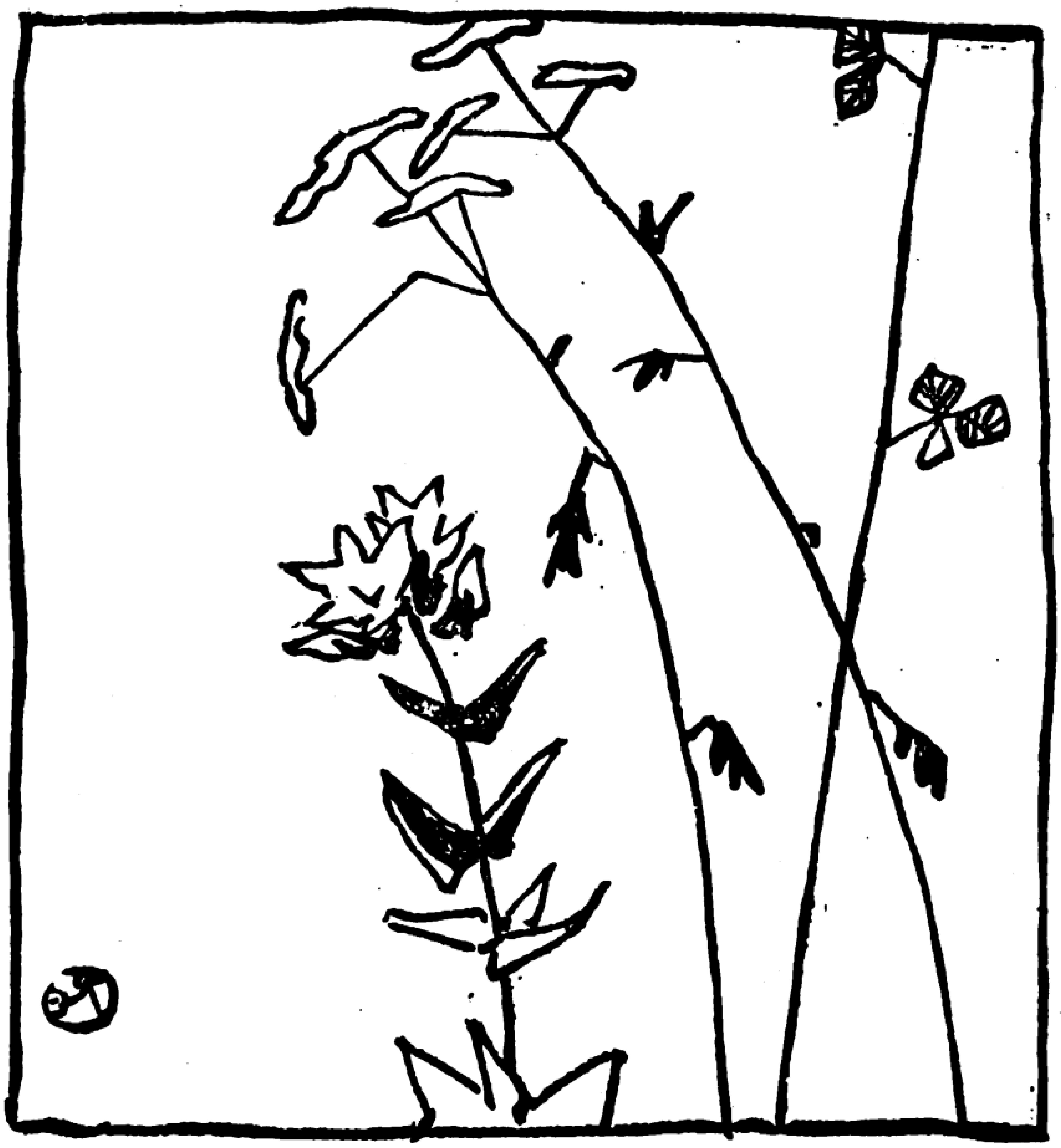
此方こそ好い迷惑、とんだ飛沫――だが、富さんの上を思ひやれば、何やら同じ樣な境遇を經てきた自分の身の上にもつまされて、同情の淚を禁ずる事は出來なかつた。夫れでも富さんは、夕方不二雄が水泳から戾つてくると、旣うキャッキャと騷いでゐた。

行水の時、不二雄の燒けた背中を洗つてやると、つ

るつると黒い皮が剝けてきて、氣味が悪かつた。

八月九日、晴。富さんに、不二雄と一緒に海へ行つて御覽と、再三勸めても可厭だと云ふ。『色が黒く爲るから？』と云ふと、『お父樣が、お前は遊びに行くんぢやないから、淸水でも海水浴なんかして、暢氣な眞似をしちや不可んよつて、云はれてきたから……。』と云つて、別に行きたいやうな態度も見せない。

良人が淸子をあやし乍ら、富さんに、『お母樣が、酷くするでせう？』などゝ訊いてゐる。富さんは笑つて『否え。』と云つてゐた。



今日は非常に蒸熱く、坐つてゐても額から汗が流れて、頭の心がズキ／＼と痛い。這麼事は前には無かつたのだが、猶且お產の爲だと思ふ。

夜も熱くて却々眠られない。子供等は他愛なく、腰の近所まで露して、ごろ／＼と蚊帳の中を轉げまはつてゐる。が猶且寢苦しいと見えて、時々ウン／＼と唸つた。

良人の給料だけでは兩人でいつぱいの處へ喰べ盛りの二人まで押しかけられては、お米代だけでも出處が六ケ敷い。か

と云つて吝な事をすれば、又た義叔母樣に何か云はれるだらうし、靜岡の義兄樣の前へも餘り酷いことは出來ない。無いとは知りつゝも無駄なお錢を費はねばならず、又清子にだつて、世間の手前私の古ばかりでは濟まされまい。私の表に見えない切なさは、良人の切なさよりも、尙ほ一入であらう。あゝ今年も遂々單衣物一枚、私のは出來ずに終るのか……と淺間しい考まで、寢られぬまゝ、後から〳〵と頭へ詰め寄せて來る。十一時を打つたのも知つてる、でも種々の疲で、何時かとろ〳〵としたが、表の戸を叩く音で、又たはツと醒めた。

『遲くなつたがねえ、開けてお呉れ、私だよ……。』

と云ふ聲は、確に濱松のお姑樣！　良人を搖り起しておいてから、開けると果して然う。

『這麼に遲く起して申譯がないねえ。汽車の時間が違つたものだから……。』と重い鞄を下げて、燈火に光る額の汗を拭き〳〵立つてゐらしつた。

挨拶が濟むと、澁い眼をして　良人の顏を御覽なすつて、『お前、本當に宅の敏は酷いぢやないか！　五時發があるといふから、其意で出て來たら夫れは西行さ。九時發まで待つたもんだから、辛と今着たのだが、旣う俥は無し、何とも恁とも云へない酷い目にあはされたよ。手紙でも好いから、然ういつてやつておくれよ。』と萎頓したやうに仰有つた。

私は常々良人から談された、濱松のお家の不和を考へて、お氣の毒に思つた。

八月十五日、曇後雨。朝お薩を賣りに來たので買つた。まだ走りで珍らしいから、お姑樣や富さんを喜ばさうとの意で、殆ど氣の利いた菓子程の値で買つたのだ。處がお姑樣は少しも喜んで下さらなかつた。幾匁です？　とお訊きになるので、八十目とお答へすると『まア！　眼の出るやうね、それにまだ筋ばかりでせう？　私なら御免だねえ。』と仰有る。

別に什麽と云ふ事なしに、仰有つたのだらうけれど私の耳には恐しく響いた。妙に胸がワク〳〵して、我れ知らず呆然とした。が後で考へてみると、可笑いほ

ど自分の心は狹かつた。是迄に姑といふもの〻味を知らなかつた爲もあらうが、それにしても這麽ことでは迚も嫁には行けないと、自分で自分の心を笑つた。

今日から良人は、國語講習會の講師として、午前だけ出ることに爲つた。でお留守。お姑樣は精々と家の周圍の掃除をして居て下すつたが、お午後からは雨が降り出したので、今度は清子の守をして下さる。昔の人は能く彼纘くものだと感心した。

お姑樣にはお孫が十何人あるが、皆男であつた。處が今度は、兄弟五人の一番末の良人に、女が出來たので、お姑樣は既う非常なお悅びの體。眼を醒してる時は、か〻つて守して下さる。襁褓の取り替へから、穢い物の後仕末まで、私にも爲せず爲さつて下さる。私は泌々好いお姑樣だと思つて、是まで經驗したことの無い、一種の嬉さが胸に溢れた。

清子が佳い氣に爲つて、お姑樣の膝で、拇指の端を堪へずチユー〳〵と吸つてるのを、富さんが見て、『何故あんなに、指ばかり舐るんでせう？』と不思議がると、お姑樣が笑つて、『此位の時分には皆然うですよ。指の先からお乳が出るつて云ひますからね。』と仰有ると、富さんは、『まア本當？』と云つたきり、その吃驚した顏付といつたらない。

不二雄は三疊へ這入つて、ポール細工に一生懸命に爲つてゐた。

八月二十六日、晴。中學の水泳部も昨日で終つたので、不二雄は今日歸岡つた。

お姑樣も不二雄と一緒に靜岡へお行でになつた。二三日向方で過してお歸濱になるとの事、實を云ふと、倘少し此處に居らつしやりたいらしかつたのだが、何も斯も能く〳〵御存じなので、一度に斯う大勢居ては……と、お氣を兼ねての事であらう。良人も私もお留め申して見たが、お頭を振つてお歸りに爲つた。

其際、『淸ちやんに何か……。』と仰有つて二圓包んで下すつた。『這麽物お姑樣から頂いては……。』と極力お斷りしたのだけれど、逐々置いてお行でに爲つて終つた。本來なら、お氣兼などお爲せ申さすに、何時迄

もお世話申さなけりやならないのだが、私共の腑甲斐無さ、未だ其處まで行かず、誠に遺憾で堪らなかつた平常は親子三人が饑じい思を爲なければと暢氣に構へてゐるが、這麼時には泌々と、貧の辛さが身に耐へる。

富さんも何と思つたか、急に歸ると云ひ出して、午後三時の汽車で去つて了つた。遽に寂しく爲つて終つて、私は惘として居た。

夜、今月の入費を計算してみると、殆ど例月の二倍も超過してゐた。良人は、

『一年中の貯金を費つて了つた。今年も冬服の新調は六ケ敷い。』と言つて、寂しく笑つた。

恐らく、私の合せた笑も寂しかつたであらう！。





後三年日記

咲子

十月一日、秋日和の麗かさ、玉のやうに透けた青空に、綿雲が一つ二つ浮いて、お隣の柿の實が赤く日光に照り榮えてゐる。

昨夜解いて置いた旦那樣のお袷を、やつと洗つて張つて了つた、仙は今すや〳〵眠つてゐるので、名古屋から新着の校友會雜誌を少し讀む、高等女學校を卒業してから既う三年目、昔を思へばほんとに夢の樣である。會員消息欄が約廿頁、同級の方々の御近狀も夫々面白く記されてある、中上さんの女子大學便り、相變らず清少納言的の警語づくめで、晩翠寮とやらの夕の窓にお得意のお顏が目に見えるやう、松山さんの小學教員の經驗談、羊を牧ふ野の人にも限りなき樂はあるべきものを、まして尊い人の子を御教へなさる日々のお勤め、どんなに御愉快なことだらう、次いではクラス一の滑稽家であつた井上さんが去年お生れの坊ちやんの事をお書きになつて盛に人を笑はせてゐらつしやる、何時も無邪氣らしい小野さんが、御嫁入後の失敗談、人事どころか一句一句に自分の胸を刺される樣、その外何れも飾りツ氣なしの感想やら實歷談、曾ては同じに摘んだ數へ艸の、おのがじゝ花となり實となつて、樣々の階級、樣々の境遇に咲きつ香りつして居る面白さ、それに付けても今の我身を顧れば、何方にも此方にもお耻かしい事ばかり、思はぬ運命の虜となつてから、折角住み馴れた名古屋をも引き拂つてこの地へ來たのは一昨年の暮、今日此頃の佗住居に旦那樣のお痛はしいは固よりの事、三年前に自分の胸に湧き返

つてゐた理想よ空想よ、みんな儚い泡沫夢幻と消えて床しい懐しいと思つお友達の方々が、皆立派なお身の上となつたのを想像しては、濟まない事ながらお羨しいと云ふ境は通り越して妬しいといふ感じも起り、暫くは恍惚してゐたがあゝ自分の心は何時か僻んで來たと見える、境遇をこそ造り出すべき人として、境遇のために弄ばれるやうな弱い心になるものかと、ふいと氣が付いて、森先生の處世論を讀み始めた。

十月二日、旦那樣から御命令の通り、橘橋の袂の時計店へ置時計の修理を頼みにいつた序、魚町へ廻つて晩の物を整へようとした處、今日のお魚の高いこと眼の出る樣である、一山五錢の鰯のハンペンを買つて本町の角まで來ると、脊なの仙が目を覺して切りに泣く困り切つて柿を一つ買つて持たせるとやつと默つた、呉服町の丸宗で今日から冬物の大賣出し、まづは此の市での老舗が店先を眩く装飾して一等景品が百圓の勸業債券など〻記し立て〻、頻りに客を呼んで居る、今日の自分には何の用もない處ながら、つひ暫くは立ち止つて硝子越に中の陳列品を觀てゐると、此は又夢の樣な事のあつたもの。

三年前お別れしたきりの野瀬常子さんが、丁度お買物の包を抱へながら出てゐらしつて、思はず見合す顔と顔、逃げ込む穴はあるまいか、この見すぼらしい姿を何としてお目に掛けられよう、顔はほてる、手足はすくむ樣、たゞとち〳〵としてゐると『マアあなた、矢張り此市にゐらしつてね、私嬉しいわ』と仰りながら側へよつてゐらつしやる『オヤ男のお子さんね、可愛い事よ、旦那樣も御丈夫ですか、さうマア結構ね』一寸包をお持ち替へなさる時、右の中指のリングがきらりと光る。

もう逃げようとて逃げられようか、思へば同じ學びの友、クラスの中でも毎時々々お優しかつた方だものと、急に氣が付いた樣に御挨拶も申して、さて其後の御樣子を伺ふと、是迄名古屋の師團にお勤めの旦那樣が、こちらの聯隊へ御轉勤遊ばしたので先月の半から常子さんもおいでになつたとの事、噓か誠かその當時

は私の住所をお探しになつたけれど、つひお分りにならなかつたので、力を落してゐらつしやつたのに『マア今日は神様のお引き合せよ』などゝさも嬉しさうに仰つてそして頻りに住居の位置をお尋ねなさる濟まないことながら是ばかりはと申上げずに居ると、『私度度伺いたいのよ、私共はね聯隊の門前で大きな榎の木が立つてゐますから直ぐお解りになるでせう、あなた聞かせて下すつたつていゝぢやありませんか、あんまり水ッ臭いわ』とまた仰るので、つひこま〲と申上げて『汚いのにお驚きのないやうに』と付け加へ、西と東へお別れを告げた。



常子さんは學校時代よりも一層御綺麗に一層人懐こしい方におなりの樣である矢張り順境にお立ちの方は誰でもあゝしたものかしら。

十月三日、何時も早くお起きになる旦那樣が今朝に限つて大層寛りとしてゐらつしやる、それもお頭の上から夜着を被つて圓まつてゐらつしやるが、どうやらお目は醒めてるらしい、『どこかお病いのですか』と伺ふと、『馬鹿をいへ』とおつしやつ

たきりである、御病氣でないとすると何か不愉快な事でもあつてそれを考へてゐらつしやるのではあるまいか、何樣昨夕お歸宅の時に少し御顏色が惡かつた樣に思はれる、不斷から俗人の集りで仕方がないとばかり仰るあのお勤め向きもしや御同僚とのお間にお爭ひでもあつたのではあるまいかと心配しながら、御飯の仕度をして了ふと、急に起きていらつしやつて直ぐ召しあがり、平日の通り仕度して御出勤なさつた。

どうも何となく氣になつてならない、人樣から溫厚家溫厚家と云はれて居らつしやる旦那樣の事なれば別に何事もあるまいがと思つたり、多分お風邪でも召して御頭痛か何かなさつたのだらう、いつも御病氣をお隱しなさる方だからと思つたりして、お袷を縫ひながら、あれこれと氣を揉んだが、午後の四時には例の通りいゝ元氣でお歸りになつて、仙には今川燒のお土產さへあつた、全く今朝は寒氣がしてならなかつたとのお話、晩のおかずは玉子のふわと金山寺、お隣の時計が七時を打つとすぐお寢みになつた。

十月四日、朝の內お隣りの櫻の木に、百舌鳥が來て鳴いてゐた。

旦那樣はよい鹽梅に御丈夫で御出勤なすつた。

お正午少し前、仙を抱いて戶外に立つてゐると、いつもの花屋さんが來た、丁度よい處であつた、紫蘭と百日草と吾亦紅とが一束になつてゐて一錢五厘といふ、取り敢えず買つて佛壇に供へた。

今思ひ出しても耻かしい、私が此家へ來たばかりには、碌に出來もしない千家古流を振り廻して、この節ならば山茶花や菊の早咲をば、お錢の事は苦にせずに取り寄せてお床の間を飾ることに夢中になつてゐたがその都度あのお優しいお姑樣がよう出來た〳〵とお賞めなすつて、さて御自分はいつも佛壇のお花を新しくなさる事を御樂みになすつてゐらしつた、學校に居る時分、家事の先生から、筍や松茸の御飯の炊き方は知つてゐても御病人のお粥の加減はとれず、生花丈けは十人並に出來ても佛の花の萎れたのには氣が付かない樣な事では一家の主婦として何等の價値もない人と云は

ねばなりませんと繰り返し〳〵お諭しがあつたが、ほんとに私もその價値のない一人であつた。

それが今ではお床の間もないこの侘住居、山茶花や菊は枝の持ち方さへ忘れた替り、お舅樣お姑樣へは忘れずに供へる一錢五厘のこの花束、『咲も大分世帶じみて來た』とお笑ひなすつてゐらつしやるだらうか。

こんな事を考へながら、どうした事やら、ほろりと涙が一雫落ちた。



十月五日、トウチャンお起きい〳〵と仙が頻りにせがむので、旦那樣は折角の日曜日を寛りとお寢みになることも出來ず、六時少し過ぎにはお起きになつて、御飯の仕度が出來るまでと仙を抱いて散歩にお出になつた。

御飯が濟んでからも矢張り仙を相手に頻りに巫山戯てゐらつしやるので、私はその間に名古屋の母への手紙を書き了つた。

お正午過からは秋雨がしと〳〵降り出したのに戸田樣の御隱居所からお使があつて、旦那樣は碁のお相手にお出掛になつた。

變れば變る人の心や、『年寄程我儘で陰氣で強情なも

のはない、年寄を相手に話すよりは裏の溝で蛙を釣つて遊んだ方が氣が利いてると」口癖の樣に仰つた旦那樣が、今ではあの御隱居のお氣に逆ふまい〳〵を第一となされて、お使でもあれば直ぐあの通り、それもその筈、この市へ御出勤になつたのも、元はあの御隱居樣の御骨折で出來たこと、その外私にはお話のない事でお世話におなりの事も數多いやうに察しられる。

よい鹽梅に仙が眠つたので、山田樣の孃さんの帶を縫ひ始めた、「漆髮不梳經幾日、爲人却作嫁時衣」といふのは誰の句であつたか、此頃の私は大分詩中の人になりかけて來たらしい、併し賃仕事も積つて見れば大きいもの、無論一日に二時間か三時間しか出來ないけれど、それでもお湯錢や仙のお菓子のたしまへ位にはなるものを。

十月六日、旦那樣は昨夜遲くお歸りになつた、今朝になつて「如何でございました」と伺ふと、「碁にはすつかり負けた、けれども金儲の法を敎はつて來たから埋め合せは付いてる」とて笑つてゐらつしやつた。

午後になると常子さんが尋ねてゐらしつた、先日あアは仰つたものゝ、まさか今の私を訪問して下さるやうな事はあるまいと思つてゐたのに、まア何といふお優しいお心根だらう、ほんとに是が掃溜に鶴、狹ッ苦しいやら汚いやらを耻しく思ふよりは、たゞこの友をいよ〳〵有り難く懷かしく思ふ心が先に立つて暫くは名古屋の樣子を伺ふやら此方の事をお話したりしてゐたが、お話はだん〳〵三年前の夢に返つて、笑つた事怒つた事、思ひ出多き無邪氣なお話に思はぬ花を咲かせて了つた、常子さんは「ほんとに肩揚時代に限るわね」と仰つて猶いろ〳〵のお話をお續けなすつて、澁茶一より外何の御愛想もない處を、さも愉快さうにお遊びなされ、四時少し過ぎてからお歸りなすつた。

思へば誰の身も、せち辛い世の荒波に漂ふ根なし草沈むも浮むも何を標準に幸といひ不幸といはう、常子さんのお話を伺つても、外目からはお羨しい〳〵と思はれる方々のお身の上にもそれ相應の御苦勞はあるもの、人には知れぬ沖の石の乾かぬ淚を深窓の中に隱さ

うより、樂しいやうな此佗住居に、旦那様も私も共々健康の賜を受けて、仙は日に増し可愛くなるばかり、暖かい春の光はいつも部屋にみち〳〵て居るのに、何として自ら蔑むやうな事があつてよからうと、今日は妙に力を得たやうな心持になつた、是もみんな優しいお友達の賜だらうか。

　常子さんの御土産は栗羊羹とみづ〳〵しい林檎、旦那様がお歸りになつたら、どんなに喜んでめしあがるだらう。



事物に對して感謝心のあふるゝは女の大なる美德なり純粹の日本婦人の德はこゝにあり、この日記は即ちこの德を以て人を化す、聖人の心を體するものといふべし、其他文章に就ては評者一字を賛する能はず、眞に大人の文なり、長者の文なり、そゞろに其人の慕はしき心地す。

（圏點は編者の加へたるものなり）

初產日記

さつき女

第一日

兩三日前より、夜分には何となく苦しくて、能く寝む事も出來ず、どうした事ならん、近い内には產婆も來るべし、訊いて見んなど、今朝も苦しいながら、先づ御飯もすまし、主人の出勤を見送るに、いつになく內に居つて欲しき心せしも、勤め大切と思へば言葉にも出さず後にて今日は、何をせんかと思ひ居たりし時、永田夫人見舞はれ、種々咄の折柄、親戚の山下夫人も來られ、咄は例の如くお產の事ばかり、自分は何分經驗の無き事、案じるより生むが易いとは聞けど、實に心細くてならず語りつ、慰められつする內、突然洋水下る、兩夫人大に驚かれ、直に人を產婆に走らせ下さる、豫て心安き兩夫人、ましてお產の事は幾度の經驗を重ね給ひし事とて何くれと世話し下さる。

自分は山下夫人にたすけられて床につき、さていかなる產をする事か、結婚以來一度もそのけはひなかりしものが、六七年を過せし今年今日、珍らしくも初のお產をする事なれば、生兒の男女は兎も角も、人並のものゝ生るべきやなど不安の念のみ。

兎角する內豫て雇ひ置きたる老婢も來り、午後一時には產婆さんも來る。

診察の後「愈々お出來になるのであります」と云はれたる時は、又今更の如く鼓動を高め、恥かしいやら恐ろしいやらにて胸ふさがる。

主人も報知を受けたるものと覺え、歸り來られ、いよいよ出來るのかと打笑まる。

さて產婆氏は「まだ陣痛もなし今の内に二三軒兒供の湯つかはせに參らん、往く先はしか〲と云ひて、兩夫人に托して出て行かる…、三時頃となり少々腰の痛みを感ず、五時頃產婆は歸り來り、食事をすゝめられ、御飯刺身、鷄卵など戴く。

腹部を温むるがよからんとの事にて、俄に風呂をわかす、十分汗の出る迄入り居れとすゝめらるゝも、常々の早風呂の事とて、なか〱長くはこらへきれず、めまひを催しさうになりたれば、上りて床に入る。

追々陣痛來るも、微弱にてまだ生れさうになし、急に人の出入多くなりしより、近所の人も知りたるものと見え、かはる〲見舞はる、豫て懇なる田村醫師夫人もお尋下さる、同夫人御歸りの時、產婆は、「今夜十二時

頃には出來申すべく、其時刻には先生に御出を願ふ旨、御傳へ下されたし」といへり。

今日は夕方より雨小止みなく降り、風も强く、寒さも常の日の如くならざるに、打見れば伽し下さる方も、三四人あり、人は情け、旅の空もなど心細き事のみかは。

十一時頃田村醫師雨を冒してお出下され、診察の後座敷にて主人と談され、さてまだ容易の事にはあらず、暫く休ませ貰はんとて寢らる、追々皆樣も休まれしと見え夜の更ると共に靜になり行き、雨の戸たゝく音のみす。産婆氏は傍にて始終さすり下さる、終宵少々の陣痛のみ。

第二日

朝は牛乳、粥、卵にてすます、八時主人の出勤、田村醫師も一應歸宅せらる、正午近くなるもまだ强き陣痛なし、今の內に晝の仕度すまさんと皆樣御飯をめさる正午主人も歸らる。

やがて自分にも晝飯をすゝめられ「澤山たべ留かれば力出です」など云はるれど、床に動かぬと、樣々の心わずらひとにて、喉を通らず、無理に二椀いたゞく。

陣痛も追々はげしくなる、塵まるゝも間のなきことならん、一と月ばかり前、近き山に散歩どもして歸りの坂道にてすべりたるを、産婆は位置くるひたり、されど臨月も近き事とて、操なほしも出來ず、母體には障る事なきも、お子方の命は萬一の事あるや計り難しなど、心配せられたるが、可成は親子共に無事なれかし、など思ひは陣痛のすゝむと共にいやます、まもなく田村醫師も來られ、出産の期は瞬一瞬に近づくものゝ如し。

午後五時頃陣痛の一しきりすると共に、胎兒は出かけたるものゝ如し。今一と息、今一と息と、幾度か催さるゝも、その聲によびさまされて、りきみて見、りきみては眠氣さすと云ふ樣にて、五時半頃分娩を了る。

されど陣痛の弱かりし爲め、産道に暇をつひやしたると、胎兒の逆産なりしとは、終に窒息の期長く、醫師も産婆もあらゆる手數を盡したるものゝ如きも、終に甦らざりしぞあはれなり。

自分は此の時憂きも悲しきもなかりき、たゞ重荷おろしたるやうの感じのみしつ、さて後は、心何となくすみ渡りたるやうにて、氣もたかぶり、談笑平日に異ならず、皆樣却て心配せられたるやうなり。

見舞の婦人客數多來らる。

後醫師が主人に話すを聽けば、胎兒の發育十分に過ぎしかも、母體の小なりしと、陣痛の微弱なりし爲に、逆

産なりしは此の不幸の原因なりしと。

後産も無事に濟み、先づ是にて自分の命のみはたすかりたる心地す、それと共に死したる女兒の惜しさ、刻々とまし來り。「彼の時すべらざりしならば」などかへらぬことのみ思ひわづらふ。皆様は何も約束事なれば、思ふても歸らず、いそぎ元氣つけて平常の體にかへれと慰めらる。

今夜は皆様つかれ給へるならん、まどろみ給へと永田夫人等御二人伽し下さる、自分は朝まで何事もわすれて打眠る。

第三日

前日の事を思へば、眞に夢の樣にて、主人の枕元に來給ひて、「嘸ひどかつたらう」と云はれたる時は、何ともいひ難き淚わき出でぬ、九仭の功を一簣にかくとは是なめれ、何れの命が惜しきか、天命とはいへ諦めがたし。

田村醫師夫婦、山下主人等早朝より見舞はれ、死兒埋葬の事共種々周旋し下さる。

第四日

午後主人の友達三四人見舞に來らる。

追々つかれもうすらぎ來る。

主人盆栽二三を枕頭に列べ下さる、無聊を慰めんとし給ふ御心中うれし。

今日迄熱も出ず産婆は此のまゝならば氣遣ふべき事なしといふ。





巡査の妻の日記

谷口まさ子

十二月二十五日

朝起きると、お手水鉢には二寸計りの氷がはつて、裏手の村社八幡宮の屋根や四邊の畑は一面に白う霜が置かれてある。

今年も僅か四五日を餘すばかり。市中ではヤレ煤掃だの、餅搗だのと、途行く人の足並も何となう忙はしく覺ゆるを、今も尚ほ舊暦を守る、この田舍は平日と別段に變りもなく、氣樂と云へば云へ何となく物足らぬ心地せらる。

夕飯のお菜の添へにと、裏の畑（僅かの空地、私はこれを畑と呼ぶ）の手作のお葱を穫る、もう少しと思つたが何となく物惜しき心地したれば、ソコ〳〵にて止む。夫が午後の巡回より歸らる。

夕飯を濟して夫と火鉢を擁して、今日の寒さの事等話して居ると、何日も使に來る本署の小使が『旦那、非常召集で御座います』と封書を持つて來た、『お寒いのに御苦勞、熱いお湯でも……』と言ふて居る中に『急ぎますから』と出て仕舞ふ。何事で御座いますと、夫に訊くと『殺人犯の奴がアノ枳殻山に逃げ込んだから逮捕の應援だ、八時の集合だから直ぐ出掛けよう』と起つて素早く官服と着替らるゝ間に私は脚袢、草鞋、提灯などを取揃へる『都合によると明日でなければ歸られない』と言ひつゝ出て行かれる、門口まで送つて出ると、外は眞暗で、吹き荒む風は身を切る樣に。佩劍の音鏘々として、寒天に響き、闇を照す提灯は次第次第に遠ざかる。

昨日洗濯した、シャツ、ヅボン下などの綻びを縫かけた。お宮の松や杉の樹が風に騷いで居る。割合に眞

いこの駐在所にわれ只だ一人、淋しいより寧ろ恐ろしい心地して、雨戸の風に音するにも一々心が置かれる隙洩る冷たい氷の樣な風は、一入身に泌むを覺ゆ。アア家に居てさへ此樣に冷るのに、外は隨分嚴しい事だらう、夫は今如何して居られよう。人を殺す樣な惡人が、アノ嶮阻な山に逃げ込んだ以上は、おめ〳〵と、捕はれまい、ヨシ見付られたとて、おとなしく逮捕されまい、必然兇器で手向ふだらう、若し其時夫が先頭に立つて居られたら、怪我はなさるまいか、などゝ取越苦勞が頻りに胸に浮ぶ。

　何時夫が歸らるゝやも知れんので、火鉢の火にはコンモリと灰を被せて床に入る。炬燵が暖かなのに就けてまた夫の身が思はれる、職務とは云ひながらつらい事だらうなどゝ考へると、コウして暖かに寢て居る私は何だか罪でも犯して居る樣な氣持がする。夜は更けるが眼が冴えて寢られぬ。嗚呼下級官吏の妻、わけて巡査の妻、世の中にこれ程つらい心配な者はなからう、月々頂く俸給は誠に僅かで、此の物の廉い、暮し宜い田舍に居てさへ、夫婦差向で漸つとのこと、市中などで勤務の時の生計の困難と言つたら、他人樣にお話しも出來ない位、まして夫の職掌が職掌だから、隨分危險な場合も多く、其心配は迚も他の奥樣方と同日の論ではない。何故私は巡査の妻になつたのだらうと、つまらぬ事が考へらるゝ。併し立派なお家でも家庭に風波が絶へず、不快の裡に暮さるゝのも、數ある例なるに、つれ添てから四年足らぬ勝ちの私に未だ一度のわるい顏も見せ給はで、常にやさしくして下さることを思へば、これに優る幸福はあらじと、また思ひ返しても見る。

　風は一入吹き荒び霰にやあらん、雨戸を打つ音して物凄きと言はん方なし。偏に夫の身に恙なからん事を祈るのみ。

三月六日

　緩う吹く風に連て何處よりともなく、梅の香を送り來る。今日は少し暖かければ朝より汚れ物などを洗濯す、春とは云へど衣濯ぐ手には未だ殘んの寒さを覺ゆ。

郷里の母上より手紙來る、いつもながら溢るゝばかりの情をこめたる言の葉の數々、老が丹精に仕上たる手織もの二反、小包便にて送りたれば千筋の分は夫に、赤縞の方は私にと、委しく記しあり、終りに、從妹の貞子、都合により兩三日前、杉本方より離婚の上實家に歸り來れりと簡短に書いてある。何故貞さんは歸つたのであらう、貞さんは女學校も卒業した人、その旦那は文學士とかで、相當の財産もある人だと聞いて居たのに、貞さんも嫁つた當時は『理想の夫を得た妾は模範的の家庭を作る』などゝ言つてたが僅か一年も經ぬ中に破鏡の嘆を見るとは、何んな理由があつてだらう



此間應久寺の老僧が『今の學校出の女は育兒法はドゥだの料理法はコウだのと賢しこさうな理屈は言ふが、女大學や今川など讀んでた、昔の女の方が人の妻として實際に價値があつた、今の女は一生苦樂を倶にする夫を二段にして、肩書やら財産に嫁入するから少し姑が八釜しく言ふとか、又は財産が左前になると辛抱が仕切れない

で逃げ出す、宛然で嫁に行くのを奉公人が目見得に行つた位しか心得て居らぬ。此れは世の風教が廢れて人間が輕薄になつて、人格が落たからだ』と嘆かれた事が思ひ出される。

夫が巡回から歸られて『此の間一寸話して置いた、臺灣行の事は愈〻許可なつたから、五六日の内に赴任するから……』と無造作に話される。豫ねてその事は聞いて居るものゝ、餘りに急なのと、サテ愈〻行くと決つて見ると、何んだか行くのが恐しく厭な氣持がする船に醉はしないだらうか、冬でも綿入は要らぬさうだが、夏はドンナに暑いだらう、マラリヤが流行さうだが、二人ともそんな病にでも罹つたら誰れが介抱して呉れるだらう、殊に蕃界勤務だから、何日何時生蕃に襲撃されるやも計られぬ。何日ぞやの新聞にも蕃界勤務の巡査夫婦が生蕃に慘殺された事が書いてあつたかと思ふと身の毛も悚立つ樣な心地がする。今更ら私が止めたとて思ひ止まる樣な夫ではない、電報で母上でも呼んで母上から見合す樣に言ふて貰はうか知らと、あれを思ひ此を思ひて、わが小さき胸は亂れて糸のやうに。嗚呼、私は何故巡査の妻になつたのだらうと、思はず例の愚痴が繰返される。

六月二十七日

夜は未明けやらず、殘んの月は芭蕉樹を照らし、微かに呻くが如き水牛の啼聲を聞くのみ。人家を離れしこの蕃界巡査駐在所は寂として一入物凄く、わけて夫は數日前より生蕃討伐隊の一員として蕃地深く進まれし事とて、留主守るわれの淋しさ、恐しさ何に譬へんやうもなく、早く夜の明よかしと私かに祈りつゝある時、この寂寥を破りて、スタ〱と次第に近づく草鞋の音さては夫の歸られしにやと、寢所を出でんとする刹那「電報」の一聲に先づ胸跳り足戰き、サテは夫の身に變事ありしならんと、取るより早く披き見しわれは其儘そこに泣き伏しぬ。

武治(夫の名)重傷、危篤臺中〇〇病院に收容す。

臺中迄は四里、山道なればとて、何かあらんと、支度もそこ〱、自分と夫の着替へ二三枚と、內地を出

る時、此れは暑さ中りの妙薬、これ創の妙薬と母上が心盡して贈られし、創藥などを風呂敷に脊負ひつゝ人目も恥もあらばこそ。

病院に到りて、受附に旨を通ずれば『暫く待たれよ』と言はるゝにぞ傍の床几に腰を下せば俄かに頭重く、胸苦しき心地ぞする、不圖わが姿に眼を付けば、草履は破れて砂埃の白う脛にかゝれる、何處にて怪我したりけん、足の爪先より血の滲み出でたるが砂に塗みれて赤黒くなれる、髪のほつれを梳かんとせば途中にて落したるにや櫛も見當らず、流るゝ汗は脊負ひし風呂敷包にまで徹りて、汗の香鼻を撲つ。噫見苦しく取亂したる吾が姿、見し人は如何に笑ひつらん、如何に可笑かりしならんと、われながら身恥かしき心地す。

其病室に案内せられし時、負傷は胸部貫通銃創と聞きし時、蒼白き顔を見し時、グル〳〵と幾重ともなく卷かれたる白き繃帶より微かに薄赤き血の滲み出たるを見し時、明日までは迚ても六ケ敷からんと醫員より聞きし時の事などは、われの拙き筆もて、何で寫さるべき、また寫し置くの要もあらじ。嗚呼六月二十七日此日、この光景、この悲しみ、われの終生忘れんとして忘る能はざる日なるぞ。

たゞ、我夫が終焉前三十分、皮下注射によりて、微かに眼を開かれつ『オヽ、靜枝か、己れはモウ絶命だお前にも永年苦勞ばかりさせた、お前は薄倖な者だ、今改めてお前に禮を言ふておく』と言はれた。私はもう胸一ぱいになつて言はうとして云へず、シカと兩手を握りつ、『お禮なんて、私は、妾は、あなたの妻ではありませんか』と云つたら、蒼白い顔に淋しい笑を含まれたまゝ、われの細き腕に抱かれつ。午後十一時二十何分と云ふに、三十一歳を一期として……。

文辭洗煉、簡潔、一句の冗語なし、而かも情景並び臻たつて、感興溢るゝが如し、これを讀んで涙を流さゞるものやある、抑も臺灣の蕃界に勤務する巡査は上代の防人の如きものなり、即ち邊境に往きて獰猛なる蕃族の襲撃に備へたる事は彼の萬葉の悲壯なる調べによりて知らる。「大君のみことかしこみ、つまわかれ、かなしくはあれど、ますら夫のこゝろふりおこし、よそほひてかどです」云々の歌思ひ起されて一掬同情の念を禁じ得ず。



恐ろしい災難の日記

飯田しづ子

一 強雨

昨日から降り出した雨、時候柄にもない梅雨の様だと云て居たのに、二時頃からは一しきりづゝザーザーッと降り出して、夕御飯のすんだ時分からは小止なく降り續く。早や水がつくだらうと噂とり〴〵。近所ではもうそろ〳〵手廻りを片付け始じめる様子。氣の早い人や老人などは早や逃げ出す人もあるとの事。わたしは水所とて有名な此の土地に生れながら、幼い時から都へ出て居たので、まだ一度もこの經驗がない。是れ位の雨でまさかと安心はして居るものゝ、人々の騒ぎがひどいので、又さうかとも思ふ。何時かしらと時計を見ると七時が打つ。雨はます〳〵降りまさる。今日はいよ〳〵本當だらう、早く大切の物丈けでもまとめて置かう、然し私の物は手を付ける程でもない。良人は今の内休んで置くとて寢に行かれる。父母はと見ると、流石年寄りの、蠟燭はあるか、米を二階へ運べ、兎も角も飯を炊けとのお聲聞ゆ。早速臺所へ出て母様の助手となり食物の用意にかゝる。水つきの時は腐敗の豫防として飯の中へ酢を入れる事は此時覺えた。鍋釜の始末をするにも、からにしては流れてしまふ、水を一ぱい入れて沈む様にして置けよと母様のたまふ。もう凡てが斯ういふ風なので、私もいくらか其の様な心持になつて來た。だがまださうあはてないでも共思ふて居た。

二 出水

八時過ぎ近村の出入りの者が二人見舞に來た。早速

それを酒屋へ走らして序に水を見せにやつた。其の間に庭廻りを片付て居ると、やがて二人は歸て來て、水は一丈八尺だとのこと。そんなら未だ一丈から餘裕があると父様は仰しやる。町の樣子はと訊くと、もう片付けかけて居るといふ。まだといひ、もうつくといひ、何うすればよいのか私には勝手が分らぬ。只父母の命の儘に、見舞に來た二人を力にそれこれ運んで居るとやがて良人が起きて來られ、も一度水を見て來ると仰しやる。序に蠟燭とマッチとを取て來て頂くように願つた。暫くすると門口に、あゝもう門迄水が來て居るぞ、とのお聲と共に良人が歸られた。皆は夢中で働いて居たので、そんなに水がふえたのを知らなんだのだ。



三　混雑

そんならいよ〳〵か。もう床の上迄あがるかも知れない。疊建具を上ねばならぬ。裏には鷄が百ほども居る。先づそれからと云ふので、良人は其の方へと行て仕舞れた。刻一刻雨がひどくなる

と共に、世間は益々騒がしくなつて來て、外を見と提灯が右往左往にかけちがふ樣が實に忙しさう。近村からは見舞の人が頻りに來る。あまり多いのもと手傳てもらふのを謝絶する。水嵩の報が來る每に不安の念は益益高まつて來る。其中に水は早や庭迄はいつて來た。床板が浮と危いからと云ので皆は二階へ上つた。良人は二人を相手にまだ下で働いて居られる。わたしらは又二階へ上げた物を片付けて居た。其時ふつと思ひ出したのは、良い方の時計と、つひ此間拵らへた計りの絹齋先生の額とを忘れて居つた事であつた。下の男に其れを取て呉れる樣に命じると、なあにそんな所迄つきますものか大丈夫ですと云ふ。けれども、まあ取つてお呉れと云て、漸く時計を受取たかと思ふと、あ床板が浮き出した。危い〳〵、早く上れ〳〵、と云ながら、三人は上へあがつてほつと呼吸をした。時計を見ると九時を十分計り過ぎて居つた。

四　不安

道を一つ距た學校には避難者が集るのであらう。追追燈火の數が增して人聲も聞える。其れに引替へ、近所の家は二階がないので、皆逃げたのであらう、ひつそりとして音もしない。內では、皆が二階に集つて樣子を考へながら、早く水足がすわればよい、とそれ計り待つて居たが、水はだん〳〵增すばかりで、十時にはもう二階との間が八九寸程になつた。これでは迚も二階も助るまい、早く荷物を三階へ運べと云ふので、又もや皆は總立ちとなつた。折角いくらか注意をして整頓して置いた簞笥や道具もかうなつては、もう善も惡いも云ふて居られぬ。全く人任せ力の續く限りといふので、手當り次第進二無二三階へ積み上げた。積み上げると云ふよりも、寧ろ投げ込んだので、簞笥なども引出しを拔いては上げ〳〵したので、何が何處にあるのか分らなくなつて仕舞つた。鷄も犬も上げて仕舞つたから、三階はまるで物置同樣、身動きさへ出來なくなつた。皆は寄り合て、色々噂ばかりして居るが、誰も彼も、もう水は引くだらう、去る廿九年の時もこ

れ位であつた、もう引くに違ひないと云ふ人計りなので、私は、もう斯うなれば五十歩百歩、三階さへ助かれば大した事はないと諦らめたので、餘り心配もせず、彼方此方と窓の外をのぞいては淋しい中に騒がしい夜の様を見て居つた。

五　覺悟

丁度其時であつた。ゴーッドーッと云ふ音がしたと思ふと、學校が俄かに騒がしく、叫ぶ聲、走る音が聞えて、今迄二階に見えて居た燈火がだん／＼下へおりる。そして少くなる。何事が起たのであらうと訝し合て居ると、今迄二階の下にあつた水が突然嵩を増して上へ上つて來た。其水勢がこれ迄のやうでないので、皆は驚いて思はず立ち上つた。「あッ堤が切れたのだ」と云つたのは例の見舞の男であつた。「どなたもお覺悟なさいませ、此んな所迄水が來る様では未だ／＼どんなになるか分りません、さあ今の中に御飯を召上つて御用意遊ばせ、おい竹さんわし等はお酒を頂いて元氣をつけもう一働きせにやならん」と、も一人の男に言たが、一人の方はあまり元氣でない方なのに、此慘しい有様に氣を呑れてか、お酒どころか御飯もほしくないと云ふ。一人の方はいゝ氣になつて、グビリ／＼呑みはじめ、一働きするといつた口の下から腰を下ろして動きさうにしないのみか、「もうかうなつたら何もかもお諦らめ遊ばせ、いくらお家が流れましてもお命丈けは屹度私がお助け申ます」などゝ、此方にとつては心細い管を巻きはじめる。水はと見るとだん／＼と増すばかりで、早や二階の窓はかくれて仕舞つた。柱にかけて置いた時計も、水に浸つて動かない。ランプは危いとて提灯に替へた。何を思ふ間もなかつたが、併し此時程いやな心地のした事はない。父様はまさか是れ程にはと思つて居られたのに案外の事とて御心痛の様があり／＼見える。私は只はあ／＼思ふばかりでどうする事も出來ぬ。すると又一しきりゴーッの音と共に水は又々嵩を増して三階の床すり／＼迄になつた。早や是迄と覺悟した皆は、袷といはず、綿入と云はず、

手當り次第に引出して重着とし、貴重品を腰につけ、女も男も帽子を被り、いざと云はゞ屋根の上に逃れ出る用意をした。酒呑みの男は漸う腰を上げ、家の破風から屋上へ繩を結ひつけ、是れを傳ふて出られる樣にして呉れた。此の時には成程馴れたものだと感心して少し心丈夫にもなつた。

六　悲　鳴

一時頃でもあらうかと思ふ頃、所々に悲鳴が起た。『助けて呉れー、やあ〱、もう首がつかるはやいー、助けて呉れー、やーい』と血聲をあげて助けを呼ぶあはれさ。あゝあれは土方の鶴の聲だ。水のつく前見舞に來て呉れたのに逃げ後れたものと見える。可憐さうにと云つて居ると、聲がせぬ樣になつて、ザンブと飛び込んだ音がして、バシヤン〱と泳ぎの音が二三度聞えた儘、もとの靜さに返つた。あゝ鶴はとう〱死だらしい、可憐さうに……、おかみさんや婆さんは逃げただらうか、あゝ早く夜が明けるとよいにと、時計がないので餘計に時が待たれる。暫くすると、今度は裏の方で『私はかまひませんが二人の子供を乘せて下さい』と云ふ聲がする。あゝ裏には舟が來たらしい。竹内のお婆さんが行れるのであらうと窓から見たが、木立にかくれて燈火さへ見えぬ。すると表の方で『助けて呉れー〱』と連呼する者がある。舟が來たのを知つて是れを呼ぶのであらうが、舟は少しの注意をも拂はずに行て仕舞つたらしい。此の悲鳴の主は、數日前我が町へ轉居して來た勞働者で、おかみさんは足腰立たぬ大病人で子供が三人もあると聞いて居たそれらしい。助けて呉れーの叫びは斷續して聞えて居たが、終には聲も枯れ〱にお題目を交じへる樣になつた。『子供丈けを助けて呉れーやー〱』と哀れに訴ふる其悲鳴、今に我身もあの樣になるのかと思ふと、實に身も消え心も消ゆる思ひで、皆が顏見合せて居る計り、一言を發する者もない。

七　生　地　獄

夜が白々と明け離れて、其處此處見える樣になつたので、こわ〳〵外を見ると、家といふ家の屋根には皆人が出て居る。勿論雨がまだ止まないのでびしよぬれで中には赤裸の人も見える。例の悲鳴の主はと見ると、案の定其の人で、病人を屋根の上にねさせて、子供と共に看りする樣のあはれさ。『屋根にさへ居れば大丈夫しつかりせよ』と聲援はするものゝ、屋根の央は水に浸されてあるのである。うちでは皆なが繩につかまつて屋根の上に出たが、風が強いので吹き飛ばされさう、良人は紐でもつて皆の體をつないで下さつた。そして良人は萬一の備にと皆が止めるのもきかず濁流に飛び込んで筏を造られたのには、見る人皆舌を巻いた。



皆が上つてまあ安心と一呼吸する間もなく、又もやゴーッの音がしたかと思ふと、見る〳〵大きな家が動きだした。屋根には人を乘せた儘である。『キャーッ助けてー』と叫ぶ聲、屋根から屋根へ飛びうつる人影、なだれの樣に落ちるのも見える。助け舟が幾艘となく其間を縫ふて行くのも見える。どれも〳〵人を山と積んで行く。大きな家が横さまになつたかと思ふと、前のに當て共に倒れて流れる、くづれる、重り〳〵するすさまじさ。流は急に我が家の方へ流れて來る。あゝあの大きな家が此方へ來たら、今度はうちが助からぬ。どうぞ家を助けたい。廿九年の水には伯母樣の家が流れたがと思ひ〳〵そちらを見ると、はや其影も形もない。

はつと思つて見廻はすと、既に二三町も流されて、郊外さして出て行くのがそれらしい。あゝ又伯母さんの家は流れた。人が見えぬのは逃げられたのであらうか。お怪我はなかつたか、伯母様は何といふ不幸な方だらう。屋根に居るので種々の事が見える。まことに悲絶悽絶である。

八　助け船

母様は堪へかねて頻りに舟を呼べと仰る。然しいくら叫んでも屆く所へは來ぬのである。來ぬのも道理、只二軒丈け取り殘されて居るからで、かうなると種々の事が考へられる。いよ／＼今日が我が身の果か。嗚呼我が一生は不甲斐ないものであつた。女子相當の教育もして頂いたのに、今日になる迄一つとして成効した事もなく、お齢とられた父様母様に御安心をおさせ申す事も出來なかつた。然しわたしは自分の出來得る限りは盡した積り、父様母様は決して不足には思召すまい。唯これからこそお側に居つてしみ／＼御恩返しをしようと思つて歸たのにと、そればかりが心殘りである。京地の住居は何うであつたか、取り亂してはなかつたか、洗濯物なども殘りなく歸省の前に整理して置いたが、是れが蟲が知らすとでも云ふのであらうか、會のお金も田中さんに預けて置いてよかつたと、其れから其れと思ひ移り行くうちに、向ふから士官の指揮する一艘の舟が見えた。やれ嬉しやと思ふ間に、どうやら行つてしまひさうなので、堪らなくなつた。私は始めて聲を上げて老人丈をと頼んだが、士官は「まだまだあなた方より急を要する所があるから此の次に來る迄待つて居れ」と云つて行き過ぎた。一度助からうと思ては今迄の覺悟もどこへやらで、もう矢も楯も堪らなくなつた。

九　生　別

ぢれて／＼待つて居ると、小さい舟が此方を向いて來る。近よるのを見ると、それは一個人の舟で、先きへ行かねばならぬと云ふのを無理に頼んだが、舟が小さ

いから逆も皆は乗せられぬ、女だけならと云ふので、何うしようかと思て居たが、ぐづ〳〵して居ると行てしまひさうなので、仕方なしに母様を助けて二人乗つた。水勢が強いのと、舟が小さいのとで、思ふ様に乘り切れず、避難所の方へは行けないので、岡といふ高みの方へと導かれ、漸く其所へ上つたが、傘は勿論下駄さへないので、強雨に洗はれた石原がひどく足にこたへて痛い。私でさへこんなのに母様は嘸と思ふと、涙が先きへ立つてものも云へぬ。そろ〳〵歩みながら落着く先きを考へたが、永く土地を離れて居たので知己の家さへ知らないのである。此んな事なら目的地を決めて置けばよかつたのにあゝ父様や良人はと考へながら行く後ろに、『奥様々々』と呼ぶ者がある。ふと見ると、ずつと昔うちで世話をした事のある女であつた。『まあ此方へ來てお休み遊せ』と云はるゝまゝに店に腰を下ろした時には、全く天の助だと思つた。其家では直におむすびを作つて持て來て呉れたが、何うも食べる氣にもならない。後に殘られた人々が案じられるので、母様を其家へ頼で置いて私はもと來た道へ引き返した。もう皆が見えるだらうといくら待つても少しも見えぬ。あゝ皆はどうしられたであらう、若しや……と思ふと、悲しい事ばかりが考へられる。心弱くてはと氣を取り直しては其所此所尋ね廻つたが、何うしても見當らぬ。かうして居てもと思ひ直して母様の方へ行かうとした時、後の方で手を拍つ音がした。何の氣なしに顧ると良人が山の上に立つて居られた。

十　再會

『あッ』と云つたまゝ呆然と立つて居ると、良人は道もない山のがけを走り下りて來られた。『無事であつたか、さつきから探して〳〵くたびれた、父様も大そう御心配だから我は早くこの事を報らせて來る』とて、また行つてしまはれる。見ると綿入に繩の帯をして、着物はところ〳〵泥にまみれ、見るからに昨日からのお働が思ひやられる。暫くすると父様も來られたが、唯眼と眼で無事を祝したが言葉はお互に出なかつた。



其儘母様の所へ引返し、漸く其所へ落ちついて善後の策を講じたが、未だ何處へ行くにも道さへないので、其夜はともかく其所に宿を借る事となつたが、外に避難者も多いので、四疊半に九人の雑居、夜具などは無論ない。横になつたはなつたものゝ、どうして〳〵一目も眠られぬ。眠られぬまゝに過ぎ來し方や行末の事などを考へ始じめた。過去には隨分不平な事や恨めしい事が澤山あつた。未來にも屹度あるだらう。然し死ほど苦しいものはなからう。死に堪へる程の勇氣があらばどんな事にも堪られよう。今迄の私は辛抱が足りなかつた。情に走り過ぎた。我慢の出來ないため、氣の弱いため、失敗した事も多かつた。これからはもつと冷靜になつて、何時迄も今日、あの恐ろしい洪水と鬪つた樣に、殘る半生を生命あり光明あるものとすべく奮鬪的の生涯を送らうと決心した。外を見ると、月は中天に懸て光り清く、空は拭ふたやうに一點の曇りさへなく、昨日からの暴風雨はまるで詐の樣である。

◎達者に書いてはあるが少しも感興が浮ばないのは不思議である。



多勢の子供を育つる母親の日記

柳枝子

一　汽車の往復

昨日まで學校の放課を待ち、午後より行し、一郎の歯の充塡も、けふで終りなれば、日曜を幸ひ主に留守を頼み、伴ひ二番汽車にて行く、岸和田へ停車すると誰ぞ轉任さるると見え、洋服の人羽織袴の人其他見送り人多し、誰ならんと思ふ内にフロックコートの主人と其夫人と思はれる人、令嬢、令息の數多乘込まる、こは豫て聞及びし、某税務署長の榮轉にて其家族と共に今日此處を引拂はるゝなるべし、君は豫て廉潔の士と聞しが、今日始めて夫人をよそながら見るに、年の頃卅五六、今の世に虚榮を喜ばるゝ人ならむには、當世流行の何やらお召に、指輪の二つ三つ例の金鎖を輝かすべきに、君は質素なる飛白の袷に黒繻子と博多の晝夜帯を胸高にきつとしめられ指にも頭にも何の裝なく乘車中子女に何くれと注意され、姑君にやさしくもの云ひ給ふさま誠に奥ゆかし。

彼の賄賂を受け、終ひに顯はれ繩目の恥を受けらるる人も大方は、愛さるゝ夫人の虚榮心を滿足させん爲め、心ならずも贈物を受けらるゝとか、さるにても君はかゝる夫人の内助ありてこそ、廉潔の志を全せられしならむと、そゞろ夫人の德を思ふ。

ガラス越しに外計り見て居た一郎も、倦きたかして小聲に唱歌を唄つて居る。

停車場から直ぐ車で病院へ行く、歯科もけふは日曜で大層混で正午の急行で歸るつもりで有たが、間に合ないから道頓堀から千日前へ出て、子供達のお土產の手遊を買ひ、次の汽車へ乘る。一郎は腰掛へ坐つて、

行軍將棊をならべ、しきりに研究してゐる。

住吉で僧侶四人乘たので、けふはお彼岸の入りであつたと思ふ、何やらん聲高に話しながら袋の中から果物や菓子を出して食べて居たが、次の驛で、若い娘が二人、母親らしい人と乘ると、御僧の一人次の僧の膝をつき何やらいふと、次なるも、次なるも皆娘の方へ目をうつしながら呟く。か丶る振舞の僧侶の身として有難くない樣に思はれるが、さて今日說敎のあるお寺へ參らば、衣の袖つ丶ましう、珠數つまさぐりつ丶壇上に立ち、神々しき聲して、法の道を說給はゞ、參詣の善男善女、あな尊き聖人やと、敬ひかしこまるならむと、をかしう覺ゆ。

汽車から降りると子供等皆迎ひに來て居てお母ちやんのお歸りと喜び寄りそう、三郎は守の背中ではねて居る、僅か一日の留守でもこんなに待てくれるかと嬉しい。

二　朝の賑ひ

枕元の時計を見れば、五時半なり、三郎の三時間目の乳を飮ませ竊と下にやすませ、次の間の一郎を起しながら湯殿へ行く、二郎は早くより目醒めて、自分を見ると直ぐ『お早う何か頂戴な』とねだる此頃で朝のお目醒しほしがるのは二郎一人、一つ上の靜子が姉さんぶつて居るのとは大きな違ひ、『まあ、お顏洗つてから』といへば、二郎はいち早く來る、續て靜子も起き一郎も和子もだん／＼とせまい湯殿は一ぱいになる、仲働の竹は茶の間と玄關の掃除を仕舞『さあお召かへ致しませうお早くお出遊ばすお方がお怜悧で御座います』といふと、和子と二郎が駈出す。

今朝は大分涼しいから皆に羽織を着せる、靜子の被布は此春少し長いと思ひしに丁度よくなる二郎と和子は其割に延びず一郎は羽織は嫌でシャツを着る。

『早く飯だ飯だ』と一郎が急立る、竹は『只今着物を着替へまして』と前掛の紐を締めながらお給仕をする四人食卓へ坐り一郎が『僕の蝦夷菊が今朝水やりに行たら澤山咲てましたからお母さん活けなさい』とい

ふと、二郎もまけぬ氣で『僕のピロート草も大變きれいだからお母ちやんに上升』といふ、一郎が夏中丹精して、毎日水をやつたので菊も、美麗に咲はじめた、二郎も兄ちやんのお下りのピロート草を貰ひ、『之は僕の花だと喜んで居る、

静子と和子は昨日のお土産の人形を傍へ置き、一口食べては抱へ、一口食べては立かけ、お話に身が入てるので、竹は『お汁がさめ升から御飯召上つてからに遊ばせ』といふ。



自分が手水を使ひ鏡臺の前へ坐る頃『行て參り升』とカバンを掛け一郎は學校へ行く、静子は『髪を結て頂戴な』とリボンと打紐を持て來る、静子は何でも仕末が能くいつも根が抜けると、リボンと打紐を必度自分の手遊戸棚へ仕舞ふ事に定め、手遊でも一番仕末がよい、時にはお母さん負ける事もある、髪を結てると『お嬢さん遊びませう被入いな』と、お隣のお芳さんが誘ひに來る、『待て頂戴よ今髪を結てから』と静子が答へる、『私も一緒に行

わ姉ちやん」と、和子と連れ立ち駒下駄の鈴をならして外へゆく。

三郎が目が醒めたと見え泣聲がする、守はお襁褓を洗つて居る樣子ゆゑ抱て田圃の方へ運動に行く。

少し黃ばんで、重さうな、實のりのよい稻穗の露に朝日がきら〳〵ときらめき、いづこともなく蟲の音がかすかに聞える、見渡しの雨後の山が近く見えこの儘麓まで行れさうに思はれる、あゝいゝ景色畫の樣だと見とれて居ると、三郎がおくれ毛を引く、「旦那樣は目醒で御座います」と竹が迎ひに來たので家へ歸る。

三　乳母

「初やが來ましたよ初が來た〳〵」と和子は大喜び、「御無沙汰を致しました皆樣は機嫌よう被入いますか」と銘仙の袷に羽二重と色繻子の帶を小さくお太皷にしめ叮嚀にお低頭をしたのは、此春まで和子の抱き乳母で有つた女。五月中よい緣が有て、こゝから一里計りの在所へ嫁入りしたが、先は女姑一人でそれも誠によい人、夫も極く眞面目に働く人ださうで、初も幸せ、自分も共ども喜で居た、家に居る時分も無口であるが、よくまめ〳〵敷働き、仕立物料理も一通り心得、夫も世の常の女の樣に鼻にかけず、何事も自分に相談して殊に子供の面倒がよく、和子が生れてから今年で四年大層愛してくれたので、和子も自分より初が大好き、お嫁に行つた當座は、乳こそ飲せなかつたが、乳母が下つたと同樣、朝晩初々と泣て困つた、自分も何かの相談相手になつてくれたので、片腕を取られた樣で有つた、今日は賴のんで置た仕立物を、屆けながら遊びに來たので和子は大喜び、肩に飛び付たり膝にもたれたり、御飯も一緒に食よう、お風呂も一緒に入らう宿つてお出で一緒に寢んねしようとあまへる、兄弟たちは「和ちやんは初が來たので威勢がいゝ事」と笑ふ、初に負ぶさつて遊びに出たが程なく寢て歸つて來た、納戶へ寢とやすませ暫時在所の話などして居たが、「御目醒になつておむづかるといけませんからお可愛想で御座いますが、お寢みの內お暇致し升お目醒になりまし

たら來月田舎のお祭りには初がお迎に參り升と仰つて頂きとう御座います」と枕元へ野で摘で來た花束と御菓子の包を置き、和子の寢顔を見て殘り惜しさうにいとまを告げて歸つた。

＊＊＊

目が醒ると案の定「初はどこへ行た初や初や」と泣て何と賺しても宥ても聞入ず、泣て困つたがよく云つて聞かしたので漸漸得心して泣止み夕飯を食べたがけふは何だか平生より淋しさうにして居る、夕方の家の中は陰氣で嫌なものだから連れて少し運動して氣を紛らせ樣と外へ出た。



夕日は西に落ち雲の色が薄りと赤く、遠近の村々は靄に包まれ、家路に急ぐ農夫の影も朧になつた黄昏時向ふの方から廿二三の女が手荷物を抱へ洋傘を持ち裾を端折て急ぎ足で來る。「おや初に樣子が似て居る今頃初もあんな風をして家へ行着く時分だらうと思つて居ると、側に立て居た和子が「あら初やだ」と駈出した、「違ひ升よ」と留めるのも聞えないかして其人の袂に縋り付き早口に「初やまた來たの

よく來たねえ」とさも〳〵嬉しさう、其人は立止まつて不思議相に和子を見た、和子は人違ひの恥かしさと初を思ひ出したのとで、追かけた自分に取付て泣出した、「人違ひでしたか」と、氣の毒さうに振返り〳〵行き過ぐ。

可愛相に口には出さなかつたが恁んなに初が戀しかつたかと涙ぐまれる、日はどつぷり暮れて家の中には燈火の影見えお母さんはどこへ這入たのと自分を搜す聲がする、泣じやくりして居る和子を負ひ門へ入る。

四　子供の遊び

一郎が學校から歸て來て皆と階子の下で遊で居る、「汽車ごつこをしませう」「小兄ちやんは切符賣りよ」二郎「どちら迄」和子「おばあちやんのとこまで下さい」靜子「私は東京」一郎「僕は神田小川町」二郎「チヤン〳〵汽車が出升よお乘なさい」ピリピリーポツ、ポーポツポツ………」二郎は恁んな事上手なり。

取入た張物を疊みながら聞に自分も幼き時小川町の玄關側の階子の下で姉樣と人力車ごつこをして遊びどちらへと訊れると、巴町の藤井といつたが、今子供の遊ぶのを聞と、矢張り行先は母親の里なり、所も替り二十年前の遊びなれど、子供の心は替らぬものとをかしく思ふ。

おやつをたべて仕舞と、一郎は、「兄ちやんは釣に行つて來るよ、竹物置から鍬を持て來ておくれ」と云ひながら釣竿へ糸を付けて立かけ、「いちつてはいけないよ」と鍬を持て裏へ行くと直に、蚯蚓をにぎり片手に釣竿を持ち「藤や用が有たら川へ迎ひに來てくれ」と飛白の脛きりの着物に草履をはき、夏中の海水浴に潮じみた麥藁帽子をかぶり、飛ぶ樣に出てゆく。

子供の好みも替るもの、夏の始めに螢狩り、暑中は海水浴、涼風立ちて蜻蛉つり、夫も倦きて此頃は魚釣りに耽ける。

四時過しかば自分は、牛乳を沸騰しながら、ジヤガ芋と玉葱の皮を剝き、牛肉玉子パン粉等を揃へる今晩

は手製の洋食なり、子供のヲムレツを先にと、フライパンへバタをとかして居ると『お母さんと嬉しさうな聲を先に一郎は釣竿を擔ぎ片手に、ミルクの明罐を下げて歸て來る。『ほらね』と差出す中を見ると、二寸にたらぬ鯊が四つと、蚯蚓の樣な鰻が一つ、獲物は少なきも樂しさはいくばくならむと思ふ。

五　燈火のもと

主の書齋で栗を剝きながら今日の會のお話を伺て居ると、一郎が復習をはじめる、習字は眞字と平假名でむづかしいとていそしむ、自分が母樣のお仕事をなさる側で外史の素讀をして頂くのがつひ昨日の樣に思ふと、もう子供のさらへを見てやる樣になる、早いものだと思ふ。

庭で鈴蟲の音がするあゝいゝ聲と聞入る、一郎は復習を終へて机とカバンを片付け、栗を食べながら、お父さんとけふ學校で聞た、修身のお話をして居る。晝活けたコスモスの花が、ランプの光で一しほに見える、萩桔梗を振袖姿の優美な姫君にたとへんか、これは今めきたる洋裝の貴夫人とも思はれる。

八時を打つ、一郎は寢衣を着かへ學校の先生が仰有りしとて、不斷着を疊み其上へ兵子帶を載せ定めた處へ置き、『おやすみ』とお低頭して部屋へ行く。主は卷煙草を片手に、讀書に耽けられる。自分は今夜絎上て仕舞ふと絎物の針をいそがす。こゝへ引越してもう五年になるが、どうも東京が戀しい、汽車へ乘ても東京辯の人を見ると、なつかしく東京はどちらと聞度樣な心持がする、郵便といふと飛で出て殊に里から小包が來た時は一番嬉しく包紙でも東京の新聞は取て置度樣な氣がする、母樣や姉樣は今頃何をして被居るだらう、老眼鏡に背中をまるくしてあの火鉢の傍で日記を付て被居る御樣子が見える樣だ、そばで姉樣が菊代さんの美麗な被布でも縫て被居るかしらと思ふと、電車のゴー〳〵といふ音の聞える樣に思はれる。

『おいお茶でも入れんか』と仰ったのではつと東京の想像が消え立て、茶盆を取り出しお湯の加減を見る。

隠れて書いた 看護婦の日記

小草子

ざあざあと云ふ河瀬の音にいつも目のさむるのは午前四時、五時が起床時間なれど私はいつも四時に起きる。

昨日の朝きた女學世界早くよみたい〳〵と思ふて居たけれど、つひ暇がなくて今朝まで開ひても見なかつた。これから一時間は自分の體ゆつくり讀まうと出して見れば、早上級の人の手にふれたのやら、表紙は中は破れ、口繪の繪葉書は誰の手に取られたやら影もないのである。

私はあまりのなさけなさに、知らず涙が頬をつたひました。

あゝ下級看護婦、これ程つらい者が又とあるでせうか、病室の掃除が不可ないと云ふては小言を云はれ、仕事がぬるい足音がすると何につけても憎まれるばかり好な雑誌も、めつたによむ事は出來ません。

よく世間では嫁のつらさを云ふけれ共、いかにむつかしい姑があつても、きげんの取りにくい小姑があつても一方にやさしく愛してくれる夫があれば其くるしみは、わすれる事が出來ませう。

あゝ一人の慰藉者もない妾ほどつらい者が又と世にあるだらうか、友人は皆故郷のたより、母の手紙と、喜ぶけれど、妾には其なつかしい、したわしい母様が此世の中に居られませんもの、思へば思ふ程いよ〳〵かなしく遂には着物をにぎつたまゝ、しつとりと露のおいた庭草ふんで星の光に泣いたのも今日ばかりでは有りませぬ。

△さびしい夕暮

松の木の蔽いかぶさつた、二號病室の屋根を照らして居た夕日もいつか入つてしまうた。庭の木立の淡暗く淋しい中に一人立つて何となくうら悲しい様な思にふけつて居る時、鶴見おろしは、さつと木の葉をそよがせて我が白衣のすそを吹いた。

あゝ今朝退院された月村様今頃はもう御家に歸りついて、二ヶ月ぶりになつかしい父君や、やさしい母上や、あの可愛いゝ弟様方と、どんな話をなさつてるでせうか、妾が病院へ來てから一年半、多數の患者を受持つたけれ共、月村様のやうな優しい方は外になかつた、今朝のやうな、つらい別れをした事は今まで一度もありません。

友人からいやな事を云はれて泣いたあげく、それを月村様へ話したら、



「人から何と云はれても自分さへ心を清く持つて居たらいゝぢやありませんか、私なんかどう云はれたつてよいです」

と云はれた。其言葉が今でも耳にのこつてるやう。

月村様は高等學校の二年で文學ずきな人である、淋しい處がすきで、妾の故郷の耶馬の山中等はことにすきだと云ふて居られた。あゝ妾もさとへ歸りたい、たとへ墓石の下でも母様まします所ですもの。つぎ〳〵に悲しい思ひにふけつて居れば、身は霜夜を戸外に立つて居るやうな寒さをおぼえ、おつる涙もとめあえず、其まゝ其處に泣き伏しました。

日中もホト、ギスなく山中へ、たゞたのしく生ひ立つたけれど、今は日毎を淋しとなく、あはれの女となりました、あゝ今日こそ涙のつきるまで泣きませう。

△つらい夜勤

各病室の灯は淡くまたゝひて居る。

たのしいなつかしい昔の夢を見て居たのを、呼び起されたのは一時半、妾は今夜十六番の夜勤に明番なのであつた。

あたゝかい寢衣をぬぎすて看護衣に身をとゝのへて、まて二時の交代時間迄は用もない。病室から歸つてきた西野様といろ〳〵の話をして見る、始めは患者の事について、それから上級のうはさ、まだ後二年もある卒業後の話とつぎ〳〵に、末に故郷の事にうつりて二人手に手を取つて泣きました。

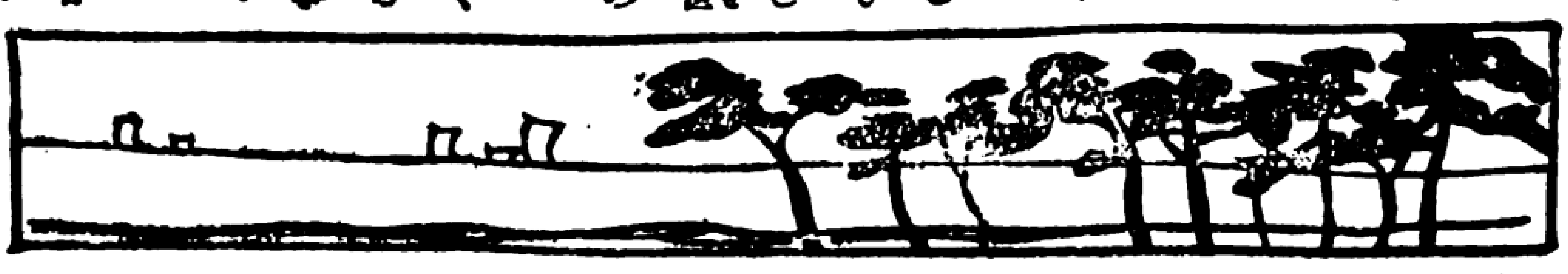
かくて惜しい時間は早くたち、友はつひに寢についた。あとは唯一人、さほど重傷でもなければ氷嚢かゆるのが仕事、病室から返つてきて、つくれんと火鉢にあたつて居れば種々の事が胸に浮ぶ。

少女時代のたのしかりし事、長崎へ出た當時のうれしかりしこと、賑やかな町の様などいろ〳〵と考へて見た。

そして其時分の妾の心、まあどんなに美くしく花々しかつたでせう。自分は女學生何でもかでも勉強して出世せればならぬと多大の希望をいだいて居つた、あゝあの時分のやうな心にも一度なりたい……

ふと考へついて氷嚢かへに出ると廊下の風はつめたく吹いて、眞夜中の淋しさはひとしほ身にしむやうである用事をすまして看護室へ歸つてくると今度は又、家の事弟の事、學校の事などを思ひ、そして西野さんの事を考へ出した時妾はホツと吐息をついた。

西野様は妾と同窓しかも同じクラスの親友、十三の春靜ちやんは小倉、妾は長崎共に首尾よく入學試驗に及第



したので別れてしまうた。それから四年間、始めの内は文通もしたけれど、いつとはなしに遠ざかつて遂には住所さへたがひに知らぬやうになつた。

妾も二年は無事で學校へ通ふたが三年目の春家は破産し、母は病死、重れ〴〵の不幸つゞきにつひに退學し、國へ歸る事にきまつた夜、原田先生の御宅で泣いてないて一夜をあかし、翌朝停車場迄送られたのは夢のやうだつた。希望をすて理想をなげ故山に入りて二年間は人の世のはかなさをかこち、身もありてかひなき心地に、うつうつと、行く雲を眺めては、そゞろ花やかなりし去にし年のことのみしのび、霞の間に、紅葉の野邊に、唯日毎涙にくらし居たりしが、去年の秋の始めつ方ふと思ふ事ありて看護婦を志ざし、病院にきて見れば思ひもよらず西野様と逢ひました。

おちぶれ果た我姿を、はづかしいとも思はず昔の友のなつかしさによりそいて言葉をかはせば、變らぬ者は友の愛よ、にぎる手と手には、いくしづくの涙がおちたでせう。

きけば西野様もいろ〳〵とかなしい事ばかり、御父様も御母様も、あの大學の秀才とうたはれた御兄様までも今は此世の人でないと。

『廣い世の中に妾はたつた獨者よ子、美代ちやん姉妹だと思つて可愛がつて下さいな、貴女一人がたよりだから……………』

と云はれた時は何とも云へず唯だまつてうつむいた。

ほんに思ふて見るからか、あのわか〴〵しく美くしかつた御面はおもやつれのしたやうな、いさぎよかつた、もの言ひも何となく淋しいやうな心地がする。

そして妾も涙ながらに、あるたけの悲しい思ひを打明けて、二人は昔にました睦じさに、つらい事も、かなしいことも、たがひに慰さめもし、なぐさめられもして、此くるしいつとめも、其のためにこそつゞくのである。昔の事今のことつきぬ思ひにふけて居るうち夜はいつか明けて、かしこゝ早掃除は始まつて居る。

△新入院の患者

今朝三番に入院があつた、患者は十三になる可愛い少女、其母様とばあやが附添にきた、そして當番看護婦を一人ほしいと申出た。あの可愛いゝ人の附添には誰が行くだらうと皆で噂して居たら、三時の回診後、醫局より妾に行けとの命、うれしうて〳〵其まゝいそいで三番に行きました。

白きベットに伏す人を見れば、いたましや花のつぼみ

の少女は、くるしさうに妾を見て姉ちやんと呼びました。
妾は何ともこたへずに、じつと目をつぶして神にいのりました。
「どうぞ此の可愛いゝ方を、再びもとのやうな體にかへし、そして我が此の大任をはたさしめ給へ」と。
おもき任はおふたれど、やさしい御母様と心やすい、ばあやと、姉様々々としとうてくるあや子様と、親身の家庭も及ばぬたのしい一室に、妾ははじめて看護婦のたのしさを知り得ました。
心の限り、身のつゞくかぎり、一日も早くあや子様の御病氣のよくなるやうにとねんじて、看護せしかひありてか、日に日に御様子のよくなり行くうれしさ、それにつれて、御母様や、ばあやの美しい笑がほ、やさしい言葉、見るもきくもたのしい事ばかり、たま〳〵、西野様と出あふては、今のありさまをはなして、よろこぶけれど、西野様はやはりつらい勤務をして居らるゝと思へば、かなしうて氣の毒な心地がする。
あや様の御病氣もだんだんよくなつたある日のこと御母様が、
「もうあや子もよほど全快して退院するのも近い内になりました、ほんに村田様にはどれだけ御世話になつたか知れませんのねえ、とても筆や口でつきる事ではございません。何と御禮を申していゝやら」
とお仰せらるれば、ばあやは又、
「私は一生村田様の御恩はわすれは致しません」
などゝ云ふ。さうすればあや子様までも、
「あたし姉ちやんの御恩わすれてはすまんのねえ母様」
と言はれる。妾は何と申してよいやら、うれし涙にくれるばかり。
あゝいつまでもいつまでもかうして此所に居りたいけれど、それはとてもかなはぬ事、私のやうな者でも斯うへだてなくして下さつて、我子の如くあいして下さる御母様の御心ありがたさ。
あや子様は又ことに姉様々々と、兄君より外もち給はぬ身とていつも妾に、
「ほんとうの姉さんになつて下さいな、そしていつしよに小倉へ歸りませうねえいや」
と問はれるので、
「ハイそれはもう。あなたさへ姉様にして下されば何處でもまゐります、あなたのやうな妹があれば外には何んにもいりません」
と云ふて居れば、うれしさうに、



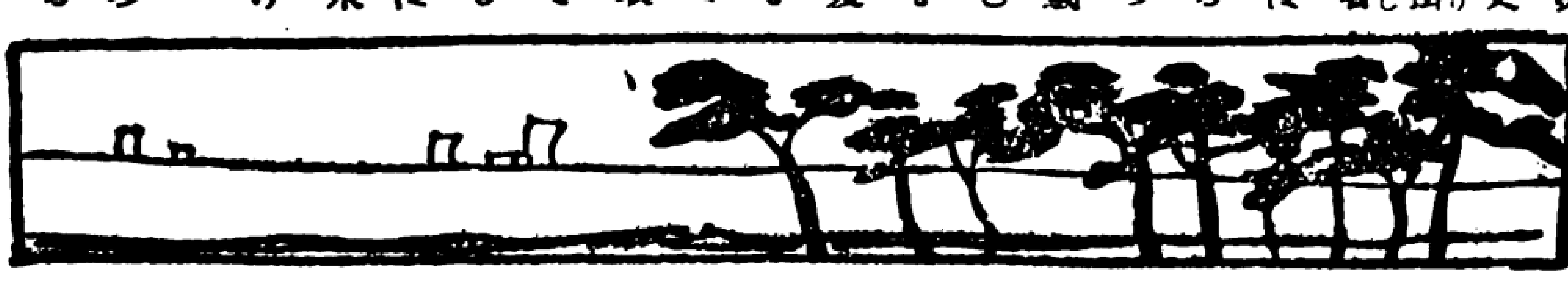
「母様ほんとうの姉様が出來てよ」と一人でよろこんで居られる。

其かほを見る度に妾は涙を落します、あゝあや子様といつしよに居るのも後四五日、退院さるれば又いつの日か相見ることが出來ようかと思ふて、けれどこれはしかたのないこと、唯この後はあや様の成人なさつた、おうつしゑでも見てたのしみませう。

いたづら子を育つる母の日記

熊谷磯子

入相の鐘に驚き目さむれば、臺ランプ片手に餘念なき今年三つの腕白盛り、生後百日に充たずして貰ひ受けし可憐の子。よその子よりはませて口もきくいたづらはもつて來いのその名も强き龍雄、圓ぽちやで色白く、卑なき顏にもするどき眼は、異様に輝きてたけき氣象を現はし、ランプのほや片手に器械ないぢる愛らしさ、時計がなつたすると直ぐ其前へかけて行つたが、上を見て耳をかたむけ、音をきいてゐたが一つ二つ三つと數へてあとは無言のまゝ見つめる、すぐとつてくれとだゞこねる、ブリキ製の玩具時計出しやれば、あけて見るとて散々こわしてしまふ、つひには坊のはかけて、大きいのを頂戴とくる、豆糖を與へて漸々だまし、鉢取る間も足手まとひ、一足出るもあと追ひして、はだしでかけ出す、足にくぎさせど痛しとも思はず、豆と思ふてダニを食ふ、藥を見れば飲み度さにお辭儀もすれば、唱歌もうたふ、丈夫な替り顏洗ふ間も、着變へする間も落付かず、雑巾掛の手をそゝぎ、茶くめばアイロとはたる、止むれば火箸片手になげんとする、煙管をなげる本をさく、鍋臺はこび、鍋のふたを取る、茶碗をはこぶ、箸はこぶ、坐る間は林檎食ふ時のみ、實に手にも足にも暇なきはいたづら子を育つる母にこそ、洗濯すればお手傳ひしてぬれ鼠になり、蒸氣の笛に驚いて耳を聳てゝ豆腐を見ればむしつて喰ふ、瓜を見てはかじりつく、美しき花も甘き實も龍雄が眼につかば最後、かんざしをぬく、櫛を取る、髮をむしる、針箱などは置き付かず、鏝をとつてなげる、針もつあまりのせわしさに、手をつれつてやれば、そのまゝ泣き寢入してぐつすり、こゝぞとホツト息つき、針箱取出せば、晝のつかれに眼はしぶり、針先覺束なき悲しさ我ながら消え入り度き心地して、ひとり孤燈の下に眠ひ眠らせば、國の爲家の爲、あつぱれの人と育て上ぐるは女の務、日頃の辛苦も物かはと、老さき短き針の道、末は誰にか賴らん哀れの子、夜一夜寄愛をこめて縫ひ上げし袷一枚、是も彼が成長後の學資の片はしかと思へば、可愛さ一倍して、胸もはりさけんばかり、かくて單調の月日を送りつゝ成長のみを樂しみに、淋しき月日を送るなりけり。





麗人日記

櫻澤千良

十月一日

夫が事務所から歸つて來て「此間からの話しの結果三日頃に樺太へ行つて來なければならない」と云ふ、明日一寸米國へ行つて來るなどゝ前の晩になつて云ふ樣な人なのだから斯樣な事も珍らしくはないけれど、一寸驚かれた。

「どの位行つて居るのです」「如何しても二週間はかゝるだらう」成事ならば私しも一緒に行つて見たい、然し毎月五日には前月分の仕拂をしなければならないのに、夫の出立は三日頃、明日にも計算して誰かに渡して行けばよいが、それでは自分の氣がすまぬ、殊に末の子「れれ」の保母が暇をとつて歸つてから未だよい替りも見當らぬ、千代さん(親戚から來て居る娘)や、うへの子の保母などが氣をつけて吳れるから心配はないけれど、母の身として安心はならない、もしやに函館あたりまでお迎へに行く事が出來ればとも思つた。翌日の午前二時頃、目が覺めたので「れれ」の部屋に行つて見る、蚊帳から少し離れた處に手燭の火がまたゝいて居て、千代さんが疊の上にうたゝ寢をしてゐた「千代さん又蠟燭のつけばなし、而してうたゝ寢は風邪をひきますよ、」と云つた調子が高かつたのか、千代さんは飛び起きてよく眠つて居る「れれ」をさらふ樣に抱きあげる、その風が妙だつたので思はず笑ふと、氣がついて又下へそつと寢かす、傍に寢てゐた清(上の子)の保母も起き上つて「もう度々の事ですから何ですが噓の樣ですけれど、此頃になつて燈火のつけばなしは今夜がはじめてゞ御座います、是から必ず氣をつけますから」と云ふ。

夫にしても萬一私しの留守に何か間違ひでも起つたら、後でどれ程悔しいだらう、など案じると函館まで行く事も斷然やめて終はうかと思ふ。「是から充分氣をつけますから、どうぞ安心あそばして」と云ふ聲に氣がついて、立上りながら「蚊帳へでも火がついたら夫こそ大變な事になるから、本當に注意してね」此間まで母樣に云はれて居た樣な事を最早人に云ふ樣になつたなどゝ考へながら、自分の寢室に歸る、何處の鷄か切に夜鳴を續けて居る、程近い停車場で「ランプ屋ー」と大聲で叫んで居るのが森とした邊りに響く、聯結さした貨車の一つが其次のにぶつかると、長い列車の末の方まで追々にじれた樣な音を傳へて行く。

十月二日

明日の準備に夫の冬の洋服。下着など長持から出してよれ(女中の名)

に干させる、厚い裏毛の外套の持つにも重い樣なのを見ると、こんな物を着る時もあるのかと嘘の樣な氣がする。

夫の出立が明日だと思ふと、忘れた事がある樣で、何だか落ちつかぬ。夫が馬で出て行かれてからは、いつになく働けて二階の障子の玻璃拭きから、今日には限らぬたち物まで殘りなくやつて終つた。私しも明日出立する樣な氣で、後の事など考へて居たが、ふと左樣でない事を思ひ出して、自分ながら淋しく笑つた。

植木屋が歸りがけに松の木に松蟲と、つと蟲が澤山居るので、木が痛んで終ひます、今日も餘程除きましたが、未だ除きつくせませぬ、又明日伺ひますと云ふ、松蟲と云ふと愛らしく聞えるけれど、松毛蟲といふといやらしい、西洋では猫柱とか云ふ相だが、又一しほ恐ろしく思はれる。つと蟲とはつとに入つて居るからの名で、秋風にちゝよと呼ぶと、淸少納言の筆すさんだ面白いみの蟲の事である。よび樣によつては恐ろしい物もやさしく、面白い物もつまらなく聞えると思ふと又それが面白い。

私しがふと思つた事が偶然その通りになる事がよくあるが、今日も何からともなく夫の樺太行きが延る樣な心地がしたので「お出立はのびる樣な氣がする」とよれに話してゐる處へ、夫が歸宅して五日になつたと云つたので、又いひ當てたかと自分ながら氣味が惡かつた。

十月三日

一と月ぶりで一中節の師匠の處へ稽古に行く、上野から淺草行の電車に乘らうと停車場の方へ向つてゆくと、後から呼ぶ人がある、振り返つて見ると母の家にゐる貢さんと云ふ青年、今母の行つてゐる伊勢崎から昨日歸京したので、私しへの言傳を持つて來たから、その事をいひながら私しの處へ來ようと思つて家を出た途中だと云ふ、私しの行く處まで行きながら話さうと云ふ、電車が來た、滿員、其次のも亦滿員、押し合つて乘るでもないとやり過すと、其後が却々來ない、見て居るうちに乘る人がたまつて終ふ。立つてゐる人達がジロジロと此方を見る、私しの持つてゐる紅の傘が日に透いて鮮な血の色に見える、白い方を持つて來ればよかつたと思ふ、三つ目の電車が來た、是もあまりすいては居ないが、きりがないので乘る。弟の身の上に就ての母樣の言傳を聞き、此方の意見など云つてゐるうちに、淺草の雷門に着く、降りて左の橫町へ入つて右手に細い新道の角がお師匠樣の家なので「今日は」と私しが入ると貢さんも入しつたが上らないで土間に立つてゐる、「お珍らしい」と迎へて吳れたお師匠樣を見ると、何だか若い人と一緒に來て惡かつたかしらんと云ふ樣な氣がして、途中で別れゝばよかつたと思ふ、でも默つてゐては三人とも猶困るから、母の家の人だと云ふ事を話してお師匠樣に紹介する。

「左樣ですかまあ一ぷく御あがりなさいまし」とお師匠樣が云ふ、「はあ有難う然しもう是で」「歸るのですか」と私しが訊くと「はい國から母も來て居ますから」「それでは又れ」「其うち又御宅へ伺ひます」と歸つて終ふ。

石の枕のけいこをすませて家に歸ると品川から父上が來て私しの歸りを待つてゐられた。

十月四日

子供二人と夫と私しと朝食まへに庭を散歩する、ダリヤの花が紅や黄や桃色に咲き競つてその儘に起きふしゝたのが秋の露にゆあみしてゐる、野薔薇のくゞりに病葉が交つて女郎花が風に靡いた懶かしい姿で立つてゐる、朝顔の花のかつらは朝毎に小さくなつて松が枝にからんだ處はクリスマスの木にかける飾りの花の様に見える、木もたはむ様になつた栗がなくなると、柿のばん是にも半赤るんだ立派な實が澤山になつてゐる子供は毎日とる事を此上もない樂しみにしてゐる、いちじくも柘榴も孰れ劣らず美くしい實をつけてゐる、無數の枝に無數の實をべつたりとつけてゐる大きいぐみの木の影から白い鷄の子が急ぎあしで出て來たが、私し等の前を通るのに又一しほ大急ぎになつて身を左右に動かしながらのめる様に裏口の方へかけて行く、彼のアグリーダクリングの話をふつと思ひ出すと自然にほゝゑまれる、時間が來たので上つて食事する、長男が長い蛇を手に持つて食堂へ飛び込んだ「あれ蛇ッ」とあたり人がぱつとちる。見ると口の邊から生々しい血が滴つてもうぐつたりと死んでゐる「そんな汚い物疾く捨てゝお終ひなさい一體何處から持つて來たの」と光に聞くと表門を入つた處の芝生の上に竹にはさんで捨てゝあつたと云ふ。では誰か殺したのだらう思へば如何して此虫は人に見られば殺されるのだらう、何故又そんなに憎まれるのだらうイヴを誘ふたと云ひ傳へても夫は惡魔の力によるので此虫自身に罪はない。俗に云ふかいうきりの首の動かし方くらゐいやらしい物はないと思ふ何だか微怪な西洋婦人を思ひ出す。

十月五日

出立は今夜の八時五十五分手まはりの物など取そろへてゐる處へ、一年も逢はなかつた吉川の奥様が來られた、これは二三年前赤坂へ開業した若い醫師である。四方山の話しをして居る處へ、太物を商ふ花岡と云ふ婦人が來た、この人は最早六十過ぎでもあらうのに重い荷物を負ふて、險しい坂を輕々と上つて來る、至つて丈夫な、面白い人である。吉川の奥様を見てまあお珍しい、私し、度々お門を通りますが何やら伺ひにくうて」といふ「まあ左樣ですか私しの處はお存じの通ですから、今は卸買ふ處ぢやありませんが、通つたらおよんなさいな」「ありがたう何卒又何なりと御用をな」「もう拾年も經つたらばどしどしと買ひますよ、夫までは買ひ方は此方へねがつてね」「此方でもね此頃はえらい御辛抱だすわ」「うそそんな事」「あら本當なのよ、少し都合がわるいのでね」「だつてあなたのと私したちのとは大變な違ひがあるわ」「都合の惡いのは誰だつて同じだわ」「でもお醫者様は面白う御座んせう、藥九層倍と申ますわ」「それは昔しの事ですよ、今は高價な新劑をつかふから、うつかりすると損しますわ、藥價の請求は出來ないし」「請求してはいけないのでせうか」と訊くと「醫は仁」と云ふから拂へない人に

は何處までも無代でやると云ふ事になつてゐるのですからね、いくら欲しくても何時でもよい樣な風をしてゐなければならないから辛いのですわ、博士とか學士とか云ふ人達は名で直すのですからね、藥は砂糖水に色をつけた物であつても患者の「信」を利用しますから、大家になると儲ですが、私し共は本當の藥で治さなければならないんだから、其藥價でも倒れたら慘憺たる者ですわ」「倒す人もあるでせうね」「ありますとも、晦日に拂ふと云つて置いて何の音沙汰もないから、人をやつて見ると二三日前に逐電、こんなのにも度々逢つて來ましたよ、考へて見ればをかしな物よ、手の出る程ほしいところを何時でもよいなんて人間は僞の動物ね」とこの奥樣の云はれる事には確に眞理が籠つてゐる、今日は夜まで遊んで行くとて其處らにある物をカバンに詰める事など色々と手傳つて與れる、何時か私しが世界漫遊の途にのぼる時友どちに「此荷物は此處へ入れるの『是は持つて行く方がいゝわ」などゝ荷づくりを手傳はれる時は、どんなに嬉しいだらうなどゝ思ふ。夫は六時四十分頃歸つて來た、事務所から二三人見送りながら手傳に來て與れた、吉川の奥樣は晩餐をすませて歸られる、日暮の里まで送つて行く、又逢ふ時まで黄昏の窗の白百合と俤の殘る樣に肩かけは白を撰んだ。

今見ゆるその俤をひめおきて
わかれし後に逢ふよしもかな

日暮里の停車場に車を横づけると、先に行つてた人が出迎へて挨拶する時に水田氏は軍隊式の禮、何となく送りの樣が貴族的なので、いやだと思ひながら、向ふを見ると、螢の如く出札口から目を見張つて暗い燈火に此方を透し見てゐる人があつた、心ない汽車の音が遠くから聞えて來る、急いでプラットホームへ入ると「あなた方おのりですか、そんなら三本目の瓦斯燈の邊まで御出でなさい、此處はズット後になりますよ」と驛夫に注意されて急がはしく驅け出す。汽車が着いた、一等室の窓から夫の連れなる人が首さし出して待つてゐた、挨拶しても騷々しい、蒸氣の音で互に聲が聞とれぬ、室内は只暗でないと云ふ許、夫の顔もよく見えぬ、バタンと重い戸が閉されると、汽笛一聲車はゆるく動き出す、夜の色よりなほ黑い一列の汽車が朧げに形をとつて、見るく\うちに遠くなる、私しはハンカチーフを高く振る、夫も帽を振つてゐるのだらう、見えない、汽車は輪形を描いて曲つて、やがて顔はみえなくなつたが音ばかりは聞えて居る。歸りは送つて與れた人々と一緒に汽車で歸る、家に着くと何となく淋しさが身に滲る、一緒に來た人々が集つてゐる處へお茶やお菓子を出す樣に云ひつけて私しは自分の居間へ來た、夫は最早何處らまで行つたらう」

これは日記文の未成品ともいふべきものでせう。文に推敲のなきは可惜。可惜。

この作者はどうしても自然詩人であるやうに思はれる。天然を描くにいふべからざる妙所ありて、人事を寫すに拙劣といふよりは寧ろ粗漫なるところあり。故に全體統一を欠いて第三者たる讀者に感興を與へざるは大なる損失かとおもはれる。





約婚前の一日

葉子

昨夜は種々な空想が胸の中を往來して、十二時を聞いてやう／＼眠就いた、其故か今朝は少し頭が重い、醫學士との緣談漸々進行する、性急な月下氷人の米田樣、早朝から御來訪、直に離室へ御案内して、話の出ない中にと、急いでお茶を持つて行く、話が氣になるので立聽して居る處を十重さんにでも見られたら大變だから、廊下續きの母屋の方へ入つて、物陰からそつと耳をそばだてる、マア氣の早いこと、寫眞まで借りて被來つて、

『お孃樣のも御持合ので宜しう御座いますから拜借して參りませう、先方でも御母樣は既う御承知なんだから、宜い樣なものゝ、然し御本人は未だ御存知無いのですから――』眞實に此樣な事と知つたら、此夏那須溫泉へ、祖母樣と十重さんと私と三人で避暑して、小母樣や道代樣に御目に懸つた時、もう少し御世辭を振りまいて御機嫌を取つて置けば良かつた、でも恁うして望まれる所を見れば滿更無愛想した譯でも無かつたらうなどゝ、己惚れてみる。

何んでも御兄弟が三人で、道代さんの直上の姉樣は東京へ嫁いて、總領の兄樣は新潟で病院の副院長を爲て被居るとかつて伺つたが、其時は其の方に就いて、何の觀念も無かつた、其の方の妻に望まれ樣などゝは夢にも思はなかつた。

母樣が寫眞取りに被來るかも知れないと思つて、南の間へ歸つて、何喰はぬ顏で、縫ひさしの自分の袷をチク／＼縫り始めたら果して被來た、五月愛國婦人會總會に出京の折、お馴染の本郷の望月で寫つた、桃割

のを上げる、これが最近のだ『いやに濟し込んでるの子。』とは恁の寫眞の着いた時の十重さんの評、自分でも生際の邊などが氣に喰はないが、今から寫らうたつて此樣な片田舍では見られる樣には寫れないもの、しかたがないわ、寫眞で合格しても後で實物のお多福が現はれてから、愛想づかしを爲れて、其れこそ萬事休すだから、始めから醜いのを承知しといて貰つた方が佳いと、强ひて負惜みの理屈を捏ねる、米田樣は目的物を持つたのでサッサと歸られる。

離室で『一寸お出で。』つて母樣のお聲、胸が俄に波打ち始めて、顏が熱く成る、金時宜しくといふ外觀で伺うと、傍に有つた手札形の寫眞を取つて『米田樣が持つて被來たのだが子。』つて、私の膝近くお置きなさる、顏が益〻赤くなる、母樣は氣をきかして私の方へは背を向けて茶器を片付けて被居る。

一生の運命の定まる瀨戸際だもの、穴の明く程も見なけりやならない、然し母樣をお控へ申して居ては、極りが惡くつて——何んて意久地無しだらう、高が一葉の寫眞ではないか、恁んな事では實物同士の見合ひなら必と落第に違ひない。

母樣は何んにも仰有らない、茶道具持つてお立ちなさつたからこの間にと、早速取り上げて見た、彼のお品の佳い小母樣の御子で、美人の進代樣を妹として被居るのだから惡からう筈はない。

鼻下に立派な八字を蓄へて、キッと結んだ口元に決斷力の强い、一度云ひ出しては後へ退かない、意志の强固なのが現はれて居る、然し犯し難い中にも眼の邊には柔和らしい樣子も見える。

私は一體男子で頭髮を奇麗に分けて、チラ〳〵光らしてる人は、何んだか氣障な樣な氣がして嫌ひだけれどこの方計は分けて被居ても左樣は思はれない、洋服の着具合まで氣に入つた。

學生時代によく、心合つた同士の話題に『理想の夫』が出た時、私は第一に才學の秀た人が佳いとか、才學は左程でなくとも人格の高い、男らしい人を望むとか性質の優しい、妻を熱愛してくれる人なら地位も財產

も要らないとかつて、皆樣無形の方面に計り重きを置いて、容貌などは友達に紹介した時先樣が不快に感じない程度なら何樣でもいゝわなんて、誠に感心な事云つて被居るけど眞實に左樣か知ら、其れに職業は軍人が一番多くつて醫者が最も少なかつたつけ、左樣云へば私なども御多分には洩れぬ容貌には冷淡な醫者嫌ひな仲間だつたが怎うして寫眞を見ると、矢張り風采の上つてるのが良い、勿論人格や性質が容貌よりもゝつともつと大切だけれど——、職業は人物さへたしかなら構はない學生時代とは考へも次第に變つて來る、あの醫者嫌ひな中田さんがドクトルに嫁いで、天晴獨唱家を氣取つて音樂者以外には嫁がない樣な事云つてた藤子さんが、無骨な陸軍大尉に嫁した、妙なもの、其れでお二人とも人に羨まれるやうなスヰートホームを作つて被居る。

二三度寫眞に頰ずりして自分で終つて置くのも變だから母樣が終つて下さるだらうと床間へ置く。

扇の間の東の襖際に陣取つて夢中に小説『月魄』に喰ひ入つて居た十重さん、右手で頭をたゝきながら私の方を向ひて、

『餘り熱中したので頭痛がするわ、どれ私も始めようか』

『倭文子が爾に呼び付けられて、質される邊既う讀んで？』

『えゝ、助川で正木に逢つた事ァ早く打ち明けて了へば疑れなくも佳いのに——私が倭文子なら云つて了ふわ。』

眞實に十重さんは心に思ふ事はズン／＼云へる性質だから羨ましい、私は又胸に疊んで置く計りで奈何しても發表されない、去年だつたか十重さんが未だ學校に居た頃、大道占に身の上判斷をして貰つたさうな（迷信家ァつて笑つたら奈何事云ふか戯談によ、つて云つたつけ）其時卜者が『貴女の姉さんは温順で思つてる事も云はれない性質だが貴女はそれと反對だつて云つたさうな、温順はちと怪しい、私は大の勝氣で時に突張る事も有るが大抵は我慢して、人の云ふ事に從

つてるから或は那麼とこを名付けて溫順と云ふのかも知れない、これで勝氣でなかつたら生存して行かれないだらう、今度の世には見合ひの時でも赤い面一ツしないで先方の人を好く觀察出來る樣な臆面なしに生れて來よう。

十重さん袖縫ふ手を一寸休めて突然「姉さん奈麼方？」「え？。」と問ひ歸して又赤くなる「いまに文夫ちやんと行つてよ、其時は、澤山御馳走して頂戴。」

「厭よ十重さん、未だ定りもしないのに。」

定りもしないにと口では云へ心では既う定つた氣で居る、勤めて平氣を裝ふても包みきれない、悅は顔に溢れる。十重さん每の樣に饒舌らない。時々私の顔見ては莞爾々々して居る、御祝ひには何を差し上げませうと云ふやうに見える。

不圖婦人會の歸途上野のステーシヨンで、計らず御目に懸つた尾澤さん——今は小原さんだけど——の姿が目先きにチラつく。同じ級で朝夕騒ぎ廻つて居た頃は、其れ程美しいとも思はなかつたが僅か三年の中に大變御嫖致上げた。たしか第一番なんだらう。濡羽色のお髮を大きな丸髷に結つて、鐵納戶地のよりからみの繡絽の御召に牡丹と蝶を染め出した華美な單瀰の丸帶を恰好よく結んで、ほんに見惚れる樣な若奧



樣になられた。元から快活なのが又一入お樂しさうだつたので、結婚は恁うも人を美化するものかと熟々感じた。

私も最う少し經つて結婚ずる。而して新ホームを作る。洋行してドクトルの學位を得て歸朝。病院を建てる。嗚呼如何に前途に光明が輝いて居るだらう。其時は私は藥局もやる間に合はなけりや受付でも何んでも——ドクトルの令夫人が受付とは——何構はない、夫に一身は捧げたのだから、夫の爲めには水火も辭さない覺悟だ。けれど若し若し、彼の寫眞突返へされたら噫！其時は什麼しよう！髮を剃して山奥で一生を淋しく暮さう、然う思ふと又無暗に寫眞が心配になる。先樣はあんなお立派な御容姿なのに、手札形で、私は可笑いのをカビ子なんかにして、臺紙が一寸ハイカラだから餘計變に見える、明後日か明々後日あたり着くだらう、而したら嘸お呆れなさるだらう。

這麼こと計り考へてるので、幾度も間違つては、篦を付け直したり、縫ひ直したりするので、どうも手の方が捗らない、もう思ふまい、どうせ成る樣にしか成らないのだもの、氣を揉んだつて仕方がない、運は天に任せて了ふ。

却々よい所がつかまへてあるが、情の浮ばないのは、どうしたものであらう、書き方が冷やかな所爲か誠に殘念である。





戀を戀する娘の日記

こほろぎ

十一月五日。

あゝ好いお天氣だ。

今朝起た時は何だかゝう魂を持つて去かれた樣にぼんやりして何にも解らなかつた。私は何を思ひ出したのか着物を着替へて出かけた、お師匠さんの處へ往かうと思つて。

出て見ると存外冷々した風が腋明から身にしみる、昨夜の雨に土が洗はれて埃も立たず、何となく街がしまつて見える。新道の角迄來て『ひよつと不在ぢやあるまいか』と思つたが、此處迄來たもんだからと構はず歩つて見ると三味線の音が聞える。新道は別に變遷もしないが、角に大きな八百屋が出來た、前には確か唐物屋だと思つてゐたが。其新店で梨と葡萄を籠に入れさせて、久し振で岡安の格子を潜つた。

稽古してゐたのはつひぞ見馴れない年増、『初音』の合の手の、ほんの一くさりの處を幾度も〳〵教はつてゐる。一寸横顏が富士屋のお内儀さんかと思つたら違つてゐた。近頃始めた人らしい。やつと稽古を終つて『お待遠樣』と此方を向いたら存外若い痩形の、染小紋の袷に博多の帶を締めた奥樣風の人だつた。お師匠さんは『よく道を忘れませんでしたねえ』などゝ、それでも大變悅んでゐた。お師匠さんまあ何處迄肥るんだらう、でも藝人だの待合のおかみさんだのは、いくら肥つても醜くないから不思議だ、白い圓い手で三味線を彈く度に袖裏の紅いのがチラリと見えるなどはおばあさんとは思へぬ程美しい。

高い調子で小鍛冶を一つさらつたら件の奥さん感心

して聞いてゐた。長らく休んではゐたし、何しろ今朝の事だもの、まるで氣が乘りはしない、自分が唄うてゐるんだか他人が唄つてゐるんだか、上顎の邊に何か機械があつてそこから聲が發る樣な氣がして。それでもかういふ事は一番好い。ぐづ／＼考へ事などしてゐては到底唄へないから據無く何も彼も忘れて了はなければならない。一生懸命汗になつて唄つたお蔭で大變好心持になつた。

歸途につく／＼思ふと、今日は上天氣で洗濯やら張物やら家中が忙しいのに、自分一人暢氣に遊んで來たのが如何にも濟まない。それにお母さんが本所へ往くと云つてゐらしつたのに留守番が無くて嘸困つてゐらつしやるだらう。あゝ是だけの事を辛と考へられる樣になつた。今朝の心持は實に何とも云ひ樣のない程變だつた。其筈さ昨夜三時迄起てゐて、あんな長い手紙を書たんだもの。だが氣のたつてゐる時は爲方のないもので、あんな意味の分らない失禮な手紙を、まあ夜中で幸！　あれが晝間で直ぐ郵便函へでも投り込んで了はうものなら、どんなに物笑ひで、感情でも損ねた日には取返しが附かなかつた。さう云へば彼の破つた紙屑を私は如何したらう、どうも今朝下駄穿いて風呂の焚口迄持つていつた覺えがないから、事によつたら平常着の袂かも知れない、まさか落しやしまいね、そこいらへ落して置たら大變だが……。

自家の前も荷車ばかりよく通つてごみ／＼穢い通りだ。駄菓子屋の店に栗の煠たのが出てゐる。お父さんか「今度暇な時に目黒へ栗飯喰べに連れてつてやる」と仰つたつけ、お父さんの「暇な時」はいつの事だか宛にならない。

中の口へ入つて來ると「お歸んなさいまし」とおたきが袴を脫す。

「お母さんもうお出かけになつて？」と訊くとまだゝと云ふ、まあよかつた。

「茶の間にはもうお膳が出てお母さんが一人で喰てゐらつしやる。

「只今」といふと、

『はい、どうでしたお師匠さんは』と御機嫌が好い。眞實に私の母程優しい母はたんとあるまいと、今始めて氣が附いた樣にしみじみ勿體ない。

少し落付くと汗で肌襦袢が冷やりする。頭の痒い事〳〵、昨日の髮は横毛が新しかつた故か髷がぶゝゝゝくぶくして廻りも一體に少し出過だ。

種々お話しながら帶を疊んでゐると、『まあ喰べて了つたらさ』と仰しやるから着物は脱放しにして置て御飯を喰べる。あれだけ歩いてあんな高い聲を出した割には、すつかりお腹の空た樣な氣がしない。



お母さんは早く濟ませてお支度をなさる。『藏の二階から羽織と長襦袢を出して來ておくれ』と仰るのを、ハイ〳〵と返事しながら御羽織だけ出して、長襦袢をころりと忘れて了つた。『あ、今一度いつて來ませう』といふのを『いゝよ〳〵』つて、出てゐる方ので間に合してお了ひになつた。

あとで散かつた着物をまとめて簞笥へ收はうと思ふとあら！例の圓めた反古がちやあんと簞笥の上に乘つてゐる。まあこんな處へ乘せといて、それでもよくまあ見つからなかつたと宛もない神佛に手を合せたく

なる。此頃の樣に物忘れが甚しくつちや我ながら信用が出來ない、お母さんが何とか思つて居らつしやりはしまいか。

たまに歩いたので隨分くたびれた。足が重くて〱簞笥の抽出しを明るのも臆劫でならない。と云つて靜としてゐると不知不識物思に落ちて了ふ。肌襦袢や手巾を洗濯しようと思へば竿が一ぱい塞つてゐるんだもの。

お久はお供で往つて了つたしおたきは張物をしてゐるし家には私たつた一人ぎり。此機會を何かに利用したら――、と思ふがさて何の方法もない、さあ然なると急に寂しくて〱堪らなくなる。此頃のくせで私は寸時も靜としてゐられない、自分は何か重大な任務を帶びてゐて一分時も空に費す事を許されない身である樣に、絶えずあくせくしてゐる。其くせ何か一つの仕事に手を着ると、「あゝこんな事は何時でも出來る、もつと大事な用をしなければ」と直ぐ止めて了ふ、と手が空く、手が空くとぢつと目を据ゑて考へ込んで了ふ。はつと氣が附くと、「あゝこんなに遊んでゐちや」と又他の事をする、また「こんな事なんか」と止める。どうしてかう心が忙しいんだらう。

お留守番は長火鉢の前に端然と坐つてゐなくつちやならない、それが私には大苦痛だ。五德を拭いたり灰を均したりして見ても、さつぱり意味がない。座蒲團の下から責任が手を出して擽る樣な氣がする、私の責任はどんな責任だらう？　ほんとに妙だつちやない。

時計が二時を打つ、鐵瓶が鳴り出す。壁には三味線が二挺かゝつてゐる。何だか意氣な端唄でも中音で唄つて見たい。どうせ三味線を習ふ位なら、清元か歌澤でも習つて置けばよかつた。長唄はおさらひの時などは樂しみだけれども、かう一人で寂しい時に彈くには何だかうつりが惡い。聽衆もないのに大きな聲して大薩摩なんぞ唄へやしないわ。

鉢前の秋海棠もすつかり色が褪めて了つた。またあの盜賊猫がきよろ〱何かねらつてゐる。毛色がいゝから飼つてやらうと思へば、お魚肉見せても寄つて來

ないんだもの、どうしてあんなに疑ひ深いんだらう。

あゝ今日は何か物足りない樣だと思つたら、さうさう、おやつ時分だつた。茶簞笥を開て見ると唐饅頭が入つてゐる、おや／＼唐饅頭なんぞ有難くもない。おや、郵便？　もしや……？　と身體がぐら／＼ッとして夢中で唐饅頭を頰張つて了つた。

おたきが濡手で摘んで來たのを見ると何だ、馬鹿にしてゐる！　帶封の相場表が。

いつの間にか私は部屋に入つて墨を摺つてゐる。紙も展げてある。お手本も出してある。此頃は大層勉强家になつたとお母さんも悅んでゐらつしやる。『昔と違つて、琴三味線や針仕事ばかりではいけません、女は何より手が書けないと不自由だからね』と幼い時からよく叱られたが、此節は打つて變つて好きになつた。こんな事ならもつと早くから行つて置けばよかつた。今迄ふわ／＼遊んでゐる間に勉强もし、せめて小說でも澤山讀んで置たら、人樣のおはなしを聞くだけでも解つて、どんなに面白いだらうに、でも今からでも晚い事はないわ、せつせと手習ひでもしたり、思ふ事をすら／＼手紙に書く位は、ぢき出來るだらう、いゝえ是非ともさうならなくつちやならない。

もう小春日和といふのかしら、今日の長閑な事は。此部屋は餘り暖か過ぎて逆上て仕方がない。

日光が廻つて正面の圓窓に梅の枝がぱつと映る。此節は每朝自分で掃除をするから、日が射しても硯箱の蓋に塵埃の浮く樣な事はない。私も年齡を考へればもう此位は當然かもしれないが、自分で部屋の整理もし其きちんと片附いた机の前で勉强するなんて、ほんとに進歩したとでもいふものか、何となく嬉しい。

臺所でまた八百屋の小僧が何か話し込でゐる。おたきもあんな無骨ない風をしてゐて却々よく喋る。あゝやつて手を明てゐる間に解き物でもしたら宜さゝうなものだに、お母さんがお留守だと小言の云ひ手がないもんだから、いゝ氣になつてゐる。若い盛りをあゝ燻つてばかりゐて、よく苦にもならずに元氣にしてゐられる、自分ぢや今が若い樂しい盛りとも何とも、氣が附

かずにゐるんだらう。

まあ何といふ暖かな日だらう、顔が熱つて熱つて涙が出さうになる。何處から入つて來たのか大きな蜂がぶん〳〵唸りながら其强い羽を窓の障子にばさ〳〵とぶつける、ほんとにまあ此蜂は氣でも狂つてゐる樣だ、此部屋には何も求めるものはないのに、大變焦れて一つ處をぐる〳〵廻つてゐる、刺しさうもないが氣味が惡いから窓を開けてやると、ぶうんと威勢よく飛んでいつて了ふ。まあ向ふの洗濯屋の物干の綺麗だ事、ああこんな强い日に向つて白い物を見詰るのは目の毒だお〻眩しい、眉毛の上の肉がきん〳〵痛む。あ〻さうだつた、私は昨夜ろくに眠なかつたんだもの、道理で先刻から眠くて〳〵爲樣がないと思つてゐた。いくら勉强が大事だからつて、こんな時にはやつぱり眠た方がい〻、もう〳〵氣が遠くなる程眠い。

柱箱を枕に、壁の隅に日を避けて横になつて見たが、眠ようと思ふと却々眠られないものだ。臺所でもうお鰹節を掻き出した。今から寐ても僅かの間だ。いつそ奮發して目を覺して了はうかしら、でも今からおやどうせ何も出來やしないのだから、少しかうして休んでゐよう。お母さんはどうせ晩でなくつちやお歸りになるまい、本所の伯母さん許へいらつしやると毎時長いんだから、其かはりお土產が樂しみだわ。あ〻今日は五日だつた、水天宮樣で電車が込で嘸困つてゐらつしやるであらう。

五日といふ日は不思議と私に關係が深い。今年の春の五日――、あ〻苦しい身體中の血が殘らず顔へ上る樣で、熱いんだか何だか感覺のない程苦しい、乾度また紫色になつてゐるんだよ、どうしてかう逆上性なんだらう。お久なんぞは逆上る〳〵と云ふけれども、ついぞ赤い顔したのを見た事がない、ほんとに羨しい、逆上の下る藥と瘠る藥はないものかしら。

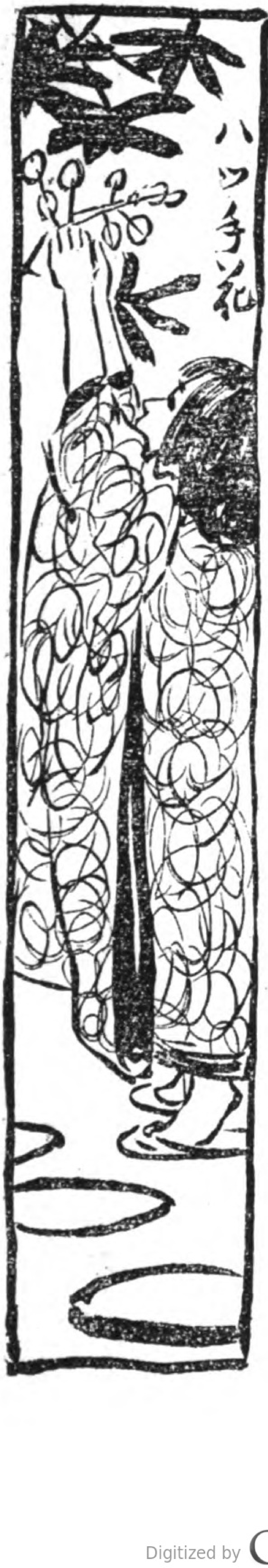
あ〻五日！　五日！　彼時が四月の五日で今日が十月の五日と、丁度半歳だ、まだ半歳しか經たないんだわ、ほ〻〻〻〻〻〻。

あ〻焦れつたい、目瞼がくつ〻き相になつてゐて却

却眠られない。脣の皮の剝るのが氣になる。髪がいよいよ壞れかゝつて來た、明日あたり又おくめさんを呼びに遣らなくつちや。今日お師匠さんでは「かん〱」が能く似合ましたねえ」だつて。ほんとに面白い人！　あの社會は暢氣だから彼家へいつてゐると自分迄釣込まれて、何もかも忘れて了ふ。またお稽古を始めようかしら、長唄ならまう下品な事はないわ、勉強もいゝけれども、それは



急に成功の見込もないし、恥かしいが私は他に是と取立て誇る程の能もないんだから、あゝ始めやう〱。長唄は私の爲には神樣だつたぢやないか。私の小鍛冶は——、ほゝゝほ、よく密と立聽しちや翌日いろんなお世辭を仰るんだもの——、ほんとに今年の春は佳かつた、今迄は春でも秋でも同じ樣に思つてゐたが、春は實際いゝ。麥畑が海の樣に青々として、眞の海は其果に僅に光つて



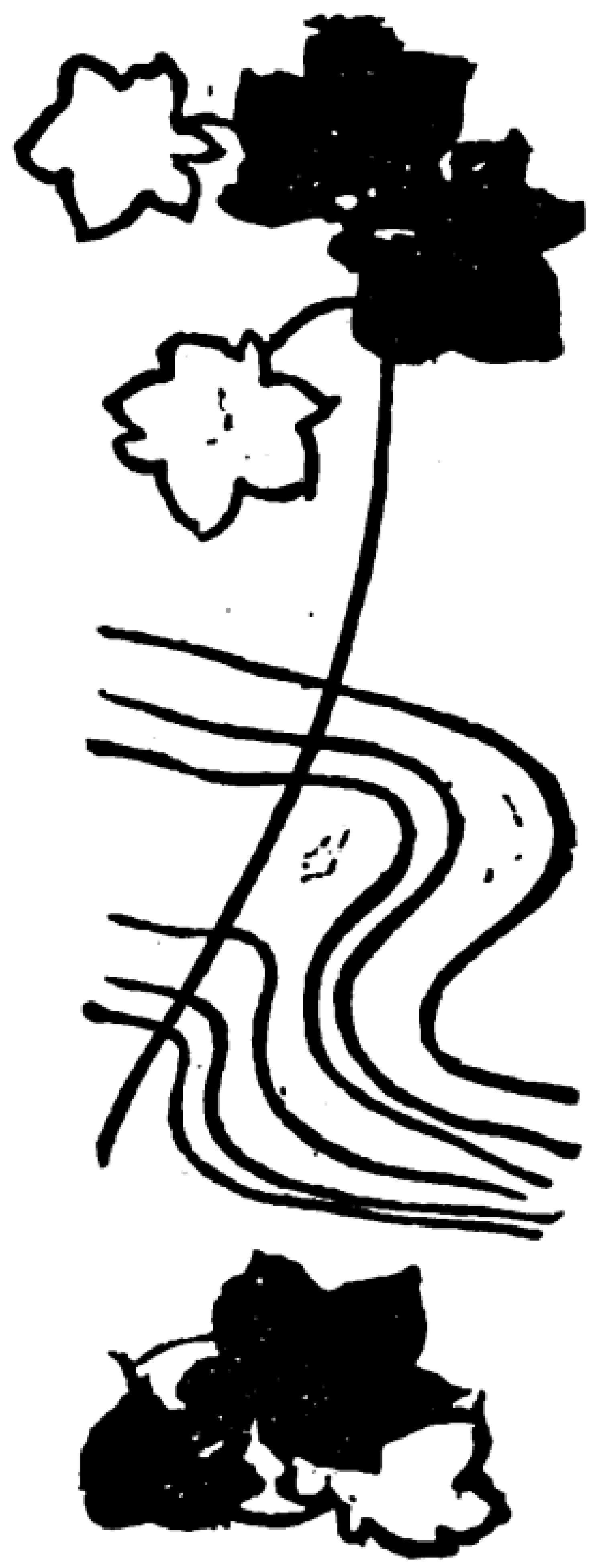
ゐた。百姓家の四目垣には枸杞の葉が延びて、あの井戸端を廻つて小高い徑の上に出ると、二階造りの別莊の窓が――、あゝ、ハーモニカを吹てゐらつしやる。菜の花の匂ひがいゝ事、おや又ぎし〲擔桶を荷つて來る、あれが田舍は嫌になつて了ふ。まあ田子の浦だつて、ほんとに物も云ひ樣で綺麗になる。あゝ、あの百姓かしら私を呼んでゐるのは。此邊ぢや衆がもう私達の事を知つてゐるのかしら、知られたつて怖かないけれども――、あゝうるさい何だつて自分の名なんか呼ぶんだらうね。

『お豆腐屋が參りましたが今日は如何でございます？』

おゝいやだ、まあ私は――折角好い心持に眠かゝつてゐる處を起されて了つた。

お豆腐なんぞ要りやしないわ、晩食のお茶はお母さんがちやんと極めてゐらしつたのに。

戀する娘の心もちといひ、其の態度といひ、實に申分なく描かれたり、構想既に凡ならず、描寫亦細に入り、閑々の情、時に人をして五里霧中に入らしむるの感なき能はざれども、此の場合としては亦斯くならざるを得ざるべし、敬服々々。



花子むつかりの記

山中多根子

十月一日。今日は朔日なり。花子（三歳）の誕生日なれば竹に負はせて產土神御靈神社へ詣る、歸途寫眞屋に立寄りて花子の紀念に撮影す、道具に使ふ剝製の犬が御意に召し凭れ掛つてのんの（歸る事）否々と叫ぶ、無理に賺せど泣き出すに困じ果てたり、竹がお晝は大きい鯛とゝで美味のですから歸らぬと玉（猫の名）が盜つて行ますと言ふに小さき耳傾けて、おいちい、おいちいと鸚鵡返しの早や竹の脊によりかゝりて犬の事忘れたらむ樣可笑し、歸り路に浮世小路にて紙屋のお兼樣に遇ふ、妾が里近き紙屋の娘なりしが兩親逝りて後、家運悲しく、今は萍の身の定めなくさる料亭の酌人となり果て、男もちて子迄なしたりと人の噂に傳へしが、見れば肩揚の初心しき昔姿は消え果て、物言ひも甲斐々々敷、わざとらしき愛嬌も見せて何處やらに艷なる物腰、妾が嫁ぐ前は屢ゝ遊びに來てつれづれ慰むヴアキオリンの拙き音にも聞き狃れぬ耳を怪み、店の若人が戲言に面赧めしも四年の昔と覺えしが、變るは人の世よと後影二度三度顧みぬ。

花子は何處の姐ちやん〳〵と竹に問ふも竹も知らず奧樣何處の別嬪さんでおますと問ふ心の裡に何處やら羨しさの仄けるも淺猿し、人形舖に立寄り、ダーク人形二つ購めて立ち出づるにピン〳〵欲しと言ふ、竹も解らず躊躇ふにアレ〳〵と指すを見れば小さき三味線なり、何處誰より聞覺えしか、竹も呆れ貌なり、價廉ければ是も購ふて歸る、お晝の菜は却々の御機嫌にて、今日は花ちやんのお誕生日だよと言ひ聞かせたるに、御祝儀に添へし柿鮨の酢きに目を細め乍ら、わたち明日もお誕生やと言ふ、竹も妾も腹抱えたり、夜に入りて父上蓄音機を取り出で給ふ、疳高き長唄の勸進

樣に驚かされてか、モー寢んね〳〵と次の間に奔り出でゝ啼き出したれば父樣も止め給ふ、跡聞かまほしげなる竹の恨みぞ殘れる。

二日。小春日和の麗かに庭の楓も色づきたり、花子は竹に負れて戸外に出でぬ、見上ぐれば虛空よぎる白雲一片、なにとなき秋の思ひ逼るに耐へ難く、ゆく末こし方を思はれて、床の間の陰暗き立琴に、朱總せし房長う垂れて浮び出づるは三年前ぞかし、妾が嫁きてより夢の如く月日は經過ぬ。新婚當時の事は更なり、笑ひし事、悲しかりし事、懷しき事とり〴〵に、追懷多き幻想に獨り微笑も可笑し。花子の泣き聲聞ゆるに俄に胸破れて何事ぞと問へば、戸外に遊び居し童のヂヤボロ持ちて戯るゝを見居たりしに、上手を見せて空高く揚げし獨樂の折惡しく孃樣の頭に少し觸りしにぞ誠に無調法なり、許させ給へと汗拭き〳〵竹は詫言す。檢むれば別に疵も無し、其れより暫時御機嫌いと〳〵惡しかりしが、明石の伯母樣來られし騷ぎに泣き止むお土產にと枝乍ら鈴生の柿、色見事なるが珍らしく暫く遊びしも、伯母樣の此方へ來よと仰さるゝに嫌と言ふ、強て捉えむとすれば皴のよつた、おばちやまイヤと言ふ、失禮なりと咎めむも是非なし。午後父樣歸り給ひしにお許を得て伯母樣花子、竹と四人連れ立ちて博物塲へ行く。美術館もそこ〳〵に花子の氣に入りしは象が前にある小山の如き藁束をかしこげに鼻に扱き乍ら、大きなる耳搖せて喰ひ盡す樣也、アレ〳〵と鈴の如き聲張り上げたれば一齊に四邊の人の眼を惹きぬ。火喰鳥の前に到りておばちやま〳〵と言ふ何事と考ふるに明石の伯母樣の腰かゞみたる樣に似しとてなり。竹はどれ？と尋ぬれば新に來しと言ふ箆鷺を指して竹々と言ふに竹のふくるゝ樣可笑し。花ちやんは何れと伯母樣の問はるゝに秋水淺く羽搔せる鴛鴦の色美しき羽を指すに、餘り大人氣たりと怪み問へばアレは花ちやんにあらで花ちやんの好きなのと答ふるも罪なし。菊もとり〴〵に咲き出でたる園の逕を逍遙して歸る、伯母樣排斥の聲も止みたるは此行の賜なり、伯母樣此夜泊らる。

三日。今日は竹を殘して伯母樣と花子を連れて墓詣す。墓は下寺町なれば車を傭ふ、車上にてわたちくるゝま大好と連呼す、寺に到れば門前の花屋にて花を買ふ、舊知の老婆いでゝマア大きうなられてお可愛い事と愛想よきもうれし。閼迦桶の水に半ば挿せし野菊、鷄頭の色深う秋を見せたるに、これをどうするの〳〵と伯母樣を困らす。墓は三つ並びたり、一番小さく苔むせるが御先祖の墓なりと嘗て夫の仰せ給へれば先づ四邊を淨めて二人恭しう額き次、次と拜し終るに花子も同じ樣に見習ひたり、伯母樣は眼の中に入れたき程可愛しと涙浮べて仰せらる。頓て天王寺に志す、道行く人に淋しき町の名を問へば玆は六萬體町なりと答へて過ぎぬ、夕陽ケ岡、安居天神も過ぎて、杜深く五層塔の聳ゆるに群鴉飛び交ふ景色並ならず、玆は天王寺と伯母樣に敎へられて首肯くも愛し。極樂の鐘に驚き、轉法輪の朱門色褪せたるに、白紙とりいでゝ、寫生する人達あり、花子を見て、孃樣是を與げませうと、取り出す繪葉書にも秋は籠れり。難波の秋の夕暮は此邊に若く者ぞなきと西鶴が懷硯、思ひ合されて淋し、歸れば父樣今日は醉ひ給ひて花子に指人形を躍らせて見せ給ふ、年ゆかぬ竹も次の間より笑ひ興じたり、最初は伯母樣を嫌ひしに今日は始終膝を離れず、畵の本取りいでゝ伯母樣に五月蠅く問ふ、氣の毒なりし伯母樣泊らる。

四日。伯母樣と訣れを告ぐ、歸られし跡は花子の機嫌惡しくむつかりしも門の戸すぐる樂隊に忘れて再び伯母樣の事も言はず。午後より妾も婦人會に出席す今日父樣が花子を傅りして留守待たむと仰す、忝く出席して歸途嘸かし困じ給ふらむと車上乍ら心は疾く家路に歸るごとくいとゞ車の遲きを喞つなめり。是れ見よホントに困つたよと投げ出されし父樣の日記に或は詫び或は可笑しくうつしとりて行末を謹まむと思ひ定めつ。

今日安は婦人會に出席す、花子の番をする事となる、最初は繪葉書帳の名所繪抔見て是は何是は何と五月蠅く問ひて遊び居たりしが中途にて飽きたる樣子に

こは堪らじとワッフルを袋乍ら與ふ、効を奏して暫時無事、急に玉（猫の名）が見えぬと言ひ出す、勃勃低氣壓襲來、竹は裏口で玉を探す、急にかあちやまはと言ひ出す、菓子を買ひに往つたのだと言ふ、すぐ歸るのと連發する。屹度直ぐ歸るとの證言を得て暫く無事、更に歡心を買はん爲晩は牛肉だよと言ふ、ビーフ好き〳〵トヽより好きだと言ふ、竹に豆腐と葱を買ひにやる、暫くはビーフで持ち切る、袋を見ればワッフルは既に退治されたり。更に柿二個を與ふ、頓て電燈が灯ると急に泣きたい樣な貌をして母ちやまは〳〵を連呼す、今直に歸るよと言ふ、諾かず母ちやまの所へ往くと言ふ、竹に母ちやまを呼びに往けと命じる、竹、戸口に暫く立ちてすぐに歸られますと返命。今暫しの辛抱なりと、人形を躍らせたれど今日は徒勞、手風琴を持ち出でゝ竹の君が代はと奏でたるに、立上りて手風琴を奪ひとりて次の間に抛り出す、餘りの事に今度は少し强硬に母樣はすぐ歸るから大人氣く待つて居なさい、と六ケ敷顔をする、暫く無言なりしが急に次の間に入りてシク〳〵泣き出す、是れ平素母の敎育慈愛に過ぐるを以てなり。

家庭百科全書十二　婦人の生理と衛生

牧野清子著

生理衛生の智識は家庭生活の上に極めて必要なる事柄にして苟くも肉體の貴重なるを知る人にしてこれを等閑に附すべからざるものなれども、從來有觸れたる生理書の如くは、兎角理論にのみ走りて、肝要なる生活上に交涉少きを以て遂には無趣味無用のものとして遠ざけらるゝの弊あるがごとし、本書は即ち是等の欠點に省みる處あり、生理衛生の說を理論に陷らしめずして專ら實際の場合に當てはめて說を設けたるものなれば、家庭に於て晩餐後の語り草に其一節々々を引き出して讀み味へば、主婦も主人も、又子供も老人も自から生理上の智識を得て實際上に益すること甚だ大なり、くだらぬ小說に浮身を窶す人々も此書を手にすれば、自然と天地の改まりたる心地すべし定價四十五錢（博文館發行）

△小說　血寫經

堀内新泉著

一個人の苦痛は一個人に忍びて斷じてこれを人に語る勿れ我が苦痛は我れ一人にて負ふ、これ人生の義務なりとはこの作者が人生の行路の門出に發せし一語にしてやがてこの作を捷ち得たる動機なり、本篇中收むるところの佳什八種、いづれも潜心、聳聽すべき好話料にして言辭の間に敎訓的處世的の語句の多きは又要するにこの作家が立志小說の壇場一方の雄たる所以ならんか。價四十五錢（成功社發行）

△閨秀文範

大月久子編

上は紫、清の源語枕草紙より、下は一葉晶子の小說日記に至るまで凡て文筆に長ぜる閨秀の名文佳什を網羅して文を學ぶものゝ軌範としたるものなり。定價四十錢（文祿堂發行）


小春



満足な境遇に居ながら斷えず寂寥を感ずる妻の日記

玉露

十月一日　今日から心の日記を書いて見よう。夜でなければそんな事しては居られない。今はもう八時良人は會社から何處かへ寄つたと見えてまだ歸らない健坊は定り通り八時に寢てしまつた。友染の可愛いゝ蒲團の中に神樣のやうな、罪も汚れもない顔して……

今日は健兒を連れてかね子樣の御宅へ伺つた。此暮生れる赤ちやんの爲めにおむつの形を拜見したくて………。三角の一角を長くのばして股ばさみにしたやうなもので其中へ都合の好いやうに切れをあてゝ置けば宜しいのださうで新聞で形を切つて下さつた。

「もう直き同級會よ入らつしやいな」と仰つたから、「エよく鏡と相談しまして」と申てお別れした。

健兒が漸く世話がぬけたと思へばまた赤ん坊!!!今日もかね子樣のお話につぎ子樣から「著者と相談の上發行を止むる事に致し候」と云ふ御手紙が來たさうだがほんとに子供は二人もあれば澤山。私は男子が一人あるからこんどは男でも女でも。も一人限りでそれでいい、かね子樣はあんなに御丈夫だから老先き樂しみにお子樣澤山あつていゝけれど私のやうな弱虫は子の出來る毎に壽命が縮まるやうな。酸性の形勢不穩に苦しめられるのを始として妻は見にくゝなる。產む、育てる、さうして成長くなつたら扱てどんな人になつて呉れるやらお嫁でも來れば私は 姑!!! オゝいやだ事!!! けれど私それ迄生きては居ないだらう體は弱し兩親も早く死なつてしまつたし……私は年老つて生きて居たくはない精々四十二三までゝ澤山だ其間に二人の子供

を理想的に育てゝ家政をきちんと治め道樂に讀んだり書いたりして暮せばそれで結構だと思ふそれであまりお婆さんにならない内に死んでしまひたい。孤兒の私だもの死んだつて葬式なんかして人に迷惑かけるのもいやだし形ばかりの法事や下らぬ石塔なんか馬鹿々々しいからそんな事は一切やめにして燒いて粉にして月明の夜良人がボートで何處かの灣に漕ぎ出して其粉を海の中へ吹きとばして頂きたい。お友達にしろ誰にしろ思ひ出して下さる方があつたら其時は子供の力になつてやつて下さればいゝ。

とは思ふものゝそれで私なる者が此世に永久終りをつげてしまうかと思ふと殘り惜しいやうでもある。これでも女優になつて星と輝く電燈の下に華の姿をよそほひこらして滿場の紳士淑女を恍惚たらしめ出づるに馬車入るに玉樓の榮華の夢の生活もして見たいし尼になつて山中深くいほりを結び木の實を食ひ泉に浴し玲瓏玉の如き心しづかに汚れなき身を端然と坐して孤燈の許に讀經の 行 すました。生涯もやつて見たいし。氣高い姿もして見たいし仇つぽい風もして見たいし……

……ア門が開いた音かしらお歸りぢやないかしら。

「何をやつてるんだか」なんて冷笑されると心持ちが惡いから今夜は止めとせう。

十月二日。朝早くから支度してまた健坊と出かけた第百銀行へ拂込として白木屋へ行つて三越へまはつてお夕飯の時分に大急ぎで歸つて栗きんとんやメンチボールを料理へて待てども／＼また今夜も良人は歸らぬ。健兒は眠くなるお湯は沸いて居るしヱ、お先きへ頂いてしまへと入浴や夕食をして今丁度八時。白木屋や三越の買物は此月末に拂ふのだがまた良人がいやな顔をしやしないかしらと思ふとつまらなくなる尤も知らん顔をして銀行から出しておけばいゝけれど……。男は夜でも勝手な時に歸つて勝手な所へ行つて好きな事が出來るけれど女はお金のつかひやうがないのだもの着物でも買ふ位は仕方がないわ何でも一家は皆心を合せて勤めなけりや駄目だ。親から頂いた財產をどうせ失くすなら良人も私も同じやうにつかひますわ。僅かの事

を角目だつて意見なんかするより其方が餘程いゝ。何も乞食になるわけではなし……。とお歸りがないので少々氣が强い、今夜は何も感想もないから日記もこれでよして作樂會の原稿でも書いて見よう。ダンテ、ガブリエル、ロセッチイの掬水を新體詩に作へて見ようと此間から考へて居たのだから……。

十月五日。昨日は歌舞伎へ行つて見た。女歌舞伎と云ふのを見て佛國の小說をよくも此樣に德川時代に當はめて作られたものと感心したなか〳〵面白い狂言であつた。中幕は高野山の塲を見て急に隱宅へ預けて來た健兒の顏が見たくなつた。父君に逢はせてよと遙々高野の山にたどり來た我子の成長した姿を見ながら情を殺し淚を呑んで何氣なく別るゝ苅萱の心中あまりに不自然ではないかしら。修業の爲めと云ふもあまりに消極的に思はれてならぬ。然し親子の情を寫したものは眞に身に浸みて來る。子持ちでなければ此味は分るまい。

淸七と云ふ馴染の出方に良人が『女の始末位出來なくて坊主になつちや駄目だねえ』と云つたら『へエ左樣ですとも私や坊主にやなりませんなこれでも女は五人もありますけれど……』と云ふ『まああんな事……』と私が笑つたら『まつたくで……おふくろもあれば叔母もあり姉もありますしな……』とすましたもの。

終りにお祭佐七と云ふ鳶の者の江戸ッ子氣性を見せたものであつた元來私は日本橋の生れ、武士氣質の實母に育てられお茶の水の校風に養はれても泉鏡花氏の小說を愛し浪六氏の奴の小萬を再讀三讀するのである隨つてこんな狂言も見に來るのである。

芝居もよかつたが直私達の隣に居た藝者達も美しかつた。一體日本婦人は引立たない人が多いが比較的藝者は表情もあり活き〳〵して見える。男子は折にふれ時につけ彼等を招く機會が少く無い彼等は可愛いゝ顏に巧に化粧して美しい衣服を美事に着こなして華やかに笑つてもてなすであらう。それに私等女房は經濟を思ひ家政を省みつゝ無駄のないやうに考へて暮して居るのである。云はゞ女子と生れたのは一つで方面が異

つて居るのであるから彼等に牡丹花の艶なる風情あれば我等には白梅の氣品をもつて身をたしなみ『ア、女房はぢじむさい』と思はれぬやうせなければならぬ。

今日は一日家に居て裁縫したりガラス磨きしたりして暮した良人も早くお歸りで今お客と奥でお話して居られる。まだ十時にならないから靴下の穴をふさいでおかう。

十月六日。馬政局の幹部總辭職の號外が來た。國民に勤勉な氣風を養はうと思はゞ競馬などは止めたがいゝ。日本一の美人とやらも本日御結婚をなさるゝさうな。容姿美しく生れたのが已に天下の果報である。自から果報者と知つたら感謝の意もて萬事に誠をつくされたいものである。

晝は透通るやうな日和であつたが今夜は月が曇つて居るそよ〳〵と目に見えぬ程の秋風が吹いて虫聲あはれに。夫待つ間をかうして居ると何だか心細くなつて來る。父上も生きて御出の頃。まだ今の夫を兄様と呼んでお互に學校通ひして居つたが或る年の晩春國元から從妹の○○さんが來て兄様と大變に仲がよかつた。夫と見て○○さんを戀して居る△△さんを。自家藥籠中の者にして一夏を文學のお話したり詩のお話伺つたりして暮たが何も知らぬ△△さんが全く○○さんを思ひ切つて一途に私を思つて下さるのを思ふにつけ淺ましい女の意地を耻かしく丁度今夜の様な晩そつと部屋をぬけ出して一切の心を打明けようと裏庭の萩のしげみに身を忍ばして向ふの二階の燈火を眺めては△△さん!!!と呼ばうとしてはためらひ〳〵遂に其儘引返して寢てしまつた事もあつた。私ばかりを愛して呉れぬ兄様なら私も其つもりで決して妻にはなりますまいと心の奥で覺悟して居ながら去り氣なく月日送るうちに結婚話も出るやうになり兄様も何分宜しくと云つてしまつた。が私許りはまだいや〳〵の一點張りで。口にこそ云はね父様の心中物足りぬ事に思召たであらう。其年の秋縁に腰かけて月見て御座す父の後姿をつく〴〵と見たらばいたわしや。御髪の薄くなつた事。十分二十分三十分!!!ぢいつと見つめて私はすつかり覺悟をき

めました。それで忽ち十一月に式をあげたのである。今は健坊も出來て至て平和に暮て居て『○○さんはあなたの初戀人ですわね』などゝ云つては笑ふ。○○さんも今は人妻△△さんも子供まで出來て居る。タイムの力は人の血を吸つてしまうと見えて今は其四人寄つても世間話しては平氣で別れる。とは云へ今夜の樣にこんなに思ひ出す時もある。あゝ父樣はお亡なりになつてしまつたのだ……。健坊の生れたのを大變にお喜こびになつたがせめてもの孝行だけれど……。

もう十時も過ぎた。いまにお歸りになるでらう!!!。

十月九日。かねて出產に大學病院ときめて居たが色々內部の話伺つて急に家でする事にして今日健兒のかゝりつけの下條先生から紹介して頂いて新町の玉木樣に手紙を書いた。明日は早速まつにでも持つて行つてもらはうと思ふ。此前健兒の出來た時には自分で手紙を書くなどゝ云ふ事はとても耻かしくて出來ないのでいやがる良人にむりに賴つて書いて頂いたが此度は良人に賴んだなら一言の下にはねつけられてしまふだらうし自分でも賴まうとも思はないで一人で書いてしまつた。思へば私も齡を取りました。

と云へば今夜のやうな明月にもヴアキオリン彈くでもなし琴を出すでもなし、あの柿の木の枝へまん圓いお月樣がかゝつて其まわりの雲が美しく輝いて居る處は丁度いゝ畫手本だと眺めながらさて唐紙をひろげて畫筆とる氣も出ないとは矢張り齡の加減かしら、タイムの力は私の體の血と熱とを取つてぬかみその中に入れてしまつたさうな大かた星と菫のお香の物でも出來るであらう今度女の子が產れても私のやうな世話女房にはしたくないもの、然しこれでも知つた人達が仕合だ仕合だと云ふから可笑い。成程お姑を持つたり、定つた月給で生活したりしてお出の人樣から比べれば仕合に見える處もあらうが本人の身になれば至て平凡な身の上で張合もなければ樂しみもなし時には面白くない事もいやな事もありつく〲他人が羨ましいと感じる時もある。つまり世話女房でも何でも愛情と向上心。この二つに熱して暮したなら一番幸福だらうと思ふ。

まあ今夜ももう十一時に近くなつた健坊も大分せきが出るやうだ濕布をも一度しかへておしつこを出して水藥を呑ませてさうして寢るばかりにしてお歸りをまつ事にせう。

十月十二日。赤ちやんの布團も綿入れるばかしになつたからうして置いて來月にでも作れば間に合ふ。

午後に玉木樣がいらしつた前の時と同じ樣に診て下さつた何處も異狀がないさうで結構で御座いますと云つて御歸りになつた。

今。臺灣の鶴子樣から御手紙が來た御子もなく。御夫婦ぎりで。好きな處を旅行して意に適つた事業をなさる。實に實に羨ましいのは鶴子樣御夫婦。あれがほんとの本能滿足と云ふのだらう、人が何でも自分の最長所とする事で生活して行くのが一番樂しくもあり幸福でもあらう。私なんか元來人妻となる性質でないのに四疊半裏の生活に甘んじなければならないのは家の爲めとは云へ不幸の至りだ。とは云へ昔のお友達の中で。敎師などにおなりの方が紡績づくめの御召にハイカラの御髮御袴はいてもう御齡の知れる御顏に御化粧して御出のを見るとオールドミスも有難くはなし。さりとて御子樣は年々生れる御話は家事向の苦しみ話ばかりこれでも昔は御一緒にテニスもしたり西洋歷史や徒然草や幾何や美學の研究した人かと御氣の毒になるそれなら絹の座布團京机大きな腹に博多の帶をしめて坐つて心の日記でも書く私は最も中庸を得て居る幸福ものであるかもしれない實然「小人閑居して不善をなす」何の苦痛もないものだから張合もないなどゝ我儘も出るので大いに働いて居る人は何等の味もない飯も甘く食し私共には「めんどうな」位にしか思はれぬ。「眠」なるものにも最大愉快を感じると云ではないか。けれども平凡は遂に平凡なりで私のやうな身の上の人間に面白い日記の種もありやしない。

晝間はいやがつて吸入を少しもしない健坊が夜寢ついたばかりの時には何にも知らずにさせてくれる。良人は今夜も玉突きであらうもう九時になるどれそれでは吸入でも支度しませう

讀み去り、讀み來つて、後半二三頁のところに至り、文字飛舞活躍、恰も數千の伏兵一時に起り、劍戟縱横、人馬叫喚の聲を聞くがごとし、內心に非常の不滿を抱く人にあらざればいかで斯の如き文を成し得ん。冒頭數行の文字を味ひ見るべし。

日記文受賞目錄

▲後三年日記（壹等參拾圓）　石崎咲子

▲小姑の書いた嫂の日記（貳等貳拾圓）　若紫

▲戀を戀する娘の日記（貳等貳拾圓）　こほろぎ

▲滿足な境遇に居て寂寥を感する妻の日記（參等金拾圓）　玉露女史

▲田舍住の處女日記（參等金拾圓）　内藤千代子

▲荒び果たる我が心の日記（緣遠き女の煩悶）（參等金拾圓）　村の娘

▲巡査の妻の日記（四等金五圓）▲看護日記（同上五圓）▲事務員の不平日記（同上五圓）▲不遇日記（同上五圓）▲約婚前の一日（同上五圓）▲多勢の子を育つる母の日記（同上五圓）▲おそろしき災難日記（同上五圓）▲良人の生命を繫ぎ止めし妻の日記（同上五圓）▲虐待されし從姉の日記（同上五圓）▲女教師の日記（同上五圓）

▲初產日記（五等貳圓）▲隱れて書いた看護婦日記（同上）▲悟り得て嬉しかりし私の日記（同上）▲世帶日記（同上）▲麗人日記（同上）▲花子むつかりの日記（同上）▲平凡日記（同上）▲婚禮日記（同上）▲良人には見せぬ私の日記（同上）▲いたづら子を育つる母の日記（同上）

古今日記文粋

御幸日記

久我通親

廿一日、(治承四年三月)夜をこめて出させ給ひ、都を出させ給ふより、上達部殿上人皆淨衣をば着たる、音に聞きし和田の岬須磨の浦など云ふ所々、浦づたひ、はる〴〵荒き磯邊を漕ぎ行く舟は、帆打ひきて、波の上に走りあひたり、福原の入道は、唐の船にてぞ海より參らるゝ、播磨の國まで越えけるにや、いなみ野など聞ゆるにぞ、哀れに覺ゆる、御輿近く候ひて、ところ〴〵問はせ給ふ、播磨の國山田といふ所に、晝の御まうけあり心ことにつくりたり、庭には黑き石にて霰の形に石だゝみにし、松をふき、樣々の飾りどもをぞし渡したる御まうけ、海の鱗をつくし山の木の實を拾ひて營める、とばかりありてぞ出させ給ふ、風少し荒だちて、波の音もけはしく聞ゆ浮べる船ども少し騷ぎ合ひたり、明石の浦などすぐるにも、何がしの昔ししほたれけんも思ひ出らる、申の時に高砂の泊りに着かせ給ふ、四方の船ども皆碇おろしつゝ浦々に着きたり、御船のあし深く

て港へかゝりしかば、端舟三艘あみて、御輿かきするて、上達部ばかりは御船に奉りし、聞もならはぬ波の音、いつしかおどろ／＼しく浦人の聲も耳に留まりたり、是よりぞ國々へ召されたる使など返し遣はさるゝ便につけて都なる人に音づれける。

思ひやれ心もすまにねざめして
あかし來たるよゝの怨みを

何れの里にか鶏のほのかにきこえて、いとものあはれなり、四方の浦々霞みわたりてたゞならぬ春のあけぼのに、旅の袖の上其事となくぞしほたれける、潮みちぬ、出させ給ふべしとて、われも／＼と船とも營みたり、近く候へなど賴もしく思したる、いと辱けなし、唐の御船より皷を三度うつ、もろ／＼の船ども始めてこの聲に港を出づ、出はてゝぞ一の御船は出さるゝ、舟子楫取などこゝろ毎にさうぞぎたり、はじこがしの藍摺に黄なる衣ども重ねて二十人着たり、なぎたる朝の海に舟人のえいや聲珍らしくぞ聞ゆる、午の時傾きしほどに、室のとまりに着き給ふ、山まはりて其中に池などの樣にぞ見ゆる、船ども多くつきたる其向ひに家島といふ泊あり、筑紫へと聞ゆる舟どもは風に隨ひてあれに着くよし申す、室のとまりに御所造りたり、御船よせておりさせ給ふ、御湯など召して此の泊りの遊びども古き塚の狐の夕暮に化たらんやうに我も／＼と御所近くさし寄す、もてなす人も無ければ罷り出でぬ此の山の上に賀茂をぞいはひ奉りける、御幣まゐらせ給ふ、又私しにも參りて幣奉る、年老たる神との守あり、此の社は賀茂の御厨に、このとまりのまかり成りし、そのかみふり分けまゐらせて、御驗あらだかなり、社五六大やかにて幷び造りたる、皷打ちて、暇なく神巫ども集りて遊び合たり、是は御道のほど雨風のわづらひなどの御祈り申すとぞ聞ゆる雲わけんの御ちかひも思ひがけぬ、浦の邊りにたのもしくぞおぼゆる。

廿三日空も晴れ風も靜まりて、有明の月、淡路島に落かゝりて、又なく面白ければ、

淡路しまかたふく月をながめても
よに有明の思ひでにせん

備前の國兒島のとまりに着かせ給ふ、御所のつくりなり、御物具ども新らしく調へ置きたり、上達部殿上人どもの宿所ども造りならべたり、潮少し干て御船着きたまふ、汀遠ければ、御輿にてぞ上らせ給ふ、御所の東の御壺に、樂屋をつくりて入道内侍とも具してまゐる、樣々の直垂ども、錦をたち入れ、花をつけたる八人集まりて田樂をす、女のあそびとも見えず、たゞあらんだにあるべきに、海のほとりに眼驚かす者やあらんと覺ゆ、田樂果てにしかば、國のすしとて、おかかしげなる者共參りて、すしはしり仕うまつる。日暮れにしかば、皆罷りぬ、浦々御覽じやりて、入日の空に紅を洗ひて、向ひなる島かくれなる山の木立ども、蒼にかきたる心地するに、御眼にかゝりたる所々尋ねさせ給ふ、此の向ひなる山のあなたに、入道大臣はおはすると申すに、聞召して御氣色打變りにしかば、人人までも哀れに思ふ心の中とも見えたり、あからさまとおもふ泊りだにも、物哀れなるに、況て夷の館に入りぬらん氣色、如何ばかりと覺ゆ、邦綱の大納言御香づれありしなど申しける、何のはへも思召し分かず、此國に八幡の若宮おはしますと聞召して幣奉らせ給ふ。

廿四日の寅の時に、鼓をうちて備中の國せみ戸と云ふ所に着かせ給ふ、國々深くなるまゝに山の木立、石の立やうもきびしく見ゆ。

廿五日、申の時に安藝の國馬島と云ふ所に着く、これにて皆潮にて髮を洗ひ、身を清む、宮島近くなりにけりと、清き心を起す。

廿六日、空の氣色麗らかにて、神の心も承け喜ばせ給ふにやと、惠みもかねてしるし、日さし出づるほどに出させ給ふ、午の時に宮島に着かせ給ひ、神ほうの船尋ねらる、かねて參りまうけたるよし申す、陰陽師の船しばらく待たるゝ、空の氣色、所のありさま、眼も心も及ばず、大唐の湖心寺もかくやとぞ見え、神々山の洞などに出でたらん心地す、宮島のありの浦に神はう調へたてゝ御拜あり、社司、狩衣など着たるもの、神ほう持ちてまゐる、大幣に祓へ清め申してまゐらす

る、時實の中將取次で進らす、潮ひくほどにて御所に船入らねば、端舟にてぞおりさせ給ふ、上達部御にさふらいて、宮島の南の方、三間四面の御所つくりて、障子の畫ども海のかたをぞ書きたる、海の上汀まで廊をつくりつゝけて、潮滿たば、御船をさし寄せん支度をぞしたる、御湯殿などありて、絹の御淨衣召して出させ給ふ、御所の東の庭に白木の机を立てゝ、菰をしきて、白妙の幣をよせ立つ、其東に唐櫃の蓋をあけて、黃金の幣を置く其西にわら坐を敷きて陰陽師の座とす神馬一匹立つ、左衞門尉信貞、時宗これをひく、北面なども未だはじめ置かれねば、御供には上達部の侍をぞ召されける、宮内少輔宗則役送りを勤む、御けい果ぬれば召使ひ御沓をもちて先にまゐる、廻廊の北のはまを廻りて參る、廊を通りてまゐらせ給ふ、位の御時は一二町をだにも、えんだうをこそまゐらせしに、めし習はぬ御沓も如何とぞ覺ゆる、上達部殿上人御供に候す、まろうどの宮にまづ參らせ給ふ、こんくの幣は二さゝげ、白たへの幣、神官とりて寶前に供へならべ立つ、拜殿の中のほど、高麗の半疊一疊、御拜の座とす、こんくの幣は兼光の辨つたへ取りて、隆季の大納言、藤大納言傳へ取りて參らす、御拜終りてかへらせ給ふ、(中略)

廿七日は空の氣色うらゝかに晴わたりて、殘りの鶯思はぬ深山の木陰に語らう聲す、夜をこめて潮滿つとて、御所の前までさし入りたる、誠に此の世のありさまとも見えず、供御など果にしかば、御宮めぐり、あるべしとて、宮へ參らせ給ふ、今日は布の御淨衣をぞめしたる、國々のかみどもまゐらせたる、宮の前に運び置く、廊の前に樂屋をつくりて、拜殿をたてたり、內侍とも老たる若きさま〲歩み列りて神供まゐらす(中略)

廿八日此のわたりの浦々を御覽ずべしとて海士どもかつぎさせ給ふ、唐のはなだの狩の御直衣、唐綾の白き御衣二、御大口奉らせ給ふ、御姿いみじうなまめかしう美しう見えさせ給ふ、浦づたひてさし廻して御覽ず、誠にせんの洞もかくやと龍宮とも是をいふにやと

覺ゆる所々のみ多かり、みろめなど、持てまゐるとばかり御覽じ廻りて返らせ給ふ、あくる辰の時に又御宮めぐりありて、やがて御船に奉る、島の内にもおどろおどろしく騷ぎ合ひたり、内侍ども汀に出てゝ、何となく日頃の名殘しのび思ひたる氣色なり、なごり多きよしの歌仕ふまつれとありしかば、

立かへり名ごりもありの浦なれば
神もあはれをかくる白波

風も靜かに、物の哀れも春深くなりにける景氣、思ひかけぬ島の上に、櫻の散かたになりたる見ゆ、いみじくをかしく覺えしに、三月盡になりにけり、今日は、いかで旅の泊りとても、春を惜まざらんとて、人人文作るもてなし、興せさせ給ふべきにもあらず、何のはへも思召されず、理りとぞ見えける。

此の日記は今を距ること七百七十年安德天皇の治承四年、平家全盛の頃の筆錄なり。高倉天皇相國淸盛に强ひられ給ひ、御位を安德天皇に御讓りあらせられし後、京師より、安藝の嚴島へ御幸ありし折、隨行の一人なる久我通親(土御門宰相中將と稱す)のものしたるものなり平相國福原に於て盛饗し奉り、且つ唐船に乘じて供奉せし事などあり、嚴島は淸盛が勸請せし御社にして、構造に善美を盡せし樣、宛がら龍宮のごとく、供奉の公卿其美觀に心醉して呆然たる樣、見るがごとし、而かも一天萬乘の君にして、淸盛に憚からせ給ふ有樣など、思ひまゐらせては千歳の後猶口惜しき心地ぞする。

蒙塵日記

二條良基

八月十日(文和二年)あまりは、日數のみふる雨の中、いとゞ晴れぬ雲井は山高き心地して、物むづかしく、軒はさながら雲霧に閉ちられて、峯の松風あさましく吹きおろして、萬づに凄まじかりし事のみぞ多き斯るところを百敷と賴みたるも、有がたき世の例なれど、昔木の丸殿など云ひけるも、かくこそは有けめ、此國の御幸の例も元正天皇など度々跡ある事なれば、驚くべきにあらねど、習はぬ山の御すまゐ、猶世づかぬ心地して、都の戀しさ、嘸明暮の思ひにてありし、名高き仲ばの月をさへ、隔て顏なる雨雲は、尙晴やら

ず二千里の外の古人の心もかくこそはと、取あつめて物哀れなり、夜一夜ふきつる風。明方より靜まりて、今夜の月は尙忘るまじきにやとて、人々短冊たまはり。殿上の御遊びなどにはあらで目馴れぬ、戎衣のうへ、人どものけしき武士めきたれど、おの〳〵思ひの露をよすがにて、尙言の葉の花を爭ふなるべし、夕風又吹き立ちて、程なく澄上り、月山陰までも殘りなくさし入りて、いと限なし、曇りなき御代の例と心地せしかば、行末かけていと賴もし。

名に高きひかりを御代のためしとや
　最中の秋の月は澄むらん

鎌倉大納言（尊氏）の上り今日々々とのみ聞えしかど、唯同じ樣にて、日數經しかば、心元なしとて、度度御使をつかはす、今はほかあるまじきよし、公私へ受文のありしにぞ、誰々も安堵したる樣にはべりし、都より數多上れる殿上人なども、おのが樣〳〵打群れて、こゝかしこの名所などへ行きて、遊びはべりしかど、猶も心に繫る八重葎の露けさに、左樣の友にだに誘はれず、明す暮すも、只我身一つの秋とのみ覺えて、いと慰めがたし、眞に養老の瀧などいふ所に行きて、彼の流れに觸れぬれば、病もやがて癒へはべるよし人人申しあひしかど、左樣の所へもさし出ず、夜深き砧の音など聞え來るにぞ、人の住家ありと覺えし、寢覺の里といふところもこのあたりぞかし、實に明しかねたる草の枕も道理すぎたる秋の夜なりけり。

内裏の庭もさながら田の面につゞきて、稻葉の山も遠からねば、又歸りこん都の賴みならでは侍ることもなし。

思ひきや思ひもよらぬ假寢して
　稻葉の月を庭に見んとは

かゝるいたづら事をのみ思ひつゝけてぞ心一つは慰みはべりし。

八月の末鎌倉の大納言、旣に尾張に着ぬと奏せしかば、同二十五日、小島の頓宮より、垂井に行幸あり、其有樣非常の儀にして、腰輿に召さる、朝衣の人はなくて、戎衣とかぬ姿、めづらしき事どもなり、思ひ思

ひなりし出たち、なか〳〵見所もありしとや、鳳輦のかたびらを膠々に渡してかけたりしぞ、始めたる事なれど、かくもありぬべき事共なり、田舎の民ども、さながら、見參らせんも、かたじけなき事なれば、斯樣に申させ侍りしなり。

垂井の頓宮は、當國の守護、頼康承はりて作り設く、黒木の御所、小柴垣など結ひ渡して、神々しく廻立殿、大嘗宮などの心地ぞせり、入御のほど、物見るもの共、いづこよりか集りけんいと多し。

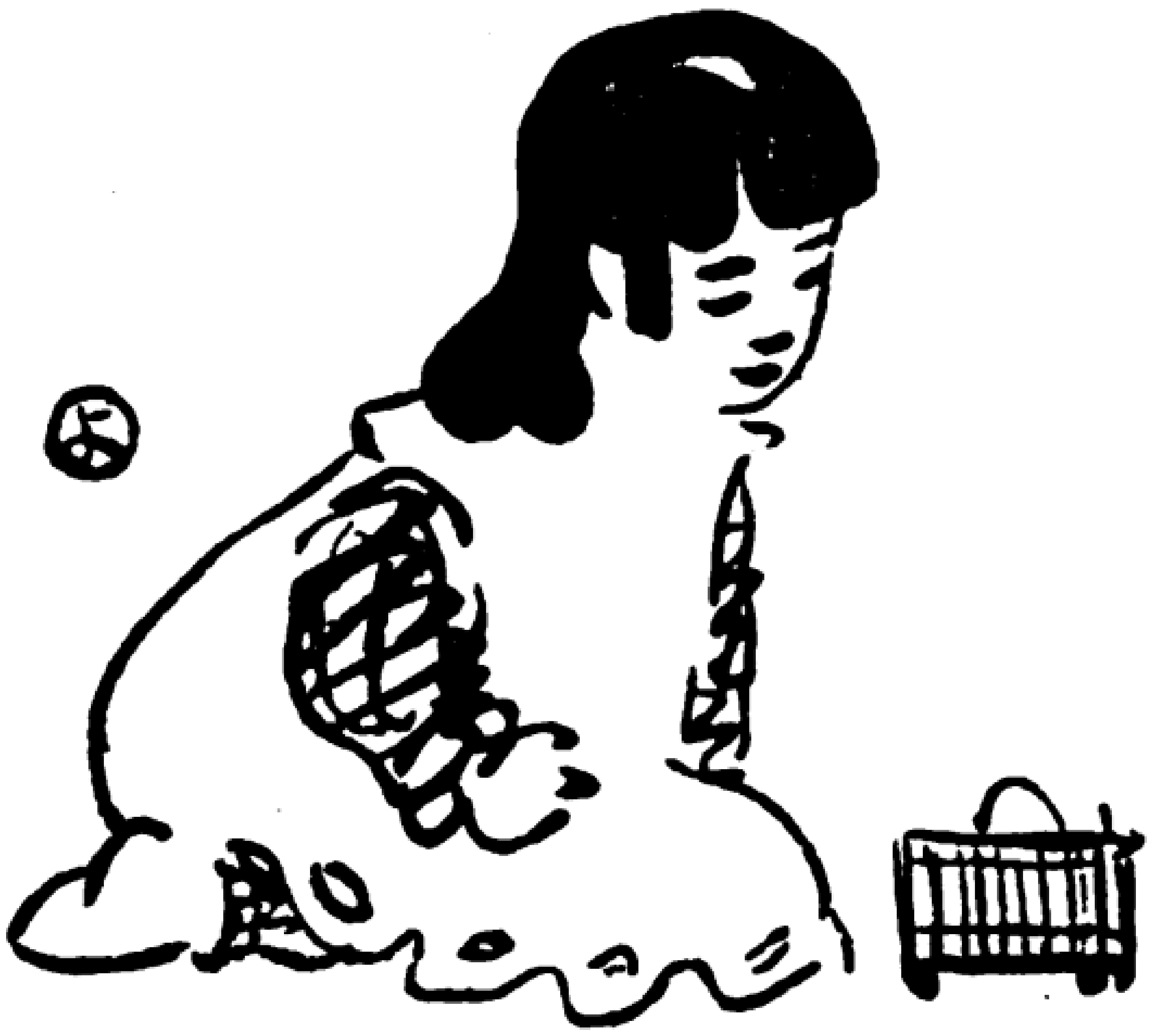
實澄朝臣御劒に侍ふ、其儀常の儀にたがふことなし、休みどころは風もたまらねば、前の宿尋ね出で、世におもひなし隔りける樣に覺ゆ。

さても、この邊りは、名所などにも、痛くもてあつかはぬ所なれど、彼の高經の朝臣の美濃の國司になされて下りける時、移れる、影はと詠みけるはこの垂井の事にや。

斯くいふほどに、二十六日の夜、近江の凶徒輩、蜂谷とかや、この國に打入るべしとて、犇めく、都の路はこの程早塞りたりと、聞きしだに心細かりしに、今宵は、苦々しく、ひしめきて旣に早近づきたるよし申侍べりしに、人々內裏へつとひまゐる、如何なるべきにかといと物騷がしくて、斯くて世をや盡さんと心細さぞいはん方なし、されど、明方には、別の事、候はじよし、人々申し侍べりしかば、夢の覺たる心地しておの〳〵退り出ぬ、馬共用意なし。臨幸もいつかたへかと、まで沙汰ありし、其折の騷ぎ申すばかりなかりなとぞ却々今の思出とも申侍りぬべき。さて九月三日に、將軍(尊氏)垂井に着く、此の有樣目出とう、いみじかりし事共なり、前二三日は、武士共、ひま隙間なく、宿々に着く、持つれたる旅の重荷ども、道もさりありす、布引につゞきて、萬づ今ぞ心地廣々と覺えはべりし、大納言は錦の鎧直垂に、小具足にて、栗色馬に乘り、先打は結城、小田、佐竹などいふもの共なり色々の具足共水の垂る樣なる兜の鍬形、先にきらめきて、夕陽にかゞやく、一日の祭りなどの心地しておの〳〵綺羅しくぞ見えし後陣には、仁木兵部大輔、小田

など東國の武士、數をつくして殘るものなし、將軍の馬の先には、命鶴丸、心言葉も及ばぬ出立、坂東第一と聞えし・馬にぞ乘りたり、其有樣見所多し、年たけたる總角の姿はすべて惡くも見えず、誠に、物に合ひぬべき氣色、人に勝れたり、牽馬十四疋、いづれも〳〵心の及ばぬもの共なり、東國の名馬は殘りなく上りたるよしぞ聞えし、佐竹の斑馬などいひし大馬など其數多し、將軍やがて直ぐに內裏へまゐる、頓宮の外に召具したる軍兵をば止め置きて、只一人參る、庭上に入り、中門の前に立ちて、頭辨俊冬朝臣もて事のよしを奏す、西園寺左衞門督、出會ひて引導す、弓矢とつて堂上の御前の召あり、程なく退り出づ、宿所は垂井の長者が家なり、こゝは始め、內裏になりはべりし程に恐れ申しけるを、只、さぶらふべきよし、仰せ言承りてとゞまりけるとぞ聞えし、大方垂井へ臨幸の後は神殿を、去りて遊興物の音をも止めて深く恐れ申しけるとぞ聞えし、いと有難き事共なり、實に仁義をわきまへてこそ、これ程の運は持はべるらめと返す〳〵も頼もしくぞ承はりし。

この日記は今を距ること五百五十年前（文和二年）南北朝戰亂の際、南軍京都を占領し北朝の天子、後光嚴天皇が、戰塵を避けて美濃小島の頓宮に落ちたまひしを、作者攝政關白二條良基公が、參候せし時の日記なり、山奥の茅屋に君臣世を果敢なみてありしに、足利尊氏御迎ひに參りて行在所の天地始めて愁眉を開けるの樣なり。此の日記によりて流石の足利尊氏が、武人の頭領たる、度量と寬大なる氣象とを以て朝紳を信服せしめたる樣見ゆ



寶永大火の記

二十日あまり本國近江にありしが、晦日の夜、檜杉山といふ上に火の燃ゆるが、定かに、雲にうつらふ景色恐ろしかりけるに、けふ大きに燒けぬといひ渡りしかば、とみに人を登せぬ、そのあしたも、なほ色たゞならず、煙なるべし、雲ぎりのやうに立まがひし間、かた〳〵道のたよりを聞くに建仁寺の前、宮川の町より火出でゝ、上中下のころところなく燒け失せぬときゝて、我宿も早くけむりとなりぬらんとおもへど、常になしへしごと、調度は惜しむな、老たるしぞくを過ちさせずと誘ひてとく遁がれよといへるを守りなんと、心易くて猶定かなる便りを聞きて立なんと、靜まりてありしかど、方廣殿の大門に火移りぬと聞こゆ、いかにまれ、早歸りなんこそよからめと勸むる人のあれば、やがて物に乘りて夜もすがら急がせ、二日の朝辰ばかりに歸りて見るに、晦日より、此方火を避けて入り込みたる人々の、猶物さわがしけれど、例の籬のどかに來鳴くがうれしくてくちずさむ。

歸り來て聞くも更らにぞめづらしき煙にもれし宿のうぐひす

そも〳〵此度ばかりの火に、京にてためしなしといふ、寶永の火は今も語りつたへて、恐ろしき事に言ふめれど、そは京の町十が六とかや、其の先、應仁の亂れの火も、彼の記にすさまじく書けれど、此方の樣にはなし、中むかし、鴨長明の記に見ゆる大風地震などつゞけて書きたれば、身の毛もよだつ樣なれど、火ばかり、とり放ちては京の中、三つが一つといへり、こたびは洛中洛外をかけて九分にあまり、殘れるところはわづかに、方廣殿のめぐり、西本願寺は危ふく免がれ、はた、本寺、北野ばかりとなん、されば、禁裏、仙洞を始めたてまつり、諸宮公卿の御やかたども一時にけむりとなり、掛卷くもかしこき御上〳〵もかた〳〵にあがれ移らせ給ひ。（伴蒿蹊）

幼き折の事ども

新井白石

我幼き頃は上野物語といふ草紙ありけり、これは寛永寺の花見に人のむれ来る事どもをしるせしなり、我三歳の春の頃にやあるべき、火燵に足をさしてはらばひ居て、その草紙を見ながら筆紙をもとめてすき寫しけるを、母にておはせし人の見給ひ、十が中一二まことの文字もあるをと我父に見せまゐらせしを、父の友なる人の来り見しより、人にも傳へ聞きゝてその寫せしものどもをとり傳ふる事になりけり。



我十六七歳の時上總の國にゆきしに、かしこにてその寫せしものを見る事を得たりき、又其頃屏風に我名を題せしに、二字は其體をなしたるもの、後までありしが火にやけうせたりければ今は其節のもの我が許に殘らず、此後は常の戯れに筆とりて物かく事のみをしければ、おのづから日々に文字をも見しりたれど、物讀む師友とすべき人なかりしかば、ただ往來物の類など、讀みならふのみなりき、戸部の家人に富田とて生國は加賀の國の人と聞えしが太平記の評判といふ書を傳へて其事を講ぜしめらる我四五歳の頃につれに其座に侍りてこれを聞くに、夜いたくふけぬれども つひに座を去りし事もなく、講畢へぬれば其義を請ひ問ふ事などありしを人々奇特の事なりといひき。

六歳の夏の頃、上松とい

ひし人のさびしく文字などありしが、七言絶句の詩一首敎へて、其意を聞せしに、やがて韻をなしければ三首まで敎へられしをば、人にも講じ聞せたりき、此兒文才ありいかにも師をえらびて學ばしめらるべしなど彼人もいひしかど、かたくななる昔人たちのいひしは、昔より言ひ傳へし事なり、利根、氣根黄金の三こんなくしては學匠になりがたしといふなり、この兒利根こそ生れつきたらめ、なほ幼なくして其氣根の事も計りがたく、家富めりとも見えれば黄金の事心得られずと言ひあへり。

我八歳の秋戸部の上總の國にゆき給ひしあとにて、手習ふ事を敎へしめらる、其冬の十二月半ば江戸へ歸り參り給ひしかばつれに傍にさぶらふ事どものごとく、明の年の秋また、國にゆき給ひしあとにて、課をたてられて日の中に行草の字三千、夜に入りて一千を限りて書き出すべしと命ぜられたり、冬に至りぬれば、日短くなりて課はまだ滿たざるに日暮れんとする事たびたびにて、西向なる竹緣のある上に机を持ち出でゝ書き終りぬる事もありき、また夜に入りて手習ふに睡の催ほして堪へがたかりしに、我につけられしものとひそかにはかりて、水二桶づゝかの竹緣に汲みおかせて、いたくねぶりの催しぬれば衣ぬぎすてゝまづ一桶の水をかゝりて、衣うちきて習ふに、はじめ冷かなるに目さむる心地すれど、しばし程經ぬれば身あたゝかになりて、またまた眠くなりぬれば又水をかゝる事さきのごとくす、三たび水をかゝりぬるほどに大やう課をも滿てたりき、我九歳の秋冬の間の事なり、かゝりしほどに此頃よりは、我父の人に贈り給ふ文をばかたの如くには書きたり。(折焚柴の記)



御産日記

紫式部

十一日の曉に、北の御障子二間はなちて、廂にうつらせたまふ、御簾などもえかけあへねば、御几帳をおし重ねておはします、僧正きやうてふ僧都、法務僧都など候ひて、加持まゐり、院源僧都きのふ書かせ給ひし御願書に、いみじきことゞも書き加へて、讀みあげ續けたる言の葉の、哀れに尊く、賴もしげなる事かぎりなきに、殿のうちそへて佛念じ聞え給ふほどの、たのもしく、さりともとは思ひながら、いみじう悲しきに、人々涙をえほしあへず、ゆゝしう、かうなど、互みに言ひながらぞ、えせきあへざりける、人氣多くこみては、いとゞおん心も苦しうおはしますらんとて、南東おもてに出させたまふて、さるべき限り、この二間のもとにはさぶらふ、殿の上、讃岐と宰相の君、内藏の命婦、御几帳の中に仁和寺の僧都の君、三井寺の内供の君も召し入れたり、殿のよろづに罵らせたまふ御聲に、僧もけたれて音せぬ樣なり、今一座に居たる人々、大納言の君、小少將の君、宮の内侍、辨の内侍、中務の君、大夫の命婦、大式部のもと殿の宣旨よいと年經たる人々のかぎりにて、心を惑はしたる氣色どもの、いとことはりなるに、また見奉り馴るゝほどなけれど、類なくいみじと、心ひとつに覺ゆ、又この後のきはに立てたる几帳の外に、内侍のかみの中務のめのと、姬君の少納言のめのと、いと姬君の小式部のめのとなど、おし入り來て、御帳二つが後ろの細道を、え人もとほらず、行きちがひ、みじろく人にはその顏なども見わかれず、殿の公達、宰相の中將兼隆、四位の少將雅通などをば更にもいはず左の宰相の中將經房宮の太夫など、例は、けどほき人々さへ、御几帳のかみよりともすれば覗きつゝ、腫れたる目どもを見ゆるも、よろづ恥忘れたり、頂にはうちまきの雪のやうに降りかゝり、おししぼみたる衣のいかに見苦しかりけんと、後にぞをかしき。

御頂の御髮、おろし奉り、御戒言うけさせ奉

り給ふほど、くれ惑ひたる心ちに、こはいかなることとあさましう悲しきに、平安にせさせ給ひて後のことまだしきほど、さばかり廣き母屋の南の廂、高欄のほどまで立ちこみたる僧も俗も今ひとりと讀みて額を突く。

東表なる人々は殿上人にまじりたるやうにて、小中將の君の、左の頭の中將に見合せて、あきれたりし樣を後にぞ、人々いひ出でゝ笑ふ、假粧などのたゆみなく艶めかしき人にて、曉の顔づくりしたりけるを、泣き腫れ、涙にところ〲濡れそこなはれて、あさましう、その人となん見えざりし、宰相の君の顔かはりし給へるさまなどこそ、いとめづらかに侍りしが、ましていかなりけん、されどそのきはに見し人の心ありさまの互に覺えざりしなんかしこかりし。

今とせさせ給ふほど、物の怪のねたみのゝしる聲などのむくつけさに、源の藏人には心譽阿闍梨、兵衛の藏人にはそうそといふ人、右近の藏人には法住寺の律師、宮の内侍の局にはちそう阿闍梨をあづけたれば、物怪にひきたふされて、いといとほしかりければ、ねんかゝ阿闍梨を召し加へてぞのゝじる、阿闍梨の驗の薄きにあらず、御物怪のいみじうこはきなりけり、宰相の君、をぎ人に影向をそへたるに、夜一夜のゝじりあかして聲もかれにけり、御物怪うつれと召しいでたる人々も、皆うつらでさわがれけり。

午の時に空晴れて、朝日さし出でたる心地す、たひらかにおはします嬉しさの類もなきに、男にさへおはしましける悦び、いかゞは斜ならず、昨日しほれくらし、今朝のほど朝霧におほゝれつる女房など、皆たちあがれつゝやすむ、御前にはうち老ひたる人々の、かゝる折節つき〲しきさぶらふ、殿も上も、あなたに渡らせたまふて、月ごろ、御修法、讀經にさぶらひ、昨日今日、めしにて參り集ひつる僧の布施たまひ、醫師、陰陽師など道々のしるしあらはれたる、祿たまはせ、うちには御湯殿の儀式などかねて設けさせ給ふべし。

これは有名なる紫式部の日記の一節なり紫女の才識は日本婦

人の許りとすべきものゝ一にしてこの日記は作者が上東門院（一條天皇の皇后）に宮仕へせし折りの日記にして、宮廷内闈の狀態を細寫せしめでたき文なり、こゝに御產とせしは後一條天皇の御誕生ましませるなり。
數多の僧侶を召し集ひて讀經せしむる事、僧侶が聲をからして修法するも容易に御產なき事、さては道長の關白殿が外戚の權勢を負ひて、僧徒を罵り散らす樣、千年の後猶目のあたり見るがごとし、僧徒の修法は當時の風習として、萬づ祈禱に用ゐたるものなるが、これを今の催眠術などと思ひ較べて見れば、悉とく迷信とのみ言ひ難からん。

參籠日記

右大將道綱母

かくて年頃願あるを、いかで泊瀬にと思ひ立つを、正月にと思ふを、さすがに心にしまかせねば、辛うじて、九月に思ひ立つ。
たゞ正月には、大嘗會の御禊、これより、女御御代出立るべし、これ過して諸共にやはとあれど、御方の事にしあらねば、忍びて思ひ立ちて、日惡しければ、門出ばかり、法性寺の邊にして、曉より出で立ちて、午の時ばかりに、宇治の院に至りつゝ見やれば、木の間より水の面つややかにて、いと哀なる心ちす、しのびやかにとおもひて人數數多ともなうて、出で立ちたるも。
我が心の怠にはあれど、我ならぬ人なりせば、いかに罵りてと覺ゆ。
車さし廻して幕などひきて後なる人ばかりをおろして河邊に向ひて簾に卷きあげて見れば、網代下にし渡したり、行き交ふ舟ども今に見えざりし事なれば、すべて哀れにをかし。
後の方を見れば、來困じたる下司ども怪しげなる柚や梨子やなどをなつかしげに持たりて、食ひなどするも哀れに見ゆ、割籠などものして、舟に車をかきすゑて、いそぎ持て行けば、贄野の池、泉川などいひつゝ鳥とも居などしたるも心にしみて、哀れにをかしう覺ゆるにしのびやかなれば、よろづにつけ淚もろく覺ゆ
其の泉河も渡りて、橋寺といふ所に泊りぬ、酉の時

ばかりに、おりて休みたれば、旅籠所とおぼしき方より、切大根、柚の汁してあしらひて、まづ出したり、かゝる旅立ちたるわざどもをしたりしこそ、怪しう忘れ難ふをかしかりしか。

明くれば川渡りて行くに、柴垣わたしてある家どもを見るに、いづれならん、加茂物語の家など思ひいくに、いとぞ哀れなる、今日も寺めくところに泊りて、またの日は椿市といふところにとまりて泊る。

またの日、霜のいと白きに、詣でもし、歸りもするなんめり、脛を布の端して引めぐらかしたるものども行きちがひ、さわぐめり、蔀さしあげたる所に、宿りて、湯わかしなどするほどに様々なる人の行ちがふ、おのがじゝは、思ふ事こそはあらめと見ゆ、とばかりあれば、文さゝげて來るものあり、そこに留りて、御文といふめり、見れば、昨日今日のほど何事かいと覺束なくなん、人すくなにて物しにし、いかゞ言ひしやうに、三夜侍らはんずるか、歸るべからん日、きゝて迎へにだにとぞある、返り言には、椿市といふところまでは、平かになん、かゝるついでに、これよりも深くとおもへば、歸らん日を、えこそ定めねど、書きつ。

そこにて猶三日待ちたまふ事、いと便なしなど定むるを、使きゝて歸りぬれば、それより立ちて行もて行けば、なでふ事なき道も山深き心地すればいと哀れに水の聲も例にすき、霧はさしも立わたり、木の葉はいろいろに見えたり、水は石がちなる中より、湧き返りゆく、夕陽のさしたる樣などを見るに、涙もとゞまらず、道はことにをかしくもあらざりつ、紅葉もまだし花も皆うせにたり、折れたる薄ばかりぞ見えたり、ここはいと心ことにみゆれば、簾まき上げて、下簾おしはさみて見れば、着ならしたるものゝ色にもあらぬ樣に見ゆ、薄色なる羅の裳をひきたる腰などちりゐて焦がれたる朽葉にあえたる。心地もいとをかしう覺ゆ乞食どもの、坏鍋などすゑて居るもいと悲し、下賤おかなる心地して自から生けり、劣りしてぞおぼゆる、眠りもせられず、いそがしからねば、つく〴〵と聞けば、目も見えぬものゝ、いみじけにしもあらぬが、思

ひける事共を、人や聞くらんともおもはず、罵りまうすを、聞くもあはれにて、たゞ涙のみぞ溜るゝ、今しばらくもやと思へど明くれば罵りて出で立つ。

歸さは忍ぶれど、こゝかしこあるじしつゝ留むれば物さわがしうて過ぎゆく。

これはかげらふ日記の一節なり、蜻蛉日記は藤氏の盛世に攝政たりし、東三條兼家の室たる藤原倫寧の女の日記なり、今を距ること凡そ九百三十年、(天暦八年より天延二年まで凡二十年間の記事)紫式部以前のものなり。

藤原氏盛世の時、勢力全朝を傾けし大臣の内閨が、如何なる樣にて旅行せしかを知るべく、雲上の貴人が下賤の乞食どもと一つに參籠せし樣、當時の生活の簡易なりし樣なぞ見るべし。

御不例をみとりまゐらするの記

讃岐典侍

かくて七月六日より御心ち大事に重らせ給ひぬれば、誰も日頃とても、例ざまに、思し召したりつる事は、難きやうなりつれども、これかやうに苦しげに、見參らする事はなくて過させ給ひつる、かくおはしませば、いかならんずるにかと、胸潰れて、思ひあひたり、その頃しも、上臈達障りありて侍はれず、或は子產み、或は母の暇、今一人は疾よりも籠り居て、この二三年參られず、御乳母だち、藤三位心ち煩らひて、まゐらず、辨三位は、東宮の母もおはしまさで、生ひ立たせ給へば、心のまゝに、侍はるべくもなきに、あはせてそれもこの頃、瘧心ちに煩ひて、たゞ大貳三位、我具して、三人ぞ侍ふ。

されば只怜しの人の、煩ふだに、人のいと參りしたくしく扱ふ人おほくほしきに、これはまして、同じ日の暮るゝまゝに堪へがたげにおぼしめしたれば、院にかくと案内申さする、驚かせ給ひて、近くて御有樣聞かんとて俄かに、北の陣に御幸ありて、と奏す。

かく苦しうおぼしめしたれば、大殿油、例よりも近く參らせなどするほどに、たゞ消えに消え入らせ給ひぬ、あないみじと泣きあひて、内大臣關白殿、まゐり

て、つと侍はせ給ふ、大かた罵りあひたり、増譽僧正、頼基律師、増賢律師など召しにやりつゝ、頼基律師即ち參りて經讀み、佛ゝどきまゐらせらるゝほどに、暫ばかりありて打身じろきせさる給ふに、今少しのゝしりあひぬ。

經讀まるを聞かせ給ひて、今は益あらじ、唯かりうつせよと仰せられ出でたれば、物つく者どもめして、ゐて參り移さるゝ、おびたゝしさは、押し量るべし、移りてその事とはいはで、かはめきのゝしるさま、いと怖ろし、御粥など參らすれば、めしなどすれば嬉しさは何にかは似たる、大臣はあるかと問はせ給へば、大殿の入らせ給ひて侍ふよし申し給へば、御幸はなりぬるかと問はせ給へば、しかなり、侍ひぬと申させ給へば參りて申せ、今は何事も益侍はじ、立てさせ給ふ。

これは王朝の末つ頃、堀河天皇に仕へまつりし、讃岐典侍の日記の一節なり、堀河天皇御惱の事より筆を下して遂に崩御の事に及べる樣を記せり、此段は御病重らせ給ひて、屢々御苦ませ給ひ、數多の僧徒を召して祈らせ給ひし當時の樣見るがごとし、今を距ること八百年以前の記錄として、斯く非細なる實にめでたき文なり。

管弦の名殘

中務内侍

七月五日、北山殿に行啓なる、御幸のなりしかば、はえ〴〵しき御遊びどもなり。晝は山瀧など所々御覽せられて、暮るれば御舟に召す、夕月夜より、有明になるまでかゝる夜もなし。

九日、月さし出づる程に、例の御舟に召す、太夫遲參し侍りぬと、遊びくたびれ侍ると申す、暫しは釣殿に休らはせおはしましゝかど、御舟差し出ださる、御樂あり、殿上人ども、小さき舟に乘りて、中島を隔てて吹合せたる物の音、たとへん方なくおもしろし。遙かに漕ぎ出でぬるに、かすかに羯鼓を打つ音聞ゆるを、人々あきれて、いづくならんと申すに、太夫にやあらん、とて迎への小舟に樂し、朗詠などして差し

寄せたれば、火を焚きてぞ參り給ふを、いみじく興せさせ給ふ。

春宮の御方十三日は、御くたびれにやありけん、御舟にも召さず、無量光院の廂にて、月御覽せらる、實子に花山院、大納言、太夫殿侍らひ給ふ、さまぐをかしき御物語どもあり、東の妻戸の口に大納言殿、權大納言殿侍ひ給ふ、やがて其の東の間のすみ、高欄に、宮內宰相殿三人侍ふ、なにとなき物語どもして更け行くまゝに、ことに近ふ西の山もと、入かた近く傾きたる月の池にうつろひて面白きを所からは、げに見所あるよしよの月影、いかなる世にも忘れずやなど、言ひあはせつゝ、二十五の菩薩の來向の御繪、見るよりはじめて、賴もしく、哀れなる方も添ひて名殘多げに、ならへば又來ん年の今宵、思ひ出でなるべしなどいふ。心のうちに、

山かげにながむる月よめぐりあはん
　　みやこの空におもかはりすな

十六日もこの御方は、御舟もなし、朝餉の御簾卷きあげて、月御覽せる、御緣に人々さぶらひ給ひ、伯の新少將、衞門の藏人、召し出でゝまゐらせらる、花山院大納言、太夫殿太鼓、さらぬ殿上人ども律には月の光もことなるに、拔頭の舞ひ出でたるほどは誠におもしろし、名殘多くてはてぬ。

これは中務內侍日記の一節なり、中務內侍は宮內卿永經の女にして、龜山、宇多の兩朝より、伏見天皇の御代にかけて仕へまつりし人なり、當時鎌倉執權の世にして、朝廷式微の折柄にはあれど、未だ王朝を去る遠からざる頃なれば、流石に盛世の名殘をとゞめて、微かながらも、昔への面影をとゞめたる樣を窺ひ知るべし。

海道旅の日記

阿佛尼

今日は十六日の夜なりけり、いと苦しくて臥しぬ、いまだ月の光は、かすかに殘りたる曙に、守山を出でて行く、野洲川わたるほど、さきだちて行く旅人の、駒の足音ばかりさやかにて、霧いとふかし。

旅人はみなもろともに朝立ちて
　こまうちわたす野洲のかはぎり

十七日の夜は小野の宿といふ所にとゞまる、月出でて山の峯に立ちつゞきたる松の木の間、けぢめ見えていとおもしろし、こゝは夜ぶかき霧の迷ひにたどり出でつ。醒井といふ水、夏ならばうち過ぎましやとおもふに歩人は猶立ちよりて汲むめり。

むすぶ手に濁るこゝろをすゝぎなば
　うき世の夢やさめが井の水

十八日、美濃國關の藤川わたるほどに、まづ思ひつづけゝる。

わが子ども君につかへんためならで
　わたらましやは關のふじ川

不破の關屋の板びさしは今もかはらざりけり、

ひまおほき不破の關屋はこのほどの
　時雨も月もいかになるらん

關よりかきくらしつる雨、時雨に過ぎて降りくらせば、道もいとあしくて、心より外に笠縫の驛といふ所に、暮れはてねどとゞまる。

たび人はみのうちはらふゆふぐれの
　雨にやどかる笠縫の里

十九日、又こゝを出でゝ行く、終夜ふりける雨に、平野とかいふほど、道いとわるく、人通ふべくもあらねば水田の面をぞ、さながら渡り行く、明くるまゝに雨は降らずなりぬ、晝つかた過ぎ行く道に、目に立つ社あり、人問へばむすぶの神とぞきこゆるといへば、

まもれたゞちぎりむすぶの神ならば
　解けぬ怨みに我まよはさん

洲股とかやいふ川には船を並べて眞拆の綱にやあらん、かけとゞめたる浮橋あり、いと危ふけれど渡る、この川、堤のかたはいと深くて、かたかたは淺ければ、

片淵の深きこゝろはありながら
　人目づゝみにさぞせかるらん

かりの世のゆきゝと見るもはかなしや
　身をうき船を浮橋にして

とぞ思ひ續ける、また一の宮といふ社を過ぐとて、

一の宮名さへなつかしふたつなく
　みつなき法をまもるなるべし

二十日、尾張國下戸といふ驛を行く、よき道なれば熱田の宮へ參りて硯取り出でゝ書きつけて奉るうた、

　いのるぞよ我おもふことなるみ潟
　　かたひくしほも神のまに〳〵

鳴海がた和歌のうら風へだてずば
　　おなじこゝろに神もうくらん

　みつしほのさしてぞ來つる鳴海潟
　　神やあはれとみるめたづねて

　雨かせも神のこゝろにまかすらん
　　我ゆくさきのさはりあらすな

鳴海の潟を過ぐるに干潮のほどなれば、障りなく、をりしも濱千鳥いと多くさき立ちて行くもしるべがほなる心ちして、

　濱千鳥なきてぞさそふ世の中に
　　あとゝめんとはおもはざりしを

隅田川の邊にてぞ、ありと聞きしかど都鳥といふ鳥の嘴と足と赤きは、この浦にもありけり。

　こと問はん嘴と足とはあかかりし
　　わが住むかたのみやこ鳥かと

二村山を越えて行くに野も山もいと遠くて日も暮ぬ

　はる〳〵と二村山をゆき過ぎて
　　なほすゑたどる野邊のゆふやみ

八ッ橋に止まらんといふ、暗さに橋も見えずなりぬ。

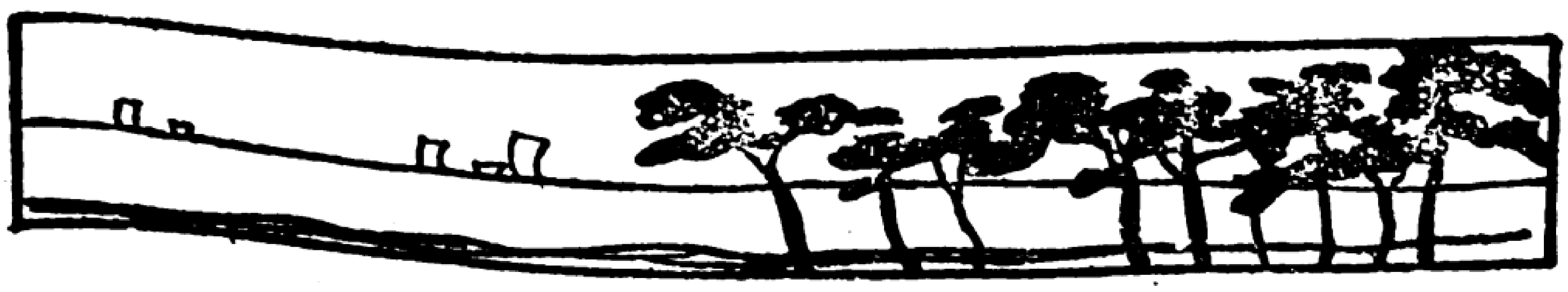
　さゝがにの蜘手あやふき八橋を
　　ゆふぐれかけて渡りぬるかな

阿佛尼は鎌倉執權時代の有名なる歌人、藤原爲家の妻にして、才學の聞えある婦人なり、元と安嘉門院の侍女なりしが、爲家の死後、剃髮して尼となり、北林禪尼と稱す、この日記は、弘安年間、訴訟用のために、京都より鎌倉に至れる旅路の日記にして有名なる十六夜日記の一節なり、さてその訴訟といへるは爲家の異腹の子、爲氏と、爲相との間に起れる父の遺產相續に關する爭ひにして、爲氏は長子なれども阿佛尼の腹にあらず、爲家生前に播磨國細川の庄を阿佛の腹の子爲相に讓る樣に定め置きしを腹異りの兄がこれを橫領して爲相に渡さゞりしかば阿佛は實子の爲めに遙々鎌倉に下りてこれを訴へしなりとぞ。



荒磯夜泊

運帆師處水運ゝ雲など打ちすしつゝ來るに、今宵のとまりは彼の見ゆる磯山の陰にやなどいも、いつしかと、心許なきに、日さへ暮れぬればいとゞ心細し、舟人の習ひとして、夜舟漕ぐには、知るも知らぬも呼びかはしつゝ、をちこち互に力そふめるもあはれなり、風やゝ吹きしりて波高く立ち來るに、そこはかとなくたゞよふ心地す、舟人の雨氣なりといふに、今しばしの程を如何ならんと、心のみ碎かるゝも楫の力には及ばれば、よしさればとて、屋形の内にこぎしらさし入れて打臥し居り、夜半ばかりにやあらん辛ふじて舟着きぬ、御心安めたまへといふも、いとうれしきに、此許にこそはとて、碇などし入れたる音の、枕がみに響きたるこそ、又なく嬉しけれ、されど大船のいみじうたゆとふは、名殘高くこそとおもふに、心地も惡しけれど、斯ばかりはとて人にも寄り臥しぬ、舟人、あなくるしやとて汗押しぬぐひつゝ、苫葺き渡し、粥うちすゝりなどして靜まりぬ、雨ふり出でゝ隙洩る雫も佗しきに、沖の方にいと遠く細き聲に、あまた度呼ばふるは、後れ舟にやとおもふに、應ふる人もなければ、船人をつき驚かすに、寢おびれたる聲してたゞ一とわたりうち應へたるは、いかでか聞き知らんと覺束なきに、從者して呼ばするも例に違ひたる怪しき聲とや思ふらん、辛ふじて漕ぎ出でゝ危ふかりけりといふ、この舟の傍にいかり下すも、げに如何ばかりにかと、委しうも問ひ聞かまほしきに、此方の船人、さこそありけめ、誰も同じかりけれど、いと眠ぶたげに言ひてやがて鼾おどろ／＼しうしたるも、いと情けなくこそ覺ゆれ、さて寢たるにいかでか夢も結ばん。（中島歌子）



亡妻を悼むの記

やよひ十二日、夜のあけんとする時に息はひきとりぬ。かへりきて臥したるまゝに物もおぼえず、雨いみじう降りて、河音たかくなりゆくに、やう／＼人ごゝろつけるも、そや過ぐるころ也、輿めくものひそかにかき出る音なひすめるは、かの亡骸を、東塢亭におくりかへすなりけり、をとこをんな殘りなくそひゆくべし、いざといへど、とみにえたちあがるべうもあらねば、後れてもはひいづ。風いとあらゝかならずふき、雨はなほしきだれて、ふるは涙と打ぬらすに、



いとゞ空をふみて、あゆむとだにおぼえず、家に來て見れば常あるところに白きものかつぎてふせり。打とけて寢たる姿に見ゆれども長きわかれぶりにさめやしつらむかほの衣とりて、そよ打まもるほど昔をかけてわきくる涙ものににず。

いにしへの色もにほひもなきからになほさく花は思なりけり

さて明けわたるしののめ更にこの世ならんや。

十三日、其からをさへ、今日はひつぎにをさめんといひさわぐ、ひとつの箱にものはひめおきぬ、うせなんあとにてといひ置きつるを思ひ出て、共にやる

べきものもしやとひらき見る、大かたはものゝ折々此年月のあひだ書きかはしたる文や歌やなりけり、いとゝかきくれて、見るべうもえあらねば さしおく、暮過ろ頃ひ、かりたさめんとにや、ひしめく音聞ゆめり、いとど胸は板になりたるに、釘びし〳〵と打立る心地す、死出のはれ着にとて、きぬやうなものは此ごろ、着かへあらためて、殊の外、むさげになどはあらじ、さはいへ、かげらうの脊のこけたるを、いかゞはする、手足も折れんずると思ふに、身もいたましや、とばかりありて、今は、たさめ果てまゐらせぬ、今一と月まみへむといふに、立わたりて臨むほど更に物も覚えず、大きなる柩



の中に、物におしつゝまれて、額ぎわものしたる白粉にいと若やぎて黒髪かいおろし、ひひなの顔付して、よそげにぞ見えたる、さてしも、さてえあられば、やをら手かけて打向ふに、氷とのみ冷へきりたるや、熱き涙玉きりてまづ我から濡ぬべし、限りあれば、退きて拝み伏す、即ち人々蓋掩して……やんとかいふもの塗りこめんとす。(香川景樹)

樂天家の旅日記

菱屋平七

四月朔日（享和二年）日よし、けふは國元の妻子、大阪の人々のかたへ書狀かきおくる、さて巳の刻ごろ金比羅の宮に詣でんと、船頭精三郎を案內にてともない行、宿を出て西南のかたに、しばしゆけば、町中に大なる御門あり、門內に御番所あり、これは御城の見附の門なり、町をはなれてやゝゆきて、よぎ田の鄕といふところに茶屋あり、甚だ淸潔なれば入りて休む、茶屋を出てしばしゆきて、松かはなどいふところに往來の人を見かけては厄拂なりとて十あまりなる子供に獅子がしらをかぶらせ、あるひは猿を舞はしなどして太鼓打ちて錢を乞ふものあまたありき。

さてこの邊の地面、見渡したるところ四方は山もなく、廣平の沃田にして麥の穗靑みたり、行く道も廣うして坂もなけれど、石高にてあゆみがたし、又しばしゆけば、榎井村とて旅籠屋、茶屋おほき所あり、道中に唐金の鳥居あり、江戸の人の建てたるよし誌せり。かくてまた五六丁ゆけば金比羅の町なり（丸龜より三里）これも旅籠屋など數多ありて町屋殊に賑はし丸龜よりも勝りて見ゆ、町の中ほどに佐屋橋といふ橋あり上に屋形ありて珍らしき橋なり、此の橋をわたりて半町ばかり行く小島屋利右衛門といふ宿屋に入りて休むこゝにもたせ來る物あづけ置きて、權現の宮山にのぼる、麓より二丁ばかりの間は、商家たちつゞけり、地黃煎、藥飴を所の名物とてうる家おほし、仁王門に入りてより一丁ばかりが間は平地にて右の方に坊舍五六軒あり、左のかたには櫻の木植ならべて、木のもと潔く掃ききよめて綠苔の色甚だ愛すべし。

このあたりより本社まで十五六町の間、右も左も玉垣なり、かくて坊舍をすぎ玉垣のうちをのぼり行く、本社にちかくなれば接待所、神馬堂あり、こゝをすぎて半町ほどゆきて藥師堂あり、此上に長曾我部殿の一夜たすけられしといふ門あり、此門の柱どもはみな逆木にてたてられたり、是より石段二丁ばかり登れば、

また青銅の鳥居あり、猶一丁ばかりにして石の鳥居ありて石燈籠あまたたてり、さて本社に至りて參拜す、東北向檜皮葺にしていかめしく、華麗なり、社前に蠟石の燈籠あり、拜殿のまへに三間ばかりの廊下に美しく石を敷て、上に三十番神あり、又鐘樓堂あり、繪馬堂は二所にあり、繪馬はとり〲ある中に、去ぬる申の年、唐人の献つれる額は竪三尺五寸橫五尺にして紺地に金字もて降神觀と書きたる太字見事なり、清の嘉慶三年に書けるよし細字にしるせり、さて御社より東のかたを眺望すれば、きのふ船にても見し飯山、眼下に見おろして　浦々鄉々民家田畠まで見えわたる風景いふもさらなり。

御山を下りて宿に歸れば、主は待ちむかへて、恭々しくねんごろに歓待して酒飯を出す、膳は、飯、平鯛の切身と、生豆腐を味噌にて煮たるもの、皿かまぼこ、たけのこ、椎茸、わらび、ふき煮びたしなり、手鹽、皿、香の物、菓子あるへい糖、最中の月、三千とせ落雁、もみぢ硯蓋、玉子、しいたけ、おしくわゐ、梅ぼし、紫蘇漬の大根、どんぶりは、木の芽あいの獨活、鉢は鯛のさしみ、うど三しま海苔、吸物はいか三ツ葉のすましなり。

人數は五人なるに酒の價共に二十二匁五分なりといふ、いと賤直がめづらしさに例のかきのせつ、酒の酌に出でたるこの家の婢の顏は平面にて、手首まる〱として肥ふとり、聲もふとくて言葉なまりがちなるが所の事共をいろ〱尋ね問ふまゝこま〲と異顏にてかたるもいとをかしく、これを座興にて醉をもよほすに、主もさし出で手をつかへ懇懃にすゝめもてなす大方は京わたりの小茶屋の有樣に似て邊鄙めきたるめづらしさ添はれり。

四月十二日。卯刻過に船出す、今日も東風にて負ひよく波おだやかなり、一里ほど走りて沖の方に、むろ見ゆ、又になひ島とて、大なると小なると二つ島ありともに樹木もなく岩のみ峙立り、北の方にせんばが嶽あり、此嶽のさし出たる鼻を廻りて、上の關の口にいたる。

かくて辰の剋過防州上の關に船を入る、湊より、入口は瀬戸にて狹隘になり、燈籠堂、船番所などあり、町屋は百軒餘り、後ろは山にて一と筋に立つゞけたり問屋多く又茶屋などもあり、此地は離れ島なり、かくて船より上りて櫻屋といふ船宿にいたり、酒をのむ、鯛のさしみ、鰡のさしみ、又鯛の鹽煮などを肴にして飲みたり、酒肴の代三百二十文、其所にて風呂に入り船に歸りて、午剋過に船を出して走らす。

さかう、馬島、牛島などいふところ／＼を見つゝ走る、未刻ごろ、室積といふところに船をつけて泊宿すこゝは入海の港にて其さまよし、人家二百ばかり、問屋などもあり、されど賑はしからず、町家も草葺の家多し、町の西なる濱邊に峨眉山普賢寺とて、普賢菩薩を安置せる寺あり。

今日午剋頃に此港に唐船來りつきぬ、前つ頃紀の國の浦に漂着したる彼所の商船なりといふ、紀州、長州の二侯より出したまへる警護の番船共、其外數十艘の引船、小早船等附流れて、日暮れば高燈籠數多くともしたて、いと嚴重なるさまなり、かゝる時に來合せて珍奇の壯觀することかなと、めづらしくおぼゆ。

さてこれより下の關まで海上三十五里、南には豐後の國遙かに遠くして海廣く波高く、近き濱邊にも見所ある勝地なくして、たゞおそろしき大灘なりと聞置きしかば、此所より上陸すべしと思ひ定めて 國許に遣はすべき書狀をしたゝめ、或は大阪へ返すべき品々又は彼所まで出し置くべき無用の冗物ども一々に調べ認めて、ひたすら陸行の用意をして、さて夜に入れば船の名殘も今宵限りなれば、酒肴をとゝのへて舟人を勞らひ船こぞりて打のみて、名殘の宴をぞしたりける。

そも／＼播磨の室津より、此の方、備後の鞆、安藝の宮島などにて茶屋に遊び、或は逆旅にて飲宴し、藝妓、舞子などに戯むれ遊びたりしこと、曾て浮薄なる奢侈の心にあらず、此の舟路の有樣、晝は漫々たる滄海に漂よひて風浪の難を恐れ、夜は物すごき島の洲先に碇おろして、波のさわぎよもすがら耳にかしましく身はゆられて安寢の暇なく、辛ふじてよき港につき得

たる時は、ひとへに蘇生の思ひをなし、又歸國の心に似たり、されば痛み定まりて痛みを思ふとやらん、其悦びのあまりに、積欝を散じ、神氣をも養はんとの事にありぞかし。是れより陸行したらんには今まで足の安かりしには引かへて長途の艱難の程兼ねて思ひやられてわびし、いづれとも旅こそ、げに安からぬものにはありけれ。

十三日、夜あけければ貝を吹き、太鼓打鳴す音の聞ゆるに、おき出て見れば、彼唐船を護送する紀州の御船の中なり、吹貫鑓など立てゝ數多の番船打かこみて唐船をば引船あまたして引出す、珍らしき見物なり、辰剋上陸して船人に別る、船人共は皆岸邊に送り出て拜伏して此頃の恩顧のほどを謝し、此方よりも懇ろに勞謝して別れて室積の北町に出づ、一里ばかりにして島田の驛にいたる、茅屋勝にして百軒ばかりなり、室積よりこの邊まで道に並立る松共木振りよくしげりあいたる、其間より彼の海山の透て見ゆるなどすべて佳境妙景にて獅子の濱によく似たり、枝を出はなれば又松原にて枝下り鹽風にもまれて、いとおもしろき老松ども多くしげりて風景いよ／＼よし、廿町許りにして山の尾といふ濱邊に出づ、鹽濱なれば珍らしく見物するに先づ渚の方に鹽燒共の家三四十見え、大道より濱手に向けて土堤を築き數百反の地を平にならしてそれに砂をふり散らし其上に潮を汲かけて日に干す、是等皆女の業なり、かくて其砂をかき寄せて大なる竈の樣なる所に入れて其上に又汐を汲かけて灰汁をたるる樣にして其垂たるを鹽釜に入れて焚くなりとぞ。

これは享保年間、尾張名古屋の町人菱屋平七なるもの一年長崎へ旅せし時の旅日記なり、此人年四十にして家業を息男に讓り、樂隱居の身となりて、旅を專らとし、諸方に遊歷して樂みとなせり乍去家には妻子を殘し置きて、當時太平無事の世ざかりとはいへ道中は隨分不便の事も多かるべき海陸二百里の旅をなせしに、ここに一日かしこに二日悠々寛々として、神社佛閣、名所古跡に道草を喰ひさては遊廓などにも足踏入れて舞妓歌女に戯れ溺るところの時概を採りてこれを仔細に筆記せる樣、なか／＼心廣く氣暢かなる吞氣者にあらざれば能ふまじき事なれ、旅宿の待遇のよしあし、土地の女の美醜、料理の獻立より、宿料酒代までも詳

しく説して、當時の狀況見るがごとく、文は聊か冗長に過ぎたれど細密なる觀察と如何にも暢々して彩の晴れたる如き樂天家の心持は何ともいへずしておもしろし。

歌人の旅日記

香川景樹

十月十一日（文政元年）吉原を出づ、河原宿より顧みれば富士の嶺曇りなし、凡て山足東西に踏みひらき打なびきたる裾野まで、端山繁山さはりなく、のこる隈もなく見えわたれるは、此邊りより中の郷までの間なるべし、さてうるひ川蓼原へ來るほど又立隱したり

　大かたは雪と雲とに埋もれぬ
　　あまりにたかき富士のやまかな

人も斯くこそあらめ、吹上に來れば、田子の浦見え渡る、坂中の榜木にけさ散りし甲斐の落葉や田子の浦といへる芭蕉が句を書付けたり、その落葉とも見るばかり、數の釣舟、ちりみだれたる言はん方なし、蒲原をすぎて、由比にとまるさてこの家の庭前なる汀の松などよく〳〵見れば、下りつる時、あまり磯際の波さわがしとて、宿りあえず、立出し宿なり、さるは片腹いたく、面伏なるこゝちすれど、彼れは得見しらず。

　契をやゆひのはま松かへりきて
　　たちよる蔭のなみを見るかな

果して今宵寢られねば、晝見れど飽かぬ田子の浦と言ひし、古人の心をも思ひ出られて、やをら起出でゝ見るに、月はいづくよりさすらん、波の上ところ〳〵朧ろに白く、見馴れぬ景色も珍らしきものから、いと凄き心地すれば、引たてゝ入りぬ、いよ〳〵目も合はず

　あらためていかに枕をゆひのはま
　　春より高きなみの音かな

十二日朝とく出で由比川を渡り寺尾の松原を過ぎて薩陲山にかゝる、伊豆の海はるかに、日影匂ひ渡れり、弓手の方を見れば磯山かげの上より、

　さやかにもあらはれ初し富士のねに
　　さし向ひたる朝づくひ哉

己れ麓を望みて曰く、關のむかしなつかしき、いざ彼の見ゆる磯邊に下りて、岩根づたひの古道を行かんは如何に、荷負へる男子が曰く、然らば後なる倉澤よりこそ下り給ふべけれ、目の下にこそ見え侍れ、此の峠より下ることはいと難かる業にて、固よりさる道も侍らず、よしや下り立ち給ふとも、親知らずのあたりは傳へ行く事いと辛く侍りなん、己れ曰く、さてこそ關守る波々のかひはありけれ、いざやまづ分け試みんとて荷など物せさせて孝一をば先へつかはし節親民二人を率ゐて直ちに踏み下る、小松、髙茅かぎりもなく茂りなだりて、更らに道なきものから嶮しくもけはしければ、さる茂りにさわりつゝも、一人ぞすべり行く、手も顔もかき裂きて、いと堪へがたき中に呻き出たる

　岩木山まとへるかづらとりすがり
　　苦しき目にもかゝる富士の根

又把りたる力草の颯と薫れるを見れば藤袴なり。

　ふち袴たれぬぎすてゝくだりけむ
　　我のみと思ふ山のとかげに

下るまに〳〵何かあらん、針ある木のしもと原にしてあらゆる蔓這ひまとひ、柵かゝる小牡鹿の胸分けするに似たり、節さきに進みて、刀もて切拂ふもとより踏みし跡もなければ、おのが向ひ向下り、別れて、折折かたみに呼び交すめり、其聲も聞えずなれば、若し麓のかげ路を踏み落して波にや溺れつらんなどおもひ過すに、いとおそろしきまでなりぬれど、さて止まんやはと猶進み下るふもとより、節よばひて、むげに嶮しく侍れば纔かにして下りきる事叶ひはべらずといふ聲、波とともに響きたり、飛び下りんには如何に〳〵否やわづかをいへども猶一二丈も侍るべし、太刀佩きながらは極めて過失はべらんといふ、嗚呼妬ましや、いかにせまほし。

　磯きはにおり立かねて白波の
　　かへるぞ田子のうらみなりける

さらばとて踏かへすも猶易からず、今は草鞋の底もことごとく脱けて、いと踏締めがたきを念じつゝ、這ひ登るに闘めく所あり、皆そこに集ひ伏して息継ぎ合へ

り、此日頃我が詠む歌をさきゝのまに〳〵書き付けたりしを今の騒ぎに落しけん見えずなりぬとて、裳のあたりまで拂ひさがして節、

　をしきかな山邊海邊によみためし
　　數もしらたま誰かひろはむ

あな妬ましといへどかひなし、扨て塗れたる血を拭き、汗かきのごひ、あゆび引しめて、やう〳〵元の道に上り來れば、時は午の下剋なり、わづかの上り下りに可惜時を過ごしにけりな、いで鈍かりししわざかな、孝一やいかに待わびんいざと急ぎ下りて奥津川を渡り來れば、孝一待受けて、やがて此處なる茶店に入りて晝餉などものす、南面打ひらけて三保の松原前に列なり、磯の巖に鵜の翅干せるなどわざとならず面白き邊りなり、庵崎のこぬみの濱と詠めりしも此邊りなるべし、此家は春も憩ひし所にて折節彌生三日の潮干に會ひて和布苅、貝拾ふなど、見愛で酒酌みしも今の心地す。

　おきつ鳥鵜のゐるばかり殘りけり
　　潮干に見えしいその岩が根

これは近世の名歌人、香川景樹が、江戸より家に歸る道すがらの日記(中空日記)の一節なり、歌人は居ながらにして名所を知るといへど、苟くも道行きて、景の見るべきところあれば、危險を厭はず、進み習して探勝に身命を惜まざる勇猛の心掛け流石は其道の達人にこそあるなれ。

歌女の旅日記

武女

三月朔日(享保五年)江尻を出でゝ興津のあひだ、かの名だゝる松原見えたり。

　清見かた霞のまより見わたせば
　　浪にたゆたふ三保の松ばら

深草の上人の、母を倶し奉りて身延へ詣で給ひしに、殘月我を送る清見が關と作られしは、からうたなれど、えんに聞なされて、まづおもひ出らる、今は波のみ關守りて、むかしの跡はなけれど、猶心はとまるなり、蒲原へかゝる山道の左のかたに、岩もる雫の滴たるを、淸げに物にうけて、心太賣る者あり、此水は九郎義經

の硯の水といひつたへぬ、冠者にて奥へ下り給ひし時此水のもとにて、都への文など書い給ひきと、目のあたり見しやうに言ふを、皆人いみぢがりて、折はまだ寒けれど、心わから水飲むもありけり、浮島が原より富士の山近くみゆ、いたゞきには雲のたなびきて、肩のほとりより雪いと白うかゝり、裾はなべて緑に見ゆめり、今めきたる裳濃の几帳など立てたらんさまの、筆にも言葉にもいひつくし難きけしきなり、鹽尻といふ名のあてにも聞えぬを京極中納言の、にくしと思ひ給ひけんも道理なりや。

　　ちりつもる山てふ山をかさねてや
　　　名高きふじの峰となりけむ

かくて千本の松原を見やりつゝ沼津の宿にやどる、二日は關をこゆとて、夜深く宿をたちて、星のひかりやゝ白むころ、伊豆の國府につく、三島の神の御社の前にしばし憩ふほど、女はさはりがちにて、えまうでず、心ばかりのぬさ奉るついでに、

　　行歸りみしまの神の宮よりも
　　　ふりぬるものは我身なりけり

箱根山に入るに初音が原といふ所を過ぐ、枯たる杉のむら立てるうちに鶯のひなどもの巣だちたるが、多く鳴くをきくに、春は早くおくれたれど、猶めづらしき心地す、何某の僧正にまかせ奉らましかば、郭公ならでもおぼすらんよなど言ひて、すける人々は歌よむもあるべし、みつやなどいふあたりは緑の林茂りたる蔭をたのみて、世にしらぬものゝ旅行く人をわづらはせし事、むかしはありしにこそ、今は里人の家居もあまた建つゞきて道ひろき御代なれば、心ゆるして馬の上、こしの内などにある限りは、眠りてさへも行くなり、山中といふ所に糸櫻の見ゆるを、

　　玉くしげ箱根の山のいと櫻
　　　あけなばいかゞよるのみぞ見む

といへば、月の夜などはこの歌もあはれならんとて笑ふ、げに旅にていひ出づる言は、常のに今一きは劣りて、われさへ覺ゆれど、後引直さんもものうくて、さて置きしなり、午の時ばかり關にいたる、山のかひに

はくぎぬきしわたし、關屋には弓やなぐひなど、きらきらしう置かせたればことなき身にも胸つぶれ、手足さへぞふるふ。かしこき陰とたのみつる笠も、扇もとられたれば、つくろはぬ面に、ふくだみたる髮のこぼれかゝりて、いかに見苦しからんと、汗あえてけり、さはいへ、あそびくゞつの類も、人の外なる定めありとて、聊かのさはりもなく通し給ひつ、嬉しとや言はまし、哀しとや言はまし、今日は坂あまた越ゆるに、山駕籠も不要なりとて、歩みぐるしき石の上を徒歩にてたどりけるまゝ、いといたう疲れ困じぬ、畑、湯本風祭、小田原、節は五月とかや、されど彌生の三日こそ心もはなやぎて、桃のにほひに空さへ醉へる景色は、菖蒲の長きねも、かけて及ぶまじう覺えたれ、早川の瀬渡るほど、巳の日の祓おもひ出でゝ、

　早川にくだす鹽木をあまの子の
　　身のかたしろと人や見るらん

川を渡れば酒匂といへる里なり、こゆるぎの磯近き苫屋の内にも、雛遊びする少女どもは、桃山吹の花など、こちだきまで瓶にさし、今日の日の暮るゝを惜しとおもへるさまなり、野に出でゝははこなど摘むもあるは、今日の餅の爲なるべし、七とせのむかし此所を過けるは、九月九日にて、別れ來し親同胞の事など、思ひ出で哀しかりしに、けふは一二日のうちに逢見んことを思へば嬉しき餘り心さへときめきてそれとなく打笑みがちなるをかたへなる人等は物狂はしきにやなどおもふらんよ明日は府にまゐれば、公私しの用意ありとて、男のかぎり皆戸塚の宿にと急ぐまゝに、獨りのどかにも行き難くて、同じき處に宿りにつきぬ三日の夜より雨ふり出でゝ翌朝も猶やます、金川、河崎、品川などいふ驛々にもたゞ過に、すぎ來て芝にまゐる、こゝより大路のさま貴き賤しき袖つらね、馬車たてきに行かひ、はえ〲しう賑はへるけしき、七とせの眠り一ときに覺めし心ちして嬉しさ言はんかたなし、其夜は御館にありて三月五日といふに、ふるき家居には歸りぬ、言ふかひなけれど、親族のかぎり、近きはをばいとこなど待集りて、とり〲に何事を言ふもまづ

覺えず幼き妹の一人ありしも、いつかねびまさりて、髮などあげたれば、我が方には見忘れたるを、かれより打出でんも、つゝましくやありけん、そばの後ろに隱れて、なま怨めと思へるけしきに見おこせたるまゝ、猶心得ずして、そこにものし給ふはいづれよりの客人にかおはす、ゆゝしげなる言には侍れど、過行きはべりし母のおもかげに、あさましきまで似かよひ給ふめるはと問へば、かれはうつぶしになりて面もたげず、叔母も鼻せまりて物言ひやらず、皆はと笑ふにぞ、初めて心づきぬ、かくて盃めぐるほど、老たる父の佐目にいますが、やがてまゐり給へりと妹のいふ。

これは今より凡そ二百年前、享保五年庚子の春尾張名古屋より東海道を經て江戸に到りたる日記（庚子道の記）の一節なり、作者は如何なる人か詳かならねど、文中記する處ろによりて見ろに歌女などの類なるべし、されど其の詞藻の絶妙なる、これはいかなる人の落魄して、かくは物哀れに旅しけるにや。

儒者の家庭日記

梅　颸　夫　人

廿二日（四月）、晴、朝寒、大くら谷を出で、西谷といふ所にて中飯、かこ川、中谷三介出でゝ物いふ、朝寒ければとてかたかけ、とうき借る、しやうが煉賭る中飯の前、魚住太子道どり石碑の建ちたる茶やにて休らふ、風景よし、あはぢ島近く見えて遠く大和路の山山みゆる。加古川まで映雪駕籠にのり、加古川より襄のる、姫路どまりと定む、けふの道九里ばかりなり、加古川を渡しにて渡り、又川ありて渡舟にてわたる、城門を入る、町あり松屋てふ宿にとまる、革細工賣るもの來り、とゝのへる、映雪分一ッあり、一匁六分とやらんなり、十三匁二分とやらん、代銀遣はす宿ふつつかにて、蚊帳もあしく、蚊入りて夜たゞ寢がたし。

廿三日、陰、姫路を出て川を渡る、是迄姫路御領分のよし、山田坂をこえ、山田に襴たてる、いかるがに休らひ、正條まで襄襴にのる、正條邊より映雪のり、

つる龜といふたて場迄のり、褒のり代り、うね迄來る、問屋にて駕籠つぐ、又二てふ、三石にとまる。本陣脇とかいひて、宿よし、此所ほたる多し、宿につくほど漸々暮れて道に螢を見る。

これは近世の大儒賴山陽が家庭の生活を其母なる人によりて書かれたるものゝ一節なり、山陽母を奉じて京都より安藝に歸する時、播磨路に盤旋する間の記なり、以下、數節いづれも「家庭の賴山陽」といへる書中より年月を追はずたゞ興味ある部分を拔萃したるものなり。

七月二日晴、夕立、自ら留守、かたびら一、つね着單物、袷、帶一、塵紙一束、半紙、吉川の贈り、磁杯、あられといふ菓子、書狀は木雞より先達て屆く、こたびは三次父子五月十八日發の書のみなり。

十四日、晴、夜おりえ買物かた〴〵寺町邊へ行く、おのれもすゝめけれど不往、久太郞も行く、扇子五本たのむ。

十五日、晴、來賀の人多し、寺町の老人嫁來る、夕酒宴の時、別に人なし三郞などなり。

十八日曉天より風雨、風いよ〳〵つのり、くづれたる家もあり、此家もあちこち破損ありて急にしよく人をよぶやうなる事、小石契約ありて來り、荷葉飯振舞、歸られて後いよ〳〵騷動、晚方風靜まり、夜寢かね、褒も起きはなし聞かせる。

廿二日龜齡來る何か持參して見せ、油團の事約してかへる、夕酒の時、笠山よびに遣はし、一緖に丸太橋茶みせ迄行き、歸り、それより月空高くなるまで三郞も出て話す。

賴山陽は近世の大家なれども、當時學權の中心たる江戶儒にあらずして、京都儒者なれば、其の生計のごときも元より貧乏を免かれざるは其筈なれど、この記によりて見るに、平常の出入さまで貧しからず、交友も又多くして、到るところに風月の樂みを縱ままにせし樣想見すべし、山陽の母は學者の妻に似合はず、交際家にしてよく樣々の人に交はり、又遊山好きにして其の日を樂しみたるは次の記によりて知るべく 兎角稲分を 蓄へたる人の 樣に見ゆ。

五月廿一日雨、風、けふ東寺へ往くとて絹女共約束しけれど、天氣あしく不往、朝吉田の町出火、袖蘭(吉

田佐登女）來り一緒に酒事、夜に入り笠山來り一同に歸る。

廿二日、陰、今日吉田の鈴鹿へ行約束ありされども昨日の騷動なれば、斷り申つかはす。瀧原の子來り、行くべきやうにすゝめけれども必ならずとて止む。

廿三日、陰、近邊の吉田屋とかいふ、小座敷にて書畫會あるよし、笠山もせわやきの内なり珍らしき事ゆゑ、見物に行く季鷹（加茂）に初めて會ふ。

廿四日、陰、夜雨、鈴鹿の政子と約ありて、吉田山神恩院にまかる、夜に入れ雨ふり、時鳥鳴く、といふ事なりしが、不鳴鈴鹿より駕籠にて送らす、豐常父子も行く久太郎勿論なり。

留主に寺山父子とぶらひ重之物、酒肴持參。

廿五日、雨、夕、晴笠山夫婦誘ひ、砂川へ行き夜歸る、辨當ひらき、約束ありし故なり、笠山も吸物刺身、草栄、枇杷等出す。

廿六日、晴、東寺田邊飛驒といふ人、門下にて其人の振舞にて丹波屋といふ生洲、朱雀にあるよし行く、途中より雨降り又止む同所にて大ぶり、神鳴歸りには晴れたれば、駕にてかへる、絹女誘ひ往く、鍵藏つれる。

廿七日、晴、夜寒し、わた入着る樣なり、萩の花（牡丹餅）こしらへ留主見舞返禮等にくばる、今日豐常會の所不往。

久太郎今日なみ〳〵に起きる、笠山へ相談事に往く、夜寺川へ、あす絹女さそひのことに往く。

廿八日、晴、講釋、詩歌なり、此中より初める。夕龜松といふ座敷にて笠山夫婦、裏、りえ、兩家の子供つれ遊ぶ、袖蘭に舞を所望して山媼おちやめのと、かねがみさき舞ふ。

山陽の母梅颸夫人は大阪、立賣堀の町醫、飯田孫庵の二女にして名を靜女と呼び今より凡百二十年前即ち安永九年其年二十歳の時、賴春水に嫁し、其年山陽を生み、五十七歳にして寡婦となり、天保十四年八十四歳にして逝けり。

探検日記

佐久間象山

嘉永元年六月、利用掛の事を以て、稲野村（信濃）に赴く、稲野の奥は、積雪夏まで消えず、徒歩わたりする谷川多ければ、わざと暑天を冒して出でつるなり、翌十七日、山に上り、溪に沿ひて行く、溪に激湍多く、行くことあたはず、よりて行くべき所を擇びて、山に登り谷に下ること、幾度といふことを知らず、此のあたりの山々、嶮岨にして、上る時は、前なる者の脚と後なる者の面と、相去ること、尺ばかりなり。最後にかくの如き嶮岨なる所を登り、熊笹の中を分けて、ゼン澤といふ所の上にいたる、溪を隔てゝ、一つの瀑布あり、高さ數千丈半ば霧となりて下る、行過ぎむとする傍に長け四尺あまりにして、枝細く目なれぬ木あり、白き花の色、極めて鮮かにして、其形も香も蓮に同じ、江戸の花屋に、大山蓮花とて、一枝を、銀四五十目に代ふと聞きしは、此の木なるべし、やがて巖を攀ぢ、倒れたる木をくゞりなどし、暮に及びて岩魚捕るものゝ休らふ小屋にとまる、四方より、木の枝をよせ、木の皮にて蓋ひたるものなり、上古穴居にかへて始めて屋を作りし頃は、かくの如くなるべし。

十八日、魚野川を泝らんとするに、水急にして、渡ること能はず、よりて横に林の間を行くに、合抱に餘れる大木、麻の如くに倒れたり、上に登り、下にくぐり、辛うじて魚野川の南崖に至る、南崖、皆、碎石なり、石の質美し、金を含みつらむと思はる、心をつけて行くほどに、石に裂紋あり、鐵槌にて打碎きて見るに、亞鉛に銀を含むものに似たり、處々に鉛礦あり、礦條見えざれば多く採りがたし、深く掘りなば、礦條あるべし、此邊の平なる處を見たて、例の小屋作らせて臥す、岩魚の一尺ばかりなるを、あぶりて食ひしに、味いふべからず。

十九日、川にそひて上る、上は怪石磊砢として將に墜ちむとする狀なり、下は急湍索廻して、潭の中に注

げり、潭の色、藍のごとし、水清くして、魚多く遊べり、手銃とり出で、うたむとせし、をりから、從者の心なく石を投げければ皆、石の間に潜みて、再び出來らず、其處より、巖を攀ぢ、水を渉りなどして進むほどに、南へこゆる所あり、溪の中央に大石あり、水さかまき崖滑かにして、足を踏止めむやうなし、一町ばかり來し道へ返りしに、南崖より、北へ倒れたる樅の木あり、長さ十三四間、水より高きこと、四間ばかりもあるべし、こを渡りて、魚野川にそひて、上ることを數町にして、大なる飛湍あり、高さ二丈ばかり、白浪石に激し、萬斛の雪を碎くがごとく、雷の落ちかさなるよりも壯なり、觀る者、毛髮を悚しぬ。

二十日、小屋を出でゝ山に登るに、異香、忽ち、林に滿ちぬ、怪みて行くほどに、路傍に目なれぬ、草あり、地より抽出ること、六七寸にて葉なし、一ッの莖に、六ッの枝を生じ、枝頭の花の形、菊のごとし、莖の色、淡紅にして、花は淡紫なり、香の清きこと譬ふべきものなし、さきの異香は此の草なりき、香と姿とを以て考ふれば、芝の類なること疑なし、莖をかみしに、味、甘くして微し苦し、博物の君子に質さむとてこを寫しとりぬ、そこより、二里餘りも來つらんと思ふに、日すでに午に近し、水邊の石に腰をかけて、飯とり出でゝ食ふ。

これは洋學の先覺者、佐久間象山先生が、松代侯に仕へし當時、藩内に遺利を探らんとて山谷を跋踄せし時の日記なり、心に風月を見ず、專ら科學的の眼光を以て記したるは、自餘の日記文と大に趣を異にするところを見るべし。



摘菜日記

正月七日、夕つかたより、菜摘てみんとて、重明ぬしを伴ひ、この岡の東を巡り、淨土寺村へ出んとす。小松の並立ちたる間々より、彼の里まで見え渡る田の面、返へしたる、返へさぬ、色わきて景色よし、三日の子の日にはいかで來ざりけんと悔ゆめり、さて畔をつたへつゝ求むれど、よき菜もなし、はこべら、佛の座、二た艸のみぞ多かる。

田面はさてこそあらめ、野邊にこそとて北なる白河の里を目にかけて引たがへものするに、薺、鈴しろ、五行、いと澤なり、流につきて上り來るほど、いと清らに美しき、鈴菜一とふさ、ゆられ流れて、やがて取りて入れんとするを、重明ぬし、こは如何にきたなげなる人の、取り除せるにもあらん、計り難し、おのがじゝ摑み得たらんことは、けしきも情もこもるべけれ、けしう面白からず、とく捨てねといふに、河上に洗ふ根芹の籠を荒み洩るを拾ふは摘むに勝れりと人も給へと言へど、聞かず顏に進みて、こゝにこそ誠にすゞしき鈴菜おい出でたれ、かたみ早くなど言ふに、持ちたるをば捨てやりけり。今に芹一種ぞ足らはぬ、常に多かる物の、なぞやとわびつゝ求めあさるほど、日暮れなんとす。里中を通りぬけて、岡の北づらを西へ下りて、



初春の日影はや
がて暮れにけり
みじかき若菜摘
むとせむ間に

なほ深芹は根芹はと呼びつゝ來るに、辛ふじて川のあなたに見出でたり。

白川の流れにおりて摘む芹は
いとゞ清くも思ほゆるかな

重明ぬしも岸に立ち休らひつゝ、打ちながめ出だせる歌多し、白川の清き心ばへにてまぎれにたり、夕月の影も髣束なり、雲の絶間に見ゆ。

春の野の澤邊の若菜摘みためて
洗ふほどにぞ日は暮れにける

一房づゝ打ちすゝぐほど、時うつりぬべし、其間重明ぬし、岡のつかさに上りて、めはる柳一しもと切りとり、そが下枝に筐結びつけ南ざまに歸り來るほど風いと寒しや。



有信は、かゝる侘めきたるすさびには、すすろき渡るすき人なり内の御節會など、事しげきにや、罷りかへり來れば、けふしも、洩れぬる事のいと口惜う、おほやけづかへもさる方にはいと便なし、などゝさゝやくこそ、あはれなか〳〵なる痴心なりけれ。

暮れて後、花園三位の君より、み使へ給はりけるに、彼の若菜、枝ながら、御使につけて奉る、上枝に結びたる二首

摘み入れし筐の芽さへあらければ洩れてやあらん七草のかず
摘みはやす片手に千代を數へけり數ならぬ菜と思はざらなん
（香川景樹）

漂流者の孤島生活日記

筆者未詳

十四日(天明五年二月)朝より南風雨天に成り、まづ四人とも佛神のおかげを以て此島へ首尾よく上らせ下され、過分の仕合、皆々いさみ悦ぶ。雨天にてはあり、數日水切には逢ひ、何より水ほしき折ふしなれば、皆皆天水を飲み、息をつぎ、それより桶へ水を取ため置けれども、あまり荒磯ゆゑ、住居なりかね。脇場所に人の住居も有るやと考へ、晝九ッ過にもなりて、島中歩行まはる覺悟にて、岡へ上り候所に別て茅深くて、道はなし、茅押わけ却々通りがたくせひもなければ又又本の磯ばたへ戻り、日暮にはなり住居なく、見廻るところ、近く岩穴の有り、其所に一夜を明すなり。

十五日朝より西風なぎ日和よくなりしかば、皆々朝起上りしが、火はもたず、飯米はなし、焚あたゝめて食ふ事もならず、何の取手もなく、四人の者打揃ひ面を見合せ、あきれ果たり。しよせん叶はぬ事なれば、先づ磯貝にてもおこし、喰ふべしと、夫より皆々貝をおこし、磯の菜をとり、日暮になりて穴へ戻れば其夜五ッ時分に寢所の穴の口に小鳥一羽飛入りしが、夜中にて火もなければ、其まゝ打捨置き、草臥て寢入りたり。

十六日日和よく、早朝起出づれば夕べ入りし小鳥、其儘居りし故、皆々ひもじくは有り、其鳥を殺し喰たるに、さして味もなければ、打捨て、又、磯貝おこしに行く、然るに穴屋へ歸りて、その貝を喰ひ、汐水にて彼の鳥を喰ひけるに、今朝とは大分違ひ、味も至極よろしき樣覺ゆ、是れは神樣より此の鳥を喰ふて助かれとの御召ならんと存じ、鳥を取事を専一になせり。

十七日朝より皆々起居る所へ空に鳥のとまる樣子是はと氣をつけ見れば、上の岩かげの邊に鳥は居たれどそこへ行事叶はねば、いろ〱して道をつけ、そこにあがり見れば、平地のところなり、其處に大なる鳥多く居る、そばへ寄れども、逃げぬ樣子、能々見れば子を生み、子を養ふ樣子なり、よつて其處へ近づき大鳥

四五羽を石にて打殺し、持歸りし所、刄物なければ、船釘をのべ、それを持つて鳥を拵らへしが、火は持たず、炙て食ふ事もならず、汐水をもて洗ひ、食ひたれば、至極味はひよく、それより朝夕の食物とせしに、少しも障りなく、身に相應いたし、身にしゝ合もみのり、達者に暮すなり。

朝夕鳥を食物にいたし喰餘りは、日々干物にいたし置き、しまつせしが三月頃より次第に鳥が少くなり、それに就ては鳥の居ぬ間は食物なしと、それより干鳥の事に氣がつき、一人前に鳥八十羽許りつゝ、四人分を干物いたし置く。鳥は四五月頃まで何國へか立行、干物ばかりにては飯米少く磯貝などおこして喰ひ、又干物にもいたし、毎日磯邊をかせぎて暮しける。時に八月頃になり、魚杯釣事に氣をよせ、其道具もなければ、舟釘を以て魚ばりを拵らへ、繩もなければ、磯邊に打寄せたるを拾ひ、それを繩につくり、それにて魚をつり、食事に心易く、日を暮したり。

これは土佐國の船頭儀助といへるもの數人天明五年の二月同國赤岡の湊より出帆して大阪へ通へる途中、土佐沖にて大南風に遭ひ、難船して方角を失ひ、海中に漂流すること十數日、辛ふじて無人島に漂泊しつぶさに艱難を嘗むること二ケ年餘にして漸く歸國し九死を脫して一生を得たる時の日記なり。但し原文の意味おぼろげにて綴の合はぬところも少かられば書き直したり。

狂歌師の旅日記

太田南畝

廿八日(享和元年二月)雨霽　曇りてほの暗きに出立つ、宮ケ谷村より左りへ折れ坂をのぼる、權太坂といふ、松の林あり、中里村をすぎて境木村の立場にいたる、地藏堂あり、これなん武藏相摸の國境なりといふに、初めて異郷に入りぬる心地せらる、燒餅坂を下りて左の方に、永谷八郷の惣司、天神山、天滿宮に行道の碑建り、日本三體の一個なりといふ、信濃坂を下れば左に尼將軍御本尊正觀音堂あり、又坂東十四番の觀音に行く道あり、から尾の立場に憩ふ、此あたり左右の山のたゝすまひ、都下の景色に樣かはりて、垣ほ

の桃くれなゐに、野菜の花黄なり、下飯田村と福田村の間にて、莚包みの長持引つゞき來れり、阿蘭陀人獻上物といへる札建てたり、四夷八蠻も譯をかさねて來たる事、治まれる代のいさほしなるべし、桃靑翁の發句に、

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

といひし事など思ひ合せらる、右に大山道、爲ニ五處橋供養一と書ける碑見ゆ、左に十九番假堂觀音道あり、松間を過ぎて土橋をわたり、戸塚の宿に入るに雨降り來りぬ、左に觀音堂あり、行基菩薩の作なりといふ、右に淡島明神の道あり、左に鎌倉あり、此所より鶴ケ岡まで二里ばかりとなん吉田橋を渡り、伊勢屋源七なるものを問ふ、問屋の正面に住めり、年ごろ和書多く貯へたると聞くに違はず、去々年金澤文庫の印ある尙書正義一卷、公に獻りて金五兩を賜はりたる由などかたる、萬代和歌集、月詣集など北川氏より借りし事ありしが、此人持てる文と聞けり、高樓に折からの雛あそびの調度めくもの建てわたして、賑はしく、茶など煮てすゝめんといへど、先を急ぎて出づ、左に鎌倉道の碑あり、天王の宮、八幡の宮あり、土地の鎭守なりとぞ、一番坂、二番坂といふを越えつゝ行けば松の林あり、此のあたり松露多しといふ、白子の臺といへるところを俗に女ころしといふ、一年旅人の女を殺せしところなりと、輿舁夫のいふに、あたりを見れば人家なし、物すごき事言はん方なく、やう／＼行きて右に靑陽院專會寺の行く道あり、又富士、淺間の社見ゆ、松原を過ぎて立塲あり、かげとりといふ、右に智證大師の作らせたまふ不動尊に詣づる道あり、左の方の岨に一本の櫻咲そめたり、實に東路のかざしなるべし千本杉といへる邊りは、老杉雲を凌ぎて高し、藤澤の宿に到り橋を渡り道塲坂を登りて小栗堂に入る、照手の姫の像あり。

小栗滿重の事普ねく人の知るところにして天狗の爪古鏡、などありといへれど浮きたるもの見んも由なしと見ずして出ぬ、山間の墓原をすぎて藤澤山淨光寺の裏門より入りて見るに本堂、觀音堂、鐘樓、經藏な

どつき／＼し、車田を過ぎてひき地川を渡る、小栗殿の乘れる車を洗ひしところなればいつも水濁れりといふ、四つ谷の立場を越え二つ谷などいふところに至る、右に大山道あり、松の並木の蔭を行きて十景坂を過れば、右に大山高く見渡さる、都人士の鮮らけき魚の鱠喰ひたりとてのゝじる南鄕の立場、これなりと聞きて、名もなつかしき江戸屋といふ家に入れば實にあざらかなる鯷といふ魚の鱠持て來れり、雨衣入るゝ籠の中に携へ來りし酒樽とり出して下物に箸さし立つるに味ひ尋常ならずぞ覺えし、松露といへるものは三ッ四ッこそ羹にはすなれ、漆しの色も衰ろへたる椀に堆たかく盛りたる、さすがに鄙風たり、橋を渡りて右の方に大鳥居あり、鶴ケ岡八幡宮に詣でぬる道なるべし。

太田南畝は幕府の吏人にして雅號を四方赤良、蜀山人といふ、詩文を善くし、狂歌、狂詩に巧みなり、この日記は享和二年幕府の命を以て大阪の銅座に出役したる時の記なり、されば蜀山人を狂歌師といへど、この日記は狂歌師としての蜀山人日記にあらずして、幕府の吏人としての旅行日記なることいふまでもなし。

風景探勝の日記

曲亭馬琴

七月廿一日から崎の松見むとて、未明に京をたちて白川越をす、湖水の眺望いづれはあれど、白川の峠より見るをよしとす、三井寺これに次ぐ、世に近江八景の畫圖、多しといへども、まのあたり、見るには、遙かに劣れり、八景あひ去ることたがひに遠し、白川山より見れば、一瞬千里、然れども、比良は右にかくれて、堅田矢走も晴れざれば、見わきがたし、此の好景畵くとも筆に及びがたく、述ぶとも詞につくし難し、近く見てます／＼うれしきものは石山と唐崎の松となり、北より南にさす枝、三十間ばかり、東より西にいたりて廿間餘、幹はふたかゝへにあまり、木の丈、高からずして、まん丸に茂生す、洛陽妙心寺の松、島原角屋の松、および住吉難波屋の松、いづれもよしといへども、から崎の松に對しては同日の論にあらず、實に天下の一つ松なり、傳にいはく、から崎の松枯れた

る時、明智光秀栽ゑかふとて、

　　わが外にたれが植ゑけむひとつ松

　　　こゝろして吹け志賀の浦風

その後、これも枯れたりしかば、長嘯子又栽ゑらるゝ、これも又枯れて今の松は近時某侯の栽ゑられたるなりといふ、松のめぐりには、かきをゆひ、崖には石崖をして、いと嚴重に見ゆ、近年、枝條ますく〵垂茂するをもて石を築き出たすことしばく〵なりとぞ、松の前面にから崎明神ただせ給ふ、小社なり、ある人のいはく、前の說非なり、この松すでに四百年に及ぶが、この事山門の記錄にありといふ、げにも、木だちのさま、百年以來のものにはあらず、傳記なほ尋ぬべし。

歌人の看梅紀行

清水濱臣

十三日(正月)夜のほどより、聊か風立ちたれど、天氣いとよし、杉田へは山越して今の道一里半もあるべし、されど背柴人の踏みわけし道なればたやすくは得越え難からまし、こゝより案內の人まゐらせんとて添へたり、此新田の境を南へ離るれば、太田村と石川中村との中をすぎてまへ村といふ打ひらけたる田面なり向ひに見ゆる岡をたゞこえに越ゆれば、南に海いと青く見渡さる、こゝの樣いとをかし、さて下りつくせば根岸といふ、そこより瀧かしらといふ村を過ぐれば、いそごの浦にいづ、かの岡越に見えしは此處なりけり、近くさし出で、杉田の濱邊にこゆべき塙あり、いとさかしとも、さかし、そば平なる細道をふみゆけば、磯もとゆする浪凄し、今日は風立ちしけなり、こゝを下れば森村とて薪とりつみて端舟の往來たゆる時なく、いさゝか賑はへる浦なり、こゝを過ぐれば則ち杉田村にて濱の眞砂地に杭立てゝ、森村との境をしるせり、こゝより賤が家に、畑、園生など梅多し、わきて多く植こみて、咽ぶばかりなるは、妙觀寺といへる寺の庭なり、濱路にむきて開ける大門より望めば、今を盛りと咲きをれり、堂の西なる小山を天王山といへり、そ

がいたゞきに登るつゝら折のがけ路より見おろせば、千本の梅は白く、梢にとほき海原は青く、筆にも言の葉にも述べつくし難し、此小山のいたゞきより、西に下れば、小松いと多く並立てり、あはれ都近からましかば子の日にもるゝ春はあるまじきを、誰見はやす人もなし。

清水濱臣は、江戸の人、國學を村田春海に學びて、文章一家を成せり。

風流宴飲の旅日記

成島柳北

十一月七日快晴、窓を開きて象頭山を見れば、よべ降りしと見えて、山頂雪少し積れり、「初雪の額に白し象頭山と」戯れ居たりしに、竹香も起き出で來りければ、時刻は何ほどゝ聞くに、明けてうつゝと答ふ、何事にやと訝りて尋ねて問へば、明けて五つといひけるなり、其詞の訛る樣も推して知るべし、此地に演劇大阪の俳優、尾上正六が、巨擘なるよし、妓輩悖行けと、すゝむれど歸りを急ぐ旅なれば止みぬ朝餉に鯛のちり（岡山にて食ひしもの）を食ふに味よし、羊羹を器に盛り酒の肴に出すも珍らし、一酌して、虎屋を立出づるに、諸妓皆送りて、大鳥居の前まで來る、其より、成齋と共に語りつゝ歩みて大なる松の傍を過ぎ、樽見村といふ處に至りて茶店に憩ひ、饂飩を食ふ、葱と、小蝦とを加へたり、風味田舍めきて可笑し、此地は麵には富みたる處ろとぞ丸龜の城下を過ぎて又備前屋に歸る。此所にて午食し、船人を呼びて船を出す、今日は昨日にかはりて風順に浪も立たず、人々皆起ちて四方の景色を望む、いと心地よし。

波瀾百道拍レ巖還、　奇景看來奇險間、
四國登容二容易到一　慇懃回顧象頭山

岸を離るゝ一里許り、摩島に到るこれより左右に羅列する鹽飽の群島なり、右に砂彌島を見る、此島には人家あり。廣島本島は最大なるものにして、人口も多し、船進んで三里ばかりも出づるに、右に八島、五劍山を望む、其左に富士の形したる島二つあり、大槌小

槌といふ、是れ讃備の境なりとぞ、豫島は石を切り出す事多く都廬島は瓦を燒く家夥し、島嶼の數限りなく、此の海峽より下の關まで續きたるよし、實に勝景すぐれたる地なり、人々奇景に對し恍然とせし間に、船いと早く、前に田ノ口の港を見る、其左に人家多く見ゆるは下村、下津井といふ、兩港にて、皆讃岐へ渡る船子の多き地なり、松島、はだか島の間を田ノ口に至る、七里の海路を一時の間に渡りぬ、風順にして帆正しき故なりき昨日の苦難に比すれば別境の如き想ありき、富士屋に立寄りしに、主人强ひて止むれど、酒食の惡しきに懲り果てたれば、袖うち拂ひて遁げ出でぬ、人々峠村を超え、山上より海路を望めば、讃州の諸山、猶、目睫にあり、去るに忍びざる心地せり、日の暮る頃、瑜伽の西屋に着きぬ、此所にて又酒酌みつゝ讃岐より早く歸りしを祝ひにけり。例の如く、鶴香、三吉、榮次、お愛、などいふ校書を呼び集へて遊ぶ、此の鶴香てふ女は才ある者にてよく人々を慰さめぬ、歌うたふことも巧みなり、其歌に「明の鐘一つふやして七つにしたらはなし殘しはせぬものに」「明烏、そちも役目で啼くのであらうが、ぬしの來る夜は遲く啼け」いと趣あり。

酒酣なる頃、義平又千代鶴とお常といふ、二名を招くに、千代鶴の形楊梁の錦兒に似たりとて成齋が予に戯れぬ、夜いたく深くるまで、興じつゝ人々己がまに〳〵臥床に入りぬ、千代鶴は、此の隣なる酒樓に養はれてあり、其故鄕を問へば浪華なるよし、其様いと、やさしく憐れに覺えて、夜もすがら、物語しける、錦兒の事など忍び出でゝかく讀みける。

染出でしゆかの山邊の蔦紅葉
　　にしきに似たる色も見えける

八日晴、朝より、人々と酒酌みて遊びにけり、此家は、屋宇淸らかにして、酒殽も口に佳なり、饂飩を供せしに其味東京にもあらぬほどに美なり、第九時の頃西屋を立出で、瑜伽權現に詣でるに、鶴香、千代鶴を始め、人々皆送りて來にけり、權現の社はいと高く、其上の山上に塔あり、其ほどより望めば四國は近く眼



前にあるが如く、覺ゆ此山は要害よき地なれば、城壘を築かば至當の所と思はる、山を下る處ろにて西屋の女原に別る。

山路を下りつゝ行きて小原に出づ、農家にまさきのかつら生ひ茂りしを見て、手折りて歸りぬ植松の渡しより、三間川に至り、引舟倩ひて申の皷うつ頃妹尾の偶居に歸りたり永氏と道すがらの事ども語りて興あり此地の水母を酢にて食ふ、味ひいと美なり、利惠一を招き導引たのみて臥しぬ。

九日晴、午飯後、成齋と共に、かはり野といふ處に出で、小川のぬくめといふ漁獵を見たり、ぬくめは田畝の間にある小川へ枯木の枝多く沈め置て、寒くなる比多くの魚其間にかくれて栖むを考へ、竹がきにて前後を遮り、其間に網をうつなり、此の日、鯉なまづの類千ばかり捕へたり、岸の泥のうちなる魚を手にて探りとることはこの地の習ひにて、これを獺といふとぞ、僅かの小川をせき留めしに、かく數多く獲物ありしは、此ほとり魚の多き故にや。

これは成島柳北の徽航日記の一節なり、柳北は幕府の遺臣にして明治初年に於ける騒壇の巨擘なり、人と爲り多才多感、諧謔に長じ又憂世の志あり、詩は其最も得意とする處にして、狂詩戯文手に任せて成ろ、頗ろの風流才子にして遊跡天下に普ねし。

汽車の旅

七月十二日　午前四時過ぐるころ、阪本の家をたちて、新橋の停車場にいたる、ゆくりなく伊藤圭介翁の、故郷名古屋にゆくにあへり、かたらふ、友を得て、いとうれし、かくて汽車にのれば、三條西侍從も、西京にものせんとて來あひたるに、いよ〳〵心いさまし、七時二十分ばかりには、戸塚の驛につきぬ、こゝより藤澤までの道のほど、此の頃の霖雨にて軌道のそこれたるところありとて汽車をとゞめたれば、おりて人力車をやとひて藤澤にいたり再び、汽車にのりぬ。

大磯の海邊をすぐれば、左に伊豆の海を見渡し、右は國府津よりやう〳〵に、登りゆきて、箱根山の、はるかに、西北のかたを、めぐりゆく、松田の驛を出て、窓よりながむれば富士の山は、左の方に見ゆ、いとあやしみつゝゆくに、御殿場の驛、近くなるまた〳〵さらに、右の方にぞ見えたる、その軌道の屈曲せるを思ふべし、これよりはあたりはさはる山もなく、峯より麓のかたまで、あらはれたるさま、その景色、たとふるに物なし、けふは朝より曇りたりしを、今し晴れそめたるによりて、富士を見ることを得るは、いと嬉し、山北より小山に至る間は隧道いと多く、たちまち穴に入れば、たちまち出で、また、入り又いづる、さながら夜と晝と行きかふがごとし。



かくて佐野をへて、沼津に下りゆくほどに、向ひに薩埵山見ゆ、この山の方はいとうちひらけたる海面なり、田子の浦とは、このあたりをいふなるべし、靜岡より西の方には、架橋多かる中に、ことに、ながきは安倍川、大井川、天龍川、さては遠江の濱名湖なり、むかしは大井川の川越とて

輦臺といふものにうちのり、または人に負はれて越したる事にてもしながら雨ふりてわたりかぬる時は其の水の引くをまちてわたりたるなり、今はさる煩もなくて、さはかりの川をまたゝくまに横ぎり行くなり、世のうつりかはりゆくさまは、あやしきものにてこそ、又川のみにもあらず、宇津の山、佐夜の中山などいふは、さかしき峠にて、旅人のいとなやみたるところなりときゝしを、今はいつの間にかは、行きすぎつらんと、其の山の在所だにしらで過ぎしは、さはいへど、おぼつかなく、本意なきこゝちせるぞかし、舞坂の驛をすぐれば、今切の軌道にかゝる、左かたは荒井の海、渺茫として廣く右のかたは入江にて、はろか向ふに湖辺の村落を見さけ、軌道の左右は、ふりたる松並木にてところ／＼水にひたりたるさま、さながら、水牛の浮べるがごとし、其景、筆紙につくしがたし、東海道軌道中第一の奇観なりいにしへの濱名の橋は此のあたりにてありしなるべし。



かくてこゝを過ぐるころは午後七時すぎたるに今日は陰暦の十五夜にて月は海中より照りのぼりて、並木の松の木かげより、ほのめき出でたるに、やうやうに海の面もあかくなりゆき、其水に映じたるはおもしろしなどいはんもなか／＼なりたゞ、汽車の過ぐる事の早きをかこつのみ。

今きれの松の木の間に影みえて
濵路さやかに月さしのぼる

（木村正辭大人）

獄中日記

（幕末の雄將）

巳夏六月三十日（明治二年）朝十時頃東京着、細川侯の兵隊護送して軍務局糺問所に至り二時間も門前に待ち居り其後門內へ順を逐て入りし處、白洲と思しき所へ小吏共誘ひ連れ、此に榎本始め、松平等四人とも坐せしに、砂利の上に薄き呉蓙を敷きたる所ゆゑ膝痛み大に困却せり、正面なる高き座敷に役人三人許傲然と坐し糺問中揚り屋へ入るべき旨申渡し、獄吏直ちに腰に細繩を附け案內せる故、之に從ひ行く揚屋の戶口に至り錠を開き內に入れば、揚屋は幾間にも分ち多人數群居せり、我等は最も奧なる一番室に入りたり、室に入る時小吏共悉く所持の品を改めしにより是非なく用意の金子並に石筆、小刀、矢立等を渡せり、室內に入り見れば四方は四谷丸太の二重格子を以て之を圍ひ、六疊敷なれども圍の內に圍と流し箱とあれば疊は四疊半なり、此內に七人納れられたり、飯時には竹の皮に飯を包み澤庵の切かけたる一片を副へ、小使持ち來れり因つて七人共、相對して之を喫す、四方窓暗く未だ殘暑も甚だしき故精神無聊何れも少許づゝ食して箸を投せり。

予嘗て舶來の虎を見し事あり今日の姿恰も見せ物の虎の如し可悲哉。（中略）

本日は何の用事もなき故、夜に入り　其儘臥せしに蚤は肌を螫し、蚊は耳に響き、安眠する能はず。

翌日は小頭に賴み、生姜、日光蕃椒、並に紙帳抔買求め夜分の用意をなせり、靜坐すれば身體に害あり、運動せんと欲すれども上にも云へる如く四疊敷なる故七人坐する時は格別の運動も爲し難し。

朝飯の時は味噌汁を手桶に入れ、湯をも手桶にて持來れり。

每日每夜無事閑散にて或は無限慷慨を起し、或は昔日の癡情を發し、却て身體に害ありと衆議し小使に賴み紙の將棊盤と駒を求めたり。（中略）

七月四日四人入替あり。

此牢屋は予が一昨年歩兵頭たりし時、歩兵取締の爲め建てたるものなりしが、何ぞ圖らん今は我身を窘迫せしむる獄とならんとは、己れより出づるものは己れに反るの理なるかと一笑を催はせり。

日々三度の食に蔬菜なく困却せしにより、折々小使に頼み、生姜、ヤタラ味噌、煮染、杯を求め、隣友にも配分せり、去乍右の品の價貴く獄中の習ひとは言ひながら隨分甚だしきものなり。

我等入牢の時、役人より金五兩づゝ受取たれども、紙帳其外日々少許の買物を爲せしにより、嚢中次第に空虚にして大に心細くなり、戰地にて彈藥の盡ると同じ思ひを爲せり牢中の人員折々出入ありて增減あれど大抵十三疊に二十四五人位なり殘暑の節一疊の上に二人づゝ並び臥するは隨分難澁なり。

沐浴は大抵十日目或は十四五日目にて人數は多く殘暑は強く圍は臭き故身體の汚穢を除くに術なく因て飯時の殘湯を取り順を追ふて一日に四五人づゝ流し箱の内にて行水を使へり。

牢中筆墨の禁嚴なる故何も大に困却せり、新來の一人矢立の筆を持ちしものありし故、始めて反古紙を買ひ墨を絞り出して少しづゝ書記せり、或は七夕の紺紙を求め前同樣に用ゐし人あり、然るに會津人佐沼といふ人入牢せしに此人圖らずも一片の墨を袖にして來れり之を貰ひて大に明瞭に書く事を得たり。

これは今の樞密顧問官大島男爵が、四十年のむかし奥羽より函館の戰爭に破れ、官軍に降りて一時囚牢の身となられし時の日記の一節を摘みたり、維新草創の際、獄制未だ定まらざりし折の事とて囚人の凄慘を極めたる樣想ひ見るべし。

貴族の別莊を訪ふの記

（岩倉大使歐米回覽隨行者の一人）

廿八日陰（明治五年九月）

朝十時より馬車に駕し府を離れ西走する事七八英里、トン河の上流なるダベンチシヤ、チユーク勞德リヤールド、カベンサン公の、チヤツピースハウスに至る、沿道の地は平岡起伏し、道路縈回し野に鋤痕少く時に茫々たる荒草の原を過ぐ、時正に東暦霜降の中候なる

に滿原の草みな枯れ、蒼々漾々として灰黑色をなし氣象慘憺たり。

此日陰風凄其として殊に凜冽を覺えたり、英國の北境秋を催す、早く荒原にあへば大抵此如き景象なり、其陰寒にして地味の瘠惡なるを知られたり、荒原は以て獸獵場となす、稍潤濕を帶びたる地には鋤犂即ち入る是より林樹處々に茂り黃葉の間に綠松を錯へ、風光頓に好く道も亦清潔なり、幾くなくして靑草滿地樹木錯落たる中に群鹿の遊ぶを見る、チユーク家の宅已に近きにあるを知るなり。

カベンサン公は約克州の貴族中にも有名の世家にて最も富有の大族なり約克州中にて六ヶ所の田宅を占領し一歲の租入すべて二十萬磅以上に及ぶ此の別莊は左右皆岡巒を負て起る、ドン河其谷を分つて流る、西南は濶然として遠野を帶び遙に岑巒の靑黛を見る、其地の景象既に凡ならず館は三階の高宇にて皆白石を以て築き皎然として聳へ璁琢精にして彫刻少し。

馬車門に入り其玄關に至れば、家從の人迎接して一室の內に入らしむ、此室は四面に書籍を棚堆して隙をとどめず、廣さ二十五六疊に比すべく即ちチユークの居間なり此に入ればチユーク起つて握手挨拶をなす、甚だ眞率なり、夫より親から起ッて各室を案內し戶を開けば一の廣廊に至る、此に一冊の帳あり一行の名を署記せしむ、室の滿面みな畫を描す、羅馬の該撒議院に於て殺さるゝ圖などありて筆跡みな精に彩色燦爛たり是より諸珍器の房室を回る、西洋の俗は器物を箱にし閉藏する事なし盡く房內に陳列し、客に示すを以て榮とす、各房室の內四周の壁上宇下床みな種々に精巧を盡し纖細の彫刻綺褥の畫帖あり中には金を刷りて光華爛然たり壁には文錦華絨・佛國のコブラン織等を張り其一面の價も數萬金に上る、周緣はみな金ずりの文繪なり珍寶を其內に攤列す、歐羅巴の珍器、古器は固より無數なり。又支那、日本、印度、亞弗利加の古器及び寶器を蓄へたり一石盤あり密質にして紫紋あり些の瑕疵なし其價一萬磅又英王ヂョールヂ第一世の榻あり、是れには史傳ある事なるべし。

又陶器を陳せる數房あり各國各種の陶器を羅列す、花瓶は臺に据ゑ、小陶器は棚に並べ大皿は書額として總て壁に懸る、其内に日本の古伊萬里燒の陶器は歐洲に久しく珍重せられ大家の珍藏には必ず其一二を蓄ふ、中には碎けたるを補完し陳列せるに至る。

書額を集めたる室々を回れば以太利、佛蘭西の名畫は其數を知らず、又古き墨畫あり、一覗味なきが如くなれども皆名手の筆にて其價最も不貲なり、或はこれを數萬金にて購ふとも得べからざる物ありと中に一畫あり、其面部のみ精彩を極め活けるが如し、全身は只筆を塗沫せるのみ是は有名なる畫家此の畫を描き未だ成就せざる内に死したる未成品なりと。

客座敷寢室の部には先代の畫像及び各國帝王の畫像を藏し下には華氈を敷く、花の如き榻子は錦繡を以て包み、彫刻の案をする、往くとして目に輝かさゞるはなし、英王の宮殿も此には一等地を讓るといふ、それより彈玉（玉突）の戯をなす廊あり、次に講經堂（圖書館）あり皆是上層の室なり。

下層なる窖には酒樽を蓄ふ、此內に一百餘年に及ぶ銘酒あり、酒は年を經るに從ひて細微に泡釀をなして益く美味を生ずるにより、西洋の俗は殊に古酒を貴重し一壜數十弗に至るある、此所にて一樽の栓を弛め、衆に一嚼せしむ。

是より臺所に至る、石炭を燒く竈、瓦斯火を用ゆる竈木炭を用ゆる竈、薪を用ゆる竈と四棟を分ち物によりて火を異にす石炭を用ゐて煮炮するは最も雜用にして大抵、牛羊を炙るに供す、是には車輪の設けあり、肉を鐵棍に縛し、燭火の前に輪回せしめ以て炙く。

食堂に於て晝食の供あり、チユークの母、夫人等一家みな出で歡待せり、晝食なし畢つて其浴室に至る石を以て床とし石面に無數の圓孔を穿ち夫れより蒸汽を颺げ石上に坐して浴する仕掛をなせり、夫れより庭に出で花園を回る、道に一廊あり、石像を攤列す、初代ナポレオンの像あり名手の彫刻にて容貌雄偉活るがごとく。

此より玻璃窖（溫室）の小農園を過ぎて馬厩に至る、

馬皆澤々として肥え、中に乘馬數匹ありみな價數萬金に上る、鬣より蹄に至るまで些垢なく蹄光は玉を欺き毛色は脂を含む、何ぞ啻に穆公の駿のみならんや。

屋中を回り畢り庭苑に出づ、山上より林樹を切開きて懸瀑を作り水は上層より一幅の素練をなして下り落ち水底は石を敷き磴を作る、水は級々に下り中間にて乍ち跳りて回散す庭上より一望すれば一條の玉簾乍ち波折をなし、珠を躍らすが如し、西洋の俗は水を愛翫す水學の益ゝ開けるに從ひ日常に用ふるに其利を盡すのみならず、以て都府庭園の觀美に供し變態を盡す、跳水池の設け至る所にあり。

是より苑中を回る、苑廣く樹茂し左に山巒を負ひ右は長阜による、石陳ね樹をうゑ徑より林中に入れば乍ら一樹を見る、枳樹の葉なきが如し、それより右の洞門に入る洞凡そ二十餘尺、進んで出んとすれば洞口の大石横はる逡巡し返らんとせしにチユーク自から手にて其巨石を推すに回振して門に中し、左右に道を開く、相見て一笑す、蓋し其底に螺旋の機關をなしたるなり苑の盡くる處に花園あり、玻璃の巨屋を作り、其中に熱帶地方の木を植ゑ芭蕉、棕梠、椰子、竹の類其數を知らず、亭々として一字の天地に繁茂せり、細草幽卉は其周圍に集め植ゑ、池をめぐらし水を湛へて一の熱帶園をなす。

これは明治五年明治政府の全權大使岩倉具視公の一行が歐米諸國を回覽せし時隨行の書記官が記錄せし日錄の一節なり、カベンサン公は英國ヨーク州の富める貴族にして家産の饒かなるは其門邸の廣大なるを以てほゞ想像すべし、當時邦人の眼に西洋の物はすべて珍奇を以て迎へられ、一器一什悉く異樣、殊品として珍重せられたるの狀、其の畫室の夥しきに驚き、庭園の規模の廣大なるに心を奪はれたるが如き、聊か田舍者の都見物めきたる樣はあれど要するに大使が這般の回覽によりて智見を廣めたるはやがて今日文明の進歩に裨益せしところ大なりといふべし。

病床にありて月日を樂しむの記

（中島湘煙女史）

四月九日晴（明治卅四年）朝京都より鯛と海老と着し

ぬ、まづ鯛の鹽燒にて朝食を喫せり、母君は胡瓜を求めに、人を走せしめ給ひしも得ざりし、海老は鬼燒と具足煮と、午食には間あれど、出來立を稱するには妙ならん。と忽ち箸を下しぬ、料理二つながら美、此の邊の海老は肉堅くして味ひ佳ならず、此の味ひに會する每に伊勢參宮の昔を懷はざるなし、午後出でゝ門に至る、雛婢諸山を指點して、春色を解き、我が園花あるところ車をとゞむ、我家に來る、日尙淺く、既に少しく化するところあるか、きよより端書着す、我まづ胸とゞろく、遂に養生、今朝五時云々の數文字、實に千萬無量の涙を帶べり、彼れ昔し夫を喪ふや、此の子あるが爲に更に哀しく、又此子ある爲めに遂に樂しく此の子あるが爲めに、長らへんと望めり、此時は猶此の子幼、共に悲愁を語るによしなし、今日の困苦語りて共に樂まんと欲して身の老に向ふを懷はず、子の偏に成人せん事を希へり、丁年に及ばんとするに當てや兵役を免がるゝの道なきやを思ひ煩ふて、晝夜措く能はず屢ゝ來りて我にはかる、役に取らるゝの健康ならば幸福なり、奚ぞ慮ることかはと我れ輸す、間もなく受驗して不合格となれり、此時既に、今日の不運を釀し居りしやも知るべからず、されど親の身に取りてはまづ眼前の役免がれしを何よりの幸福なりとて喜べり何ぞ知らん其時の喜び今日の悲みと變せんとは、禍福は縄のごとし、甘い哉言也。（中略）

十二日晴　連夜の發汗に元氣次第に衰へて、床離れ兎角惡しく、母君幾回となく、襖を開きて、少しも急ぎはせぬ、朝食事、いつまでも待ちて居ると言はれては安閑とも寢て居られず、十時やう〳〵起て出でたり、食も甘からず、されど起きたればこそ書齋にも入るを得たり、午後は必ず發熱と定まりたれば、こゝ二時間ほどが大なる寶なり、老婢に喋べり奪はれてはと、如何なる問題にも耳聾せし如く、さて何を爲さんかと思ふに、昨日櫻描きし興忘れられずして、又もや絹本を汚せり、二時間ほどにて、出來うるものと始めより定むるを以て小品の外に手を出されず、且つ端坐しては三十分とつゞかず、膝を擁して筆を執ることなれば、

其外形の殺風景なるは今や論ずる時にあらず、其の實地に於て筆の自由に動かぬは何より殘念なり、殊に机上の事なれば全面を窺ふこと能はず活勢に乏しきも止むなき次第なり、我が描きし櫻花、風吹かざれど、開けば皆何處へか散じ去りて、狼籍の色々を見るに及ばぬこそ幸なり、空所に一花生じ、一葉湧き、一枝成るの刹那のみ、甚だ愉快なれど、日を隔てゝ見る時は、其拙劣人をして不快に堪へざらしむ、何時の間にか散じて他にあらば、此の不快を免かるゝなり、然らばこれを得し人をして長しへに不快ならしむるかといふに左にあらず、人の書畫も隨分拙きもののなきにあらねど見るごとに必ず鬱を散ずべければ、他人も又或は我れの如くあらんと思ふなり。(中略)

四月二十日　朝半日又もや墨牡丹を描けり、意に適せねば改めんとて愉快なり、意に適すれば更に愉快なり筆を弄する爲めに病勢を添ふとの忠告はあれど、いづれ不治の病と定まりし以上は三十分間にてもおもしろきが何よりの賜なり、此の賜物あるが爲めに偷餘生あるが如く思惟するなり、又此の愉快を全く放擲せねばならぬならば、一日も身を置きたき世界とは我にはおもはれざるなり、それ故、發熱は覺悟の上にて、いさゝかにても氣分よき時は直ちに机に對するなり、此日は熱低くして三食も坐して喫せり、此時節は、我の好物澤山の折なり、欵冬の葉砂糖煮、木の芽佃煮、わらび、筍、木の芽あえ、或は、鳥と甘煮、昔は筍豆腐汁とて、筍を油で炒しを豆腐と和して味噌汁になすなり、今とても口には美味なれど、汁を啜る元氣衰へし爲め若し一椀を喫し得ばガツカリとして、外のものに箸を下す能はずして止むが常なり。

茶碗蒸等も皆廢せり、量の少きものにて、甘きもの最も妙なるを覺ふ、蕎麥好でありしが、彼の眞味を知らんと欲せば行儀を省みぬにあり、音せざらんと欲しては眞味出でず故に我れ他人の前にては喫せざるなり、自から言ふも可笑しけれど、我れは食事行儀のよき方なり獨り蕎麥のみは特別の許可を得て幾分の音をなすなり今日はすゝること少しも出來ざれば、音させんと欲す

るも得ず隨つて眞味又出づる能はず、こゝに於て蕎麥を試むるも極めて稀なるに至れり、茶の如きも、呑むといふよりは、かむといふ方に近し、茶はのむよりもかむ方がうまし、一口の玉露、唯、無意味にのみては味はふ暇がない、嚙む氣味にして眞の甘さがわかる、私は茶が嫌ひで何卒湯を頂戴といふ客往々來る、これだけで我が友でない心地する、何より茶が好きといふものに逢ふと、少々嫌ひなところはあるとも容赦が出來る、やつぱり酒好が我を見れば無風流、共に語るに足らぬ人物とおもふならんか、曩に一客あり、我れ茶器を改めてすゝめしが、手に取るや、灰壺の中に投じた、其勇氣に一驚を喫した、この勇氣を最初我が煎せんとする時に出してお茶は頂戴しませぬからといふて貰ひたかつた。(中略)

五月三日晴　一番の車にて東京にゆく人ありし爲め病客の眠もはやくさまさる、毎朝眠は四時半ごろより覺むるも眼も閉ぢ口も默し神も死したる如くある事凡そ二時間餘り、これにて身も心も大なる休息を得るなり

眞に眠りての休息より、覺めて眠りしが如きの休息こそ吾には眞個の休息なり、今朝はこの眞個の休息を破られし爲め規律を失ふて前夜の疲れが癒ぬやうの心地せり胡瓜の淺漬に食氣を催せしが、箸をつけては思ひし程甘からざりしは部屋のいまだなれぬによるなるべし、いと殘念に思ひたり、菜圃に出づれば、ゑん豆の稍熟したるを瞥見し雛婢に命じてとりて午食に上す、これが今年のはじめなり、午後三時半の一刹那のいそがしき事驚く程なり、いきがきれる、便が催す、かじかゞ初なきする、東京の松田より新茶が來る、澤庵が匂ふ、柚の花が眼に入る、蠶豆が並ぶ木の芽がばらつく、さて〳〵可愛らしき贈物なるがなゝ、漸やく心落付たり、かじかの啼くを欲する時、こちらより笛ふけばそれに應ずるとの事、是はおもしろしとおもひて笛とれば、いかに息きれて吹く能はず、母君少しく笛にて呼び給へば應じたりしは、妙なり、東京へ行きし人歸りもせん門を鎖るを見合せと命じて吾は枕に就きぬ宵のほどより胃こゝちあしく、これでは眠り得られぬ

かと案じたりしが、九時頃よりとろ〳〵と眠り催せし時玄關急に賑はしくなりしは、東京行の人歸りしも道遠ければといふに、吾ぎよつとせり、なにはさて、早くあげてよといよ〳〵事切迫となれり、今夜に限り胃心地あしければともいひかね、あしきもの注文せしと後悔せしも及ばぬ沙汰なり、これが名に聞く天金かと少しく箸を降ろせしも身に氣遣あれば風味の極所も分らず、されど結構の品にこそと評せり、時には些細の事に對して病氣を輕んじてまでも重んせねばならぬ氣配のあるものかなと可笑かりし、數日前久しく金絲雀の聲を聞かざるを怪しみて、其故を問へば初めこれをもたらせし人の來りて今はお傍に鳴くものも來りたればとて持ち歸りぬといふ、あれはあれにして、これは是なり、これ來りしとて彼れを疎ずるにあらぬものを又、いよ〳〵去るといふ事、吾の知りせば、かなりやに一言のいとま乞ひもいふべかりしに小春の時節より親しみしものを、われにも知らせで、持去るとは無情なり、今は何人のもとにて歌ひ居るならん、とんまの和介、さりし跡は水、青菜の不十分なる日もありしならん汝が來りし當座と待遇のうすらぎしは吾察せざるにあらざれど吾も又一々命令する事の自由ならぬ身、此上吾家にて不滿を感じ給ふより他に就て寵遇をうけ給ふが汝の身にとりては幸多からん、とはいへ一言の別辭ものべずして別れしは名殘惜しき心地せり、御身の長所は多辯なるにあるが、短所も又其多辯なるにあり、今少し深重に其辯を惜しみ給はゞ、更に世の寵遇をうけ給はんか、吾は御身と既に半年の交りあり、爭でか其の言はんと欲するところを隱くして御身の非を默々に付せんや、御身以て如何となす。

聞く龜は常に食胃の四分を充たすに過ぎず、鶴も亦六分を充たす耳、是れ長生の所以かと、吾が知人富山仙壽といふ人あり、常に語る、人は一日に飯九椀を喫す或は更に夜食なるものを食ふ、吾は日に六椀を喫し、三椀の食福を餘し、以て長生を謀らんとす、壽は八十以下にては終らざるべしと、本年八十九に至りて御健全、其言をして實ならしむ、啻に食物のみならず、器

物にても何にても大切になさゝるものは多く身貧に壽短なるの結果を免かれぬもの〻如し所謂福分のとりこしにやあらん。(中略)

五月十一日半晴半雨　昨夜十二點鐘かすかに眠を破られてにくからず思へり、今朝はまだ蓐を離れずあるにはやくも京都より小包來る、中には、ます、かれひ、鯖のすし、澤庵、胡瓜、みかん、蕪、みつば等なり、ますは極めてむまし、みかんはとても此邊にて得られぬ風味、澤庵は、不味からず、九日夜九時に、京着、其翌朝四時より買集めて送る、とある其あはてさ加減見るごとし今ごろは吾が桃尻して机により箸と其細さを爭ふべき指もてぽちり〱無言のまゝ食て居るを彼も想像し居るならん。

力士談の中に飯はからだを大きくして食べ、角力はからだを小くしてとれの一語、非常におもしろく此秘法啻に角力道のみにはあらざるべし、病氣けふは先上出來なり、養生は面倒を聞かざるにあり。

十二日雨　降ればふれ、晴るれば病む身には大差もなし、日として好日ならぬはなしとすれば、眞に好日なり、このごろの嗜好品を擧ぐれば下に描く三種、(胡瓜、豌豆、苺描けり) 胡瓜は長城の君に大なる關係もなけれど苺とゑんどうとは毎年大騒ぎ、時によるとお大名風のある、かの君苺一粒一錢といふはしりの時代も構ひ給はず、使を所々に派して購へよと命じ給ふ、橫濱にてはなか〱うるに便ならずして滿足し給ふ事難し、又豌豆は靑物店にはわかきもの乏しく、或は百姓家に相談して自由に得る事に爲しおくも、ながくは其儘になし置かずして、曰く、元來これは食用に作るにあらず、他に必用ありて作るものにして、又いつまでも地面を遊ばしておく能はざればといふに、是又滿足爲し給ふこと難きに、此大磯に移りて以來豌豆二三個僅かに上等の料理屋にのみ用ゐらるゝ時代より臺所の總菜となりて猶餘りあり、後には皆飽きて顧みぬ程に作り得らるゝなり、苺も今年の如きは十分なり又他よりも澤山に贈らるるなり。

中島湘煙は京都の人、岸田といへる吳服商の一女なり、其一家

は元と但馬豐岡の富豪にして數代連綿の家柄なりしが、父茂兵衞の代に及び、家道稍々衰へて、京都に移り、呉服店を營みしが、再び繁昌に赴き文久三年十二月一女を擧ぐ、これ即ち湘煙女史なり、女史生なれがらにして秀麗快活、六歳の時始めて小學校に入る、擧止活潑、資性聰慧、夙に神童の稱を博す、十四歳にして選拔されて京都の中學校に入る、當時四書五經を經て無點の唐本を暗記して一字を誤らざりしといふ、英語も亦此學校に學び會話をよくせしとぞ、令名天聞に達し擢でられて宮中に入り文事の御用を勤むこの年僅かに十八歳、宮中にあること三年に亘りしが、深く感ずるところありて奉仕を辭し、男女同權自由民權の說を主張して諸國に遊歷す、世に島田髷の女辯士とて雷名忽ち海內に轟く、間もなく其筋の忌諱に觸れて刑獄の身となり寒天指を墮すの日鐵窓に呻吟する數月、其境遇の變化、旣に尋常婦人の行徑に異れり。

出獄後再び、女權の擴張、自由の大義を唱へたりしが、當時自由黨の副總理中島信行氏女史の非凡なる資質を愛し納れて夫人となす、それより、女史は夫を助けて政界の風雲に乘じ又女敎育者として生徒を薰陶し、次で伊太利公使夫人として交際場裏に手腕を振ふ、其間僅かに十年、身世變化の急激なる、女子にありては稀有の事とす、女史人となり豪邁にして談論男子を凌ぐの槪あり故に稍もすれば放縱の女壯士と誤るも、其實は周到綿密なる家事の整理家にして、蓄財に長じ、交際廣く、又詩人として文人として其名高し、伊太利駐在中夫妻病を獲て歸朝し爾來大磯の地にありて靜養に勉めたりしが、明治三十四年夫君の逝去後一年其後を逐ふて逝きぬ、この日記は即ち女史が棲遲して病を養へる間の事にして、警敏の才座邊に溢るゝがごとし。

登嶽日記

栗本鋤雲

閏五月廿五日（弘化三年）晴　早發國領村にて午飯火酎二小盞を用ゆ、價二百七十二文、肴に炙卵、鹽魚あり、午後驕陽炙るがごとし、日野宿玉屋に投宿、旅泊價二百二十文。

二十六日午後疎雨遠雷、早發八王寺驛を過ぎ駒木野驛鍛冶屋に午飯す、八十文、殽に鹽炙の香魚を供す、小佛嶺を踰え、二瀨川を渡り、甲州の地に入り上野原に投宿す、宿價二百三十二文、此家の標記に、米價一升百六十四文に付旅籠代增、右の通りと書しありし、此日途中費す所、二瀨越にて火酎一盞八文、香魚鮓一個五十文煮香魚一尾十三文、渡し錢八文、關野にて饅

頭の餡に鹽を以て砂糖に代ふる者一個八文、其甚だ口に可ならざるを以て半を棄つ、草鞋二十四文。

二十七日朝疎雨、晴て後に發し鶴川に至り又雨降り乍ち止み虹見ゆ、長峯猪の目を過ぎ猿橋に至り午飯す價八十文、駒橋を過ぎ、犬目より官道を棄て岐路に入り、直に谷村を指す、谷村は石和代官所の支廳のある處にして其中大越氏同家の戚家あり、主人を孝一郎といふ、此行の東道主人なるを以て其家に抵る、途中大雷雨に逢ひ、樹陰茶店に入る、避くるに猶衣服行李沾濡せざるなし、大越主人云ふ、此地七八日前より、日として雷雨せざるなしと、因て知る昨日小佛嶺上聞く處、西南に方り遠雷殷々たりしは乃ち今日予が衣裳を濡したる谷村近邊の雨なりし事を。

二十八日朝晴、午時より雷雨、午後八時に止む、近村を逍遙し、雨再び來るに逢ひて歸る。

二十九日近山を登攀せんとせしが雨來りて果さず

六月朔日陰雨霏微。

二日陰午後晴、白糸の瀧に遊び、法泉寺を過ぎりて海盤車の石に化したるを見る晩雨。

三日、朝晴晩間雨到る、此日將に富士に登らんとして上吉田に至り社人某の家に宿す。

四日朝雨止みて發し竹輿に乘じ、淺間社に至る、社に喬木多し、仰いで日光を見ず過て馬返に到り、輿を棄て歩す、所謂富士の裾野なり幽花野草の間を蜒蜿蛇行して進む、土人の定むる處、山路を分けて一升とし恰も其三合に到る午飯し更に上りて五合を過ぐれば絶て寸草なし八合に至り石屋に宿す、途中屢次烟雨中を行く其雨なるを知らず此所飯を炊ぎ茶を淪する水は積雪の融汁にして、薪に石楠木材を用ゆ。

五日朗晴、上りて頂上に至る、下界唯白雲を見る亂絮、堆綿のごとし、曉光岳影を其上に寫す、宛谷文晁が墨描の圖に異ならず、唯峰尖に圓暈を彩す、其色虹の如きあり、衆御來光を呼ぶ、陸游が入蜀記、之を記す既に詳なり、然して文晁は蓋し未だ知らず。

六日朝、晴、晩雨、岳を下り船洲驛井出五兵衛が家に投宿して却て昨日の陰晴を問へば答て曰ふ、終日强雨なりきと此に於て下界上方、其陰晴を異にするを知る。

栗本鋤雲翁は幕府末造の吏人にして、函館奉行支配組頭となり、北海開拓に盡力し、後ち佛國公使となり巴里に駐在されしが瓦解の後は隱居して報知新聞社の聘に應じ筆を執り文名江湖に鳴る。

懸賞募集　こゝろの日記（第貳回）

〔眞實にして欺かざる日記文の懸賞募集〕——締切十二月二十日

本誌が曩にこゝろの日記を募るや、應募の諸賢無慮數百名、金玉の文字を惜み給はざりしは最も感謝の至り、御禮は言語に盡きず、今回又更に第二回の日記文を募る、されば前回の諸君は勿論、新手の諸君も又其文を惜まず續々寄稿あらん事を希望す。抑もこのこゝろの日記たるや、これを古へに徴せば萬葉集あり、萬葉は時の民性の自然の聲にして、有の儘の心を言ひ顯はしたるもの、誠に不朽の文字なり、これに依つて隱れたる人情を知り、隱れたる生活を知り、これに依つて潜める思想を知り、潜める風尙を知る、眞に活ける世の面影にして、時代の心を映せる明鏡といふべし、江湖の諸賢冀くば萬葉の作者となりて不朽に活き給はん事を。取材の方面其他は前回に倣ふて隨意投稿あるべし。

賞金

壹等	參拾圓	壹名
貳等	貳拾圓	貳名
參等	拾五圓	五名
四等	五圓	拾名
五等	貳圓	拾名

▲紙數は長短隨意なれども凡そ十枚位までを程度とす
▲當選したる文は明る四十二年一月十五日發行定期增刊として掲載す
▲賞金は發表の當日爲換券にて送達の事
▲原稿は「こゝろの日記」と表記して女學世界宛の事

新刊紹介

家庭百科全書十篇 △惣菜料理　赤堀吉松著　博文館發行

本書は專ら家庭に於て行ひ得らるゝ惣菜料理の方法を說きたるものにて、其の材料は日常有ふれたる野菜、魚類、肉類を以て調理し、火加減、味醂醬油の使ひ方器具の扱ひ方を最も詳しく說明し、春夏秋冬に應用さるべき季節の料理數十種につき料理法の手順を正しく記述しあれば實地に應用して無用の手數を省き臺所用として好指南車なり。（定價三十五錢）

△家庭の研究　三輪田元道著

從來家庭に關する書籍の出版せられたるもの汗牛充棟もたゞならず、而かも本書の如く一の組織立ちたる思想を以て家庭を研究したるものは未だ是れあらず、其の內容は哲學あり、道德あり、經濟あり、歷史あり、或は文學、美術、教育等諸般の事柄に渉りて筆を染められ趣味も亦た尠なからず、普通家庭の讀物として適當なり。定價金七十錢、日本橋區檜正町服部書店發行、

△ゆるさぬ關　古愚奔主人著

著者は匿名の士、何人か知らず、而かも想を變幻極りなき幕末の旗本家庭と町家とに採り、三人の佳人を捉へ來り、幾層の波瀾を起さしめて筆路澁滯せざる處は相應の書き手と見えたり小說とも見るべく、又幕末風俗史とも見るべきものなり。定價金壹圓、京橋區中橋廣小路燦江堂發行

△古詩新釋　蒼松岩垂著

唐代名家の傑作と稱せられたる長恨歌・琵琶行を始めとして人口に膾炙する數篇を今代の思想を以て解釋したるもの誦して環々玉の如き詩はこの新釋によりて一段の光彩あるを覺ゆ。定價三十錢、神田建文館發行

新案色分 △明治獨樂　岸邊福雄氏考案

色の配合色素の原理に就て日本婦人の智識は甚だ不十分である、たとへば新流行の勝色は、何々の混色かエビ茶は何色の混じたるものかなどは一寸知るに困難であるが此度兒童教育に熱心なる東洋幼稚園長岸邊福雄氏は新案の獨樂を發明されたり、これは一度廻はせば、其色素の原色と分量とが一目してわかる樣に拵へたる理學的の好翫具なり、即ち赤、黃、綠、青、四色が混じて鼠色が出、赤、青、黑が混じて葡萄色が出るなどは實に面白き考案である。この如くして色の種類を奨實なる二十四種に分けたればひとり子供の翫弄としておもしろきのみならず又大人の玩具としても甚だ興味あり、誠に教育的玩具の模範にして、家庭教育上必要の品なれば、新年の贈物としては最も妙ならんか。定價三十八錢郵送費八錢（發賣所は牛込區納戶町明治の家庭社）

△月の帶　資生堂案

婦人の月經時に用ゆる帶なるが、赤白帶下のある人、或は痔疾を患ふる人が用ゐてもよろし、此の種のものは從來色々工夫されし樣なるも、本品は特に體裁よく出來居れり、交際塲裡に出づる婦人、女教師、女學生、女子事務員等常に立ち働らく人々には餘程重寶の物なり、各所の藥店にあり。神田區旅籠町二丁目資生堂藥局發賣

小說 △怪　光（後篇）　田口掬汀著

これは某公爵家の近頃の紛紜事件を書いたものであるといふ事であるが、全篇を通じて左樣な處ろはあまり目につかない、或は本篇の主眼であるまい、寧ろこれは當世の輕浮なる虛榮心に浮かされつゝある人の半面を描いて、これではならぬ眞面目にかへるべきものであるといふ事を戒しめたものであらう。新しい思想とか、傾向とかに觸れて居る居ないは別問題として、此の作の長所をいへば舞臺が花やかで、變化があつて、外面の描寫が氣が利てゐる。（定價八十五錢大森不振會發行）

讀者文藝　投書歡迎（締切十二月十五日）

▲和歌（一人一首）

▲短文（三百字以內）

▲小說（二十枚以內）

▲日記文（十枚以內）

◎和歌、短文は必ず端書を用ゆる事◎字體は楷書にて鮮明なるべき事但し鉛筆にて認めたるものは採用せず◎住所姓名は必らず原稿に記しおく事◎投稿は博文館女學世界宛の事……

◎賞品

▲一等一圓▲二等五拾錢▲三等參拾錢（圖書切符）▲小說と日記文は詮考の上相當の謝禮を呈す

毎月一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）……	金二十錢
四冊（三ヶ月分）……	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……	前金二圓八十錢

内（定刊數……十二冊 增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵税 一冊 二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	五十五錢	四十七錢
半頁（卅二行）	二十三圓	十九圓五十錢	十六圓五十錢	十三圓五十錢
一頁（六十四行）	四十五圓	三十八圓	三十二圓	二十六圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十一年十一月十五日發行

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

女（後付の一）

中學世界 **文藝號** 臨時增刊

第十一卷第十五號

全一冊洋裝菊判紙數二百四十餘頁

正價金廿錢郵稅(本號に限)六錢

十一月廿日發行

▲巨額の賞金を懸けて募集したる作品(小說、論文敍事文、抒情文、新體詩、表紙畫等)總數は、萬以上に昇りぬ。

▲今、此等各選者が叮嚀なる選評を以て當『文藝號』の本欄を飾れり。

▲隱れたる若き作家並に若き畫家諸君の花花しき武者振は、この『文藝號』を措て他に覓むべからず。

△更に第一附錄の諸名家が苦心の短篇小說は、本年後半期文壇の佳什にして、作家諸氏の作物中にも重きをなすものゝ一つたるべし。

▲第二附錄の『當今文壇諸名家雅號の由來』は、固より藝苑の一餘興に過ぎずと雖も其數實に百餘に亘り、趣味縱橫、亦好乎の讀物たるを失はず。

△口繪には、當代文壇美術界の花形を收む。誌友諸君の小照も亦掲載せらる。

附錄短篇小說作家

△田山花袋

△岩野泡鳴

△前田木城

△小山內薰

△水野葉舟

△西村渚山

△德田秋聲



◎當今文壇諸名家雅號の由來(附錄)

(後付の三)

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

幼年畫報 第三卷 第拾五號 增刊

觀兵式

（太郎）やア美しい本だなア、勇ましいぢやないか、まづ表紙からみる事にしよう、

（次郎）ア、こりや陸軍大將だね、見給へ胸には金鵄勳章の功一級もある、僕アどうしても、陸軍士官になりたいなア、

（太郎）さア次ぎを見やう、オ、軍樂隊の君が代吹奏だ、ソラ彼方から大元帥陛下がお馬車でいらつしやる、綺麗だね、

（次郎）オット次ぎは歩兵の行進、

（太郎）夫れから騎兵だ、随分馬が居るぢやないか、

（次郎）オヤ砲兵が祝砲を打つて居るドドン〳〵ドドン〳〵!!!



嚴谷小波作
尾竹竹坡畫

十一月十五日發行

洋裝菊判極彩色
石版十六頁
本文活版十六頁
寫眞附錄四頁
正價金十錢
郵税（本號限）二錢

東京 本町 博文館

(後付の六)

明治四十二年度日記類

博文館日記の特色

用紙　何れも海外製紙會社へ特に注文漉製せし特別上等紙を用ゆ

印刷　日記印刷の爲新鑄せし活字を以て注意印刷す頗る鮮明なり

製本　弊館が特に英國より輸入せし新機械を以て堅牢美麗に製本す

趣向體裁

（當用日記）　日々欄には過去同月日の重要歴史、七曜、干支及び詩歌俳句等を上欄に錄し、天氣、寒暖發信、受信及び摘要の記入欄を其傍に新設す尙各月の初めには其月中に行ふべき事項を豫記すべき欄を新設し、每日記入欄には細罫を附し秩序ある記錄たらしむ。附錄としては紙數十二頁の補遺、金錢出納表、收支一覽表、友人住所錄、農家年中行事、某醫學博士の衞生心得及び內外の最新重要統計數十頁を載せ卷末には日常必須の諸規則を網羅せり。

（懷中日記）　每月の初に當月の行事、食品月令、遊覽案內等を揭げ日々の上下欄に內外名家の格言を揭げ其他七曜、干支、天氣、寒暖を附記し卷末には當用日記の如く日記補遺錄日常用の事項諸税則及最新重要の統計表等百頁を附す。

本懷中日記卷頭には皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日日曜表を色刷として揭げ新形は背面に他の二種は腹部に鉛筆挾みを設く

當用日記正價

大形（菊判）上製（舶來洋紙總クロース金文字入）
▲正價金五拾錢　郵税拾四錢

中形（四六判）特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）
▲正價金五拾錢　郵税　拾　錢

中形（四六判）上製（舶來洋紙總クロース金文字入）
▲正價金卅八錢　郵税　拾　錢

小形（菊判半截）上製（舶來洋紙總クロース金文字入）
▲正價金三拾錢　郵税八　錢

本當用日記卷頭には皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日日曜表等を色刷として揭ぐ

懷中日記正價

新　形（舶來洋紙頗美本總クロース金文字入細長形携帶至便）
▲正價金貳拾錢　郵税貳錢

上　製（舶來洋紙頗美本總クロース金文字入紙數三百〇六頁）
▲正價金拾八錢　郵税貳錢

並　製（舶來洋紙模クロース表紙金文字入美本紙數三百六頁）
▲正價金拾貳錢　郵税貳錢

本町三丁目
第二百四十番　博文館

女（後付の七）

女(後付の入)

EIGAKU-SHIMPO-SHA'S

THE STANDARD DIARY & POCKET DIARY

FOR 42nd YEAR OF MEIJI [1909].

英學新報社編纂

英學者必須の日記

挿入前賢の寫眞は其高風を仰ぎ和英對譯の金言は語學研究と共に成功の福音

明治四十二年

英文當用日記

四六判舶來紙
特製總布表裝
體裁頗優美
正價金五拾錢
郵送料八錢

發行以來愛用家諸君に多大の實益と甚大の趣味を喚起せしめたる本社編纂の日記は千九百九年度用に於て時勢の發展に伴ひ尚ほ足らざるを補ひ長短宜きに適ひて内容共に一進せり又其の價値に就ては普く世の知悉する所敢て贅言を用ゐず乞ふ倍舊の御愛用あらんことを。

明治四十二年

英文懷中日記

細小形舶來紙
特製總布表裝
優美携帶至便
正價金參拾錢
郵送料四錢

賣捌所全國到る所の書林雜誌店

多數の御注文は特製割引致候

發兌元 東京本町 博文館 東京神田 東京堂

（後付の九）

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著



家庭百科全書

和裝頗美本 ◉紙數各三百頁 ◉石版彩色口繪一葉 挿畫十數個

▲定價一冊金四拾五錢——郵稅八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尚ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

全部五十冊 毎月一回發行

第一編 **新家庭訓** 三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著

第二編 **四季料理** 宮中臣民兩流料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著

第三編 **裁縫指南** 女子高等師範學校教授 喜多見佐喜子女史著

第四編 **和洋菓子製法** 東京治庖會講師 龜井まさ子女史著

第五編 **茶道と香道** 水原翠香女史著

第六編 **諸流生花指南** 琴松園文雅君 松幸齋理常君 共著

第七編 **育兒の務** 醫學士 田村貞策君 朝夷孤舟君 共著

第八編 **簡易治療法** 新潟縣高田高等女學校教諭 藤井靜子女史著

（後付の一〇）

販賣用電話 本局二六二〇 ▶ ◀ 發兌元 東京日本橋區

婦女必讀の大全書

第九編 禮式と作法

女子高等師範學校教授 佐方鎮子女史著

第十編 惣菜料理

●如何なる準備にして料理に取係るべき乎●料理用器具には如何なる種類を要すべき乎●火加減は如何にすべき乎●鹽梅加減は如何にすべき乎●煮出汁は如何にしてそれを取るべき乎●砂糖は如何にして使用すべき乎●味醂は如何にして使用すべき乎●使用濟みの器具は如何にすべき乎●芋類の調理法●蕪菁の調理法●蘿蔔調理法●胡蘿蔔及び牛蒡の調理法●慈姑の調理法●蓮根の調理法●筍の調理法●百合根の調理法●茄子の調理法●越瓜の調理法●南瓜の調理法●冬瓜の調理法●菠薐草の調理法●蕗の調理法●土筆の調理法●たんぽゝの調理法●紫蘇の調理法●豌豆の調理法●隱元豆の調理法●大豆の調理法●海苔の調理法●茸類の調理法●栗の調理法●柿の調理法●柚子の調理法●銀杏の調理法●土當歸の調理法●蒟蒻の調理法●豆腐の調理法●鰯の調理法●鰶の調理法●鰺の調理法●さよりの調理法●鼠頭魚の調理法●鱚の調理法●鱸の調理法●鰆の調理法●鯖の調理法●鰹の調理法●鯛の調理法●比目魚及び鰈の調理法●鱧の調理法●あなごの調理法●鮭の調理法●鯉の調理法●鮒の調理法●白魚の調理法●鮎の調理法●烏賊及び章魚の調理法●貝類の調理法●蟹類の調理法●鷄肉の調理法●鷄卵の調理法●鯨肉の調理法●牛肉の調理法●肉類の鑑定法

宮内省大膳寮庖丁 赤堀吉松君
日本女子大學教授 赤堀峰吉君
東京女學館教授 赤堀菊子女史
共著

第十一編 編物指南

●第一編 總說〇編糸の種類〇編物用具〇編物の種類●第二編 鈎針編の仕樣〇鈎針編方の說明〇毛糸編物三十五種〇絹糸及びレース糸編物二十八種●第三編 つむ針編の仕樣〇つむ針編方の說明〇つむ針編物五種●第四編 圖案紙の使用法〇編物文字の編出しの法●第五編 編物造花〇編物造花の總說〇造花實例●第六編 編物雜說

女子技藝實踐學校編物科主任 三木とみ子女史著

第十二編 婦人の生理と衛生

●第一章 總論●第二章 骨骼●第三章 筋肉●第四章 物質の新陳代謝●第五章 飲食物●第六章 消化器●第七章 循環器●第八章 呼吸器●第九章 皮膚●第十章 排泄器●第十一章 神經◎第十二章 五官●第十三章 婦人固有の機關●第十四章 生理衛生と婦人◎附錄 看病の心得●看病人の心得●救急法●妊婦及び産婦の養生法●小兒の看護法

青山學院教授 牧野清子女史著

第十三編 教育お伽噺

(一)總說●お伽噺の起元●お伽噺の種類●お伽噺の効用●お伽噺の教育的價値●お伽噺に對する非難及辨解●お伽噺の選擇●お伽噺敎授の實例●お伽噺敎授の場合◎お伽教材(西洋の部)●狼と七匹の子山羊●紅帽子●兒島●ホルレー夫人●ならず者●牝雞の最後●藁と石炭と空豆の旅行●穀物の穗●狼と狐との話●市街音樂者●粥の海になつた話●星姫●漁夫の妻●雲姫物語●牛助の御褒美●桃太郎物語●裸の王樣●お姫樣と蛙◎お伽教材(日本の部)●海幸彦山幸彦●羽衣●瘤取り●一寸法師●玉取り●出世息子●姨捨山●養老の瀧◎教訓お伽噺●蛙手池●土龍塚●木笠草笠●坊主山●僞ミイラ●身震物語●蝸コロ〱●蟬の帷子●鳳將軍●笛の魂●月夜の蛙●蜃氣樓●寶珠取り●草刈鎌●シャボン玉●めくら蛇

少年世界記者 木村小舟君著

第一號以下數版を重ぬ

▲每月一回五日發行

年刊十二册菊判紙數六十四頁
每號寫眞版及密畫數頁挿入

英語世界

第八號要目

●英文探偵奇談講義（今井信之）●英譯血判取（大尾）武信由太郎●英語と修養（安部磯雄）●リーダーに現はる夏の鳥（岬柳都太郎）●譯註追剝（マーク、ツエーン）（石川祐功）●英文句讀法（茨木清次郎）●ナイヤガラ瀑布のイルミチーション（長井氏晸）●第一高等學校入學試驗答解（深澤由次郎）●解釋練習（增田藤之助）●東京高師教場パノラマ●子音の發音（岸本能武太）●英語の形式（伊藤彌門）●東京高商入學試驗成績談●佐久間信恭氏英文筆蹟●語句の省略法（武信由太郎）●數學式の文法（喜安璉太郎）●會話作文資料（笹岡民次郎）●時文研究●學校英語だより●英文通信●讀者研究壇●懸賞文披露及新課題●初學欄（英語の平等無差別、譯讀・英作文應用設問等）

第九號要目

●滑稽毛生へ藥譯註　深澤由次郎●英譯今昔物語　野口米二郎●偶像破壞奇譚講義　今井信之●子音の發音　岸本能武太●譯註追剝大尾　石川祐助●英文句讀法大尾　茨木清次郎●讀本々位解釋練習　增田藤之助●英吉利自然談　岬柳都太郎●最近科學奇聞　長井氏晸●慣用句法英語の形式　伊藤彌門●入學試驗と國文英譯　今井信之●花輪高商教授英文筆蹟●東京高等商業へ入學試驗答解　深澤由次郎●第一高受驗談●時文研究●英習字の練習　片山義行●語句の省略法　武信由太郎●同志社英語評判記●英文通信●學校だより●讀者研究壇●英語遊戲●懸賞發表●懸賞新題●初學欄（ＡＢＣ講壇、解釋、英作文、應用設問等）

第拾號要目

●英吉利自然淡木の實拾　岬柳都太郎●コナン、ドイル小說講義　今井信之●英語のイデオム　佐川春水●譯註滑稽毛生へ藥　深澤由次郎●海軍兵學校入學試驗英語科成績談　堀敎授●英譯闘寺の牛　野口米次郎●ラボツク氏林野の四季譯註　長井氏晸●子音の發音　岸本能武太●解釋練習增田藤之助●句の使ひ分け　前田忠義●英語の形式　伊藤彌門●入學試驗と國文英譯　今井信之●最近科學奇聞　長井氏晸●第四高等入學試驗英語科詳解　横地良吉●馬場ジヤパンタイムス記者英文筆蹟●三高英語受驗談●時文研究●初學欄（譯讀、英作文、應用）●英文通信●學校だより●讀者研究壇●懸賞發表●懸賞新課題●雜錄

第十一號要目

十一月五日發行

●新式譯註スパルタの教育　熊本學習院敎授●美文英譯　武信主幹●英文筆蹟　野口慶應大學講師●譯註幽靈怪談　深澤由次郎●英國大學の話　平田學習院敎授●子音の發音法　岸本早大講師●解釋練習　增田早大講師●英作文の心得　武信早大講師●科學奇聞　長井氏晸●英語「句」の使ひ分け　前田忠義●譯解の栞　横地良吉●英語の形式　伊藤彌門●英語雜筆　喜安璉太郎●會話作文資料　笹岡民次郎●第六高等學校入學試驗問題詳解　深澤由次郎●高等學校受驗談●學生の見たる英語講師●外國語研究法●時文研究●英文通信●學校だより●讀者研究壇●初學欄（ＡＢＣ講話、小品文譯解英作文、應用設問）●懸賞披露●懸賞新課題●雜錄

第一號以下取揃應高需

▲正價金拾錢　郵税壹錢　前金〔十二册金壹圓拾錢　六册金五拾六錢外要郵税

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の一二）

家庭日常の寶典

博文館女學世界編輯局編纂

明治四十二年

家庭日記

總クロース金字入頗美本紙數五百餘頁　正價參拾八錢　郵稅拾錢

家事整理の墨繩

家庭日記は最も進歩したる。且つ最も文明的なる日記にして新家庭の要求に應じたるもの也、苟も我家の規模を知り我家の地位と品格と勢力とを知らんとする人の机上に缺くべからざる重寶日記なり其の目次左の如し。

附錄

▲本書內容の一斑▲

本書は始めに一年三百六十五日の日々欄を置き、七曜干支を順記し、天氣、寒暖の各座を設け、以て日々の事項を記入するに適せしめ更に月の始には其月の行事、季節、食品、花暦の各項を抄記して月令の栞となし、次に此の日記の特色ともいふべきは他の日記簿に類例なき約二百頁に渉る家庭重要記事を始め、交際、通信、音問、祭祀以下日常諸般の事項を分類し兼れて財產、衣類等の品目を掲記して以て複雜なる家事を整理して一目瞭然たらしむ。猶前掲附錄十數次は家事當局者の心得にして朝夕必要なる家政智識にして其他これに必要なる諸規則をも網羅せり。



家庭日記は日常の家事を整理する金針にして又家運振興の指南車なり、其內容は從來有觸れたる日記簿とは全然面目を異にし統一あり、秩序あり、教訓あり、趣味ある日記にして、眞に一家の重寶たる實質を具備せり。

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

博文館臨時増刊 (三八)

明治四十一年十一月十五日發行 女學世界 こゝろの日記 (第八卷第十五號)



定價金貳拾錢 本號限り 郵稅六錢

VOL. VIII. (東京市小石川區久堅町百八番地 博文館印刷所印行) No. 15.